

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—20—

朝倉郡朝倉町所在上ノ宿・惠蘇山・稗畑遺跡の調査

1991

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—20—

朝倉郡朝倉町所在上ノ宿・惠蘇山・稗畠遺跡の調査

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告書は、昭和62・63年度に調査しました上ノ宿遺跡と恵蘇山遺跡、稗畠遺跡の調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第20集としてとりまとめたものであります。

発掘調査の記録としては、満足のいくものではありませんが、本書を通して地域の文化財ならびに歴史に対する認識と理解を深める一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々の御指導・御協力を頂いた地元の方々をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成3年3年31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例　　言

1. 本書は、昭和62・63年度に福岡県教育委員会が、日本道路公団から委託を受けて、九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の発掘調査を実施した上ノ宿遺跡と恵蘇山遺跡、稗畠遺跡の報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の第20冊目にあたる。
2. 遺構の実測は、井上裕弘・木下修・木村幾多郎（現大分市歴史資料館長）・日高正幸・高田一弘・武田光正（現遠賀町教育委員会）・佐土原逸男（現浮羽町教育委員会）が主にあたり、高瀬セツ子・本石セツ子・中村光恵・渡辺輝子・後藤カミヨ・牟田サエ子・矢野静子氏の協力を得た。写真撮影は木下と木村が行った。また、空中写真撮影はフォト・オオツカの協力を得た。
3. 出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館と文化課甘木発掘調査事務所で行った。また、鉄器の処理は九州歴史資料館の横田義章氏が行った。
4. 出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館の石丸洋・林崎新二・内本浩子氏が行った。実測は井上・木下・木村の他に、渡辺輝子・松嶋邦子氏の多大な協力を得た。
5. 製図は、豊福弥生・関久江・江上佳子と文化課甘木発掘調査事務所の塙足里美氏の協力を得た。
6. 本書で使用した方位は、遺構配置図および地形図が真北で、他は磁北を用いた。
7. 上ノ宿遺跡の遺構番号については、報告時に変更したため、調査時の番号との対照はそれぞれ表か本文中に示した。
8. 本書の執筆は、Iを井上・木下、IIを井上、IIIを井上・木村・木下・武田、IV・Vを木下が分担し、それぞれ文末に記した。なお、現大分市歴史資料館長の木村幾多郎氏と現遠賀町教育委員会の武田光正氏には、公務多忙の中で執筆いただきました。謝意を表します。
9. 本書の編集は、井上と木下で行った。

本文目次

I 調査組織と調査経過	1
II 位置と環境	10
III 上ノ宿遺跡の調査	13
IV 恵蘇山遺跡の調査	117
V 稲畠遺跡の調査	131

挿 図 目 次

本文対照頁

第 1 図 九州横断自動車道路線図.....	2
第 2 図 上ノ宿・恵蘇山・稗畑遺跡と付近地形図 (1/1,000)	折込み
第 3 図 上ノ宿遺跡の調査に参加した人達.....	7
第 4 図 恵蘇山遺跡伐開作業.....	8
第 5 図 発掘調査と記録.....	9
第 6 図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	11

表 目 次

表 1 九州横断自動車道関係遺跡一覧表.....	折込み
--------------------------	-----

I 調査組織と調査経過

1. 平成2年度の調査経過

7月末になって、道路公団日田管理事務所より第38地点（外之限遺跡）の法面が、6月30日から7月1日にわたる梅雨末期の集中豪雨のため、崩壊する危険性が生じ、急速、防災工事が必要となったと連絡があった。従って、崩壊の恐れがある用地外の法面を広範囲にわたり除去する防災工事が必要であるため、その地区的文化財の有無について協議したいという主旨であった。すでに、元年度に隣接地の大迫遺跡でも、同様な法面崩壊の危険性が生じ、防災工事に先立つ事前の発掘調査を実施した経緯があるため、直ちに、職員を現地に派遣し協議した。工事予定地は、前回の調査で古墳時代後期の堅穴住居跡群が発見された隣接地であり、その存在が十分予想されるため、発掘調査が必要であることを伝えた。しかし、現地の丘陵上にはクラックが各所に現れるなど地滑りが既に進行し、大迫遺跡の場合と同様、発掘調査を実施する上でも、かなり危険性を伴うことが予想された。従って、その危険性を十分考慮した上で、地権者の諒解が取れ次第、早急かつ、短期間で調査を実施することにした。発掘調査は、9月5日から10月11までの間で実施した。その結果は、古墳時代の堅穴住居跡3軒と土塙2基、古墳の残骸1基と墓道と思われる溝状遺構1条が発見された。前回と同様、急傾斜地に形成された古墳時代集落がさらに山側に拡大し、確認された意義は大きく、特異な集落の実態を解明する上で興味深い遺跡といえる。調査は、遺跡が急傾斜地ということもあって、調査時の安全対策や降雨時における土砂の流出を避ける対策を講じるなど、常に注意する体制をとって実施した。

今年度の整理作業は、文化課甘木事務所と九州歴史資料館で実施した。調査報告書は上ノ宿遺跡・恵蘇山遺跡・稗畠遺跡（20集）、杷木宮原遺跡・中町裏遺跡（21集）の2冊を刊行した。

なお、平成2年度の発掘調査にあたっては、朝倉町教育委員会並びに作業員として参加して頂いた地元の方々の御協力を得た。記して謝意を表します。

昭和62・63年度並びに平成2年度の調査関係者は、下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局（昭和62・63年度）

局長	杉田 美昭	
次長	菱刈 庄二（前任）	吉岡 康行
総務部長	安元 富次（前任）	進 哲美
管理課長	森 宏之（前任）	副島 紀昭
管理課長代理	三野 徳博（前任）	荒木 恒久



第 1 図 九州横断自動車道路線図

表 1 九州横断自動車道関係道路一覧表

地点	道 路 名	所 在 地	内 容	面 積	調 査 地 区 と 面 積										備 考	報 告 号		
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H1	H2		
1 小郡正又道路	小郡市大字小郡	発生集落、野史跡	11,200						5,000		500						完了	了 7集
2 鹿児島道路	#	鹿児島市古賀布施地	10,400						330	6,000							完了	了 11集
3 大坂井道路	#	大坂井	発生・古墳	5,400							3,000						不調査	了 15集
4 #	#	大坂井城跡	9,250						3,500	5,000						完了	了 15集	
5 井上藍原御道跡	#	井上	発生・中生集落	8,850					4,500	5,700						完了	了 10集	
6 渡辺堂東道路	#	渡辺町	発生・古賀敷布施地(古切堀)	32,050					500	7,300	10,100					完了	了 13集 - 16集	
7 #	今宿	発生集落地	7,200					206		100						完了	了	
8 宮延道路	大刀洗町大字山田	中後原布施地	4,000					3,600								完了	了	
9 曽路道路	#	先土師・多生・古墳・近曾郷	10,800					100	6,700							完了	了	
10 #	#	中条水原	歌止塚	34,400				700	300							未調査	了	
11 立野・官延道路	甘木市大字下瀬	立野・中生・古墳	35,860		13,660	13,500	10,090	3,000								完了	了 2 - 5 - 8 了 14 - 17集	
12 小石原・内佐美	#	中浦	中生	48,900				8,100								未調査	了	
13 #	永舟東	#	上浦馬田	56,000	200	7,400										完了	了 1集	
14 仁々通道路	#	上浦	発生・古墳集落	18,400	300											完了	了 1集	
15 西原・下原道路	#	二ツ木屋水	#	54,800	3,700				4,200	3,400						完了	了 1 - 2 - 3集	
16 高郷道路	#	福永	鶴文・発生・古賀敷地	7,800					1,400	5,400						完了	了	
17 日ノ坪道路	#	牛飼	近生・桃石	100						100						完了	了	
18 #	#	歌布施	2,950						300							未調査	了	
19-A 塚の上道路	#	#	古墳集落	30,000					700	8,200	-					完了	了 9集	
19-B 渡邊落葉	新倉町大字石原	古墳集落・奈良原塚	20,000								8,400					完了	了	
19-C 石久久見道路	#	#	古墳集落	20,000							6,100					完了	了	
20 中延道路	#	大庭	鶴文・発生・余良集落	13,400					300		11,400					完了	了	
21-A 西法令寺道路	#	#	余良集落・中庭	46,900					800	600	2,300					完了	了	
21-B 稲垣道路	#	#	歌布施								9,650					完了	了	
21-C 大庭久保道路	#	#	余良集落・野良集落								12,300					完了	了	
21-D 上の原道路	#	#	余良集落・益田・内崎集落						300	4,800						完了	了 15集	
22-A 法原・上道路	#	八角	鶴文・発生・古墳集落	5,400							5,420					完了	了	
22-C 須崎南道路	#	#	発生・中生集落・森地	5,000												完了	了	
23 塚岸洋子道路	#	#	発生・古墳集落・古墳	2,600						2,600						完了	了	
24 仁原道路	#	#	中曾敷古墳・森原塚	5,450					1,050	6,650						完了	了	
25 本才田道路	#	#	#	4,000						1,300	4,400					未調査	了	
26 #	城川	放布地	1,600					70								未調査	了	
27 真鳥道路	#	#	鶴文・発生・古墳集落	16,000					500	6,640	500	16,000				完了	了	
28 小塙寺道路	#	#	鶴文・歷生・古墳集落	2,400				200	450							完了	了	
29-A 原の東道路	#	美野	発生・余良集落・森地	16,800					600		5,240	2,100				完了	了	
29-B 細古志部野	#	#	万秒敷地								4,660					完了	了	
30 鹿嶋道路	#	鹿野・山田	鶴文・発生・沼暮	4,000							6,350					完了	了	
31 山の神道路	#	山田	鶴文・古墳	2,000							1,980					未調査	了	
32 #	#	#	歌布施	2,450				300								未調査	了	
33 衣田道路	#	#	鶴文・発生・古墳集落	2,000							5,300	2,000				完了	了	
34 岩場道路	#	#	鶴文・古墳	3,600							680	15,400				完了	了	
35-A 上ノ曾路道路	#	#	発生・古墳地	2,600							880	2,900				完了	了 20集	
35-B 恵庭山道路	#	#	古墳集落	2,000							2,400					未調査	了 20集	
36 鶴郷道路	#	#	古墳集落地	2,000							3,980					未調査	了	
37 大迫道路	#	#	奈良・平生・大野暮・集落	2,400							5,410	9,900	700			完了	了	
38 井之野道路	#	#	発生・中庭・新大石地	125							5,150	12,600	1,200			未調査	了	
39-A 木本富士道路	紀木町大字志成	発生・古墳・中生集落	22,000						300	3,400						完了	了 21集	
39-B 中の島道路	#	#	#	"							11,060					未調査	了	
40 恵庭名・本道跡	#	中庭	歌布施	2,500						300	7,700					完了	了	
41 志成周辺道路	#	#	#	18,000						300	9,400					完了	了	
42 田原鹿道路	#	#	中曾敷・平・石延	8,000						300	9,700					完了	了	
43 大谷道路	#	吉市	古墳群	12,000						500	7,500					完了	了	
44 #	久暮前	放布地	1,800								150					未調査	了	
45 斎隈道路	#	#	歌布施	2,400						400	3,710					完了	了	
46 夕ノ天園道路	#	古賀	"	1,800						300	2,210	225				完了	了	
47 上池田道路	#	池田	発生・古墳・中生集落	4,000							3,200					完了	了	
48 堤田道路	#	#	鶴文・発生・中生集落・墓地	1,800							6,800					完了	了	
49 #	林山	放布地	3,200								150					未調査	了	
50 #	#	#	#	2,400							200					未調査	了	
51 植田道路	#	#	鶴文集落	5,200							6,500					完了	了	
52-A 小川原道路	#	#	#	2,000							1,000	1,350				完了	了	
52-B 二十谷道路	#	#	鶴文集落									1,550				完了	了	
53 海内道路	#	總板	中庭	3,500							5,700					完了	了	
54 上野落道路	#	#	発生・中庭	1,800							2,700					完了	了	
55 #	#	歌布施	1,600								100					未調査	了	
56 #	#	歌布施	2,400								800					未調査	了	
57 牧崎古墳群	甘木市大字赤瀬	古墳群・鶴文・発生集落	200,000	14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400							土地確完了 4 - 6 - 12 19集		
58 山田力曽原	利根町大字山田	#	40,000	4,438						2,500	2,500	5,710					土地確完了	
59-A 佐野古墳	木本町大字水尋	発生・古墳集落										6,450				完了	了	
59-B 田原古墳	#	#	田原集落									2,600				完了	了	
60-A 西ノ道古墳	#	#	発生・古墳集落・古墳	180,000								1,270				完了	了	
60-B クリナリ古道跡	#	#	鶴文・古墳集落									4,150				完了	了	
61 #	#	志峰										2,400	4,000			完了	了	
計																		
					8,685	22,300	20,470	29,970	48,498	69,760	115,810	80,340	82,710	49,125	700	1,200		

日本道路公团福岡建設局木工事事務所

所長	風間 徹
副所長	西田 功
副所長	友田 義則（技術担当）
庶務課長	徳永 登（前任） 大河 尋光
用地課長	松尾 伸男
工務課長	後藤二郎彦（前任） 豊里 栄吉
朝倉工事区工事長	上野 满
杷木工事区工事長	小沢 公共

日本道路公团福岡管理局（平成2年度）

局長	塙坂 修（前任） 柴本 悅治
次長	小西 康夫
業務部長	添島 孝志（前任） 湯原 裕
管理第1課長	勝久 明
管理第1課長代理	鳥羽 正美

日本道路公团福岡管理局日田管理事務所

所長	幸野 哲夫
業務助役	末次 康夫
工務助役	前田 道也

福岡県教育委員会（昭和62・63年度、平成2年度）

総括

教育長	竹井 宏（前任） 御手洗 康
教育次長	大鶴 英雄（前任） 渕上 雄幸（兼任）
指導第二部長	濱地 南伯 亀谷 謙三（兼任）
指導第二部参事	大平 岩男（前任） 月森清三郎
指導第二部副理事	塙田 康徳（前任） 葉石 黙
文化課長	六木木聖久 葉石 默（兼任）
文化課參事	森本 精造（国博誘致対策室長兼任）
文化課長補佐	平 聖峰（前任） 安野 義勝
文化課長技術補佐	宮小路賀宏（前任） 石松 好雄
文化課參事補佐	中央 真人 加藤 俊一

文化課参事補佐	大塚 健	栗原 和彦
同	松尾 正俊	池原 勝二
同	柳田 康雄	井上 裕弘
同	石山 熊	濱田 信也
同	高島 邦弘	
庶務・管理		
文化課庶務係長	加藤 俊一（前任）	池原 勝二
文化課事務主査	竹内 洋征	
文化課主任主事	沢田 俊夫	
調査		
火山灰同定分析調査	広島大学理学部地質教室 京都大学理学部地球物理学研究施設助手 朝京都フィション・トラック	柴田喜太郎 竹村 恵三
文化課文化係	技術主査 高橋 章	
文化課調査班	総括 柳田 康雄（兼任）	
同	総括補佐 井上 裕弘（兼任）	
同	技術主査 木下 修	
同	技術主査 中間 研志（現福岡教育事務所技術主査）	
同	主任技師 佐々木隆彦（現南筑後教育事務所技術主査）	
同	主任技師 伊崎 俊秋（現京葉教育事務所主任技師）	
同	主任技師 小田 和利	
同	技師 水ノ江和問	
同	文化財専門員 木村幾多郎（現大分市歴史資料館長）	
同	文化財専門員 日高 正幸	
同	調査補助員 高田 一弘（現福岡市教育委員会） 武田 光正（現遠賀町教育委員会） 佐土原逸男（現浮羽町教育委員会）	
同	整理指導員 岩瀬 正信	
発掘調査作業員		
大熊 勝造	緒方 仁造	石松又次郎
半田 武則	丸山 静子	丸山英紗代
丸山フミ子	浦 文子	丸山 智子
半田 エツ	大熊キクエ	安岡よし子
		篠原 清彦
		丸山 幾子
		友納ノブヨ
		藤田マスミ

木下千寿子	林 ノブカ	井上シゲノ	林 良枝
林 ムツ子	林 美津子	上村 梅子	篠原ミユキ
大内田千江美	篠原サチエ	妹川ミドリ	梅尾 一枝
小林あい子	鶴川 水子	丸山喜代子	日吉キヨノ
井手 和枝	足立イツエ	足立ナツミ	日野智恵子
青柳みゆき	日野マツ子	半田 久子	半田 松子
足立シズカ	半田ヨシ子	岩下スミ子	岩下タマエ
岩下 陽子	岩下キヨ子	岩下トミ子	岩下ヨシ子
岩下テル子	岩下チヅ子	天野ヨシエ	松尾テル子
上田ヒサ子	星野百合子	星野美代子	星野ミエ子
星野 福子	武内タツ子	土井 イト	一の宮通子
本園セツ子	大田ミヨ子	井上キヨノ	田中サツキ
古賀フミエ	日 広子	高潮セツ子	木石セツ子
中村 光恵	渡辺 燐子	後藤カミヨ	半田サエ子
矢野 静子			

遺物整理作業員

九州歴史資料館	有馬 信子	植山 洋子	鬼木美知子
栗柄 純子	奥村千恵子	桑本 亜子	友清 光子
平石 史子	古賀 陽子	高畠美智子	砥上トシ子
武藤 瞳子	坂口 好子	田中 待子	白水マサエ
辻 光子	平田 春美	原 富子	若松三枝子
鬼木つや子	佐藤みゆき	豊福 弥生	江上 佳子
関 久江	坂田ミチヨ	政住理英子	小島佐枝子
甘木調査事務所	中里屋リツ子	西 奇子	塩足 里美
石井紀美子	尾花 道子	藤井カオル	渡辺 燐子
松嶋 邦子	原田 和枝	高潮 照美	
矢野 明美	尾座本康子		

2. 上ノ宿遺跡の調査経過

上ノ宿遺跡は、当初、九州横断自動車道関係の第35地点 (STA222+00~222+80) として登録されていた地点である。昭和62年度に試掘調査をした結果、弥生時代中期初頭の表棺や土壙墓などからなる墓地群が存在することが判った。なお、谷を挟んだ南東側(STA223~223+80)の丘陵上にも文化財の存在が予想されたため、試掘を実施したところ、土師器片とピット群が検出されたので、新たにB地点として追加した。従って、当初の地点をA地点とし、上ノ宿遺跡と呼称した。なお、B地点は恵蘇山遺跡として区別することにした。

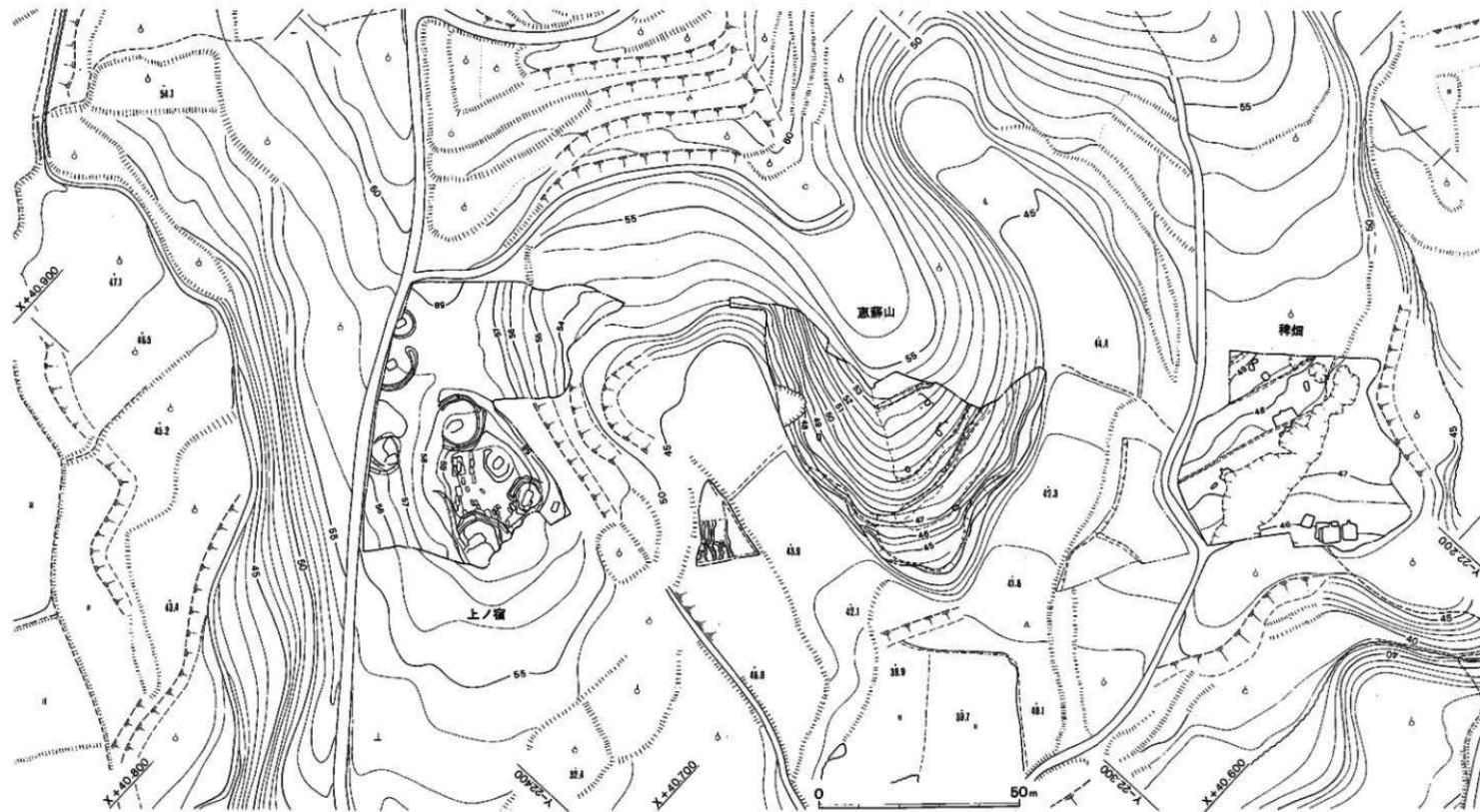
上ノ宿遺跡の調査は、昭和63年5月11日～11月16日までの6ヵ月間にわたる長期の調査となった。この遺跡は、かつて昭和30～33年にわたって柿畠造成に伴い、県立朝倉高校史学部が調査した遺跡で、今回はその北半部の再調査となった。

その結果、既に確認されていた3基の古墳の他に、新たに古墳6基をはじめ、弥生時代後期のものと思われる石棺墓2基と石蓋土壙墓1基、中期初頭の小児用表棺墓10基とこの地域特有の小口に板石を立てた組合式木棺墓48基からなる大墓地群が発見された。木棺墓の配置は重列埋葬をなし、墓域はさらに南側の用地外に拡大するため、その規模は不明である。弥生中期の墓地群は、大きくは4つのグループに区分できるようである。また、木棺墓群に伴うと思われる祭祀土壙6基も検出されている。

また、その下層からは縄文時代早期の集石遺構2基と陥穴状遺構2基、晩期と思われる土壙2基が検出された。更に、その下層からは先土器時代のナイフ形石器の包含層が、発掘区東端と東側の谷部で発見されるなど、重層的な調査となつた。なお、火山灰分析を実施するための土壤採取を行い、株式会社京都フロンティア・トラックに分析調査を依頼した。

調査は、平成2年3月の供用開始に向けて急ピッチに進む工事に追われる慌ただしい調査であった。とりわけ、前年度に終了していた柿畠遺跡の東側に建設するボックス工事に必要な工事用道路との関係で、南半部を優先させる分割調査をせざるを得なかった。次に、調査日誌をたどってみたい。

- 5月11日 第35地点（長田遺跡）の調査がほぼ終了したので、テント・発掘器材等を移動し、テントの設営を行う。
- 5月12日 遺構の検出作業を開始する。古墳の周溝が検出されはじめる。
- 5月19日 表棺や木棺墓が検出される。
- 5月30日 1・2号墳の石室の振り下げと周溝の振り下げを行う。恵蘇宿婦人会が現地見学にこられる。
- 6月6日 2・3号墳石室の写真撮影を行う。
- 6月7日 昭和30年に県立朝倉高校史学部が調査した古墳群と同一の古墳が存在することが



第2図 上ノ宿・恵蘇山・千歳道路と付近地形図 (1/1,000)

判明した。1号墳が朝倉高校調査時の4号墳、2号墳が5号墳に相当する。

- 6月14日 銀棺墓・木棺墓が多数検出され、発掘もかなり進んできた。
- 6月28日 木棺墓群の発掘が進む。今日で、銀棺墓6基、木棺墓20基、石棺墓1基、石蓋土壙墓1基となる。古墳5基となった。
- 7月5日 気球により空中写真をとる。
- 7月11日 木棺墓群の清掃と個別写真撮影を行う。
- 7月16日 実測作業がたまたため、作業員は第38地点の発掘に、一時移動する。
- 7月28日 実測がかなり進行したので、作業員が戻り発掘を再開する。
- 8月1日 1号墳石室の東側から埋甕が発見される。南筑後教育事務所管内の小学生見学。
- 8月4日 今日で木棺墓が46基となる。
- 8月10日 個別写真撮影のための清掃と撮影の毎日が続く。
- 8月17日 発掘区南半部の発掘がほぼ終了はじめたので、北半部の剥ぎたりない部分の除去をユンボで行う。
- 8月31日 北半部の造構検出作業を行う。
古墳の周溝が検出される。
- 9月3日 古墳の発掘と併行して、包含層の発掘をグリットを設定して開始する。
- 9月7日 サヌカイトの集石を発見する。
- 9月13日 集石造構2基が検出される。
- 10月3日 包含層の発掘。
- 10月18日 東側谷部の包含層の発掘に入り、ナイフ形石器出土し、調査員一同興奮する。
- 10月31日 谷部の発掘が進行する。
- 11月3日 谷部の全景写真撮影を行う。
- 11月15日 火山灰分析調査のための土壤サンプルの採取作業を行う。
- 11月16日 今日で全ての作業が終了する。お疲れさまでした。



第3回 発掘に参加した人々

3. 恵蘇山遺跡・稗畠遺跡の調査経過

恵蘇山遺跡の調査は、谷を挟んで東側に隣接する稗畠遺跡の調査が終盤にかかった段階から、両遺跡を並行する形で実施した。かなりの急斜面であるため、造構も希薄で、竪穴住居跡2、掘立柱建物跡1、土壙5と柱穴群を検出するに留まった。

調査は昭和63年1月7日～2月1日まで、2,400m²を対象としている。

1月7日 造構検出作業に入る。

1月9日 頂部付近で1号住居跡を検出したが、造構の遺存度は遅い。

1月11日 頂部付近の柱穴群を掘り下げるが、建物として纏まるものは無い。午後、宗像市に出向していった酒井仁夫氏死去の報が入り、2日間作業中断。

1月14日 暖かい日で、東斜面に2号住居跡を検出。

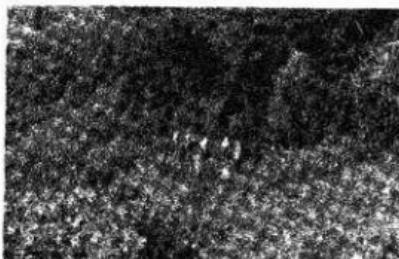
1月18日 西斜面の土壙1、柱穴群を調査する。

1月22日 南斜面下端部の土器が集中する2箇所の包含層を拡張する。
土器は古墳時代末から奈良時代に限られる。

1月27日 各造構の実測、平板測量に入る。

1月30日 全景写真撮影のため清掃。

2月1日 気球による空中写真撮影をもって、調査を終了。



第4図 恵蘇山遺跡挖掘作業

稗畠遺跡は南へ延びる低丘陵上で、東・西は谷によって限られ、幅70mほどである。恵蘇山遺跡にかぎらず、この周辺は県内最大の柿畠として、筑後川沿いから西北方面山間部に至るまで開墾、造成され、造構の遺存度はあまり良くない。調査は前述した通り一部恵蘇山遺跡と重複する期日もあるが、昭和62年10月19日より翌63年2月18日まで、3,980m²を対象として実施し、古墳時代末から奈良時代の竪穴住居跡10、掘立柱建物跡3、柱穴群および、その下層より繩文時代早～晚期の包含層を検出した。

10月19日 遺跡への進入路の整備と器材を搬入する。

10月29日 遺跡の中央部付近は、近年の土取りで、天地返しされている事が判明。黒褐色を覆土とする柱穴群の調査をするが、建物としては纏まらない。

11月6日 2号住居跡の調査に入るが、1号住居跡と同様、その大半は削平を受けている。
柱穴より安山岩製の縦型石匙・管状土鍤が出た。

- 11月9日 縄文時代の土壙2基を検出。打製石斧出土。
- 11月13日 3・4号住居跡の調査。
- 11月16日 1~3号住居跡のカマド調査。午後から翌日にかけて恵蘇山遺跡の伐開。
- 11月19日 5~10号住居跡の調査と各遺構の個別写真。1・2段目出土の縄文土器の取り上げ作業。
- 11月23日 恵蘇山遺跡の表土剥ぎを重機にて開始。
- 12月4日 3段目の縄文時代包含層の調査。
- 12月12日 1・2号建物跡に入る。
- 12月18日 2段目の包含層を掘り下げるが、縄文土器の出土は少ない。
- 12月25日 遺跡を整頓して今年の作業終了。
- 2月2日 西端部の調査に入るため、テント等を移動。
- 2月3日 南接する柿畠の進入路の確保が可能になったので、重機にて拡張する。
- 2月8日 5~10号住居跡の全体が確認され、いずれも北側にカマドを持つ方形住居となるが、6号住居跡を除く4軒は切り合っている。
- 2月10日 全景写真の撮影。
- 2月11日 4号住居跡南側一帯に分布する明褐色土層を掘り下げたところ、縄文晩期の土器片及び安山岩製のスクレバー2点出土。
- 2月16日 土層図の作成。
- 2月18日 器材を撤収して調査終了。
- 両遺跡の調査関係者は1-(1)に換るが、携わった関係各位ならびに作業に従事した各位に感謝の意を表します。



第5圖 発掘調査と記録

II 位置と環境

上ノ宿遺跡、恵蘇山遺跡、稗畠遺跡は、いずれも福岡県朝倉郡朝倉町大字山田にあって、それぞれ字上ノ宿・恵蘇山・稗畠に所在し、狭い谷を挟んで対峙している。

遺跡は、馬見山・駿遊ヶ岳といった山塊から南にのびる朝倉低山地の一つ、麻底良山（標高294.9m）から派生した低丘陵上に形成されている。この八手状にのびる丘陵上には、繩文・弥生・古墳・奈良時代といった各時期の集落跡や墓地群等が多数、分布している。とりわけ、この地域の基幹産業である富有柿の生産が盛んになった昭和30年代頃には、群在する多くの古墳群が柿園造成で破壊されたり、消滅していった。その頃、県立朝倉高校の史学部が、各地で実施された緊急調査の記録は、現在、多くの貴重な資料を残している（註1）。

今回、調査した上ノ宿遺跡は、朝倉高校が昭和30～33年の間、4次にわたって調査されたものと一部重複する地区の再調査となった。その結果、朝倉高校が調査した3基の古墳の他に、6基の古墳を新たに発見するとともに、弥生時代後期のものと思われる石棺墓2基と石蓋土塚墓1基、弥生前期末～中期初頭の木棺墓48基と甕棺墓10基からなる大墓地群、繩文時代後期の遺物や早期の陥穴状土壙2基、さらにはその下層から先土器時代の石器類も発見されるなど大規模な複合遺跡となつた。

狭い谷を挟んだ東側の恵蘇山遺跡は、調査地区が丘陵先端の一部ということもあって、奈良時代の住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟、この時期のものと思われる土壙5基と造構の少ない希薄な遺跡であった。

さらに、恵蘇山遺跡の東側にある稗畠遺跡では、繩文時代早期から晩期にわたる土壙5基をはじめ、古墳時代終末～奈良時代の住居跡10軒と掘立柱建物跡3棟が検出された。

これら3遺跡と関連する周辺遺跡をみると、近年、横断道路の調査で発見され、注目された先土器時代から繩文時代早期にわたる一大集落跡である原の東遺跡をはじめ、繩文時代早期～晩期にわたる造構・遺物の検出された治部ノ上遺跡や長島遺跡、早期の住居跡が検出された外之隈遺跡、前期の森B式土器の良好な資料が出土した土壙群30基が発見された金場遺跡や晩期の土壙が36基と多数発見された長田遺跡など、八手状にのびる低丘陵上に形成されている。

また、弥生時代の遺跡には、朝倉地方では最大規模級ともいえる弥生前期～後期にわたる一大集落跡が発見された上の原遺跡をはじめ、稻作開始期の集落として注目される長田遺跡や、前期の貯蔵穴群や住居跡が検出された鎌塚遺跡、中期の集落と墓地が発見された原の東遺跡や、杷木宮原遺跡、中町裏遺跡などが知られている。また、小規模ではあるが、金場遺跡・大迫遺跡・外之隈遺跡でも弥生中期の集落跡が検出されている。広大な平野部を背景にもつ大規模な集落である上の原遺跡に対し、これら小規模な集落が点在するこの地域のあり方は、狭い平野部しか持ちえないこの地域の実態を物語るものといえるだろう。



- 至森郡
至鹿取
至延寿寺
至おおいた
至大分
- | | | | | |
|-------------|------------|-------------|--------------|------------|
| 21D. 上の原遺跡 | 22C. 瓢塚遺跡 | 22B. 治部ノ上遺跡 | 23. 那禪寺遺跡 | 24. 才田遺跡 |
| 27. 長鳥遺跡 | 28. 中妙見遺跡 | 29A. 原の東遺跡 | 29B. 妙見古墳群 | 30. 錬塚遺跡 |
| 31. 山の神遺跡 | 33. 長田遺跡 | 34. 金場遺跡 | 35A. 上ノ宿遺跡 | 35B. 惠那山遺跡 |
| 36. 神塚遺跡 | 37. 大追遺跡 | 38. 外之隈遺跡 | 39A. 把木宮原遺跡 | 39B. 中町裏遺跡 |
| 40. 志波岡ノ水遺跡 | 41. 志波岡水遺跡 | 42. 江栗遺跡 | 58. 山田古墳群 | 61. 古熊古墳群 |
| 62. 南田古墳群 | 63. 上梨木古墳群 | 64. 烏集院3号墳 | 65. 孤塚古墳 | 66. 宮地獄古墳群 |
| 67. 宮地獄古墳群 | 68. 北八坂古墳群 | 69. 宮野古墳群 | 70. 宮野B古墳群 | 71. 陣屋古墳群 |
| 73. 伝朝倉宮跡 | 75. 小陰古墳群 | 76. 上須川古墳群 | 77. 山後山古墳群 | 79. 山ノ神古墳群 |
| 80. 奈良ヶ谷古墳群 | 81. 山田勝古墳群 | 88. 恵那八幡古墳群 | 90. 山出ウラ山古墳群 | 91. 鋸塚古墳 |

第6図 周辺造跡分布図 (1/50,000)

朝倉低山地からのびる山丘や山麓には、昔から多数の古墳群が存在することは知られていた。とりわけ、鳥集院から山後、麻底良山へと続く丘陵上には、古熊・曲田・上梨木・宮地獄・北八坂・宮野A・宮野B・降葉・小隈・上須川・山後山・山ノ神・奈良ヶ谷・山田・山田柳・恵蘇八幡宮古墳群といった17群にもおよぶ後期の群集墳が多数群在している。一方、鳥屋山に源を発する妙見川左岸の低位な段丘上には、甘木・朝倉地方で最大の前方後円墳といわれる劍塚古墳(全長70.6m)がある。また、北東の丘陵上には、規模は小さいものの鳥集院1号墳・宮地獄古墳といった前方後円墳が、さらに、その西方には、線刻壁画で著名な県指定の狐塚古墳がある。

このような夥しい古墳群が群在するこの地域にあって、この時期の集落遺跡はあまり知られていない。主な遺跡を上げるとすれば、西から治部ノ上遺跡、長島遺跡、長田遺跡、大迫遺跡、外之隈遺跡、杷木宮原遺跡などがある。外之隈遺跡を除けば、いづれも住居跡10軒前後といった小規模な集落で、夥しい数の古墳群の実態とは比較できない現状である。

70軒を越す古墳時代後期の大集落が発見された外之隈遺跡は、後期の群集墳との関連は別にして、筑後川に突き出た標高44~70mの急傾斜地に形成された特異な集落遺跡で、その立地は、平野部に形成された一般の農耕集落とは明らかに異なる。今後、注目される遺跡である。

近年の九州横断自動車道の発掘調査による大きな成果の一つは、これまで知られていなかつた奈良時代の大規模な集落遺跡が各地で発見されたことである。特に、甘木市宮原遺跡の約450軒にも及ぶ竪穴住居跡と、掘立柱建物跡200棟以上といった巨大な集落の発見は、今までの我々には予想できることであった。この他にも、50~100軒前後といった住居跡が検出された遺跡には、甘木市高原遺跡・塔ノ上遺跡、朝倉町西法寺遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・才田遺跡・長島遺跡・鎌塚遺跡などがあり、大規模な集落が各地に形成されていたことが判る。奈良時代におけるこの地域の繁栄を物語っている。

齊明天皇(661)に百濟救援のため、齊明天皇の行宮として建設されたという有名な朝倉櫛広庭宮推定地は、近接する朝倉町須川にある。また、この朝倉宮の造営と関連する軍事的要塞とも考えられる杷木神籠石(国指定)は、東方、大分県との県境である杷木町林田に所在している。このような国家的重要施設で造営されたと考えられる重要な遺跡が、この地域に存在することと、奈良時代におけるこの地域の繁栄ぶりと無縁ではないだろう。一方、奈良時代の寺院跡と知られる長安寺跡も朝倉町須川にあり、その関連が注目される。

註1 高山明池「埋もれていた朝倉文化」朝倉高校史学部 1969

上ノ宿遺跡の調査

本文目次

1. 遺跡の概要	13
2. 先土器・縄文時代の造構と遺物	13
(1) 発掘区の設定と層位	13
(2) 土層の観察	13
(3) 遺物の出土状況	17
(4) II・III区の旧地形	17
(5) 陥穴状造構	21
(6) 集石造構	22
(7) サヌカイト集石	23
(8) 土壙	25
(9) 縄文土器	25
(10) 石器	35
3. 弥生時代の造構と遺物	40
(1) 土壙	40
(2) 木棺墓	43
(3) 製棺墓	74
(4) 石棺墓・石蓋上壙墓	83
(5) 採集遺物	84
4. 古墳時代以降の造構と遺物	87
(1) 古墳群と土壙墓	87
(2) 溝状造構	107
(3) 採集遺物	109
5. おわりに	109
(1) 先土器時代について	109
(2) 縄文時代について	109
(3) 木棺墓について	110
(4) 古墳群の変遷	113

図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1	(1) 上ノ宿遺跡遠景空中写真.....	13
	(2) 上ノ宿遺跡南半部全景空中写真.....	13
図 版 2	(1) II区全景.....	13
	(2) II区E2-1, F2-2区 VII層面 (土層断面①・②)	15
図 版 3	(1) 土層断面⑤.....	15
	(2) 土層断面⑥.....	15
図 版 4	(1) II区 III層面 1号集石遺構	22
	(2) II区 III層面 2号集石遺構	22
図 版 5	(1) サヌカイト集石全景.....	23
	(2) サヌカイト集石近景.....	23
図 版 6	(1) III区 VII層下面全景	17
	(2) III区 土層断面⑦の裏側土層	17
図 版 7	(1) III区遺物出土状態1	18
	(2) III区遺物出土状態2	18
図 版 8	(1) 1号陥穴状遺構土層断面 (北から)	21
	(2) 1号陥穴状遺構 (北から)	21
図 版 9	(1) 2号陥穴状遺構土層断面 (東から)	22
	(2) 2号陥穴状遺構 (南から)	22
図 版 10	(1) 1号土壙 (北から)	25
	(2) 4号土壙 (東から)	25
図 版 11	(1) 2号土壙 (東から)	40
	(2) 6号土壙 (西から)	40
図 版 12	(1) 7号土壙 (西から)	40
	(2) 8号土壙 (西から)	43
図 版 13	(1) 弥生時代墓地群全景空中写真.....	43
	(2) 弥生時代墓地群近景空中写真.....	43
図 版 14	(1) 木棺墓群 (南から)	43
	(2) 木棺墓・石棺墓群 (北から)	43
図 版 15	(1) 木棺墓群全景 (北から)	43

	(2) 木棺墓群全景 (南から)	43
図 版 16	(1) 1号木棺墓 (北から)	45
	(2) 2号木棺墓 (北から)	45
図 版 17	(1) 5号木棺墓 (北から)	47
	(2) 6号木棺墓 (北から)	47
図 版 18	(1) 7号木棺墓 (北から)	47
	(2) 7号木棺墓小口石除去後 (北から)	47
図 版 19	(1) 8号木棺墓土層断面 (北から)	50
	(2) 8号木棺墓 (北から)	50
図 版 20	(1) 9号木棺墓 (北から)	50
	(2) 11号木棺墓 (北から)	51
図 版 21	(1) 11・12号木棺墓 (北から)	51
	(2) 13~15号木棺墓 (南から)	51
図 版 22	(1) 17号木棺墓 (東から)	54
	(2) 18号木棺墓 (東から)	54
図 版 23	(1) 20・21号木棺墓 (東から)	56
	(2) 22号木棺墓 (北から)	56
図 版 24	(1) 23号木棺墓 (南から)	56
	(2) 24号木棺墓 (南から)	58
図 版 25	(1) 25号木棺墓 (南から)	60
	(2) 26号木棺墓 (東から)	60
図 版 26	(1) 28号木棺墓 (南から)	60
	(2) 30号木棺墓 (南から)	60
図 版 27	(1) 30号木棺墓裏込め除去後 (西から)	60
	(2) 32~34号木棺墓 (南から)	61
図 版 28	(1) 32号木棺墓 (南から)	62
	(2) 33号木棺墓 (南から)	62
図 版 29	(1) 34号木棺墓 (南から)	64
	(2) 34号木棺墓裏込め除去後 (南から)	64
図 版 30	(1) 36号木棺墓 (西から)	64
	(2) 37・38号木棺墓 (西から)	64
図 版 31	(1) 39号木棺墓 (西から)	64
	(2) 40号木棺墓 (西から)	67

図 版 32 (1) 41号木棺墓 (南から)	67
(2) 41号木棺墓裏込め除去後 (南から)	67
図 版 33 (1) 42号木棺墓 (南から)	67
(2) 43号木棺墓土層断面 (北から)	67
図 版 34 (1) 43号木棺墓 (北から)	67
(2) 44号木棺墓 (西から)	69
図 版 35 (1) 45号木棺墓と標石 (南から)	70
(2) 45号木棺墓土層断面 (南から)	70
図 版 36 (1) 46号木棺墓 (南から)	71
(2) 46号木棺墓裏込め除去後 (北から)	71
図 版 37 (1) 47号木棺墓 (南から)	74
(2) 48号木棺墓 (南から)	74
図 版 38 (1) 1号甕棺墓 (西から)	74
(2) 2号甕棺墓 (北西から)	76
図 版 39 (1) 3号甕棺墓 (西から)	76
(2) 4号甕棺墓 (東から)	78
図 版 40 (1) 5号甕棺墓 (南から)	78
(2) 6号甕棺墓 (南から)	80
図 版 41 (1) 7号甕棺墓 (西から)	80
(2) 8号甕棺墓 (西から)	80
図 版 42 (1) 9号甕棺墓 (北から)	80
(2) 木棺墓群と重複する石棺墓・石蓋土壙墓	83
図 版 43 (1) 木棺墓と切り合う 2号石棺墓 (北東から)	83
(2) 1号石棺墓 (北から)	83
図 版 44 (1) 2号石棺墓 (東から)	84
(2) 2号石棺墓蓋石除去後 (東から)	84
図 版 45 (1) 1号石蓋土壙墓 (東から)	84
(2) 1号石蓋土壙墓蓋石除去後 (東から)	84
図 版 46 (1) 1号墳全景空中写真	87
(2) 1号墳全景 (東から)	87
図 版 47 (1) 1号墳石室全景 (西から)	87
(2) 1号墳石室全景 (東から)	87
図 版 48 (1) 1号墳玄門と前庭部 (西から)	87

(2) 1号墳西側周溝内土器出土状態（東から）	89
図版 49 (1) 埋甕（北から）	93
(2) 上甕を除去した埋甕（北から）	93
図版 50 (1) 2号墳全景空中写真	95
(2) 2号墳石室全景（西から）	95
図版 51 (1) 2号墳石室全景（北から）	95
(2) 2号墳南西側周溝内土器出土状態（北から）	95
図版 52 (1) 3号墳全景（西から）	99
(2) 3号墳石室全景（西から）	99
図版 53 (1) 4号墳全景（南から）	100
(2) 4号墳石室全景（南から）	100
図版 54 (上) 5号墳全景空中写真	100
(下) 5号墳石室全景（西から）	100
図版 55 (1) 6号墳全景（東から）	101
(2) 6号墳石室全景（南から）	101
図版 56 (1) 7号墳全景空中写真	103
(2) 7号墳石室全景（東から）	103
図版 57 (1) 8号墳石室全景（東から）	105
(2) 9号墳石室全景（東から）	105
図版 58 (1) 1号土壙墓全景（北から）	106
(2) 1号土壙墓内土器出土状態（北から）	106
図版 59 (1) 溝状造構全景（北から）	107
(2) 溝状造構内土層断面（北から）	107
図版 60 (1) サヌカイト集石出土石器	23
(2) サヌカイト集石出土石器裏面	23
図版 61 繩文土器 1	25
図版 62 繩文土器 2	26
図版 63 (1) II区出土石器	35
(2) III区出土石器	38
図版 64 土壙・木棺墓・溝状造構内出土土器と甕棺	40
図版 65 甕棺 1	74
図版 66 甕棺 2	78
図版 67 1号墳出土土師器・須恵器	87

図 版 68	1・2号墳出土土師器・須恵器と埋甕.....	87
図 版 69	1・3・5・6号墳出土玉類・鉄器・磨製石鎌・土鏡	87
図 版 70	2・8号墳・1号土壙墓出土土師器・須恵器と鉄劍.....	95

挿 図 目 次

第 1 図	II・III区地形図・グリッド配置図 (1/600)	14
第 2 図	II区E 2・3、F 2土層断面図 (1/60)	折込み
第 3 図	II区C 2土層断面図 (1/60)	15
第 4 図	火山灰土壤分析図.....	16
第 5 図	II区土層柱状図.....	17
第 6 図	III区土層断面図 (1/60)	18
第 7 図	III区II～IV層下面地形実測図 (1/200)	19
第 8 図	III区VI'～VII層下面地形実測図 (1/200)	20
第 9 図	陷穴状造構実測図 (1/30)	21
第 10 図	集石造構実測図 (1/30)	22
第 11 図	サヌカイト集石実測図 (1/15)	23
第 12 図	集石出土石器実測図 (1/3)	24
第 13 図	1～5号土壙実測図 (1/30)	26
第 14 図	縄文土器実測図 1 (1/2)	27
第 15 図	縄文土器実測図 2 (1/2)	28
第 16 図	縄文土器実測図 3 (1/2)	29
第 17 図	縄文土器実測図 4 (1/2)	30
第 18 図	縄文土器実測図 5 (1/2)	31
第 19 図	縄文土器実測図 6 (1/2)	32
第 20 図	縄文土器実測図 7 (1/2)	33
第 21 図	縄文土器実測図 8 (1/2)	34
第 22 図	I区出土石器実測図 (1/3)	36
第 23 図	II区出土石器実測図 (1/2)	37
第 24 図	III区出土石器実測図 (1/2)	39
第 25 図	弥生時代墓地・土壤配置図 (1/100)	折込み

第 26 図	6・7号土壙実測図 (1/30)	41
第 27 図	土壙出土土器実測図 (1/4)	41
第 28 図	8号土壙実測図 (1/30)	42
第 29 図	1~3号木棺墓実測図 (1/30)	44
第 30 図	4~5号木棺墓実測図 (1/30)	46
第 31 図	6・7号木棺墓実測図 (1/30)	48
第 32 図	8・9号木棺墓実測図 (1/30)	49
第 33 図	木棺墓出土土器実測図 (1/4)	50
第 34 図	10~12号木棺墓実測図 (1/30)	52
第 35 図	13~15号木棺墓実測図 (1/30)	53
第 36 図	16~19号木棺墓実測図 (1/30)	55
第 37 図	20~22号木棺墓実測図 (1/30)	57
第 38 図	23・24号木棺墓実測図 (1/30)	58
第 39 図	25~27号木棺墓実測図 (1/30)	59
第 40 図	28~30号木棺墓実測図 (1/30)	61
第 41 図	31~33号木棺墓実測図 (1/30)	63
第 42 図	34~37号木棺墓実測図 (1/30)	65
第 43 図	38~40号木棺墓実測図 (1/30)	66
第 44 図	41・42号木棺墓実測図 (1/30)	68
第 45 図	43・44号木棺墓実測図 (1/30)	69
第 46 図	45号木棺墓実測図 (1/30)	70
第 47 図	46号木棺墓実測図 (1/30)	71
第 48 図	47・48号木棺墓実測図 (1/30)	72
第 49 図	1~8号甕棺墓実測図 (1/30)	75
第 50 図	甕棺実測図 1 (1/6)	76
第 51 図	甕棺実測図 2 (1/6)	77
第 52 図	甕棺実測図 3 (1/6)	79
第 53 図	甕棺実測図 4 (1/6)	81
第 54 図	1・2号石棺墓実測図 (1/30)	83
第 55 図	1号石蓋土壙墓実測図 (1/30)	85
第 56 図	弥生式土器実測図 (1/4)	86
第 57 図	磨製石鋸実測図 (1/2)	86
第 58 図	古墳群配置図と地山地形図 (1/300)	折込み

第 59 図	1号墳石室実測図 (1/60)	88
第 60 図	1号墳周溝内遺物出土状態実測図 (1/30)	89
第 61 図	1号墳出土土器実測図 1 (1/3)	90
第 62 図	1号墳出土土器実測図 2 (1/3)	91
第 63 図	1号墳出土土器実測図 3 (1/4)	92
第 64 図	1号墳出土玉類・鉄器実測図 (1/2)	93
第 65 図	1号墳丘内埋甕実測図 (1/10)	93
第 66 図	埋甕に使用された土器実測図 (1/3)	94
第 67 図	2号墳石室実測図 (1/60)	95
第 68 図	2号墳出土土器実測図 (1/3)	96
第 69 図	3号墳実測図 (1/60)	98
第 70 図	3号墳出土玉類・鉄器実測図 (1/2)	99
第 71 図	4号墳石室実測図 (1/60)	100
第 72 図	5号墳石室実測図 (1/60)	101
第 73 図	5・6号墳出土鉄器実測図 (1/2)	101
第 74 図	6号墳石室実測図 (1/30)	102
第 75 図	7号墳石室実測図 (1/30)	103
第 76 図	8・9号墳石室実測図 (1/30)	104
第 77 図	8号墳出土鉄器実測図 (1/4)	105
第 78 図	1号土壤墓実測図 (1/30)	106
第 79 図	1号土壤墓出土土器実測図 (1/3)	107
第 80 図	溝状造構土層断面図 (1/60)	107
第 81 図	溝状造構出土土器実測図 (1/3)	108
第 82 図	溝状造構出土土器・土鍤実測図 (1/4・1/2)	108
第 83 図	土師器・須恵器実測図 (1/3)	108
第 84 図	木棺墓の分布状況と群構成	112
第 85 図	古墳群の分布状況復原図 (Aは朝倉高校調査番号)	115

付 図 目 次

付 図 1 上ノ宿造跡造構配置図 (1/200)

表 目 次

表 1	木棺墓計測一覧表	73
表 2	巣棺墓計測一覧表	82
表 3	石棺墓計測一覧表	84
表 4	1号石蓋土壙墓計測表	84
表 5	古墳計測一覧表	106

III 上ノ宿遺跡の調査

1. 遺跡の概要

遺跡は、南北に舌状に延びた丘陵上にあって、発掘区中央付近は鞍部を形成している。検出された遺構としては、縄文時代早期の階穴状遺構2基と集石2基をはじめ、弥生時代前期末～中期初頭にわたる木棺墓48基と祭祀土壇と思われる土壇6基、中期初頭の小児用覆棺墓10基、後期のものと思われる石棺墓2基と石蓋土壇墓1基、さらに、古墳9基と古墳時代の土壇墓1基が、また、南東側斜面からは大溝1条が検出された。他に、遺物としては先土器時代のナイフ形石器をはじめとする石器類や縄文時代の前期から晩期にわたる土器や石器など多数が発見された。

2. 先土器・縄文時代の遺構と遺物

(1) 発掘区の設定と層位(第1図)

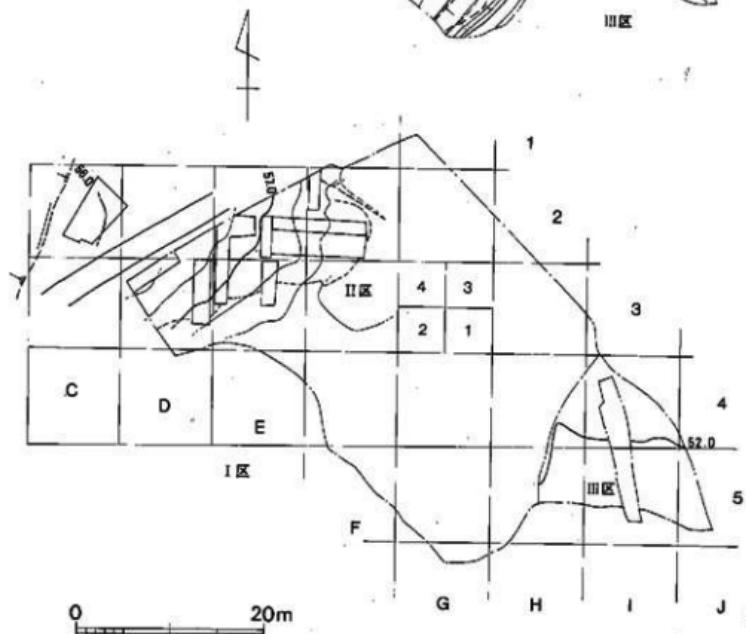
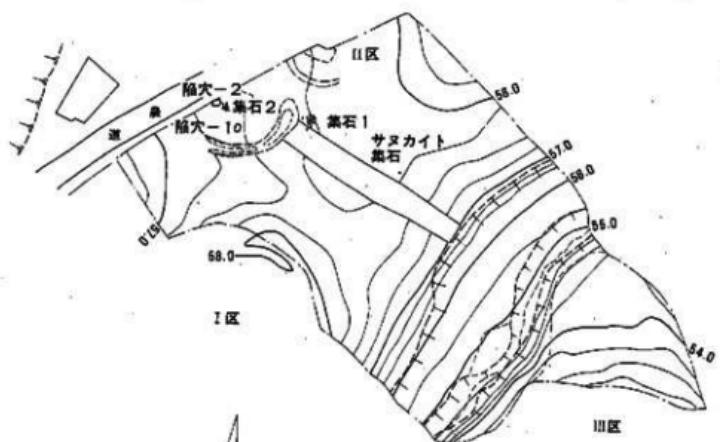
上ノ宿遺跡の調査は、当初は2号・3号墳を結ぶ線より南側を調査対象地とした(I区)。

I区終了後その北半部の調査に入った。北半部を台地の上(II区)、東側台地の下(III区)として調査を行った(第1図)。

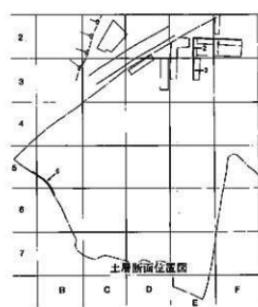
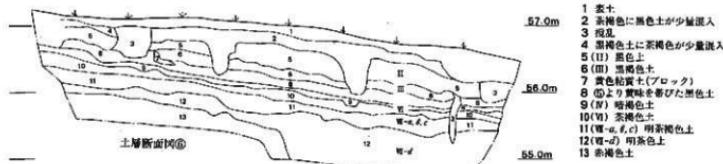
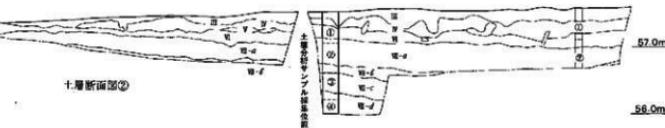
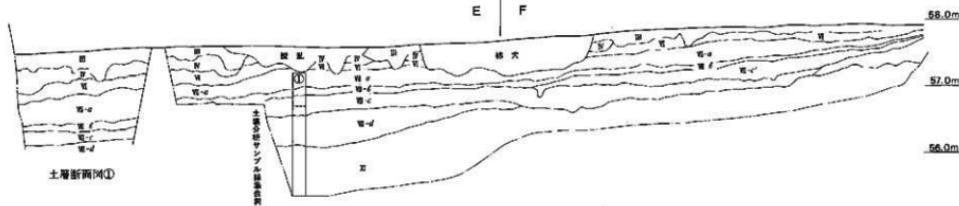
I区においても、縄文土器が、弥生時代、古墳時代遺構や、現代の柿肥料穴より出土しているが、縄文時代以前の層位的な調査は、II・III区においてである。II・III区の層位と対比するためI区南側に土層観察用のトレンチを開いた(第2図土層断面⑥)。II区は、10m四方のグリッド単位を層位的に掘り下げたが、一部土層観察用に深掘りをした。E2-1, F2-2の北側(第2図土層断面①), E2-1, E3-3の西側(第2図土層断面②), E2-2, E3-4西側, D3-3, 1東側、奥道をへだてた北側(第3図土層断面③・④)と、その北側崖面(第3図土層断面⑤)を観察した。III区は、最初に試掘溝(第6図土層断面⑦・⑧)を入れ、全体的に層位的に発掘した。

(2) 土層の観察

土層は、各トレンチとも土層の色などを若干異なる点もあるが混入物、土質を検討したうえで共通してアラビア数字で番号をつけた。火山ガラス等の分析を第2図断面②に示した位置で行い、その結果を第4図に示した。上より10cm間隔で試料を採取し、80cmまでの8個の連結したサンプルの分析を依頼した。層位との関係は、示した通りIII層からVIIa層までの間である。分析によると、鉱物組成中火山ガラスは、深さ80cmからもわずか認められるが、深さ50cmから目



第 1 図 II・III区地形図・グリッド配置図 (1/600)



第2図 II区E2・3、F2七層断面図 (1/60)

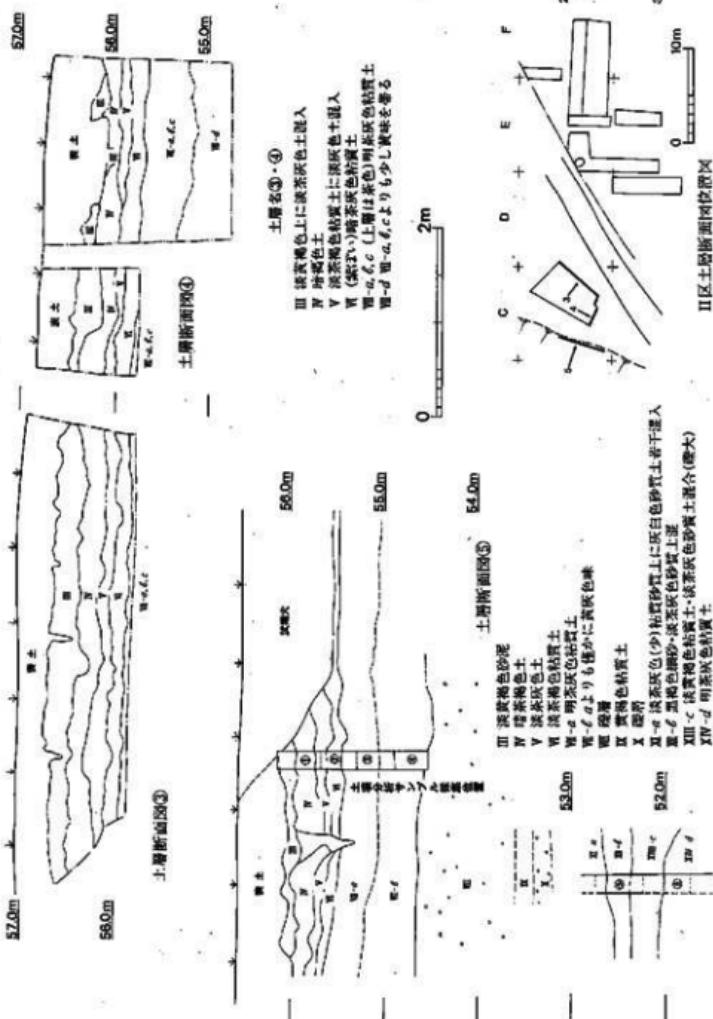
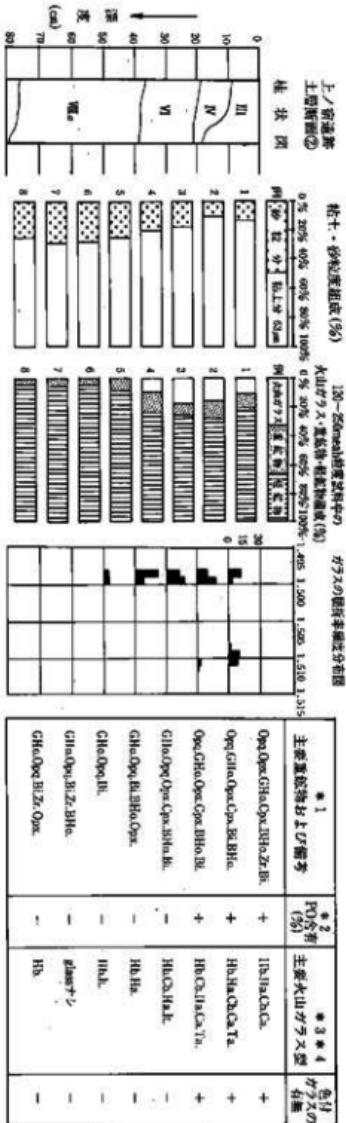
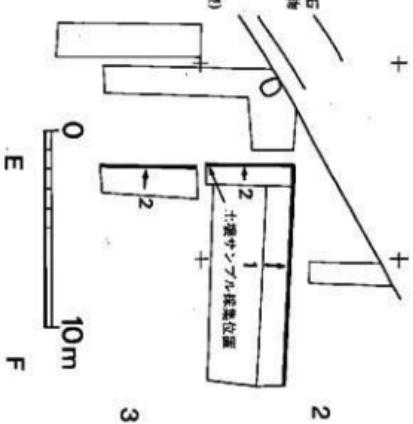


図3 図 II区C2 土壌断面図 (1/60)



試料採取地点上層試料状況および分析結果
上ノ宿道路 (0-80cm, 10cm間隔)



立ちはじめ深さ30cmでピークに達し（約19%）、深さ10cmで約10%と減少する。ガラスの屈折率は、1.459~1.500の範囲にはほとんどが入り、わずか深さ10.20cmで屈折率1.510のものが認められる。主要ガラス型は吉川1976の扁平型が、各サンプルに多く認められ、C型・T型もわずかながら認められる。主要重要鉱物組成には、火山ガラスの多いサンプルに、斜方輝石(Opx)、單斜輝石(Cpx)、角閃石が認められ、ガラス屈折率は、1.495~1.500の範囲にあり、主要ガラスも扁平型が柱石型よりも多いことなどから、VI層を中心とした時期に、AT火山灰の降下のあったことが推定される。

(3) 遺物の出土状況

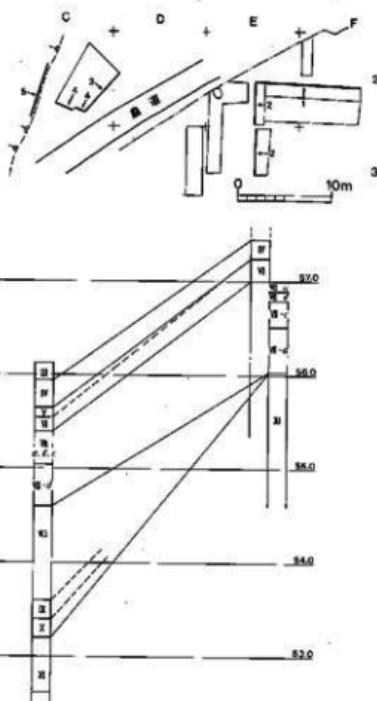
先土器時代遺物は、II区では、V層よりナイフ形石器、VII層よりサヌカイト・黒曜石片が出土している。III区では、IV'層より台形石器・ナイフ形石器、V層よりナイフ形石器、VI層より安山岩石核が出土している。

しかし、II区では、VIIb層・VI層・IV層・III層より石鎚が、さらにVI層まで押型文土器、晚期土器が検出されている。III区では、IV層より石鎚が検出されている。

以上よりすると、少くともII区の層序に関しては、VI層を中心にAT火山灰が降下したものと考えるより、AT火山灰の再堆積したものである可能性が大きいといえる。

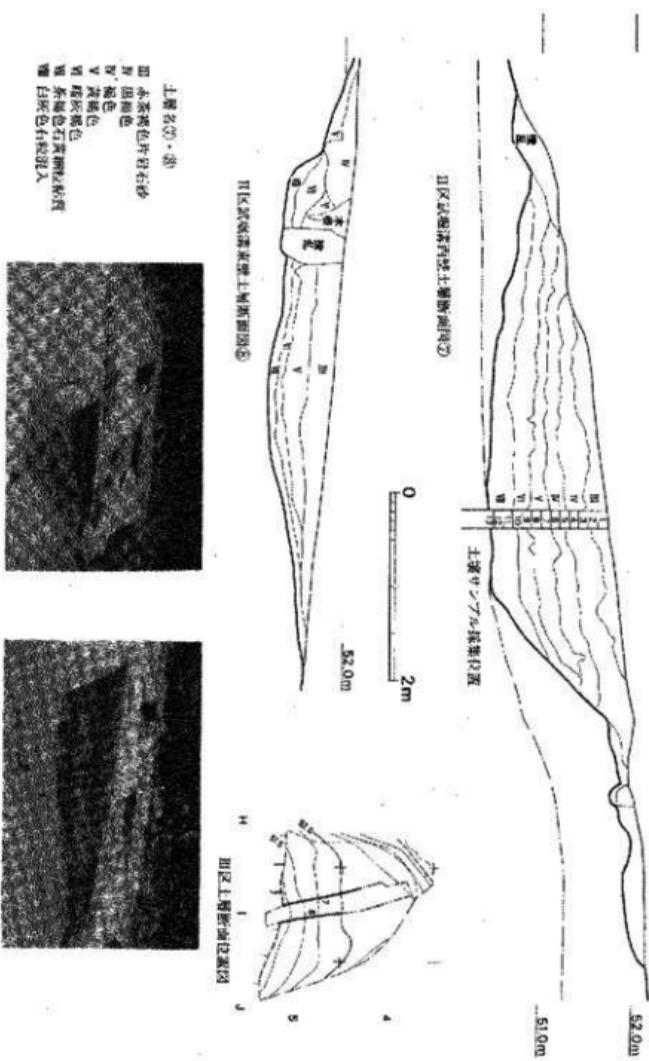
(4) II・III区の旧地形（第1・7・8図）

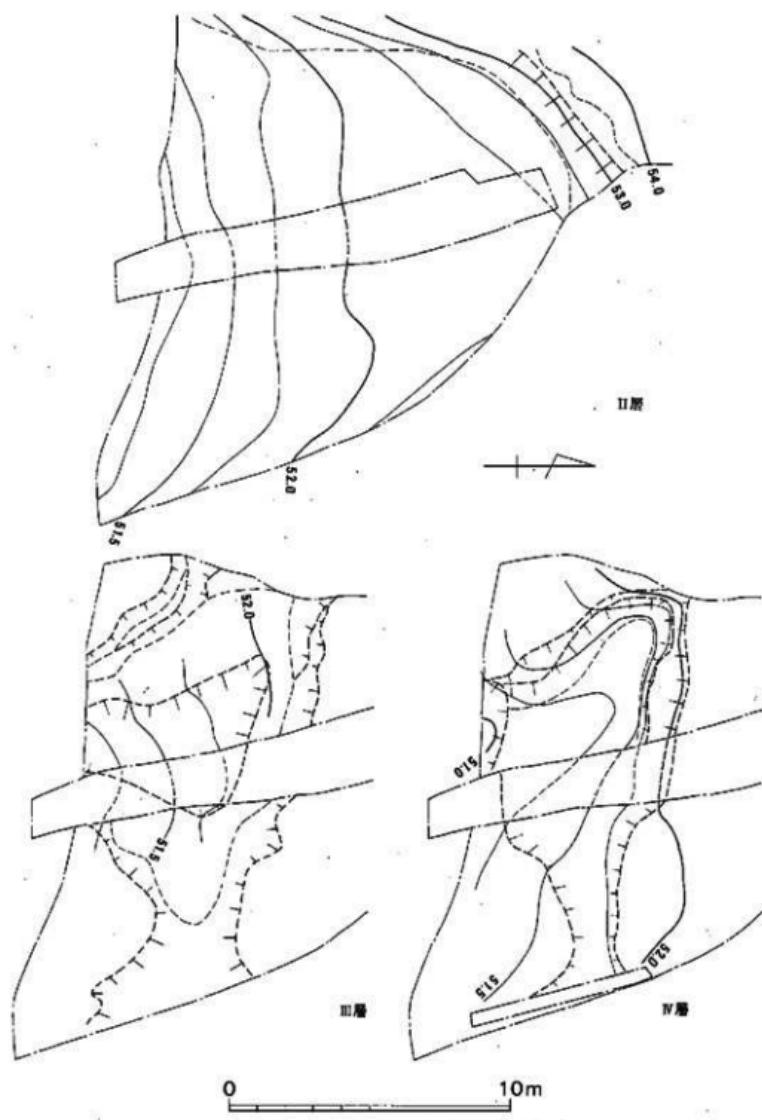
II・III区とも、いずれも浅い小さな谷に堆積した包含層であり、II区は現状ではF2-1付近を谷頭として西へ開く浅い谷（30mで1.5m下る）に遺物が残されたものである。III区は、I5-4区を最深部とし南へ開く凹地に遺物が残されたものである。



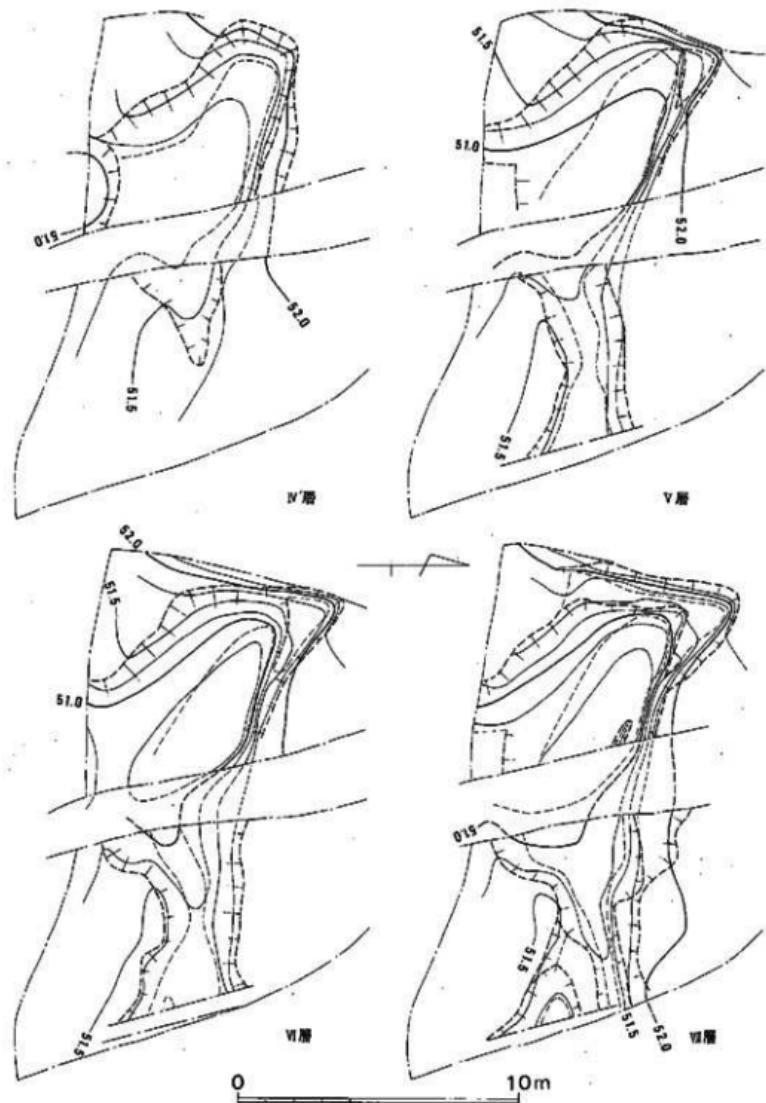
第5図 II区土壙柱状図

第 6 図 川区土壤断面図 (1/60)



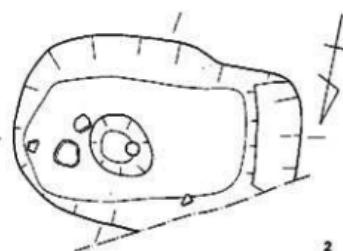
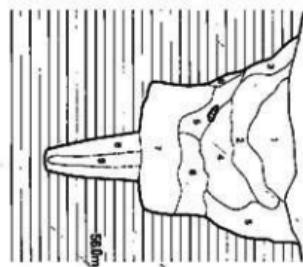


第 7 図 III区II~IV層下面地形実測図 (1/200)

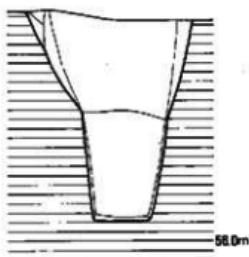


第 8 図 III区 VT-VII層下面地形実測図 (1/200)

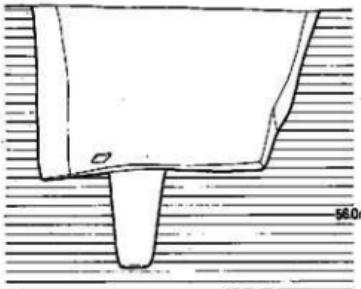
(5) 陷穴状造構 (図版 8・9, 第 9 図)



1. 茶色味ある淡黄褐色砂泥に淡褐灰色土少し混入
2. ①よりも淡褐灰色土多く混入
3. 淡黄褐色土に暗灰色土若干混入
4. ②と略同じだが、淡褐灰色土がやや多く混入
5. 淡褐灰色土に淡黄褐色土若干混入
6. 暗褐灰色土
7. 淡褐灰色(少し粘質性あり)砂泥に淡黄褐色土少し混入
8. 黄茶色(やや粘質土に黄茶色土少し混入
9. 明茶褐色土(砂泥質)

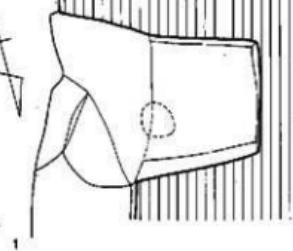
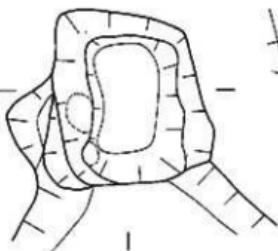


0
1m



50cm

1号 陷穴			
	上 長軸	95cm	径
横 幅	短軸	77cm	深さ
下 長軸	58cm	杭数	—
端 短軸	31cm	長軸方位	—
深さ	101cm	N-15-E	



2号 陷穴			
	上 長軸	152cm	径
横 幅	短軸	103cm	深さ
下 長軸	118cm	杭数	1
端 短軸	66cm	長軸方位	—
深さ	88cm	N-78,5-E	

第 9 図 陷穴状造構実測図 (1/30)

1号陥穴（図版8、第9図） E 2-1区にあり95×77cmの平面長方形で、深さ50cmまでは斜めに、以下110cmまでは直に壁が立っている。底面は58×30cmで平坦である。土層断面をみると、底から30cmほど暗灰色砂泥質土が均質に近く堆積し、それより上面は摺鉢状に土が堆積している。

出土遺物（第14図8・11）

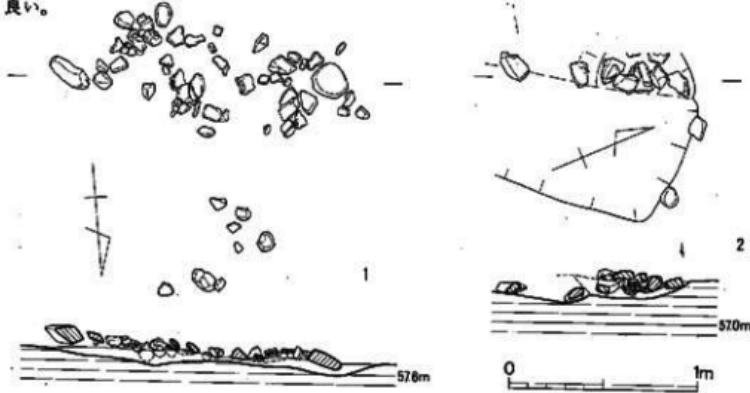
早期縄文土器 8は拓本では明瞭ではないが、梢円押型文である。11は厚手無文で痕跡的に爪形文風の沈線が認められる。いづれも1号陥穴出土土器であるが、同一時期の遺物とするには疑問が残る。

2号陥穴（図版9、第9図） E 2-4区にあり152×103cmの平面長方形に近い長方形で深さ85cmを測る。壁は若干開き気味に立ち上る。底面は117×65cmで平坦である。底面中央に上面38×30cmで深さ50cmのピットがあけられている。ピットの断面には幅7cmの杭状土層が認められ、おそらく逆木の痕跡であると思われる。

（6）集石造構（図版4、第10図）

1号集石（第10図） II区F 2-2にあり主に焼けた石が170×100cmの範囲内にまとまって散在するもので、これ自体が使用された造構ではない。おそらくは、集石炉などで使用された砾をまとめて置いた造構と思われる。石の散在する面には焼土面等はない。

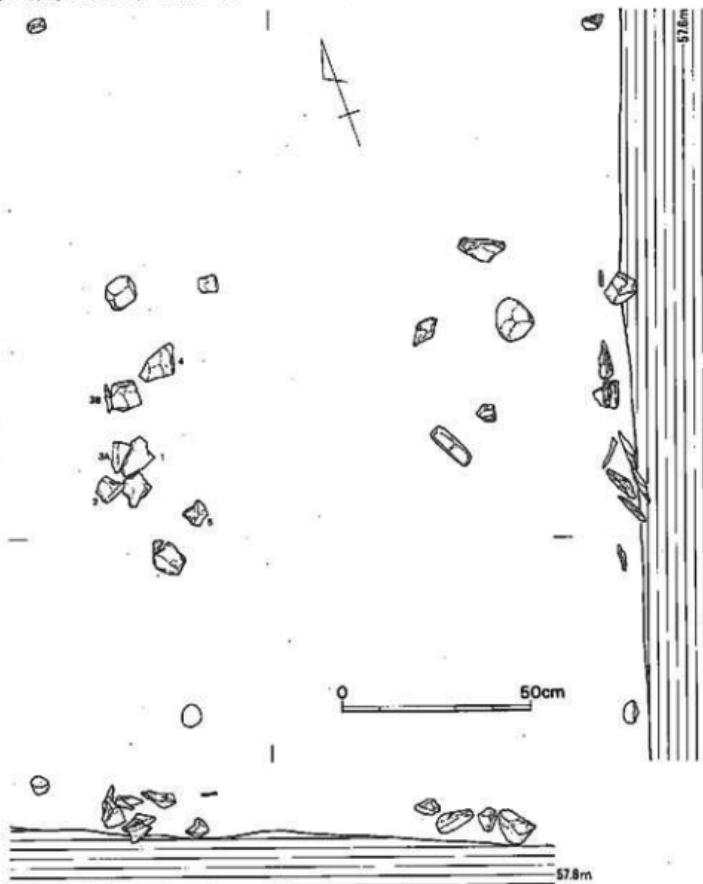
2号集石（第10図） II区E 2-2区にあり半分ほど擾乱により破壊されているが、ほぼ $62 \times (38 + a)$ cmの円形に皿状に掘り凹め（現状で12cm程）、内側に石を貼り付けるようにならべた所謂集石炉である。内面の石は、かなり移動しているが焼けた石もあり集石炉として判断して良い。



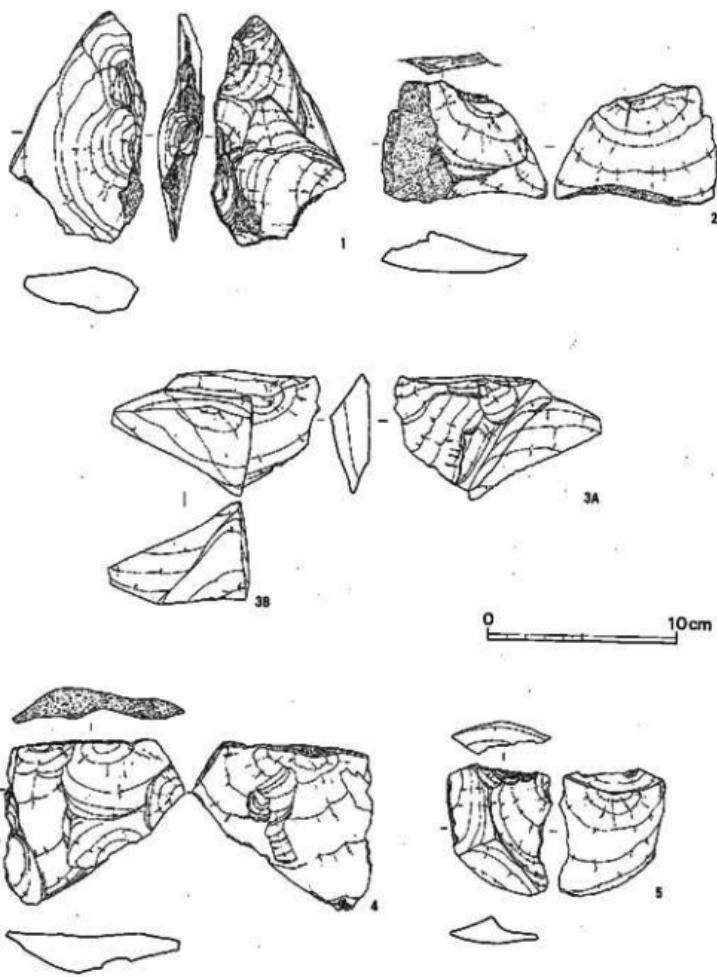
第10図 集石造構実測図 (1/30)

(7) サヌカイト集石 (図版5, 第11図)

II区G 3-4区で検出されたもので、120×100cmの範囲に、2群に分かれて石材が分布している。西側の一群は、サヌカイト剝片8片、片岩などで、サヌカイト剝片は、S-3AとS-3Bが接合したのみである。付近より押型文土器1片が出土している。東側は、加工痕の認められない礫群であるが、1点だけ、ハンマーと考えて良い石がある。発掘時の所見では、サヌカ



第 11 図 サヌカイト集石実測図 (1/15)



第 12 図 集石出土石器実測図 (1/3)

イトの細剝片などは検出されておらず、この位置が直接加工場のあととすることはできず、石材として何等かの理由で、まとめて置いておいたものと思われる。時期的には、この集石は、ほぼ地山直上で検出されており、押型文土器も検出されていることから、縄文時代早期のものといえよう。

(木村)

出土石器（第12図）

5点を図示した。1は稜を持つ打面から剥出された幅広の剝片の一部に刃部を形成する削器で、打面に自然面の一部が残る。幅12.2cm、長さ7cm、重さ178g。2は傾斜した未調整の打面を持つ剝片で、表面の約半分は自然面を残す。幅8.6cm、長さ6.4cm、厚さ2.2cm、重さ120g。3Aと3Bは接合する。両者とも2と同様に未調整の急傾斜な打面から剥出された剝片である。4は自然面を打面とする剝片である。幅9.5cm、長さ8.8cm、厚さ2cm、重さ150g。5はやはり急傾斜の打面から剥出された縦位の剝片を素材とし、両側縁に細かい加工を施した削器。幅5.5cm、長さ6.8cm、厚さ1.4cm、重さ65gを測る。

(木下)

(8) 土壙（図版10、第13図）

1号土壙（第13図） II区F-2区から検出された平面隅丸長方形プランの土壙である。長径123×80cm、深さ29cmを測る。埋土にはIII層（黄褐色土に淡褐灰色土が若干混入した土層）が流入しているので、縄文時代の造構と思われる。

4号土壙（第13図） 5号墳周溝に切られた状態で検出された土壙で、東半部は全く欠失している。一部残存する西半部からすれば不整長方形の土壙と思われる。土壙内からは粗製深鉢一個体分が出土した。深鉢は一部散在してはいるものの、斜位に置かれていたような出土状況を示すので、變指の可能性がある。

出土遺物（第21図2）

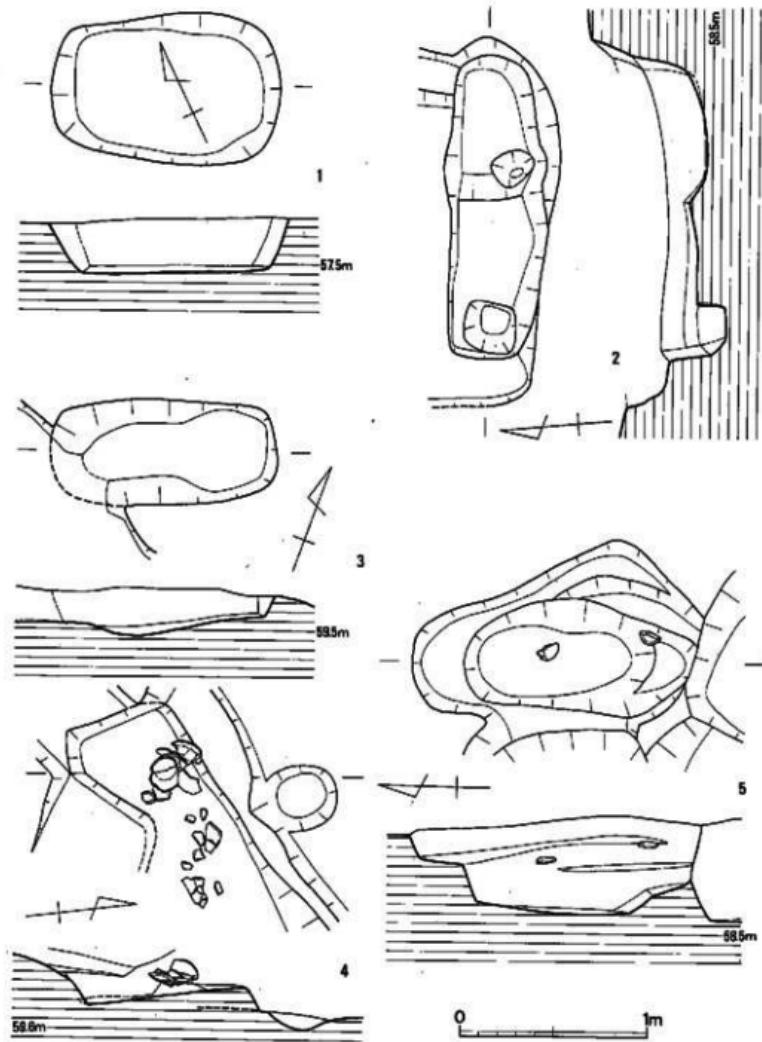
深鉢 粗製の深鉢で、底部は器肉の厚い平底で底径14.3cmを測る。内外ともナデで仕上げた暗褐色を呈す焼成良好な土器である。時期は縄文時代晩期中葉と思われる。

(9) 縄文土器（図版61・62、第14～21図）

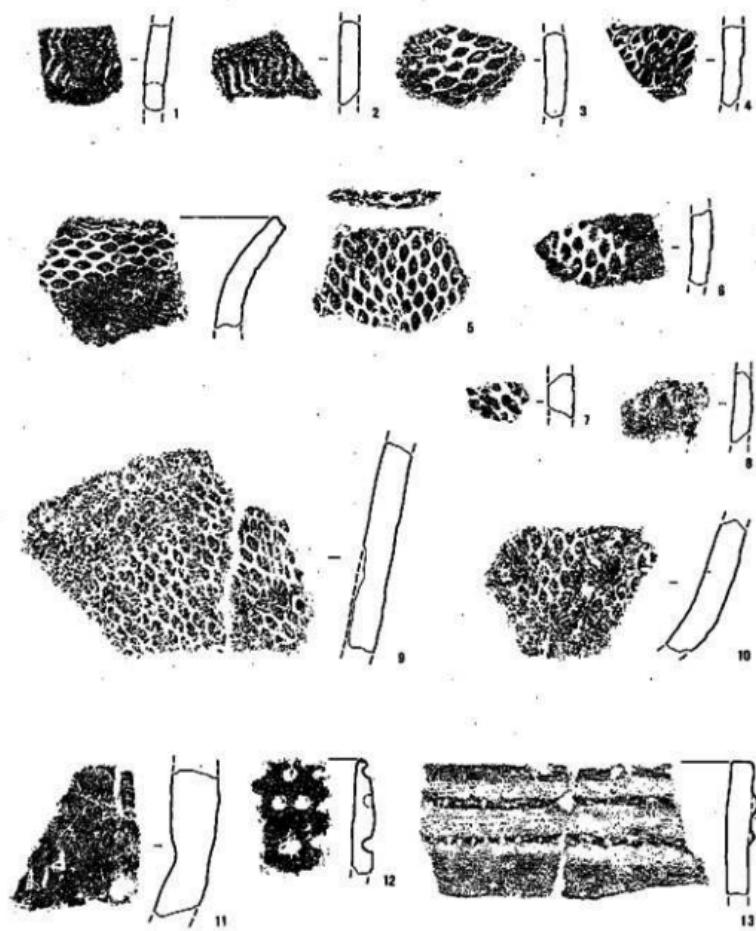
縄文土器は、II区の浅い谷状部の包含層とI区南側（1号墳付近）に多く出土し、2号墳周辺は、後期土器の包含層があったと思われる。

早期（第14図1～7・9・10）

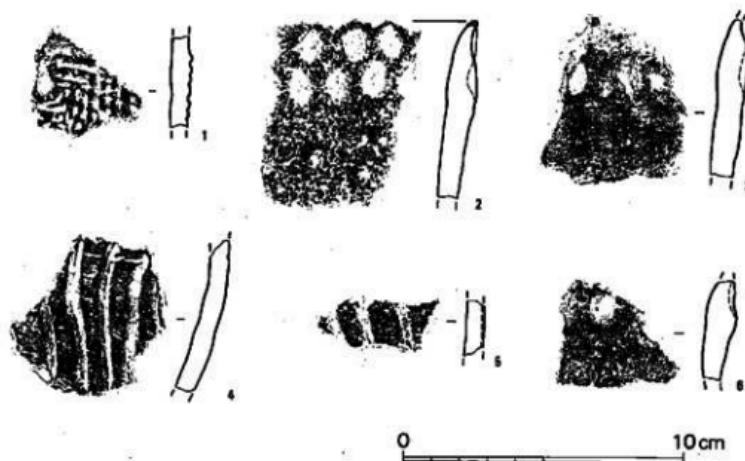
早期土器は、造構（集石・陥穴）の検出されたII区E・F-2、G3と、1号墳周辺で出土している。1・2は、山の低い山形押型文土器で、縦位または斜位に施文する。2点とも同一造構（弦生）より出土しており、胎土からしても同一個体と思われる。3～10は梢円押型文で、梢円粒は6×3mmほどの大きさである。5は、外面縦位、口唇部、口縁内横位に施文されてい



第 13 圖 1 ~ 5 号土壤實測圖 (1/30)



第 14 圖 霍文土器實測圖 1 (1/2)



第 15 図 縄文土器実測図 2 (1/2)

る。原体については、重複したり消されたりしており判明しないが、5は原体長3cm強、6段以上3単位と思われる。

前 期 (第14図12・13)

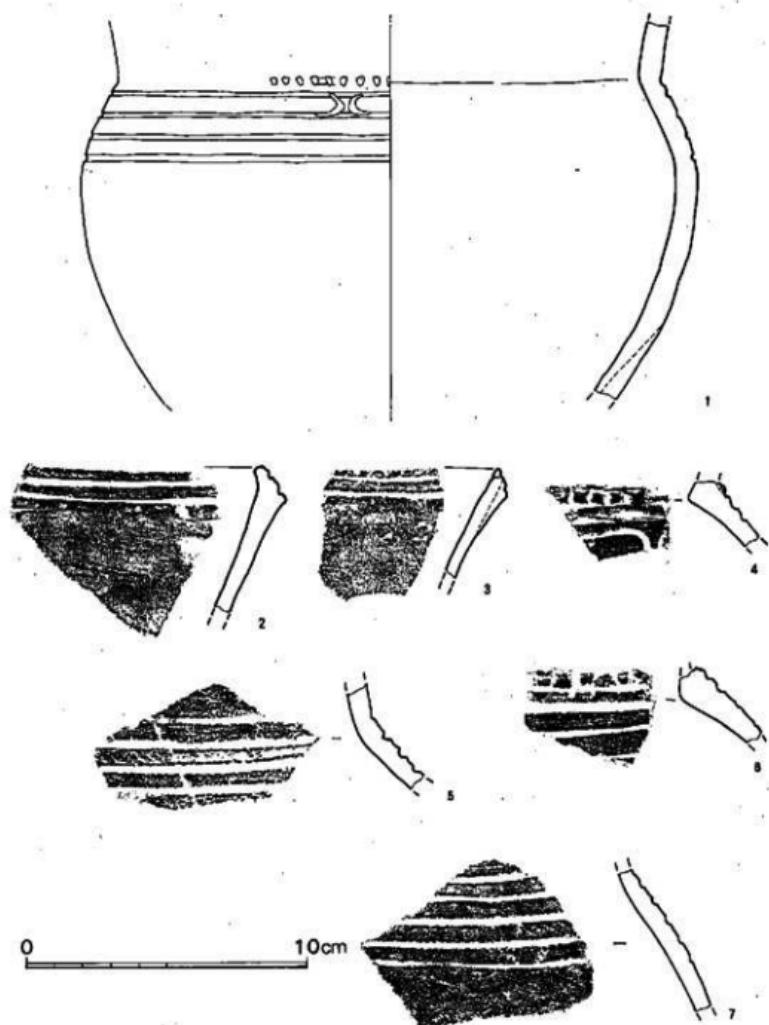
いずれも、1号墳内より出土している。12は、前期前半にみられる刺突文系の土器、13は2条の粘土帯を持つ轟式土器である。粘土帯には浅い刻目を持つ。

中 期 (第15図)

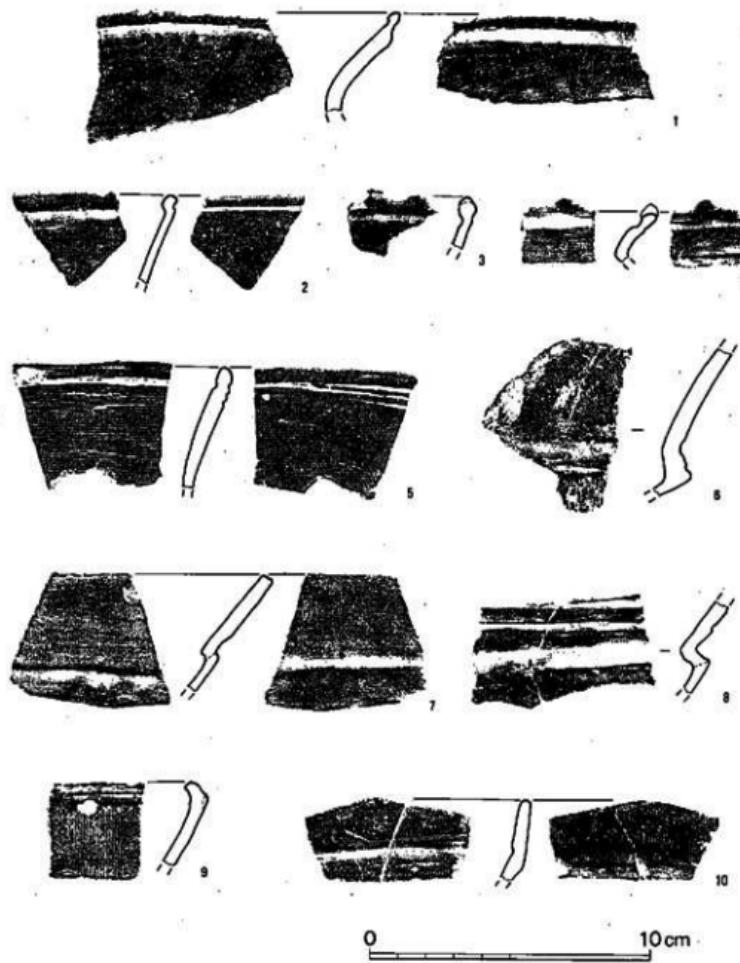
中期土器も点数はわづかであるが、1号墳周辺と、II区D・E-2, F3より出土している。1は鉤状の凹線をひいたあと2本単位の連続刺突文で充填している。多量の滑石を含む並木式土器である。2・3・6は、いずれも口縁下に2段の凹点文を持ち、2は口唇部に刻目があり波状をなす。いずれも、1号墳東側に近接した位置で出土しており同一個体であると思われる。滑石を混入するが、阿高式でも最も新しい時期に属する。4・5は、胴部破片で、垂下凹線が残っている。II区F・G-3と近接した位置で出土している。

後 期 (第16図)

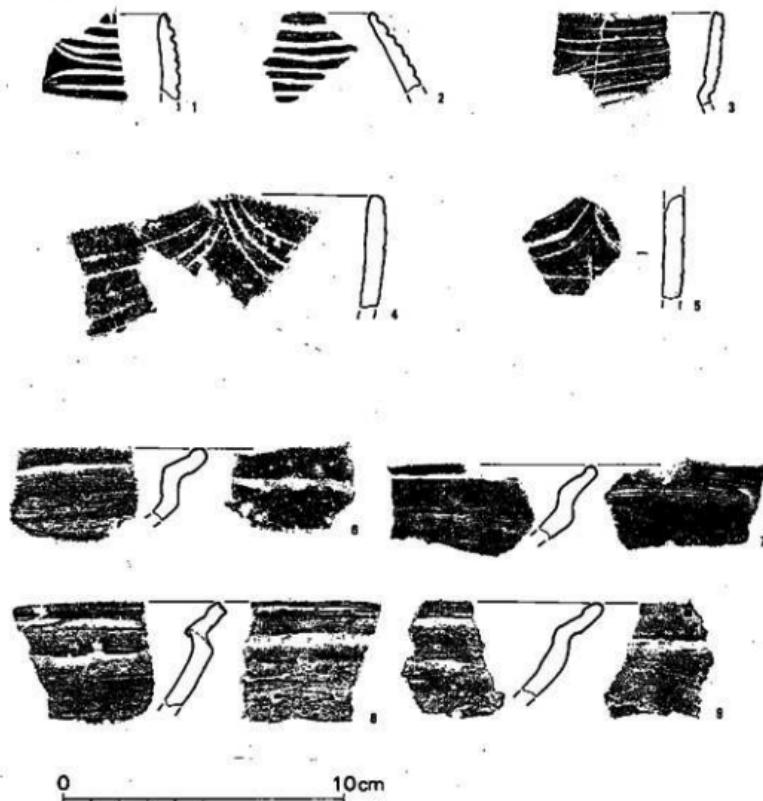
西平式系土器である。頸部に刺突による刻目が認められるが、肩部文様は平行沈線化している。いずれも、2号墳及びその南側で出土しており、他地区では検出されていない。2・3は口縁で、外面は「く」字状に内折するが内面は若干凹む程度である。端部に2本の沈線、その



第 16 図 縄文土器実測図 3 (1/2)



第 17 図 開文土器尖測圖 4 (1/2)



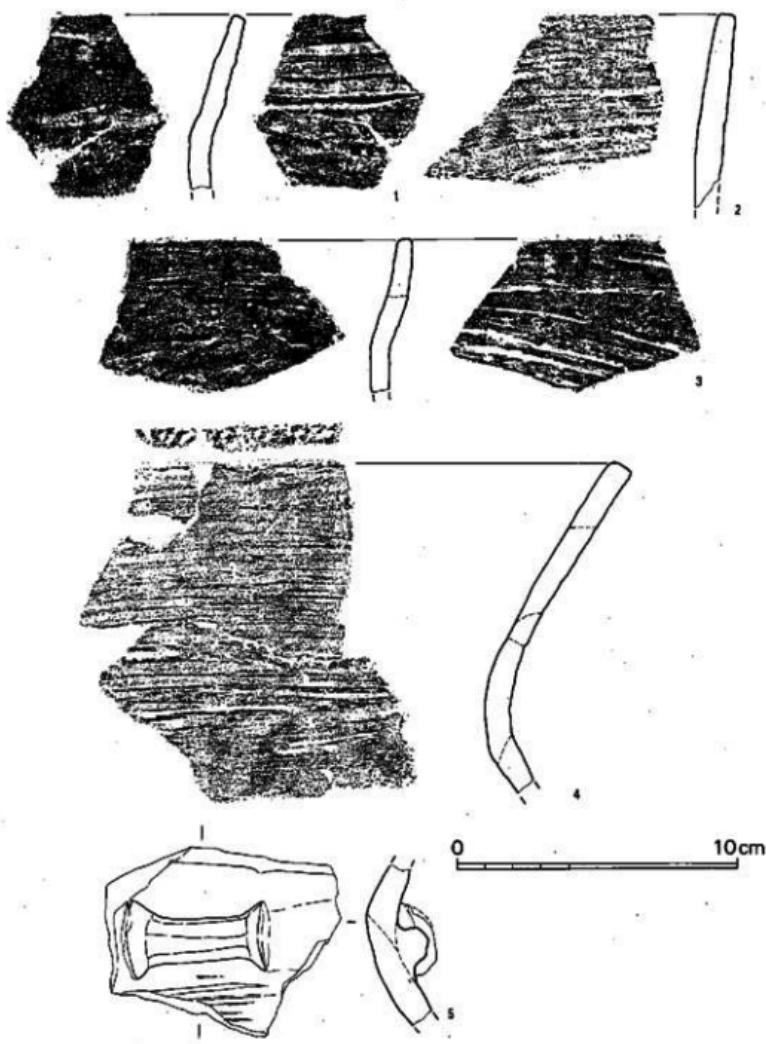
第 18 図 繩文土器実測図 5 (1/2)

上下にわずかに縄文が残る。1・4・6は、頸部が「く」字状に屈曲し、屈折部に刺突による刻目を施す。肩部の文様は平行沈線化し、 χ 状の沈線が施される。

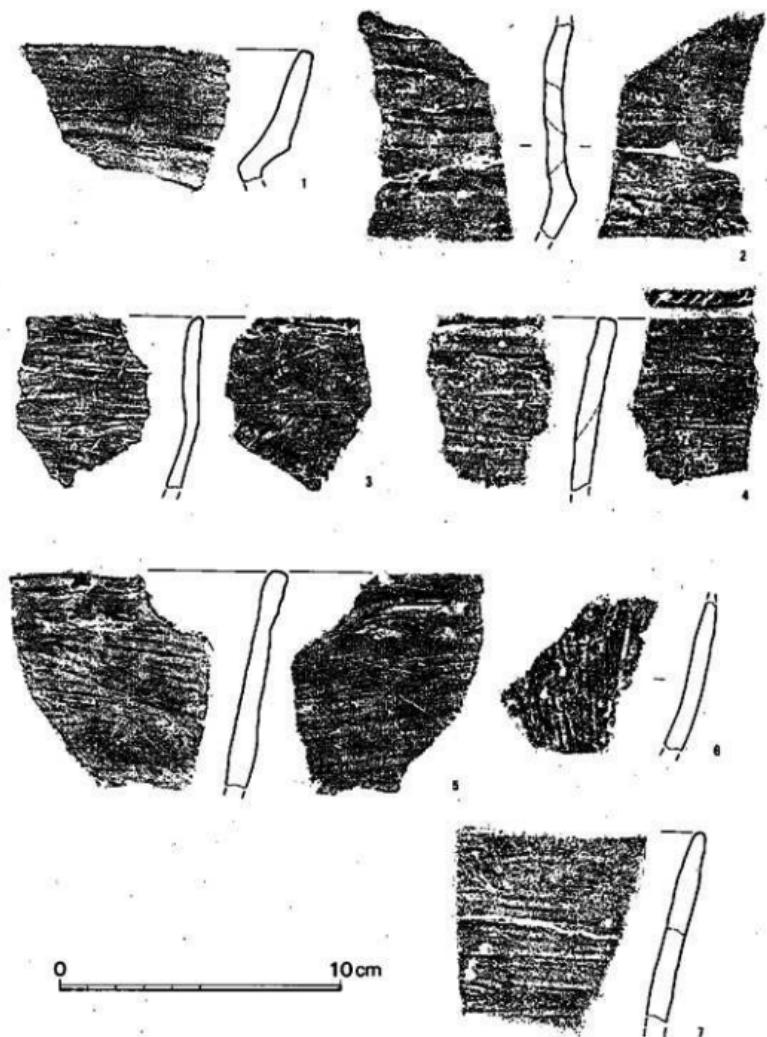
晩期 (第17~21図)

晩期土器は、II区D・E・F-2・3区と、1号墳及びその東側に多く出土している。量的に全体としては多くないが、縄文土器全体の殆どを占める。

精製土器 (第17~18図) 第17図1~5は、胎土は精練され、ていねいに研磨された浅鉢の

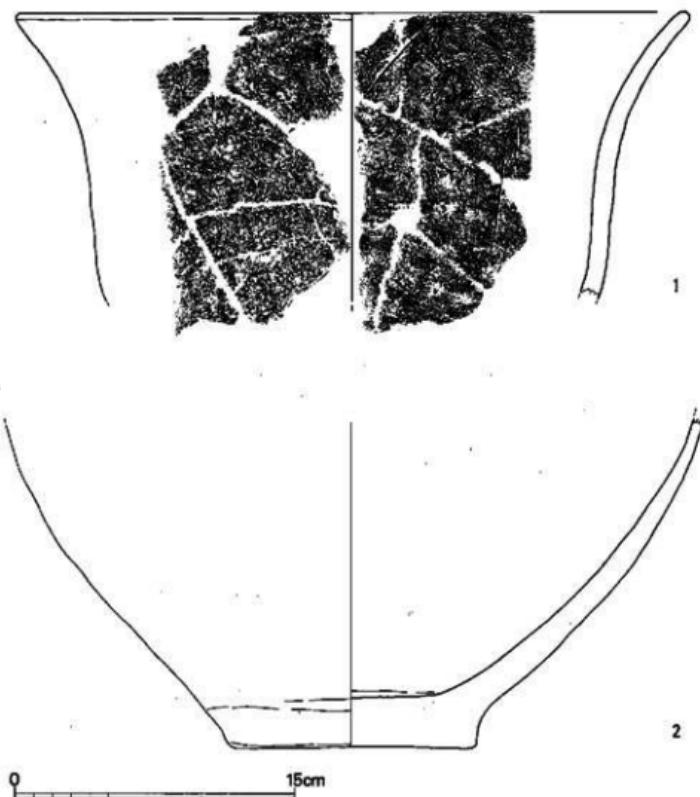


第 19 図 縄文土器実測図 6 (1/2)



第 20 図 縄文土器実測図 7 (1/2)

口縁部。口縁内、外に浅い凹線を引き端部はやや屈曲して玉縁となる。3・4の口唇部にはリボン状突起がつけられている。6は屈曲した頸部に浅い2本の沈線を引く。口縁はやや湾曲しながら外反する浅鉢。7は、胴部から屈曲して直線的にのびる口縁を持つ浅鉢で口縁端部は平坦である。8は、胴部から屈曲して口縁となるが、口縁外面に2本の沈線が残る。端部を欠き判明しないが、おそらく大きく波状をなす口縁を持つ浅鉢と思われる。9は同じく屈曲する頸部を持つ浅鉢であるが、肩部に凹点が施されている。



第 21 図 繩文土器実測図 8 (1/2)

第18図6~9は、胴部から短い頸部をつくり屈曲させて口縁にいたる浅鉢で、口縁内を肥厚させ、口唇部は角張る。

第18図1・2は、滋賀里式系の壺または鉢形土器で、ていねいに研磨される。1は、変形工字文が施されている。4は、山形口縁をなし、弧状に沈線を引いた鉢形土器で、ナデ調整が行われている。3は、頸部が若干屈曲する鉢形土器で、口縁外部に浅い平行沈線（おそらく弧状になる）を施す。

第19・20・21図は、晩期中葉前後の粗製土器である。第19図4・5は、同一位置より出土しており、くびれた頸部に蝶ネクタイ状の粘土貼付を持つ深鉢で、口縁は直線的に外反し、端部は平坦で刻目を持つ。外面は横位衆痕（板状工具）、内面はナデ調整がなされる。

（10）石 器（図版63、第22~24図）

I区出土石器（第22図）

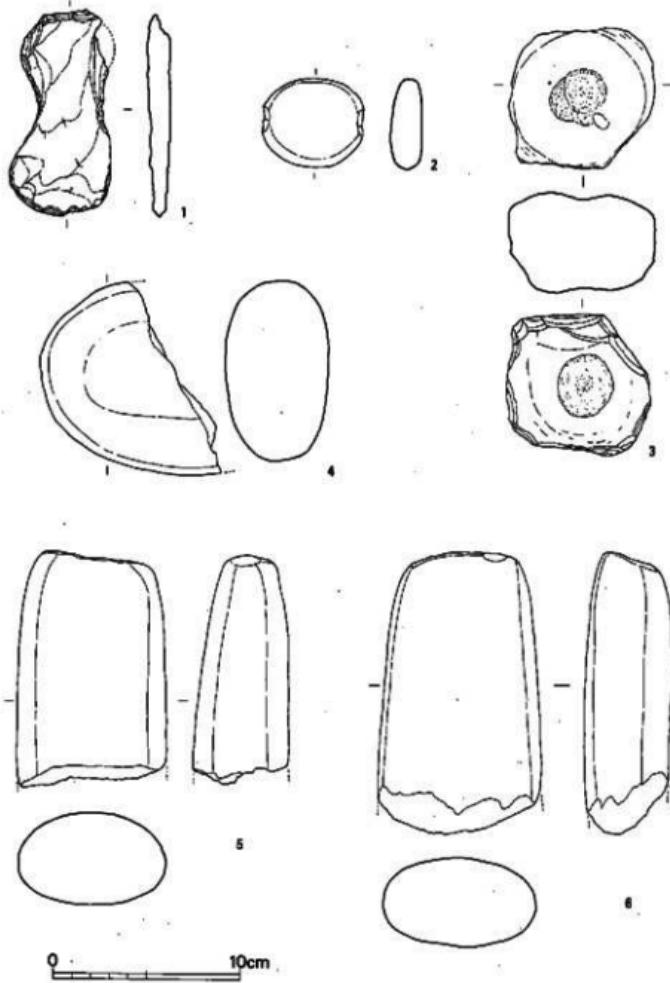
1は結晶片岩の打製石斧である。板状剥離した扁平な石材の中央部両側を抉り分鋼形にする。両端は荒く打欠き刃部とする。抉り部に若干の磨滅が認められる。長さ11.0cm、刃部幅5.2cm。

2は安山岩の石鎌で小扁平円錐の長軸端部に抉りを入れヒモかけとする。抉り部は、打欠きによるものであるが、かなり磨滅している。出土した地点は、主に西平系土器の包含層のある位置で、おそらくその時期の遺物と思われる。5.3×4.8cm、60g。

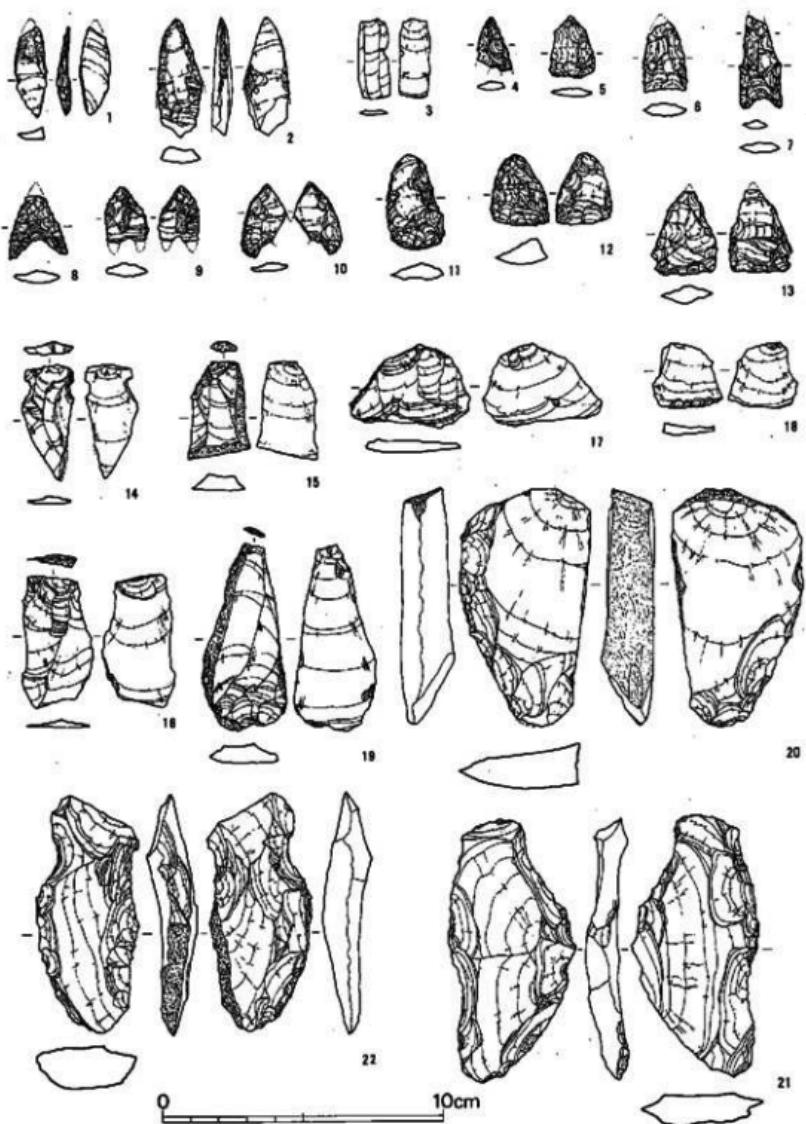
3は厚みのある円錐の両面に浅い敲打痕（3mm）が残る凹石である。周囲は打欠きにより方形に近い形に整っているが後部は磨滅している。出土した地点は、晩期の包含層があったと思われる位置である。7.6×7.2cm、厚さ5.3cm。
(木村)

II区出土石器（第23図）

1は継長剝片の片側縁に刃溝し加工を施したナイフ形石器で先端部を欠く。背面には自然面を残す。残存長3.2cm、幅1cm、厚さ0.5cmの黒曜石製。2は継長剝片を素材とし、剝片の先端部を含めて急傾斜の刃溝し加工を施す。基部側が欠失して全形が判らないが、ナイフ形石器とは考えにくく、一応、断面が台形の尖頭器としておく。残長4.3cm、厚さ0.7cm、D3~3区、5層出土で黒曜石製。3は細石刃の中間部片。長2.8cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm、重さ0.7gを測る。黒曜石製で48号木棺墓埋土出土。4~13は石鎌である。4~7~10が凹基、5~6~13が平基、11~12は凸基で、いずれも無基である。4は42号木棺墓埋土内出土。5~9は有肩鎌で、5は長2.1cm、幅1.6cm、重さ1.1gを測り、1号墳周溝出土。9は表採資料。6は荒い調整を施した石鎌で、先端部を欠失する。残存長2.5cm、重さ1.9gを測る。8号墳掘方内出土。7は間を持つ独特な石鎌で、先端を欠く。残存長3.3cm、間隔1.45cm、重さ1.6gで4号墳石室内出土。8は側縁が若干外湾する二等辺三角形に近い石鎌で、脚間2.2cm。E2~2区3'層出土。10は継長の剝片を素材とし、剝片の周辺部に加工を施したものでF2~2区7b層より晩期の土器片と



第 22 図 I 区出土石器実測図 (1/3)



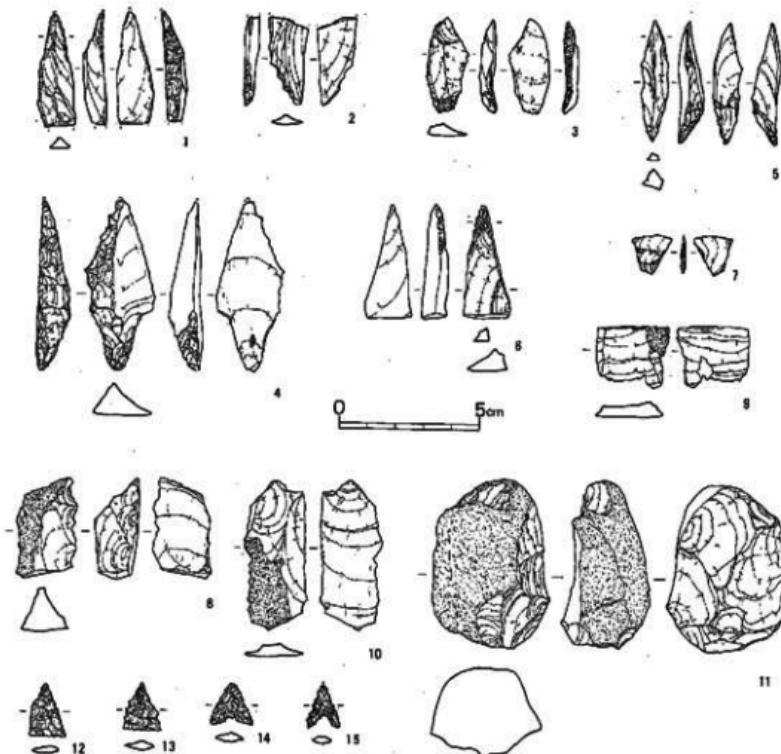
第 23 図 II 区出土石器実測図 (1/2)

共に出土。11・12は基部側から入念な加工を施した鐵で、11はF 2-2区出土。長さ3.4cm、幅2cm、重さ4g。12はC 5区6層出土で、長さ2.5cm、幅2cm、重さ3.9g。13は基部側に打痕の高まりをそのまま残すもので、D 2-1区3層より阿高式土器と共に出土した。石材は4・9~13が黒曜石製だが、そのうち7は姫島産出。他は安山岩製。14は鋭く尖った刺片の打面側両端に、表裏からノッチを施した石器。石核は両接の打点を有す。42号木棺墓埋土出土で黒曜石製。15・16は継長刺片で、両者とも自然面を打面とする。黒曜石製で、16は4号墳出土。17は幅広の刺片の一側縁に加工を施し刃部とした削器。刃部の調整は細かく急角度。F 2-2区の搅乱土出土。18は寸づまりの刺片の末端に荒い加工を施した削器で安山岩製。長さ2.5cm、厚さ0.5cm、重さ2.8g。19は小さな自然面を打面とする継長刺片の末端に近い両側縁に刃部を有す削器。長さ6.6cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm、重さ14gを測る。6号窓棺の掘方内出土。20は部厚な継長刺片を素材とし、片側刃全体にわたって調整を施す削器。打面及び他の一辺は自然面をそのまま残す。長さ8.5cm、幅4.7cm、厚さ1.5cm、重さ86gを測り、1号墳より出土。21は横長刺片の端部に荒い調整を加えた段階。打痕は除去されている。幅9.4cm、長さ4.6cm、重さ59.2gで、E 2-1区出土。22は横長刺片の両側から調整を施し、縦型石匙に近いものである。打面部には自然面が残っている。長さ8.5cm、幅3.7cm、厚さ1.6cm、重さ49.5gを測る。4号墳掘方内出土。19~22はいずれも安山岩製。

III区出土石器（第24図）

1はナイフ形石器で、横長刺片の片縁に刃溝し加工を施したもの。刃溝し加工と反対側は刃にはれ状の刺離が見られる。残存長4cm、厚さ0.8cm。I 5-4区の5層出土。2は横長刺片の末端部に細かく小さな加工を施したナイフ形石器で、1と共に、両者とも安山岩製。3は不透明な黒曜石の継長刺片を素材とし、片側縁から刺片の端部にかけて刃溝し加工を施したナイフ形石器の完形品。長さ3.3cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重さ2.2gを測る。I 5-3区の5層出土。4は安山岩製の継長刺片を素材とした刺片尖頭器。断面三角形を呈し、片側縁から基部にかけて急角度の調整を施す。基部と側縁の境には、いわゆる闊を作り出す。長さ6cm、幅2.5cm、厚さ1.2cm、重さ11.2gを測る。I 5-4区5層下部出土。5は不定形な刺片の各接から急角度の調整を上・下2箇所に施したもので、ナイフ形石器に加えておく。長さ4.3cm、幅1cm、厚さ0.7cm、重さ3g。黒曜石製で、H 4-1区5層出土。6は断面三角形に近い横長の刺片の末端部に細かな調整を二方向から施す。ドリルであろうか。安山岩製でI 5-4区5層出土。7は百花台型の台形石器。直線の刃部を除く三方に刃溝し加工を施す。長さ1.4cm、幅1.4cm、厚さ0.15cm、重さ0.2gを測る。I 5-3区の4層出土で、漆黒の黒曜石製。8は寸づまりの継長刺片で、断面は1.6cmと高い三角形を呈す。主要刺離面から急角度の荒い調整を施すが、この技術は三棱尖頭器のものである。長さ3.7cm、幅2cm、重さ12.2gを測るI 5-4区5層出土。9は継長の刺片で、断面は台形を呈す。I 5-4区7層出土で安山岩製。10もやはり継長の刺

片で、自然面を残す。縁片には若干刃こぼれが観察される。長さ5.4cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、重さ7.5gを測る。I 5—4区6層上部出土で安山岩製。11は安山岩製の円盤を半割した後に、周辺から打点を除々にずらして幅広の剥片を剥出している。I 5—4区6層出土。長さ6cm、厚さ3.2cm。12は平基式の石鎌。12は片側の肩が張る。長さ1.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.45g。I 5—4区4'層出土。13は局部磨製石鎌で、両脚を欠損する。I 5—4区4層出土で黒曜石製。付近から押型文土器も出土しており、共伴するとして誤りない。14は小型の三角形に近い石鎌で、長さ1.5cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.5g。I 5—4区3層出土でチャート製。15は鋸齒状で先端を欠く。I 5—4区4層出土で黒曜石製。14・15は縄文早期の時期であろう。



第 24 図 III区出土石器実測図 (1/2)

III区で出土した石器のうち、1～3のナイフ形石器、4・8の尖頭器類、7の台形石器及び5・6の石器群は、まとまって5層より出土しており同時期の所産と思われるが、出土地区が谷の再堆積層でもあり断定はできない。

(木下)

3. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 土壙 (図版11・12、第13・26図)

2号土壙 (図版11、第13図) 7号木棺墓の西側から検出された隅丸長方形プランの土壙である。横内は東半部が一段下がり、底面中央と東小口部にピットが穿たれている。規模は、長辺は162cm、短辺最大部で62cm、深さ中央部で12cmを測る。遺物は何等出土しなかった。

3号土壙 (第13図) 南小口部を1号石蓋土壙墓に切られた楕円形プランの土壙で、規模は長径が残存部で119cm、短径は56cm、深さは中央西側が深く25cmを測る。

5号土壙 (第13図) 南側を41号木棺墓に切られ、西壁側は6号土壙と重複した不整楕円形プランの土壙で、北壁から東壁側と南壁に一段のテラスを設けた二段掘りの土壙である。規模は上面で、現存部長径150cm、短径最大部で約100cm、深さは中央部で52cmを測る。

6号土壙 (図版11、第26図) 5号土壙の東壁と一部重複して検出された土壙で、南壁側は42号木棺墓に切られている。平面形は不整円形で、規模は長径105cm、短径87cm、深さは45cmを測る。土壙内からは底面より浮いた状態で弥生前期の壺が出土した。

出土遺物 (図版64、第27図)

壺(1) 球形の胴部に立ち気味に外反した口頭部がつく小型の壺で、外面刷毛のあとナデ、内面は指頭によるナデ調整で仕上げ、胴部内面には指頭圧痕を顯著に残している。口頭部内外はヨコナデし、内面はさらにヨコヘラ磨きで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。口径は10.1cm、胴部最大径11.65cmを測る。

7号土壙 (図版12、第26図) 6号土壙の東側から検出された隅丸長方形プランの土壙である。規模は長径135cm、短径98cm、深さは残りの良い北壁側で45cmを測る。土壙内からは弥生式土器片とともに、底面より浮いた状態で扁平な石が数個検出された。時期は弥生前期末と思われる。

出土遺物 (第27図)

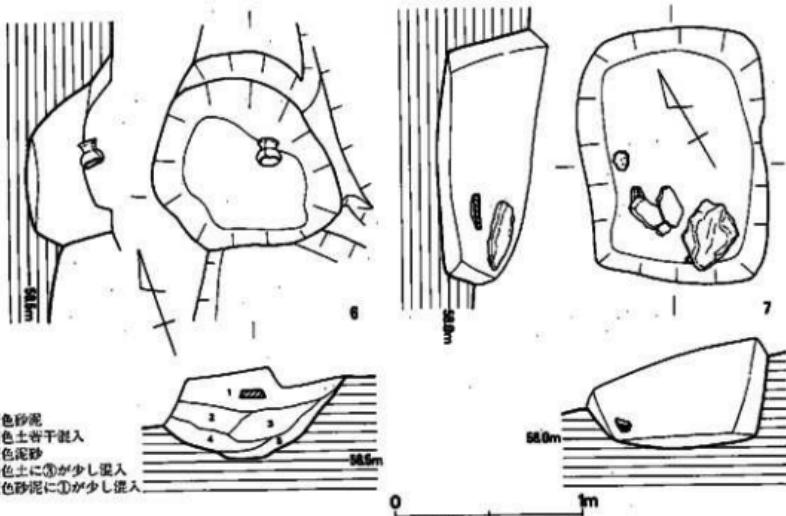
鉢(2) 底部から胴部の移行が強く外反するので鉢であろう。調整は胴部外面刷毛、内面と外底部はナデで仕上げている。色調は外面黄褐色、内面暗灰色を呈す焼成良好な土器である。底径は6.4cmを測り、底部はわずかに凹む。

甕(3) 四み気味の平底で、胴部外面刷毛、内面と外底部はナデで仕上げた茶褐色を呈す焼成良好な土器である。

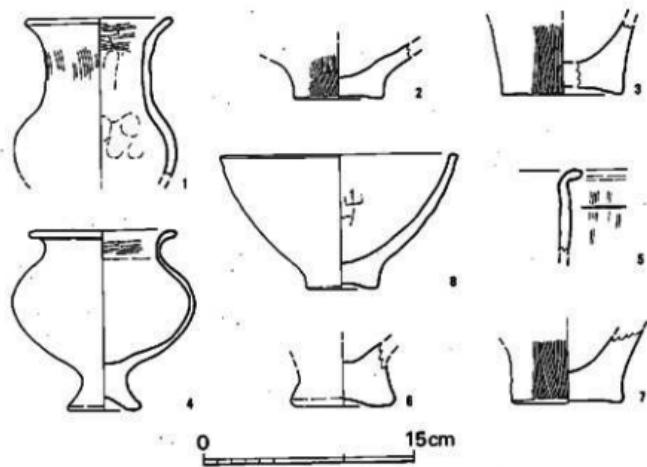
(井上)



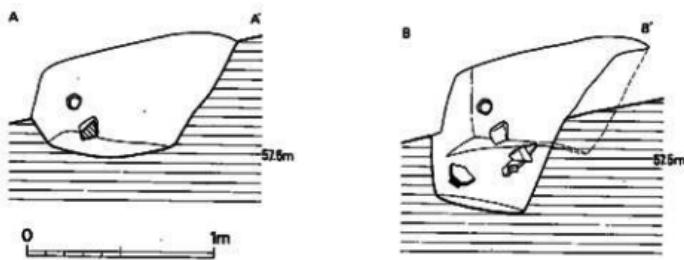
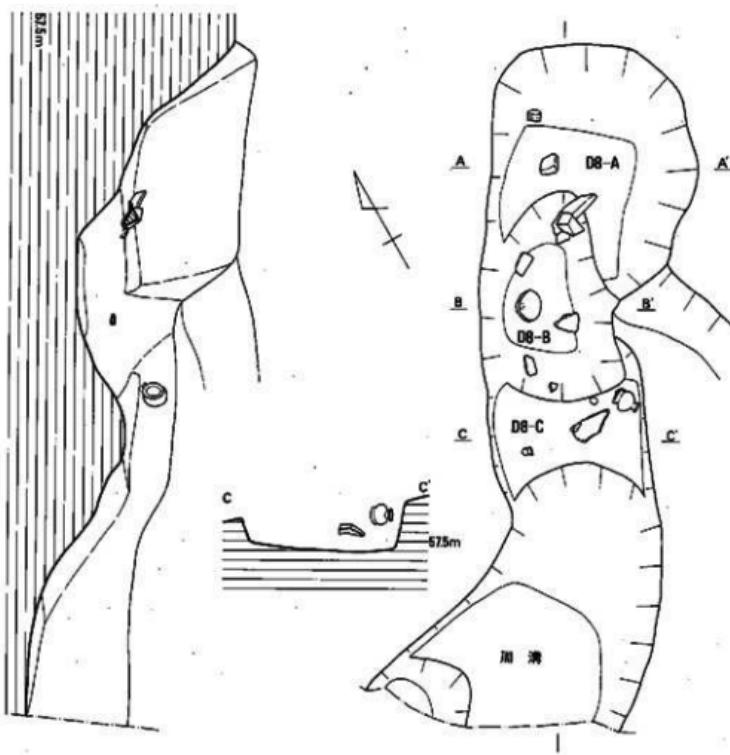
第 25 図 生生時代墓地・土壙配置図 (1/100)



第 26 図 6・7号土壤実測図 (1/30)



第 27 図 土壌出土土器実測図 (1/4)



第 28 図 8 号土壌実測図 (1/30)

磨製石斧（第22図5） 刃部を欠損するが断面長楕円形で始刃磨製石斧になると思われる。残存長12cm、断面7.9×4.9cmを測る。結晶片岩製。
(木村)

8号土壙（図版12、第28図） 7号土壙の南側から検出された隅丸長方形プランの土壙で、南側小口部は1号墳周溝の一部に切られ、欠失している。壙内の両小口部にテラスを設けた二段掘りの上坡で、規模は、現存部長径240cm、短径110cm、深さ中央で93cmを測る。土壙内からは弥生前期の台付小型壺や小型鉢などが底面より浮いた状態で出土した。時期は弥生前期末である。

出土遺物（図版64、第27図）

台付壺（4） 脚台付の小型広口壺で、器形としても珍しい器種である。扁球形の胴部に立ち気味に強く外反した口縁部がつき、脚台は外方に強く張り出した上底の台部である。外面は風化のため調整手法は不明だが、胴部内面はナデ、口縁部内面はヨコヘラ磨きで仕上げている。色調は暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。

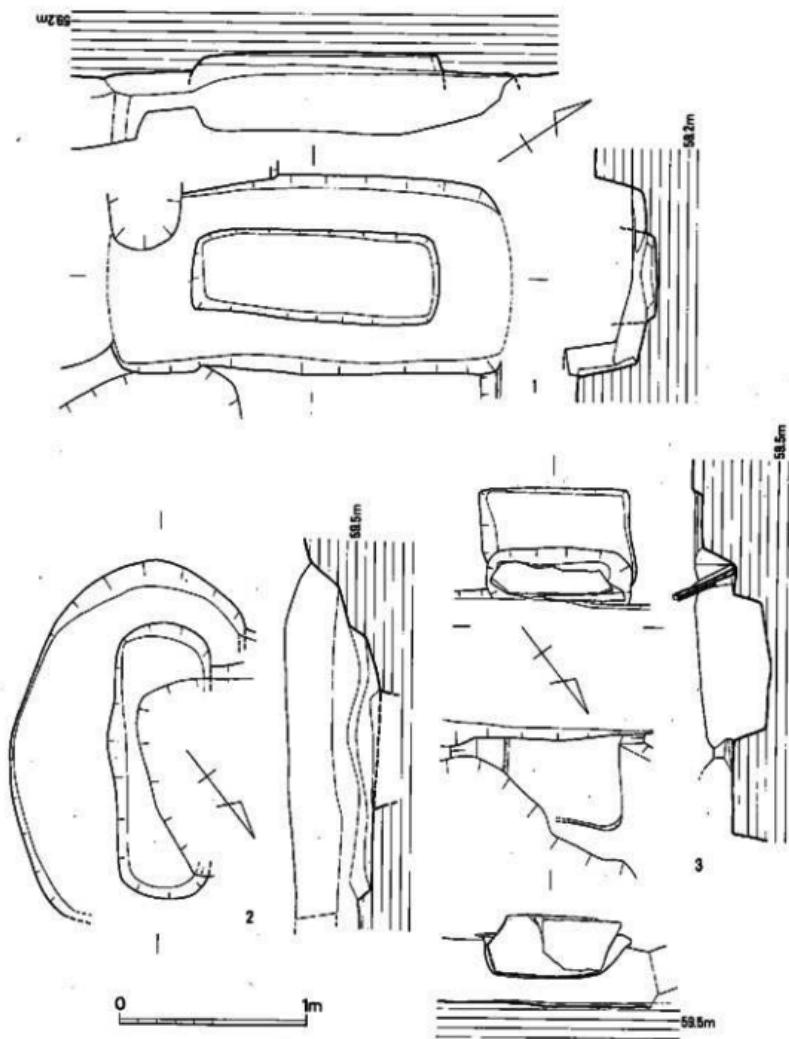
壺（5～7） 5は如意形口縁の小破片で、口縁下に1条の沈線がめぐる壺である。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで、口縁部付近外面には煤の付着がみられる。色調は淡茶褐色で、焼成も良い。6・7は底部資料で、6は外方に強く張り出した器肉の厚い凹み底の底部である。器面調整は風化のため、不明である。色調は暗茶褐色で、焼成は良い。底径7.4cmを測る。7は底径8cmを測る平底で、外面刷毛、内面ナデで仕上げた焼成良好な土器である。色調は外面淡茶褐色、内面黄褐色を呈す。

鉢（8） 単口縁の小型の鉢で、底部は凹み底の平底である。内面にわずかに工具痕が残るもの、風化のため調整手法は不明である。復原口径17.3cm、底径5.3cm、器高9.75cmを測る。色調は暗黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。
(井上)

(2) 木棺墓（図版13～37、第25図）

当遺跡では合計48基の木棺墓を検出した。しかし、後世の造構により若干の木棺墓が壊されたと考えられるが、それ以上に壊したと考えられるのが植烟の造成等でありその数については推測の域を出ない。斯る状況の下で検出した木棺墓も大半以上が搅乱を受けおり、一部では全く旧態を止めていない墓も存している。上記の理由等から個別説明の前に大雑把ではあるが概要を説明しておきたい。詳細な点および群構成等の墓制については後章で検討する。

前述した状況より一部不明な木棺墓も存在するが、大別するならば形態上より2つに分類される。棺内の小口部に石材を使用しているか否かである。石材を使用していない墓の大半以上が周知の木棺墓であろう。小口部に石材を使用している墓は木・石材を組み合わせた併用型木棺墓と考えられよう。この種の造構は類例が近年増加しているが、筑後川流域に集中する傾向が認められる。この件も後章で検討したい。



第 29 図 1 ~ 3 号木棺墓実測図 (1/30)

また、墓壇についても2種類の型式が認められる。平面形態は殆どが隅丸長方形を呈するが、墓壇の掘り方で以下の様に分けられる。墓壇と棺床とが水平な素掘りの型式と、棺床に相当する所を更に掘り下げる二段掘りとなる型式である。

以上の2項目で各2種類に分類されるが、計測表に付記した如く簡略化するため、次の様に各型式を比定する次第である。

A類……棺の小口部に石材を使用。

B類……従前の木棺墓で、小口部に石材を用いない。

I類……素掘りの墓壇形態をなすタイプ。

II類……I類の棺床部に相当する所を更に掘り下げる二段掘りのタイプ。

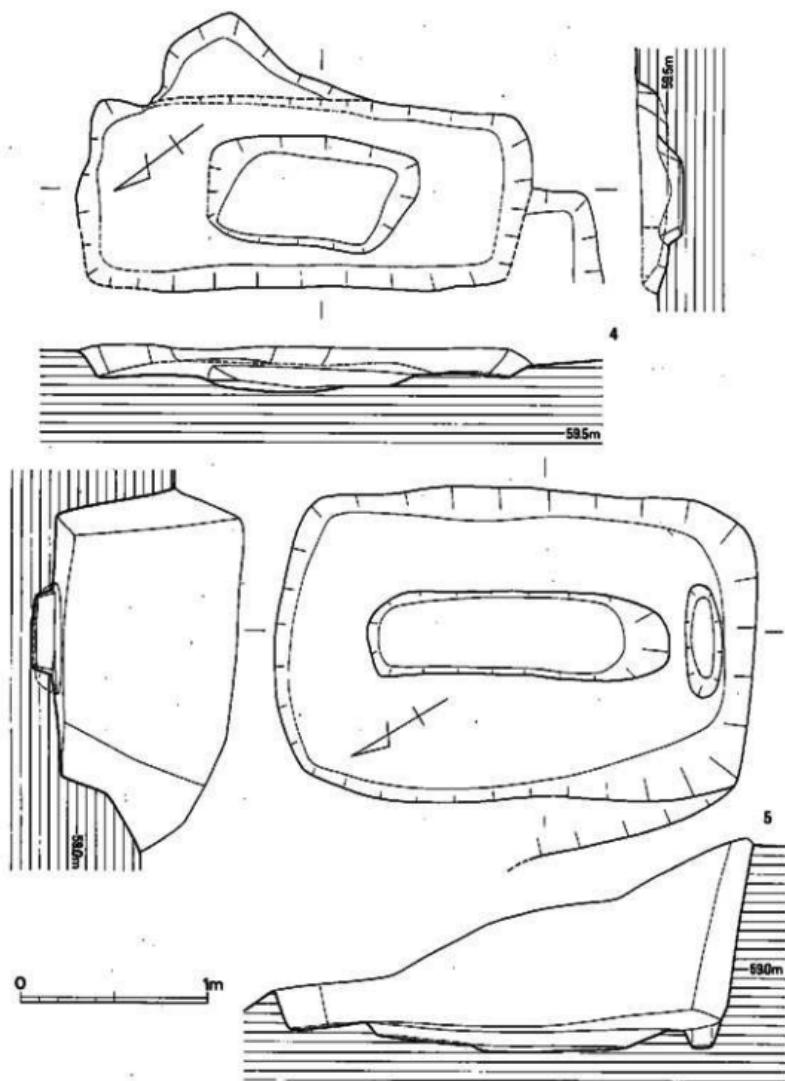
この他に、個別の各計測値は一覧表(表1)に記載しているので本文中では省略する。

1号木棺墓(図版16、第29図) 2号墳の周溝より1.5m南に位置する。2号木棺墓と隣接するが、切り合い関係をなす部位を石蓋土壙墓に切られているので、両者の新旧関係は不明である。また、北端と南東隅も柿穴等で壊乱されていた。長軸方位はN-29°-Eをとるが、当丘陵の等高線と略平行になるとえられる。墓壇はII類であり、埋土は地山と大差ない黄灰色粘質土であった。棺のタイプは一応B類となるが、開墾時に石材を撤去した可能性もあるので付記しておく。

墓壇と棺の平面形態は隅丸長方形を呈し、壇底及び棺床は中央部が僅かに窪むも略水平に近い。頭位は北側が若干広いのでこの方向が当ると推定されるが、その他に特筆すべき事項は棺内には認められなかった。遺物も何ら出土しなかった。

2号木棺墓(図版16、第29図) 1号木棺墓に隣接し、長軸方位もほとんど大差なく當まれている。遺存状況は1号木棺墓より更に悪く、棺部の半分程が柿穴により壊乱されていた。3号木棺墓との新旧関係は南端部が3号木棺墓を切っていた。墓壇の平面形態は梢円形になるとえられ、II類に属す。埋土は1号木棺墓と同じであった。棺のタイプも一応B類となろう。壇底は中央部が低く、端部に向かって順次高くなる。棺床は略水平に造られ、頭位については前述の状況より全く不明である。遺物も何ら出土しなかった。

3号木棺墓(第29図) 2号木棺墓に北東隅部を切られ、中央部を柿穴が深く横断していた。遺存状況はあまり良好ではなかったが、南側の小口部に安山岩系の平石が僅かに内斜した状態で検出した。これより棺のタイプはA類と考えられる。石材の法量は最大幅が65cm、高さは36cm、最大厚が4cmを測る。一方の北側小口石は柿窓造成時に撤去された可能性が大である。墓壇も一応II類と推定されるが詳細な点では不詳となる。長軸方位は2号木棺と全く同じをとる。棺床は水平に造られているが、頭位を推定しうるものは何ら検出していない。遺物も何ら出土しなかった。



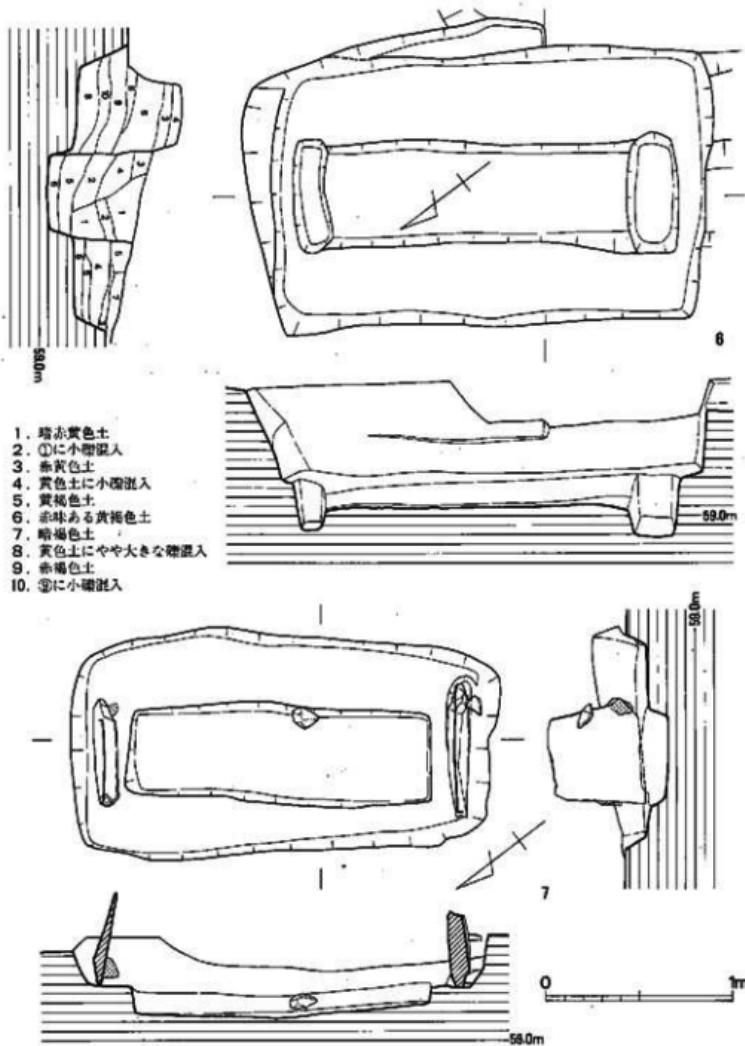
第 30 図 4・5 号木構基準圖 (1/30)

4号木棺墓（図版30） 直列に配置されている1～4号木棺墓の中でも、当木棺墓が最も南に位置し、かつ最も古いと考えられる。北西部隅を3号木棺墓に切られ、南西隅と東辺の一部も柿穴により搅乱されており遺存状態は不良である。墓壇はII類となるが、墓壇に比べて棺に相当する所は極めて貧弱な規模と不整形な平面形態を呈している。壇底及び棺床は水平に造られているが、床よりの立ち上がりは他の木棺墓に比べると極めて緩やかとなる。出土遺物はなく、他に特筆すべき事項も存しなかった。

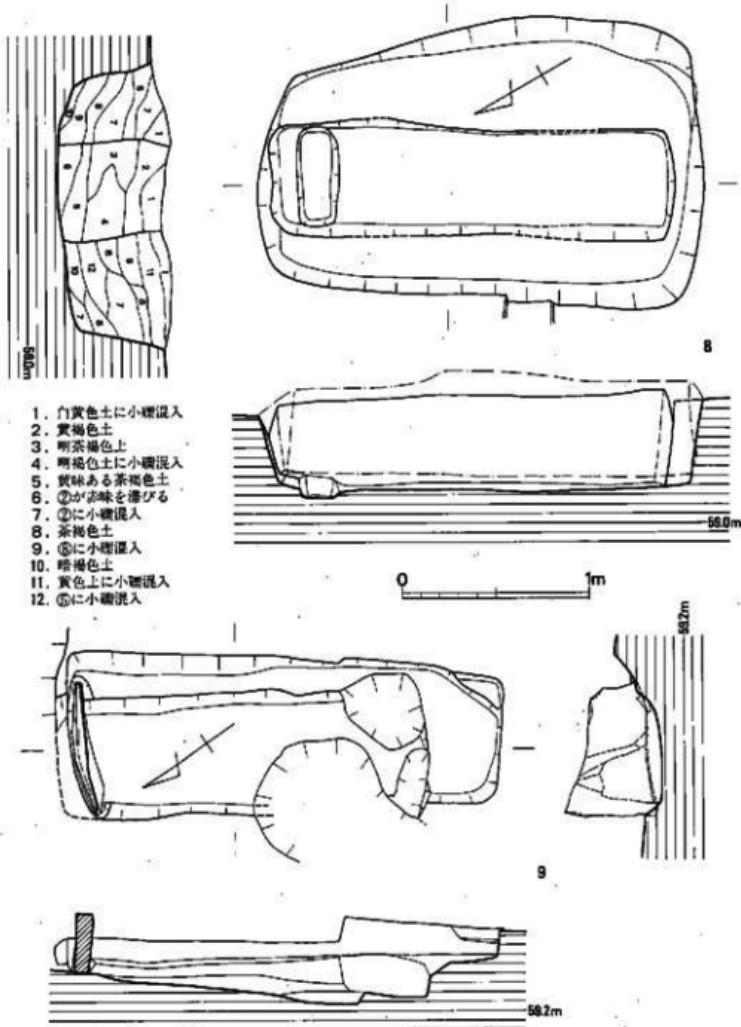
5号木棺墓（図版17、第30図） 直列に配置している1～4号木棺墓と略平行に、5・6・8・10号木棺墓も直列に配されている。当木棺墓は最北端に当り、2号墳の西側周溝に隣接した位置で検出した。墓壇の北半部は2号墳の周溝により大きく削平されているが、南側の遺存状態は良く最深部が1m近くにも達する。また、墓壇は一応II類に属し、規模も極めて大型となる。しかし、埋葬施設は壇底の中央部に深さ10cm程掘り込まれているが、墓壇の形状に比較すると若干貧弱な感を受けるのは否めない。壇底の南端で小口部に相当する深さ10cm程の掘り方を検出したが、北部には明瞭な掘り方が認められず、棺の上端が最も高くなり壇底の端部に向かって緩やかな勾配で順次下っている。遺存状況の良好な南側より判断して、棺の構造はB類と考えられる。棺床は水平と言うよりも舟底形に近く、立ち上がりも他の木棺墓に比べると緩やかな勾配である。遺物は何ら出土せず、他に特記する事項も認められない。

6号木棺墓（図版17、第31図） 5号木棺墓の南側に隣接し、略同じ長軸方位でもって直列に造られている。南東隅を石蓋上塗墓に、南西隅は2号石棺墓に切られているが、墓壇が深く掘り込まれていたので遺存状態は良好な部類に属す。7号木棺墓との新旧関係は切り合う個所の大半以上が2号石棺墓と重複しているものの当木棺墓の方が新しいと考えられる。墓壇のタイプはII類に属し、規模は大型である。墓壇のほぼ中央部に木棺が造られているが、小口部は棺よりも少し幅広で棺床より更に深く掘り込まれている。堆積状況では棺内への流入土と裏込め土とは基本的に同じ土質の黄褐色土と赤黄色土であるが、詳細に検討を行なった結果図示した様に細分出来た。この図より棺の木質部が腐蝕した後に封土と一部の裏込め土が棺内に流入したと考えられる。しかし、棺の構造に関しては両小口部が側壁より僅かに幅広い掘り方をしているだけであり、木質等は何ら遺存していないので判断するのを差し控えておきたい。壇底と棺床は略水平に造られている。遺物は何ら出土していない。

7号木棺墓（図版18、第31図） 6号木棺墓と全く同じ長軸方位を有し、東側の墓壇を僅かに切られているも、並列に配置されていると言えよう。また、南東隅部は2号石棺墓に切られて、西側は柿窓の造成等で大きく搅乱されていたが、両小口部の石材は旧態を保った状態で検出された。墓壇の規模は6号木棺墓より一廻り小振りとなるが大型と言え、II類に属す。壇底の下端際に小口石を配置しているが、棺の上端より13～15cmとやや離れた位置となる。北側の小口石は扁平な安山岩を、南側は扁平であるがやや角張った緑泥片岩系の石材を用いている。



第 31 図 6・7 号木棺実測図 (1/30)



第 32 図 8・9号木棺墓実測図 (1/30)

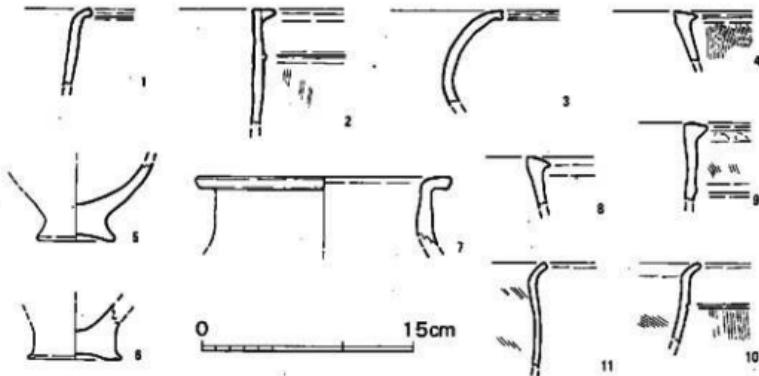
北側小口石の東端に粘土塊を検出したが、これは目張りに用いられたのであろう。棺は僅かに西偏しているが略中央部に造られ、平面形態も長方形を呈し、床は殆ど水平に造られている。床直上に小石塊が検出しているが、標石としては小さすぎる。他に特記する事は認められず、遺物は何ら出土しなかった。

8号木棺墓（図版19、第32図） 2号石棺墓に北西部を切られるが、遺存状態は良好である。6号木棺墓に隣接して、長軸方位が僅かに西偏しているも略直列に配置されていると言えよう。堆積状況も6号木棺墓と略同様であり、土層観察で棺材の腐蝕後棺内に封土と裏込め土の一部が流入したものと考えられた。木棺の最大高は60cmを測り、上部の裏込め土が棺内に迫り出し一部ではオーバーハング気味な部位も存した。また、北小口部に浅い掘り込みを検出したが、小口部の裏込めの土は幅10cmに渡り棺内に流入したものと推定された。これら検出時に考えられた木棺部の図示は実線で見透し図に記してあり、墓壇のラインは判別し易い様に一点破線にした。墓壇の規模は大型に属し、タイプはA型となる。墳底及び棺床は略水平に造られていた。

出土遺物（第33図）

甕（1） 棺内より出土した甕の小片である。口縁部は丸味を有して外反し、胸部は僅かに内傾している。調整は風化して不明。胎土は砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈す。

9号木棺墓（図版20、第32図） 7号木棺墓に隣接して、略同じ長軸方位でもって直列状に配置されている。北東側上面は2号石棺墓に削平され、西辺側は柿窓の造成で大きく切削されていた。墓壇のタイプはII類と考えられるが、西側は前述の状況で不明となる。東側の有り様から推測すると、墓壇の幅は1.1m前後になると思われる。甚だしく削平されている北側に旧態を保った小口石が奇しくも樹立していた。扁平な板石で、材質は安山岩である。一方の南小口



第33図 木棺墓出土土器実測図(1/4)

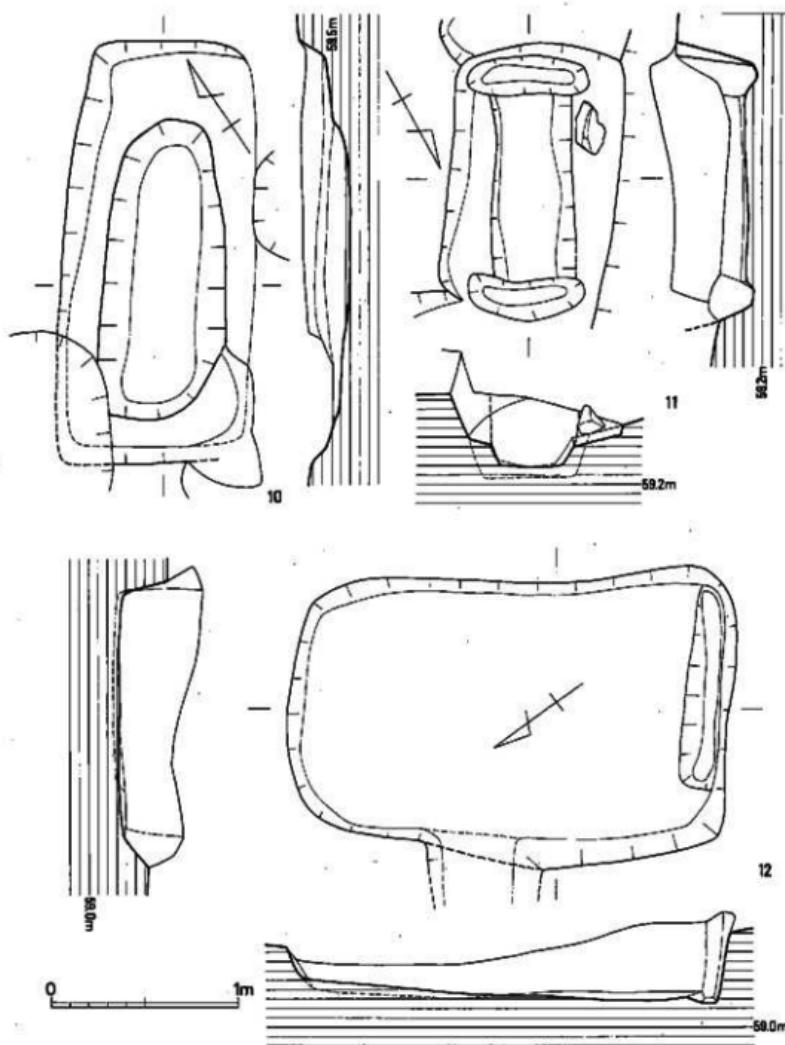
部は著しく擾乱されているので撤去されたと考えられる。棺内及び棺床も擾乱されていたが、床は北側が僅かに高くて南に向って順次緩やかな勾配になるとされる。上記の事項から判断してA II型の木棺墓になると思われる。遺物は何等出土していない。

10号木棺墓（図版20、第34図） 8号木棺墓と隣接して、長軸方位は若干東偏しているも略直列に並んでいると言える。東壁中央部は中期初頭頃の2号甕棺墓に切られ、南端部は柿畠の造成で大きく削平されていた。この様な状況で遺存状態は不良であり、東辺側にあっては墓壇の掘り方すら検出し得なかった。けれども、残存している他の部位より判断すると、墓壇はII類で中型の規模となろう。木棺部の掘り方は歪な形状を呈し、南側がやや幅広くなっている。棺床は緩やかな舟底状をなしている。遺物は何ら出土していないが、切り合ひ関係より2号甕棺墓より古い時期の所産となる。

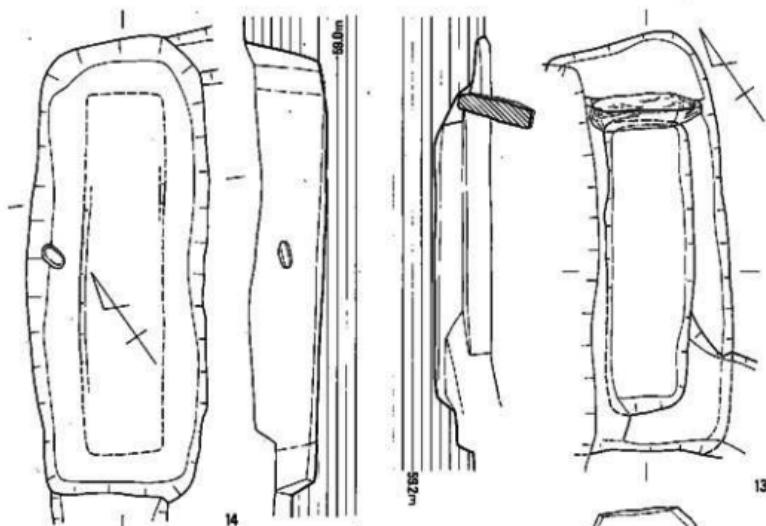
11号木棺墓（図版20、第34図） 10号木棺墓の南1mに位置するが、長軸方位と墓壇の規模や形態等は大いに異なる。西辺側は12号木棺墓に切られ、北辺及び東辺も柿畠造成で大きく削平されている。墓壇の遺存状態はあまり良いとは言えないが、一応タイプはII類と判断出来たし、規模については小型に属す。一方、棺の構造を知る上では良好な資料になり得る。両小口部は棺床より深く掘り込みをなし、短軸の下端よりも両側が更に約10cm程幅広く掘削している。これらより木棺は「H」状に組み合わせた構造になると推定される。棺床は水平に造られていたが、他に特記する事項は認めなかった。南西隅に石塊を検出したが、標石であった可能性はないと言いかねないが、裏込め内に混入したものと解釈すべきであろう。

12号木棺墓（図版21、第34図） 11号木棺墓を僅かに切り、西方に並列している。南端部は13号木棺墓に切られているが、全般に削平されて遺存状態はあまり良くない。長軸方位は7・9号木棺墓と略同じで、若干離れているものの直列状に配置していると言えよう。墓壇の規模は大型であり、タイプはI類に属す。南壁際に浅い掘り込みを検出したが、小口部に相当すると考えられるも断定するまでには至らなかった。壇底は北側が高く、南に向って順次緩やかな勾配でもって下っている。棺部については全く不明であるが、規模や形状及び周辺の有様から土壙墓の可能性は薄い。遺物は全く出土しなかった。

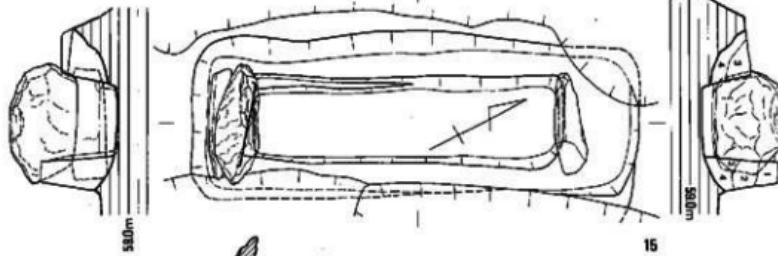
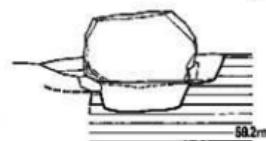
13号木棺墓（図版21、第35図） 12号木棺墓を僅かに切って南側に位置する。一方、14号木棺墓に棺部まで至らないけれども、墓壇の西側は大半以上が削平されている。その他の部位も擾乱を受けているが、北側の小口部で僅かに内斜しているものの略旧態を保って小口石が樹立していた。南側の推定小口部は柿穴が掘られているので、この時点で撤去された可能性が高い。墓壇の規模は中型であり、タイプはII類に属す。北小口石の材質は安山岩で、棺部よりやや幅広な扁平石を用いている。小口石を立てる時に一部崩れたのであろうか。切断面では小口石の両面共に埋め戻した状態であった。棺の平面形態は隅丸長方形を呈す。床は略水平となる。遺物は何ら出土しなかった。



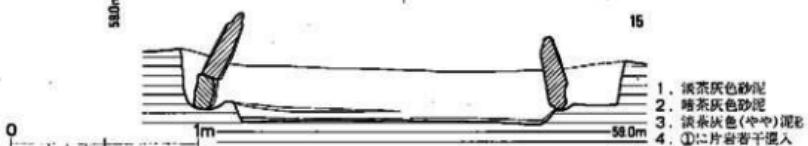
第 34 図 10~12号木棺墓実測図 (1/30)



1. 淡茶灰色砂泥(片岩少し混入)
2. 茶灰色砂泥
3. 明茶灰色砂泥
4. 茶色味ある灰白色土に片岩混入
5. ①に暗灰色土混入



1. 淡茶灰色砂泥
2. 暗茶灰色砂泥
3. 淡赤灰色(やや)泥化
4. ①に片岩若干混入



第 35 図 13-15号木棺墓実測図 (1/30)

14号木棺墓（図版21、第35図） 13号木棺墓を切っているが、略同じ長軸方位で並列の配置となる。15号木棺墓も北東隅部を僅かに切っている。検出時は墓壙が更に幅広くなると考えられたが、土層断面を検討した結果、短軸が40cm程の木棺墓になると判断された。土層図でも分かる様に、埋め土と棺内に流入した土とは大差なく、検出時に棺部の確認も難解であり大半以上が掘り過ぎる結果となった。上記より木棺部に関しては推測する外に手立がなく、墓壙の規模より判断すると、長軸が1.7~1.8m前後、短軸が0.4m程で、平面形態は長方形の木棺になろう。棺の木質は遺存せず、略垂直に立ち上がっていた。墓壙の規模は中型で、タイプはI類となる。棺床及び壙底は水平である。

出土遺物（第33図）

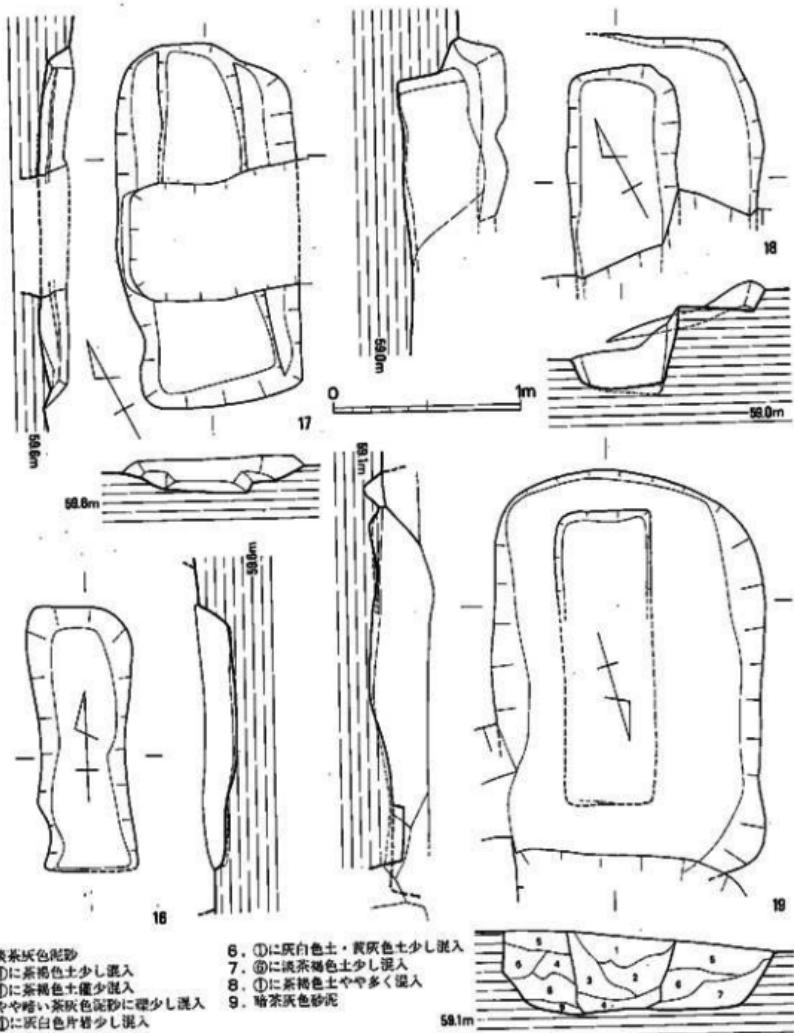
甕(2) 口縁端部と口縁下に1条の三角凸帯を付した甕の小破片である。外面刷毛のあとナデ、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁部付近外面には煤の付着がみられる。色調は淡黄褐色で焼成良好である。埋土中出土。

15号木棺墓（図版21、第35図） 14号木棺墓に墓壙の一部を切られ、長軸方位は若干西偏している。北西隅も擾乱されているが、遺存状態は良好な部類に属す。墓壙は14号木棺墓と形状及び規模も同様するが、タイプはII類である。棺部は両小口に安山岩系の扁平石を用いているが、南小口石は中程で割れている。両小口石は若干内斜した状態である。棺部の規模と形状及び両小口石の位置と規模から判断すると、H状の組み合わせ木棺墓と言える。壙底と棺床は水平に造られていた。遺物は何ら出土していない。

16号木棺墓（図版22、第36図） 4号木棺墓の南方2mに位置する。当木棺墓の周辺は甚だしく擾乱されている所であり、他の木棺墓が直列ないし並列で4~5基でもって群を構成しているのを考慮すると、この付近には他に数基存したとも考えられる。墓壙は削平されたと考えるべきで、唯一棺部のみが遺存した状態である。平面形態は少し歪みながらも長方形を呈している。棺床は端部が僅かに高くなる舟底状を呈す。他に特記する事項も認められず、遺物も何ら出土しなかった。

17号木棺墓（図版22、第36図） 16号木棺墓の西方3mに位置し、18号木棺墓と略同じ長軸方位を有す。当木棺墓周辺も甚だしく擾乱されているので、他に数基の木棺墓が間間に存したとも考えられる。18号木棺墓との略中央部に9号漆棺が存す。墓壙の中央部も柿穴で大きく削平されてはいるが、墓壙のタイプはII類と思われ、規模は中型となる。壙底と棺床は僅かに凹をなすも舟底状と言える。小口部に石材や掘り方等を検出していないし、遺存状態も不良であり、棺の構造は全く不明となる。遺物も何ら出土しなかった。

18号木棺墓（図版22、第36図） 17号木棺墓の西方1.5mに位置して、略同じ長軸方位をとる。19号木棺墓と隣接しているが、切り合う部位は擾乱されていたので不明である。南半部は1号墳の周溝で欠失している。墓壙は殆ど遺存しないが、残存している部位よりタイプはII類



第 36 図 16~19号木棺墓実測図 (1/30)

と判明し、規模は中型に属す。棺部は他の木棺墓よりも深く、立ち上がりも急勾配となる。墳底と棺床は一部擾乱されているので甚だしい凹凸を呈している。遺物は何ら出土しなかった。

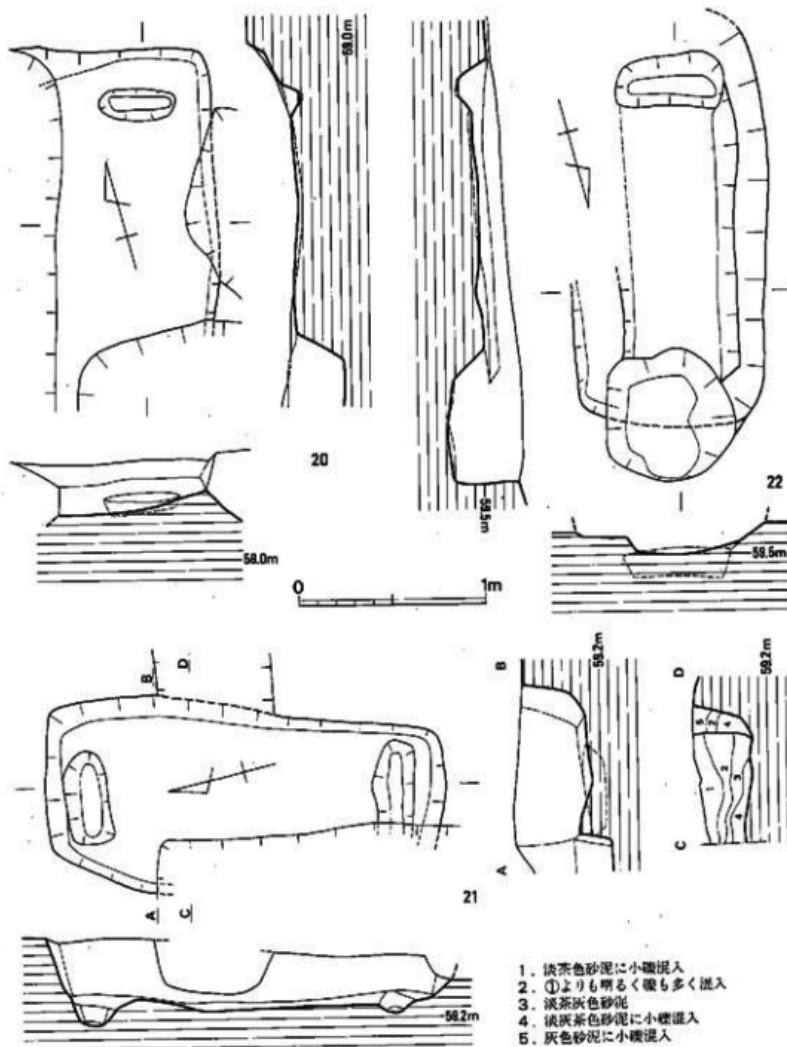
19号木棺墓（図版23、第36図） 18号木棺墓と隣接しているが、長軸方位は大きく西偏する。北半分は柿窓の造成で甚だしく削平され、南端部は1号墳周溝に切られており、遺存状態は極めて不良である。堆積状況を検討した結果木棺墓と判明したが、全容は殆ど不明である。僅かな部位から墓壇のタイプはII類と考えられる。棺部は土層図の様に垂直な立ち上がりでなく、裏込め土が崩れて流入して急勾配の立ち上がりとなる。1号墳周溝の下方に浅い掘り込みが存するが、これは小口部の掘り方と解釈すべきであろう。その他の事項は全く不明であり、遺物も何ら出土していない。

20号木棺墓（図版23、第37図） 16号木棺墓の南方4.5mに位置するが、20~23号木棺墓の4基は略同じ長軸方位を有して並列の配置となる。21号木棺墓に墓壇の西端を切られ、南側は柿穴によって削平されている。墓壇の規模は中型と推定され、タイプはI類となる。墳底は若干凹凸を有すも舟底形を呈しており、北壁より15cmの位置に長さ40cm、幅15cm、深さ10cm程の掘り込みを検出したが、この掘り方は棺の小口部に相当すると言えよう。その他に特記する事項は認められず、遺物も何ら出土しなかった。

21号木棺墓（図版23、第37図） 20号木棺墓を切り西側に位置する。西側の墓壇及び東壁中央部は柿窓の造成により甚だしく擾乱されていた。墓壇の規模は中型で、タイプはI類となる。墳底は舟底状を呈し、北側の下端と両側の下端近くに小口部と考えられる掘り込みを検出した。最も深い所でそれぞれ9cmと6cmを測る。棺の構造は不明となるが、堆積状況や土層図より判断すると、II状の組み合わせも考えられるが断定するまでには至らなかった。棺の立ち上がりはオーバハンギング気味となるが、木質部の腐蝕後に崩れたもので、旧態は垂直な立ち上がりをなしていたと思われる。遺物は出土していない。

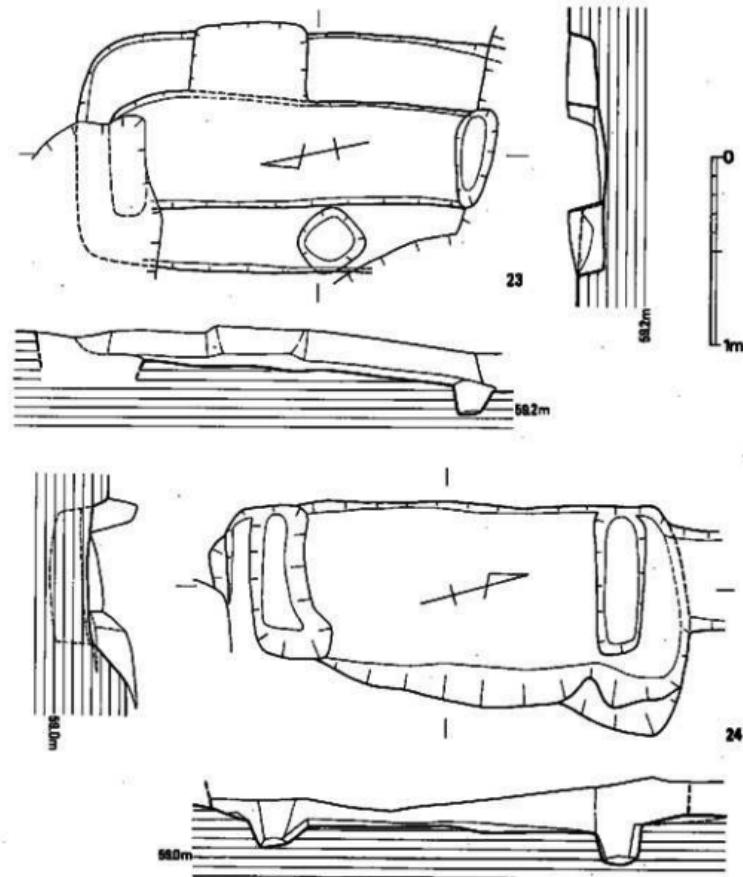
22号木棺墓（図版23、第37図） 21号木棺墓を切って西側に位置する。北端と両側が擾乱され、遺存状態も不良であったが、残存する部位より墓壇はII類で中型と判断された。墳底は若干凹凸をなすが略水平に造られていた。両側の小口は長さ58cm、幅30cm、深さ14cmの掘り込みをなしている。しかし、北側が削平されており棺の構造は不明となる。堆積状況も21号木棺墓と略同じであった。遺物は何も出土していない。

23号木棺墓（図版24、第38図） 22号木棺墓の長軸方位より僅少西偏するが、すぐ西側に位置しており、並列した状態と言えよう。北端と両端が柿穴で擾乱され、両側部は1号墳の周溝により削平されている。遺存状態は不良であるが、墓壇の規模は大型と推定され、タイプはI類に属す。墳底は北側が高く、南に向かって順次緩やかに下っている。両側で長さ55cm、幅22cm、深さ15cmを測る小口部の掘り方を検出したが、北側は削平されている。棺の構造は現状では断定し難く、棺部の立ち上がりは急勾配である。

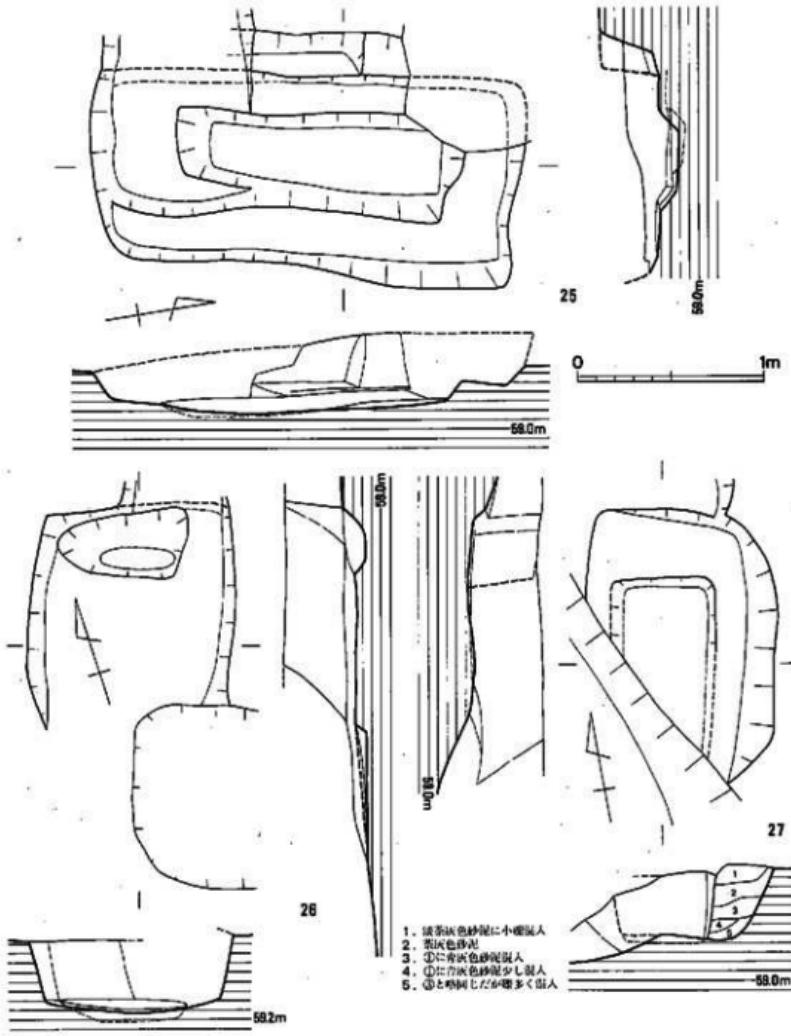


第 37 図 20-22号木棺墓実測図 (1/30)

24号木棺墓（図版24、第38図） 20～23号木棺墓の南に当り、25号木棺墓と隣接しつつ並列に配置されている。南端を8号墳の周溝に切られ、北端は柿穴により擾乱されている。また柿煙の造成で上部が大きく削平されているので、遺存状態は不良である。墓墳は大型に近く、タイプはI類に属すると思われる。横底は略水平に造られている。横底の端より10cm程に小口部の掘り方が南北2ヶ所で検出している。掘り方は若干広めで、深度もそれぞれ18cmと14cmを測



第38図 23・24号木棺墓実測図 (1/30)



第 39 図 25~27号木棺窓実測図 (1/30)

る。しかし、棺の構造については不明と言わねばなるまい。遺物は何ら出土していない。

25号木棺墓（図版25、第39図） 24号木棺墓と並列し、僅かに切り合ひ関係が存して当木棺墓の方が古くなる。北西部隅と西南部隅が柿穴により擾乱されている。また、西辺中央部の一部は掘り過ぎている。墓壙のタイプは一応II類に属すると考えられ、規模は中型となる。棺部は若干西偏しており、形状も少し歪な長方形を呈し、やや緩やかな立ち上がりとなる。壙底及び棺床は略水平に造られていた。遺物は何も出土しなかった。

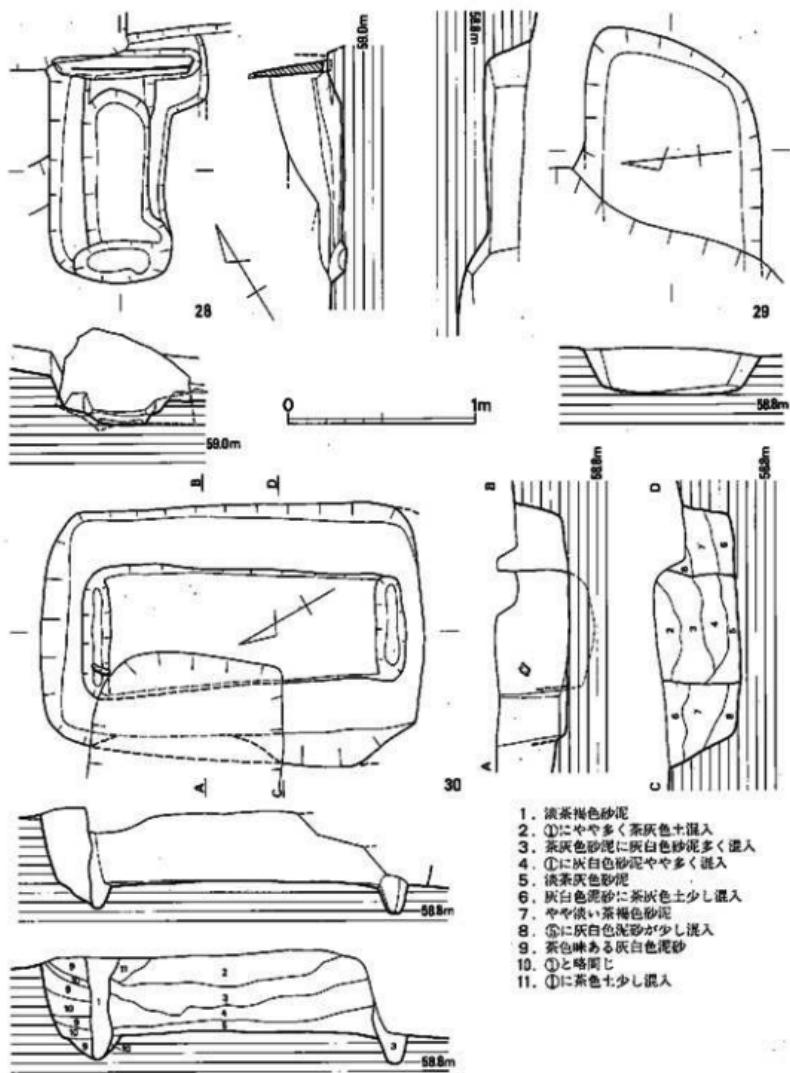
26号木棺墓（図版25、第39図） 25号木棺墓の西方1.7mに位置し、6号鐵棺墓と隣接している。東辺中央部と北東隅を柿穴で擾乱され、南半分は1号墳の周溝で削平されていた。遺存状態は不良であるが、墓壙のタイプは一応I類と考えられる。壙底は略水平に造られ、北端に長さ68cm、幅35cm、深さ6cmを測る小口部の掘り方を検出した。しかし、棺の構造は不明である。遺物は全く出土しなかった。

27号木棺墓（第39図） 26号木棺墓と並列し、30cm西側に位置する。大半以上が1号墳の周溝で削平され、遺存状態は極めて不良である。墓壙のタイプはI類に属す。壙底は若干凹凸を有すも略水平と言える。棺部も殆どが不明となるも、上端で55cmの幅を測り、立ち上がりは略垂直であり、平面形態は長方形になると推測される。小口部の掘り込みは存しない。遺物も何ら出土していない。

28号木棺墓（図版26、第40図） 26号木棺墓と隣接していたと考えられ、北端と南側の約半分程が柿窓の造成により大きく削平されていた。斯る状況の下で、奇しくも北側の小口石は旧態を保ち樹立していた。墓壙のタイプはII類となり、規模は小型に属す。小口石は墓壙の幅と略同じ扁平石が用いられ、僅かに内斜しているも略垂直に立っている。材質は安山岩系である。南側の小口部では掘り方と言うよりも抜き取り跡を検出した。両小口の有り様と棺部から判断して、 状の組み合わせ木棺墓と考えられる。壙底は北方が高くなり、南に向かって順次低くなる。棺床は略水平に造っていた。遺物は何ら出土しなかった。

29号木棺墓（第40図） 28号木棺墓の南方1mに位置するが、長軸方位は直交する。この方位を有する木棺墓は他に3基存するが、他の44基は南北に長軸方位をとっているので、当造跡では稀有な遺構となる。西側の約半分程が1号墳の周溝で削平されていた。墓壙のタイプはI類に属し、規模は不明だが中型となろう。壙底は水平に造られ、小口部の掘り方等は存しなかった。棺部については全く不詳であり、他に特記する事項も認められない。遺物も何ら出土していない。

30号木棺墓（図版26・27、第40図） 1号墳の墳丘下に、35号木棺墓以外の30~48号木棺墓の18基が存在する。西辺を7号鐵棺墓に、南辺は1号墳の主体部に削平されていた。遺構検出後、長軸と短軸の2本のセクションを設定して、堆積状況の検討を行なった。木棺部では木質は認められなかったが、土層図の様にやや明瞭な堆積をなしていたので、規模や形態が把握された。一方の小口部に関しては、特に北側では明らかに石材が抜き取られた状況を呈している。



第 40 図 28~30号木棺墓実測図 (1/30)

南側は古墳築造時に抜き取られたと考えられる。墓壇のタイプはⅠ類に属し、規模は大きめの中型となる。木棺は前述の事項より併用型の可能性が大であり、平面形態は長方形を呈す。壇底は水平である。棺内の埋土中より縄文期の土器片が出土しているが、当木棺墓の時期を指標する品とは考え難く、封土中に混入した品と考えるべきである。7号壙棺墓との切り合いより、中期初頭か若干前出する時期が妥当と思われる。

31号木棺墓（図版41） 31～34号木棺墓は僅かに切り合いを有して、西側が順次新しくなる並列配置をとる。当木棺墓がこの群では最も古くなり、東辺は1号墳の周溝に削平されている。遺存状態は良好な部類に属し、墓壇も最深部で38cmを測る。墓壇のタイプはⅡ類に属し、規模は平均的な中型となる。壇底は両端部が僅かに高くなる舟底状を呈す。棺部は両小口部に掘り込みをなしているが、棺床より僅かな深さである。棺床は略水平に造られている。遺物は何ら出土していない。

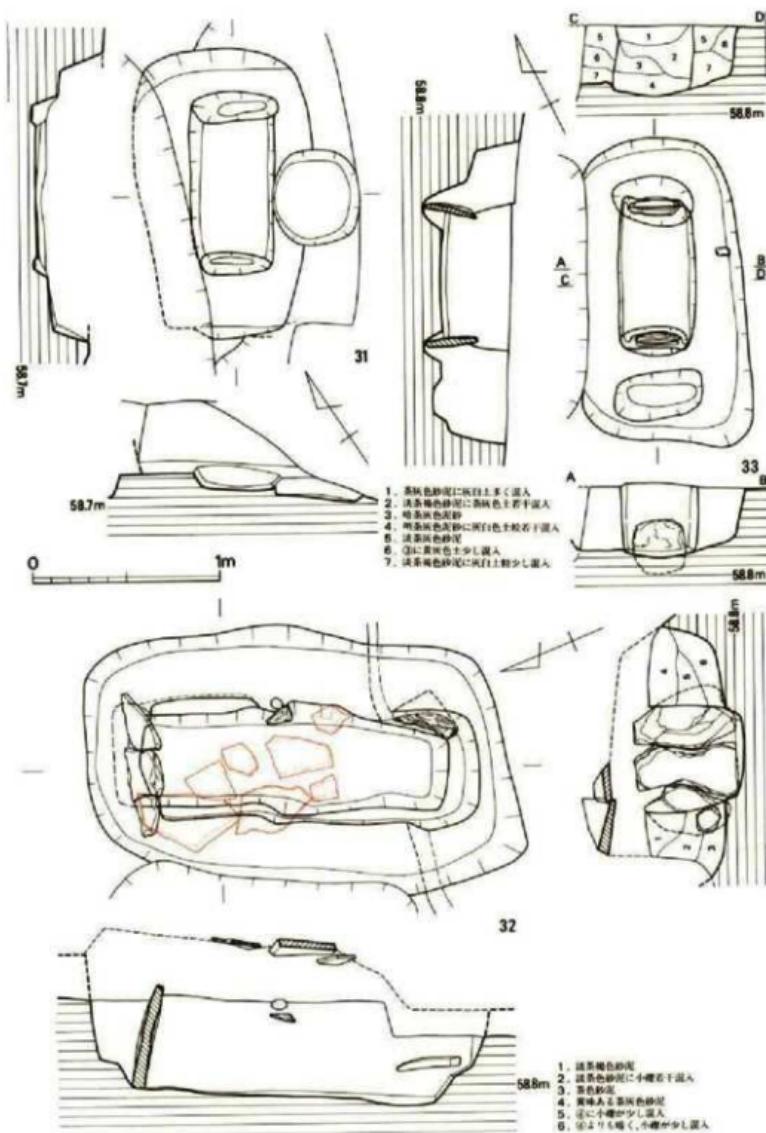
32号木棺墓（図版28、第41図） 31号木棺墓を切り、長軸方位は若干西偏している。33号木棺墓に西辺を僅かに切られている。当初は7個の扁平石を検出しただけであり、この標石を図化・写真撮影後に墓壇の検出作業を行なったが難解であった。何度も掘り下げては検出作業を行なったが、20～30cm掘り下げた段階で初めて墓壇の輪郭が判明した。木棺部の平面形態は長方形を呈し、北側の小口部に僅かに内斜した扁平石が樹立していた。石材は緑泥片岩系であり、三枚に継ぎ切られた状態で、全体としては木棺の幅よりも相当幅広くなる。南側の小口は横倒しで、かつ裏込め内に潜り込んだ状態の石材を検出した。柿焼の造成時に一部が撤去され、その折何らかの作用で裏込め内に入ったと考えられる。これらより「」状の木棺墓になると判断された。棺床は北側が少し高くなり、南側に向かって緩やかに下っている。墓壇のタイプはⅡ類に属し、規模は小振りな大型となる。標石が小口石の上面より20～30cm高くなっている。棺部の陥没を考慮に入れると、往時は相当高い土饅頭状を呈していたのであろうか。

出土遺物（第33図）

壺(3) 大きく外反する單口縁の壺の小破片である。口縁部内外はナデ、口縁部内外はヨコナデ調整である。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。埋土中出土。

甕(4) 口縁端部に三角凸帯を付した内傾気味の小破片である。外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はさらにヨコナデしている。裏込めの部分から出土した。

33号木棺墓（図版28、第41図） 32号木棺墓を切っているが、西辺を34号木棺墓に切られている。遺存状態は良好である。墓壇のタイプはⅠ類に属し、規模は小型である。棺部は両小口に比較的薄手の扁平石を用い、両小口石とも僅かに内斜した状態で検出した。材質は安山岩系で、棺床よりも10cm以上深く埋め込まれている。棺の幅は小口石よりも広く、「」状の木棺墓になるのであろうか。側壁は垂直ないしオーバハンジ気味となる。壇底及び棺床は略水平に造られているが、南小口石の更に10cm南で掘り込みを検出した。改修を行なったとは考え難く、材料の長さが不足したのに起因して棺の修正を行なったと考えるべきである。よってこの掘り方



第 41 図 31-33号木棺墓実測図 (1/30)

は小口石を設置すべく当初に掘られたのであろう。遺物は何ら出土しなかった。

34号木棺墓（図版29、第42図） 33号木棺墓の西辺を僅かに切り、略同じ長軸方位をなし並列した配置となる。造存状態は良好であり、墓壇の最深部は約60cmを測る。墓壇のタイプはII類に属し、規模は小型となる。棺部は両小口にやや薄手の扁平石を用い、僅かに掘り廻めた掘り方内に垂直に立てていた。材質は南側が安山岩を、北側が片岩系である。棺床は水平に造られているが、その他に特記する事項は認められなかった。遺物は出土しなかった。

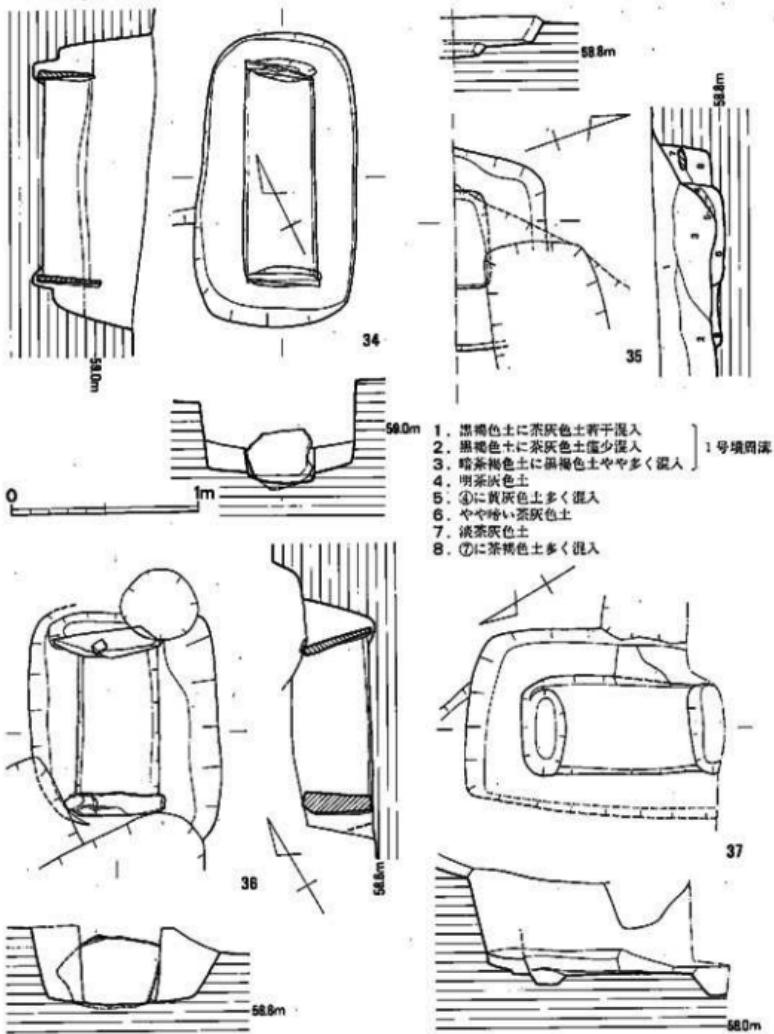
35号木棺墓（図版42図） 大半以上が調査区外に伸展し、北端の一部のみ検出した不詳な木棺墓である。北東隅を柿穴に、上部を1号墳の周溝により削平されていた。一応、墓壇のタイプがII類になるのを確認出来たが、規模等は全く不詳となる。北小口部には石材を用いていない。遺物は出土しなかった。

36号木棺墓（図版30、第42図） 34号木棺墓に隣接し、略同じ長軸方位を有して直列に配置している。柿穴等で墓壇が甚だしく削平され、かつ、北東隅部はベンガラを貯蔵していたと考えられる處に切削されている。一応墓壇のタイプはI類に属し、規模は小型となる。棺部は両小口にやや幅広い扁平石を用いていた。北側は浅い掘り方が存し、その中に立ててはいるが大きく内斜していた。南側は厚手であり、埋め込まれずとも垂直に樹立している。材質は安山岩であった。両小口石とも棺部よりも幅広く、 \square 状の木棺になると考えられる。棺床は水平であるが、その他に特記する事項は認められない。遺物も何ら出土していない。

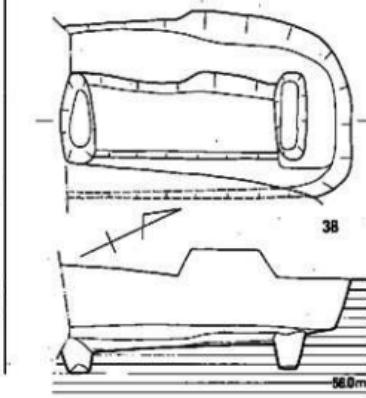
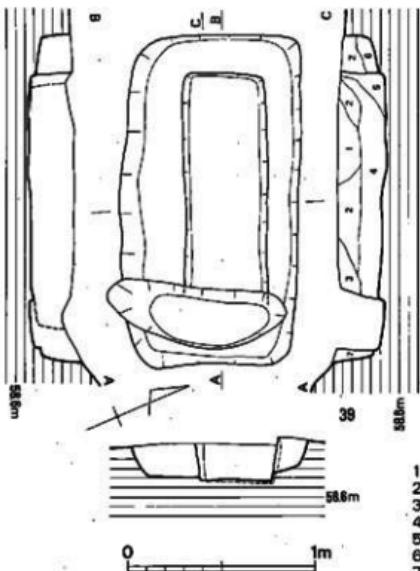
37号木棺墓（図版30、第42図） 31~34・36号木棺墓と略同じ長軸方位をなし、38号木棺墓を僅かに切ってはいるが並列に配置されている。南端が調査区外に伸展し、東辺中央部が柿穴により搅乱されているが略全貌は明らかとなる。墓壇のタイプはII類に属し、規模は小振りな中型になろう。棺部は両小口にやや幅広い掘り方を検出したが、石材は認められなかった。棺床は水平に造られている。その他に特記事項は認められず、出土遺物も皆無。

38号木棺墓（図版30、第43図） 37号木棺墓に東辺を切られているが、長軸方位は僅かに東偏するも略並列に配置されている。南端の一部が調査区外に伸展するも、略全貌は判明する。墓壇のタイプはII類に属し、規模は中型となろう。棺部は両小口に深い掘り方を検出した。掘り方は棺の幅より広くなることから、 \square 状の木棺が考えられる。石材は検出していない。壇底及び棺床は水平となる。遺物は何ら出土していない。

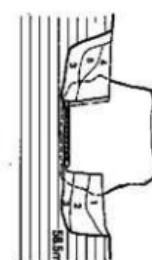
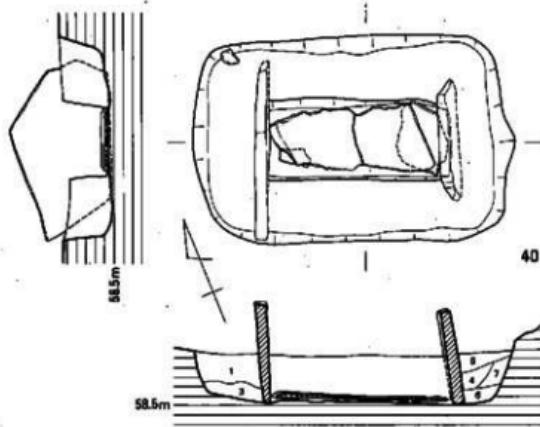
39号木棺墓（図版31、第43図） 南北に長軸方位をなす木棺墓が殆ど占める中で、東西に長軸方位をとり、かつ、40・44号木棺墓と略並列している。30号木棺墓の南方1mに位置し、1号墳石室の真下に当たり、東端を玄室鏡石の掘り方で削平されている。墓壇のタイプはII類に属し、規模は中型となる。棺部の平面形態は長方形となろう。小口部に掘り方は認められず、棺部は垂直ないし急勾配の立ち上がりとなる。棺床は僅かに凹凸をなすも略水平である。遺物は何ら出土しなかった。



第 42 図 34~37号木棺墓実測図 (1/30)



1. 淡茶灰色砂泥に灰白色片岩少し混入
2. 淡茶灰色砂泥に片岩混入
3. 茶褐色砂泥
4. やや暗い茶灰色砂泥に茶褐色土少し混入
5. やや淡い茶褐色砂泥に灰白色土少し混入
6. 茶褐色土に淡茶灰色砂泥が少し混入
7. 淡茶灰色砂泥



1. 淡茶褐色砂泥に灰白色土少し混入
2. やや暗い茶褐色砂泥に灰白色土僅少混入
3. 淡茶灰色砂泥に灰白色土僅少混入
4. ④よりも灰白色土多量に混入
5. ⑤より茶褐色土少し混入
6. 灰白色土に淡茶灰色土少し混入
7. 淡茶灰色砂泥に灰白色土少し混入

第 43 図 38~40号木棺墓実測図 (1/30)

40号木棺墓（図版31、第43図） 39号木棺墓の南方0.3mに位置し、同じ長軸方位でもって並列に配置されている。墓壇のタイプはI類に属し、規模は小型となる。棺部は両小口に大振りの扁平石を用いているが、特に西小口石は墓壇よりも僅かに小さめの立派な石材である。両小口石ともに西方に傾くが、東小口石はやや大きく内傾している。両小口石とも埋め込まれていない。床面にも大小4枚の薄手な扁平石を敷き棺床としていた。これら棺部の有り様からH状の木棺墓が考えられる。石材は安山岩が用いられていた。遺物は何ら出土していない。

41号木棺墓（図版32、第44図） 1号墳の墓道北側に位置し、42・43号木棺墓に切られているものの、42号とは並列に、43号とは直列に配置されている。遺存状態は案外良く、墓壇の最深部は60cmを測る。墓壇のタイプはI類に属し、規模は大振りな中型となる。棺部は若干北に偏向しているものの、平面形態は隅丸長方形を呈す。棺部の壁面は裏込め土が若干流出したのかオーバーハング気味となる。小口部に掘り込み等は検出していない。壇底及び棺床は水平である。遺物は何も出土しなかった。

42号木棺墓（図版33、第44図） 1号墳の墓道に南端部が削平されているが、41号木棺墓と6号土壇を切っている。墓壇のタイプはII類に属し、規模は大振りな中型となる。棺部は下段掘り方の上端際に両小口石を設置していた。扁平でやや薄手の安山岩が用いられ、略垂直に立て石している。棺部よりも小口石が若干広いので、H状の木棺となろう。壁面は木質部の腐蝕後に裏込め土が棺内に流入したことが土層より考えられた。壇底及び棺床は水平な造りとなる。

出土遺物（第33図）

壺（5） 脚台状の底部がつく小形壺の胴下半の資料である。内外ともナデ仕上げ、色調は黄褐色で焼成も良好である。裏込め内出土。8号土壇出土の壺と同じタイプと思われる。

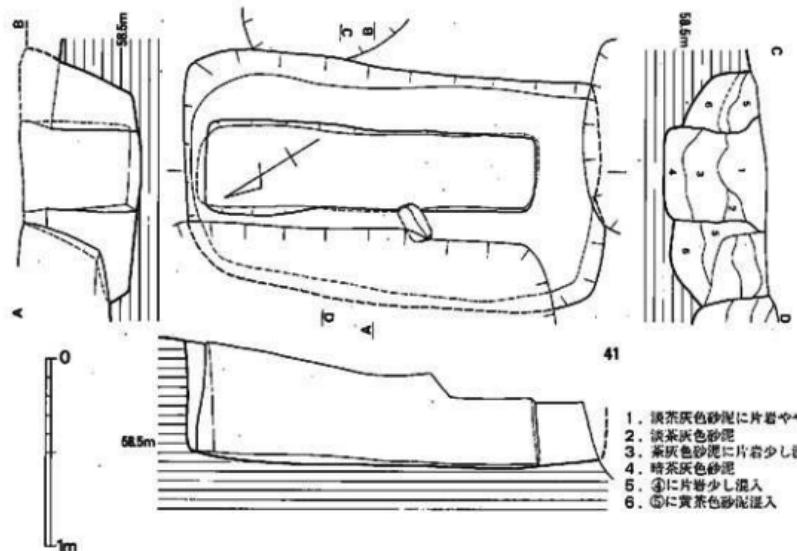
壺（6） 壺付け付近が外方に張り出した凹み気味の平底の壺である。内外ともナデ仕上げで、色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良い。裏込め内出土。

43号木棺墓（図版33・34、第45図） 41号木棺墓の南端を僅かに切る。41・43・46・48号木棺墓は隣接または切り合いながら直線的に配列していた。墓壇のタイプはI類に属し、規模は大振りな中型となる。棺部は北偏しており、平面形態は隅丸長方形を呈す。壁面は小口部が垂直となり、側面はオーバーハング気味となる。北側の小口部に浅い掘り方を検出したが、棺部よりやや幅広となる。壇底及び棺床は水平に造られていた。

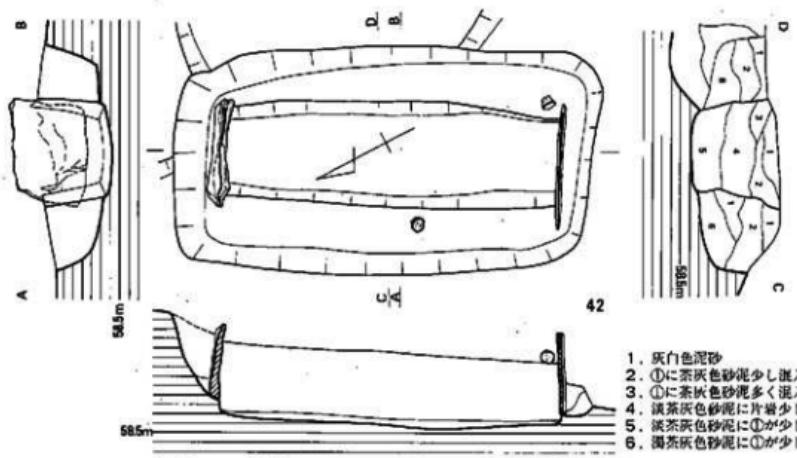
出土遺物（第33図）

壺（7） 立ち気味の頸部に逆し字状に強く外反した口縁部がつく小形壺の破片資料である。復原口径18.1cmを測る。口縁部内外がヨコナデの他は、器面の風化が著しく不明瞭であるが、頸部外面に刷毛目調整痕が一部残っている。色調は黄褐色で焼成良好である。裏込め内出土。

壺（8・9） 8は口縁部に1条の三角凸帯を付した内傾した口縁部をもつ壺の小破片である。外面刷毛。内面ナデ、口縁部内外はさらにヨコナデして仕上げている。9は口縁端部と口

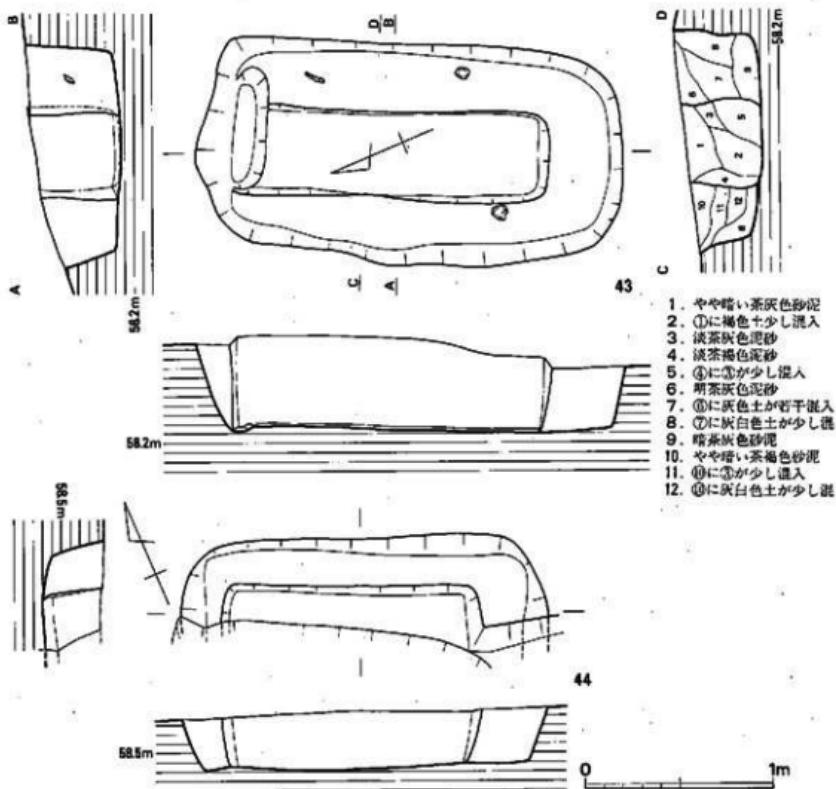


1. 淡茶灰色砂泥に片岩やや多く混入
2. 淡茶灰色砂泥
3. 茶灰色砂泥に片岩少し混入
4. 淡茶灰色砂泥
5. ④に片岩少し混入
6. ⑤に黄茶灰色砂泥混入



1. 灰白色泥岩
2. ①に茶灰色砂泥少し混入
3. ①に茶灰色砂泥多く混入
4. 淡茶灰色砂泥に片岩少し混入
5. 淡茶灰色砂泥に①が少し混入
6. 黄茶灰色砂泥に①が少し混入

第 44 図 41・42号木棺墓実測図 (1/30)

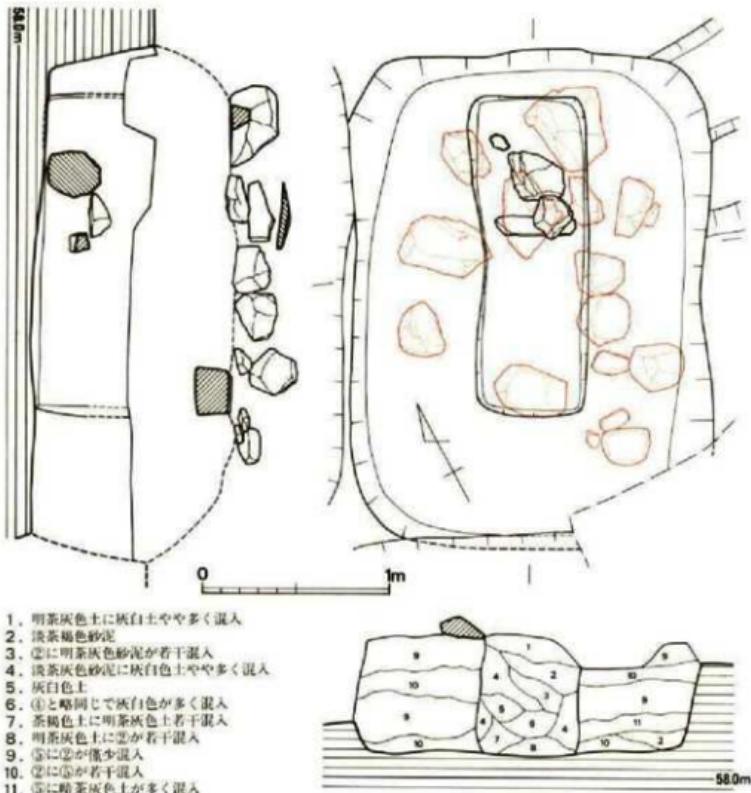


第 45 図 43・44号木棺墓実測図 (1/30)

縁下に 1 条の三角凸帯を付した妻の小破片で、調整は外面刷毛、内面ナデ、口縁部と凸帯付近はさらにヨコナデしている。色調は 8 が暗茶褐色、9 が黄褐色で、焼成は良好である。8 は裏込め内、9 は棺内埋土中出土。

44号木棺墓 (図版34、第45図) 長軸方位を東西にとる木棺墓で、40号木棺墓と隣接し、南半分を45号木棺墓に削平されている。遺存状態はあまり良い方ではないが、一応墓壙は 1 類に属し、規模は中型となる。棺部の平面形態も隅九長方形となろう。壁面は急勾配の立ち上がりをなしていた。棺床は水平に造られていたが、小口部に掘り込み等は存しない。遺物もちら出土しなかった。

45号木棺墓（図版35、第46図） 44号木棺墓とは長軸方位が直交し、46号木棺墓と略同じ長軸方位で並列している。なお、46号とは僅かに切り合い関係を有し、46号が後出すると判断した。32号木棺墓と同様に標石が存し、図化及び写真撮影後に墓壇の確認を行なった。難解を極めたが、約40cm掘り下げてやっと墓壇のラインが判明した。墓壇のタイプはⅠ類に属し、規模は当報告分でも最大となる。木棺部は堆積状態を観察した後に掘り下げたが、若干北偏する位置となる。壁面は垂直ないしオーバーハング気味となる。壇底と棺床は水平に造られ、小口部に掘り方等を検出していない。棺内にも大振りな石塊が流入していたが、壇底より標石上端面ま



第 46 図 45号木棺墓実測図 (1/30)

で1.4mにも達しており、32号同様に高い土鍔頭状の盛土がなされていたと想定される。

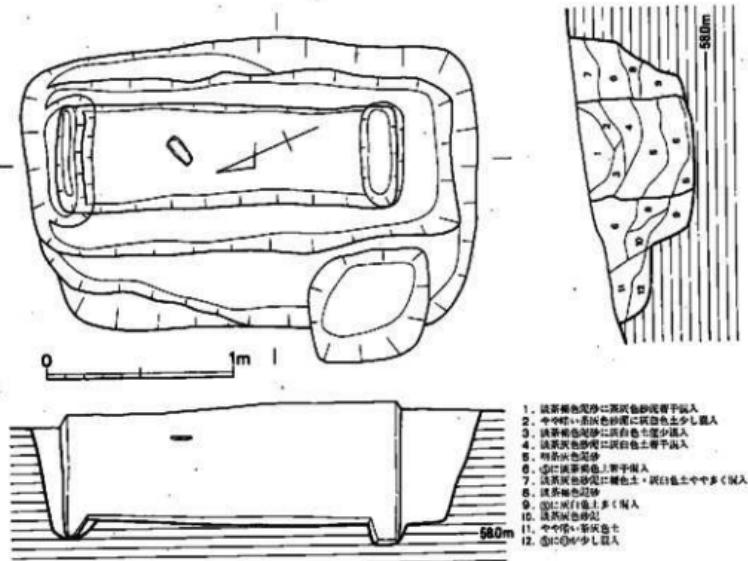
出土遺物（第33図）

甕(10) 如意形口縁の甕で、口縁下に1条の沈線がめぐっている。胴部外面刷毛、内面刷毛のあとナデ、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は外面茶褐色、内面黄褐色で、焼成も良い。裏込め内出土。

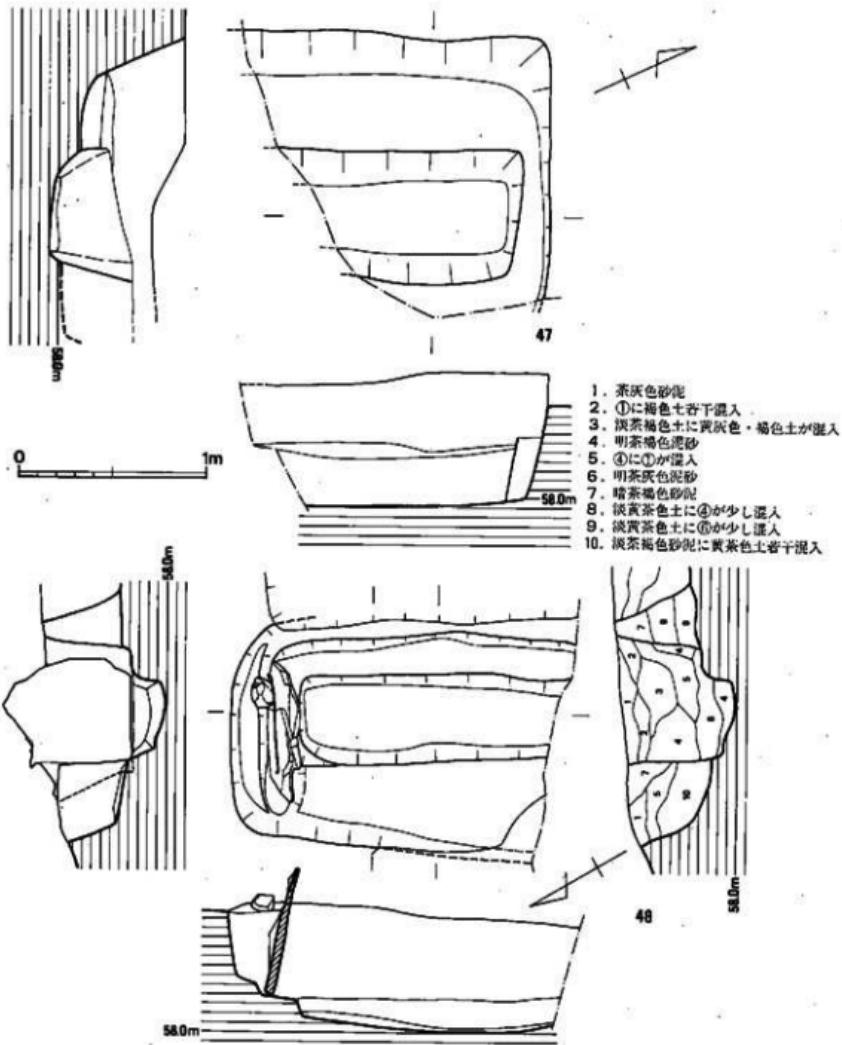
磨製石斧（第22図6） 刃部を欠損するが、断面長楕円形で船刃磨製石斧になると思われる。残存長15cm、断面8.1×4.8cmを測る。結晶片岩製。裏込め内出土。

46号木棺墓（図版36、第47図） 45号木棺墓と並列に配置され、北端は43号木棺墓に切られている。南西隅部は時期不詳の柱穴状の掘り込みに切削されていた。墓壇は西辺が二段掘りになっているが、木棺墓が重複したと考えよりも、墓壇の規模を修正したものと考えられる。このことより、墓壇のタイプはI類に属すと判断し、規模も中型となる。棺部は北偏し、壁面は垂直あるいはオーバーハンプ気味な立ち上がりとなる。壇底及び棺床は水平に造られ、両小口部は深さ10cm程の掘り込みがなされていた。

出土遺物（第33図）



第47図 46号木棺墓実測図 (1/30)



第 48 図 47・48号木棺墓実測図 (1/30)

表 1 木棺墓計測一覧表

番号	墓坑の法量(cm)			棺の法量(cm)			型式	石 材			長 約 方 位	備 考	旧番号	
	長軸	幅軸	最大深	長軸	幅軸	最大深		北	南	磚石	小口側面 の計測			
1	217+α	92	35	123	41	43	BII					N-29°-E	石室土壇面に切られる。	18
2	180+α	120+α	40	135	44	42	BII					N-38°-E	3号木棺蓋を切る。	36
3	138	72	19				AII?	○				N-37°-E	北部の小口石は抜き取られたのか?	24
4	217	86	16	82?	43?	25	BII					N-37°-E	3号木棺蓋に切られる。	14
5	232	146	94	132	38	113	B I					N-31°30°-E	2号棺肉溝に切られる。	2
6	225	134	54	163	46	55	BII					N-36°30°-E	石室土壇面と2号石棺蓋に切られる。	3
7	208	115	31	157	44	64	AII	○	○	○?	189	N-36°30°-E	2号石棺蓋と6号木棺蓋に切られる。	7
8	217	127	60	176	50	60	B I					N-29°30°-E	2号4号棺蓋に切られる。	4
9	230	75+α	20	182?	54	52	AII?	○				N-35°-E	2号石棺蓋に切られる。	8
10	209	96	23	136	38	26	BII					N-33°30°-E	2号4号棺蓋に切られる。	17
11	127	80+α	48	100	33	61	BII					N-30°-E	12号木棺蓋に切られる。	15
12	222	133	43			43	B I					N-37-E	13号木棺蓋に切られる。	16
13	215	70+α	14	145	58	53	AII?	○				N-34°30°-E	14号木棺蓋に切られる。	10
14	234	81	35			37	34	B I				N-35°30°-E	13・15号木棺蓋を切る。	5
15	226	74	29	162	37	58	AII	○	○		181	N-28°-E	14号木棺蓋に切られる。	9
16				130	35	17	BII?					N-0°30°-E		13
17	182	71	11		42?	18	BII?					N-27°30°-E		21
18	118+α	98+α	14	104+α	46	54	BII?					N-27°-E	1号墳の周溝に切られる。	36
19	203+α	121	29	151	45	44	BII?					N-15°30°-E	1号墳の周溝に切られる。	35
20	153+α	82+α	21	115+α	26	26	B I?					N-20°-E	21号木棺蓋に切られる。	48
21	198	90	32	142	49	49	B I					N-17°-E		34
22	156-α	74	15	130+α	45	18	BII?					N-15°-E		12
23	220+α	122	15	166	55	21	B I?					N-12°30°-E	1号墳の周溝に切られる。	33
24	242	85+α	26	156		25	B I					N-15°30°-E	8号墳の周溝に切られる。	19
25	211	92	31	125	35	40	B II					N-14°-E	24号木棺蓋に切られる。	20
26	175+α	95	39				B I?					N-17°30°-E	1号墳の周溝に切られる。	44
27	136+α	86	37	87+α	42	37	B I					N-10°-E	1号墳の周溝に切られる。	43
28	123+α	70	32	74	30	50	AII?	○				N-32°-E		11
29	90+α	73	24				B I					N-64°30°-W	1号墳の周溝に切られる。	47
30	191	115	38	142	55	38	AII?					N-30°-E	7号木棺蓋に切られる。	31
31	138	94+α	32	70	37	47	B I					N-34°-E	1号墳周溝・32号木棺蓋に切られる。	27
32	211	118	51	156	44	59	AII?	○	○			N-22°30°-E	33号木棺蓋に切られる。	25
33	147	81	37	67	36	20	A I	○	○		68	N-26°30°-E	34号木棺蓋に切られる。	39
34	144	80	39	105	36	32	AII	○	○		105	N-26°-E		46
35	41-α	102	28	16+α	46	34	B II?					N-19°-E	1号墳の周溝に切られる。	37
36	114+α	76	42	87	37	38	A I	○	○		87	N-29°30°-E		40
37	128+α	87+α	47	66	45	50	B II					N-33°-E		45
38	147+α	86	45	97	32	35	B II					N-25°30°-E	37号木棺蓋に切られる。	49
39	169	81	20	114+α	36	26	B II					N-67°-W		30
40	153	100	25	108	40	53	A I	×	×		97	N-67°30°-W	棺床は唯一石敷きである。	6
41	219	113	65	182	43	63	B I					N-32°-E	42・43号木棺蓋に切られる。	26
42	200	103	58	181	44	51	A II	○	○		182	N-28°-E	6号土塼を切っている。	23
43	202	105	50	152	45	50	B I					N-23°30°-E		28
44	172	52+α	28	131	30-α	31	B I					N-67°30°-W	45号木棺蓋に切られる。	32
45	249	168	63	166	57	50	B I					N-27°30°-E	46号木棺蓋に切られる。	50
46	210	82	60	156	47	62	B I					N-22°30°-E	43号木棺蓋に切られる。	29
47	155+α	128+α	71	107+α	40	37	B II?					N-24°30°-E		42
48	181+α	121+α	67	136+α	37	85	A II?	○				N-31°-E	47号木棺蓋に切られる。	41

註 石材の項目目に×印を用いているが、北か西に、南が東に相当するので便宜上使用した。

壺(11)如意形口縁の壺小片で、胴部外面ナデ、内面刷毛のあとナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。胴部外面には煤の付着がみられる。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。棺内埋土中出土。

47号木棺墓（図版37、第48図）45号木棺墓と隣接し、48号木棺墓を切ってはいるが並列に配置されている。約半分程が調査区外に伸展している。検出分より墓壇のタイプはII類に属すると考えられ、規模も中型となろう。木棺部の壁面は急勾配に立ち上がる。壇底と棺床は水平に造られているが、小口部には掘り込み等は認められなかった。その他に特記事項はなく、遺物も何ら出土していない。

48号木棺墓（図版37、第48図）47号木棺墓に東辺を少し切られているが、長軸方位は若干東偏しているものの並列した状態と言えよう。南側小口部が調査区外に伸展しているが、墓壇のタイプはII類に属し、規模も中型と推定される。北小口部に扁平な板石が、僅かに内斜して樹立していた。材質は安山岩であり、棺部の幅より広めの石材を用いている。壁面は西辺側が略垂直に立ち上がっているが、東辺側は木質部の腐蝕後に大きく崩れた状況を呈していた。上記の事項より判断して、H状の木棺が想定される。棺床は中央部が最も低くなる舟底状が考えられる。遺物は出土しなかった。

（武田）

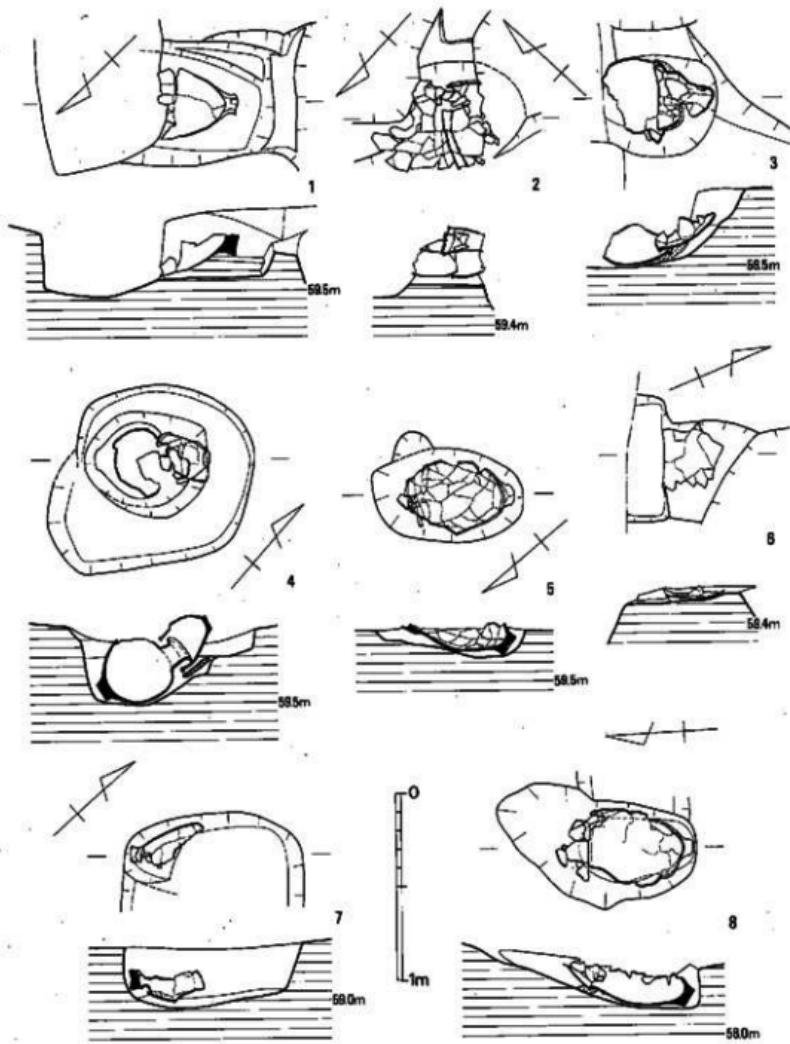
（3）壺棺墓（図版38～42、第25図、表2）

総数10基の壺棺墓が検出されたが、原位置を確認できたのは9基である。いづれも小児用壺棺墓で、後世の削平や破壊が著しく、本来はもっと多くの壺棺墓が形成されていたかもしれない。その分布は散在的で、木棺墓と複合した壺棺墓もあるが、いづれも木棺墓を切って作られている。時期ははゞ弥生時代中期初頭に属するものである。

1号壺棺墓（図版38、第49図1）3号木棺墓の西側から検出された小児用の壺棺墓である。上壺側は柿の肥料穴で破壊されていたが、散乱した壺破片から合せ形式は呑口式であったことが判った。主軸方位はN-43.5°-Eを指し、埋置角度は+10°である。時期は中期初頭である。

上壺（第50図）口縁部と口縁下に1条の三角凸帯を付した壺で、外面は風化が著しいが、胴部外面は刷毛、内面はナデで仕上げている。胴部中位には煤の付着がみられ、一部に黒斑を残している。色調は暗茶褐色で、焼成は良好な土器である。復原口径46.6cm、残存器高47.5cmを測る。

下壺（第50図）口縁上端部幅の狭い原初的な逆L字状口縁ともいえる壺で、口縁下には1条の沈線がめぐり、底部は外方に強く張り出した器肉の厚い回み底である。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部はヨコナデで仕上げている。色調は外面暗茶褐色、内面暗茶灰色で、外面胴部中位には煤が、内面下半には焼け焦げた炭化物が付着している。復原口径38.6cm、胴部最大径は胴部上位にあって、39.6cmと口径より大きい。底径は10.2cmで、器高は45.5cmを測る。



第 49 図 1 ~ 8 号 贻棺墓実測図 (1/30)

2号壺棺墓（図版38、第49図2）

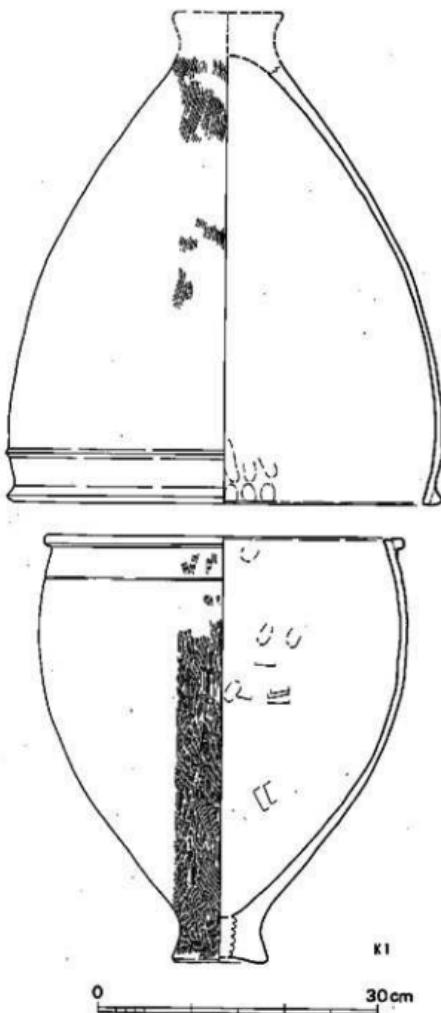
10号木棺墓を切った状態で検出された小児用壺棺で、上蓋・下蓋とも胴下半側は柿の肥料穴で破壊されていた。合せ形式は呑口式で、主軸方位はN-47°-Eを指し、埋置角度はほぼ水平である。時期は中期初頭である。

上蓋（第51図2上） 口縁部を打ち欠いた裏で、口縁下には1条の三角凸帯がめぐる。最大径は胴上位にあり、底部は外方に張り出した器肉の厚い外底部がわずかに回む平底である。胴部外面刷毛、内面ナデのあと一部ヘラ磨き、口縁部内外は刷毛のあとヨコナデしている。口縁部内面には成形時の指頭圧痕が残り、胴部外面中位には著しい煤の付着がみられる。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部最大径40.3cm、器高50.2cm、底径9.8cmを測る。

下蓋（第51図2下） 口縁部内側を打ち欠いた裏で、口縁下には1条の三角凸帯がめぐり、胴下半を欠失した土器である。胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ調整している。口縁部内外には成形時の指頭圧痕がみられる。色調は茶褐色で、焼成良好である。口径は40cm、残存器高27.5cmを測る。

3号壺棺墓（図版39、第49図3）

2号壺棺墓の南西、4号壺棺墓の北側に隣接して検出された小児用壺棺である。下蓋側の墓壙は、柿穴によ



第50図 壺棺実測図1 (1/6)

第 51 国 梅村実測図 2 (1/6)

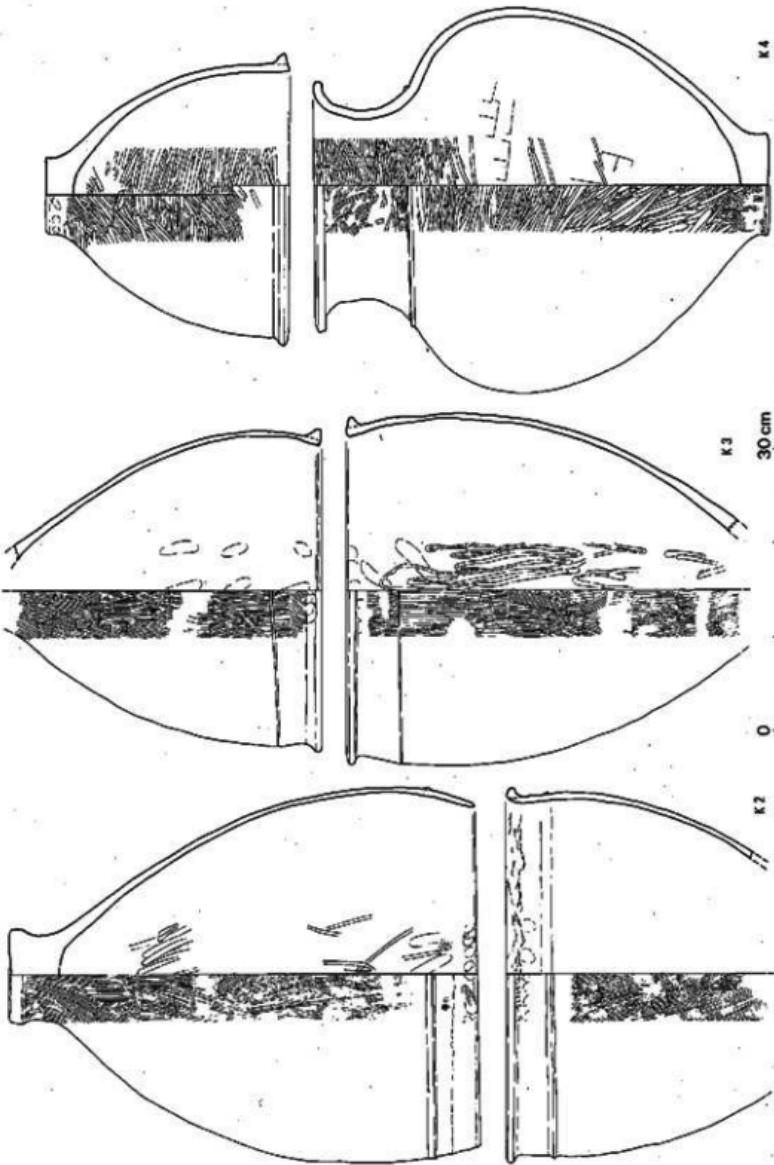
30 cm

0

K2

K3

K4



り破壊され欠失している。合せ形式は呑口式で、合せ部を粘土で目貼りしている。主軸方位はN-43°-Wを指し、埋置角度+19.5°である。

上甕(第51図3上) 口縁端部に三角凸帯を付し、口縁下に1条の沈線がめぐる甕で、底部は欠失している。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成はやや不良である。口径34.3cm、残存器高33.2cmを測る。

下甕(第51図3下) 下甕も上甕と同様、口縁端部に三角凸帯を付し、口縁下に1条の沈線がめぐる甕で、底部を欠失している。最大径は胴上位にあり、口径36.6cm、胴部最大径37.7cm、残存器高42cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面は指頭によるナデのあと部分的にタテヘラ磨き、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁部内外には成形時の指頭圧痕が残っている。色調は内外とも暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

4号甕棺墓(図版39、第49図4) 3号甕棺墓の南側から検出された小児用甕棺墓で、合せ形式は覆口式である。上甕に鉢、下甕に壺を利用した甕棺で、主軸方位はN-48.5°-Eを指し、埋置角度は+32.5°と強い傾斜で、上甕の下には合せの角度を固定するためか、扁平な石が敷かれていた。時期は中期初頭である。

上甕(第51図4上) 口縁端部に三角凸帯を付した鉢で、底部は器肉の厚い平底である。調整は胴部外面刷毛のあと丁寧なヘラ磨き、内面も丁寧にヘラ磨きし、口縁部内外はヨコナデで仕上げた作りの良い土器である。部分的に剥落しているところもあるが、内外とも黒色顔料を塗布している。色調は外面茶褐色、内面暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。口径31.1cm、器高26.2cm、底径8.2cmを測る。

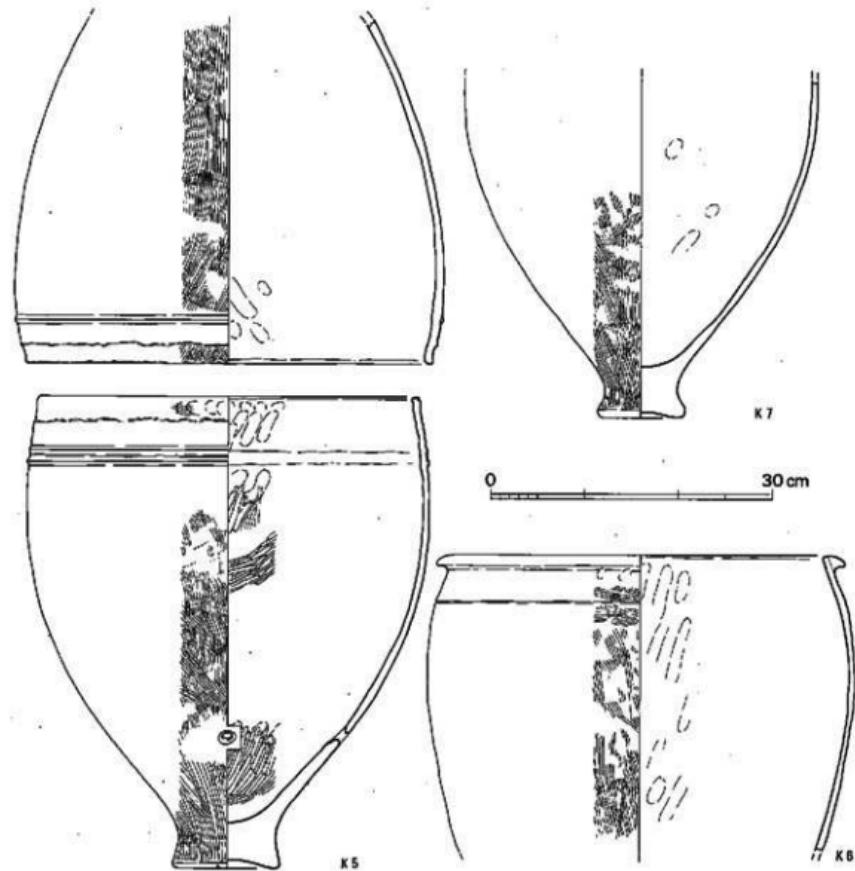
下甕(第51図4下) 扁球形の胴部に、立ち気味に強く外反した短かい口頸部がつく甕で、肩部には1条の三角凸帯が付されている。底部は器肉の厚い平底である。調整は刷毛のあと丁寧なヘラ磨き、胴部内面は工具によるナデ、口頸部内面はヨコヘラ磨き、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。口縁部内外には成形時の指頭圧痕が残っている。上甕と同様、部分的に剥落しているところもあるが、内外面ともに黒色顔料を塗布している。色調は外面暗灰褐色、内面暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。口径26.8cm、胴部最大径41.1cm、器高48.5cm、底径10.9cmを測る。

5号甕棺墓(図版40、第49図5) 22号木棺墓の北側から検出された小児用甕棺墓で、上面は著しく削平されていた。上甕・下甕とも、口縁部を打ち欠いた甕で、合せ形式は覆口式である。下甕の胴下半には、水抜きの穿孔がみられる。主軸方位はN-39.5°-Eを指し、埋置角度は+33.5°と強い。時期は中期初頭である。

上甕(第52図5上) 口縁部を打ち欠いた甕で、口縁下には1条の三角凸帯が付されている。最大径は胴上半にあり、45.8cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面はナデ、口縁部内外と凸帯付近はヨコナデで仕上げている。胴部外面下半には煤の付着がみられ、内面一部に黒斑を残し

ている。色調は黄褐色で、焼成は良好である。

下蓋(第52図5 下) 上蓋と同様、口縁部打ち欠きの蓋で、口縁下には2条の三角凸帯が付されている。底部は外方に張り出した器肉の厚い凹み底である。調整は胴部外面粗い刷毛、内面はナデのあと部分的にヘラ磨きしている。口縁部内外と凸帯付近はヨコナデで仕上げているものの、内外には成形時の指頭圧痕を顕著に残している。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈し、



第52図 製作実測図3 (1/6)

焼成良好である。胴部最大径42.1cm、器高50.2cm、底径11.5cmを測る。

6号壺棺墓（図版40、第49図6） 21号と28号木棺墓の間から検出された小児用の單棺である。蓋部にあたる南側の掘り方が、棺の口縁に接して一段下がり、東西に広く拡張されていることからして、木蓋が存在したものと思われる。南北とも柿穴による破壊とともに、上面も著しく削平された壺棺である。従って、不明な点は多いが、主軸方位はN-23°-Eを指し、埋置角度はほぼ水平と思われる。時期は中期初頭である。

壺棺（第52図6） 口縁端部に三角凸帯を付し、口縁下に1条の沈線をめぐらした壺で、胴下半を欠失した破片資料である。復原口径43.6cmで、最大径は胴上位にあり45.6cmを測る。残存器高は31.9cmである。調整は胴部外面刷毛、内面はナデで指頭圧痕を各所に残す。口縁部内外はヨコナデ仕上げである。色調は外面茶褐色、内面墨茶褐色で、焼成は良好である。

7号壺棺墓（図版41、第49図7） 30号木棺墓の西側に隣接して検出された小児用壺棺墓で、30号木棺墓との間は柿穴で著しく破壊されていた。出土した壺の破片や墓壙の規模などからみて、單棺と思われる。破壊が著しいため、かならずしも明確ではないが、主軸方位はN-42°-Eで、埋置角度はほぼ水平と思われる。時期は中期初頭である。

壺棺（第52図7） 口縁部付近を欠く壺で、底部は外方に強く張り出した器肉の厚い凹み底である。調整は胴部外面上半は風化のため不明であるが、下半は刷毛、内面はナデで仕上げている。最大径は胴上位にあり、37.5cm、底径9.3cm、残存器高36.1cmを測る。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は普通である。

8号壺棺墓（図版41、第49図8） 7号壺棺墓の南側から検出された小児用壺棺墓で、合せ形式は呑口式で、合せ口は粘土で日貼りされていた。上腹は口縁部を打ち欠いた壺である。主軸方位はN-3°-Eで、埋置角度は+31°である。時期は中期初頭。

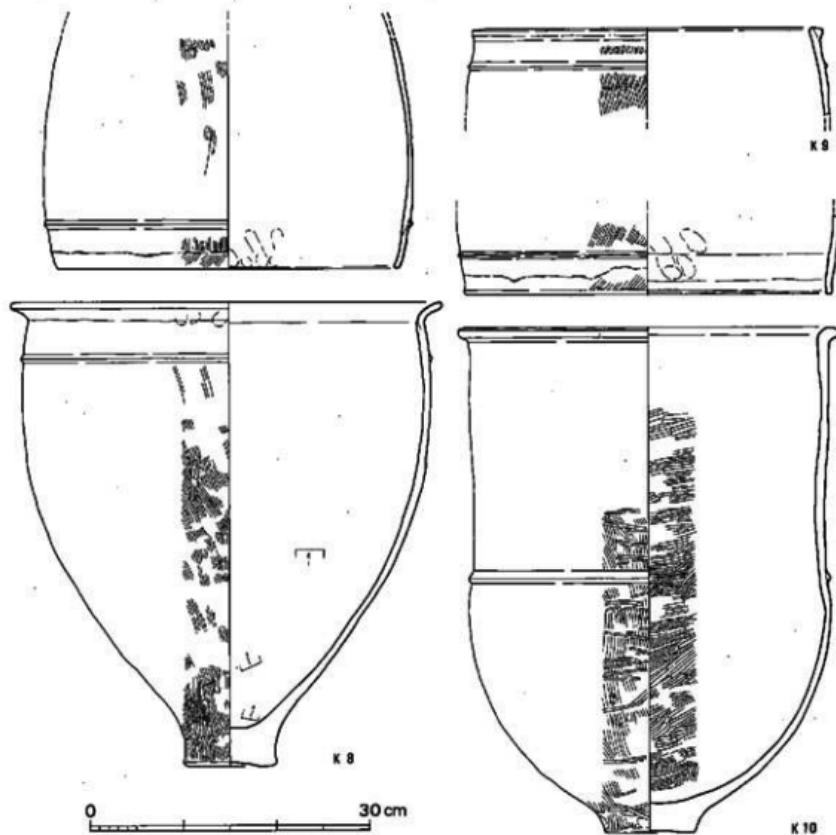
上壺（図版66、第53図8上） 口縁部を打ち欠いた壺で、口縁下には1条の三角凸帯が付されている。胴部外面は風化しているものの、調整は刷毛、内面はナデ、口縁部付近はヨコナデしている。口縁部内面には指頭ナデによる压痕が残っている。色調は内面黄褐色、外面暗黄褐色で、焼成は普通である。

下壺（図版66、第53図8下） 如意形口縁の壺で、口縁下には1条の三角凸帯が付されている。底部は器肉の厚い凹み気味の平底である。復原口径46.3cm、器高49.6cm、底径9.9cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部付近内外はヨコナデで仕上げている。口縁部外面には成形時の指頭圧痕を残している。色調は外面黄茶褐色、内面茶褐色で、焼成良好な土器である。

9号壺棺墓（図版42、第49図9） 17号木棺墓の西側から検出された小児用壺棺墓であるが、柿穴等による擾乱や削平が著しく、壺棺は原位置を保っていないかった。従って、わずかな壺片が残存していただけで、合せ形式などは不明である。しかし、残存した壺片が口縁部打ち欠

きの甕であることからすれば、上・下甕が存在した可能性は高いだろう。時期は中期初頭と思われる。

甕棺(第53図9) 口縁端部を打ち欠いた口縁部付近の甕破片で、口縁下には1条の三角凸帯がめぐっている。調整は胸部外面刷毛、内面ナテ、口縁部内外と凸帯付近はヨコナテで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部付近外面には部分的に煤の付着がみられる。残存部での胴部最大径は39cmを測る。



第 53 図 甕棺実測図 4 (1/6)

10号窯棺墓 1号墳石室掘り方内の捲乱土中から出土した壺棺で、正確な位置は確定できないが、掘り方内に存在したものと思われる。上窓は口縁部を打ち欠いた窓で、下窓は肩部に1条の三角凸帯を付したすん窓な壺形土器である。合せ形式は呑口式と思われる。時期は中期初頭である。

上窓(第53図10上) 口縁部打ち欠きの窓で、口縁下には1条の三角凸帯が付された口縁部付近の破片資料である。残存部での胴部最大径は41.2cmを測る。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁内外と凸帯付近はヨコナデで仕上げている。色調は外面暗茶褐色、内面黄褐色を呈し、焼成は普通である。

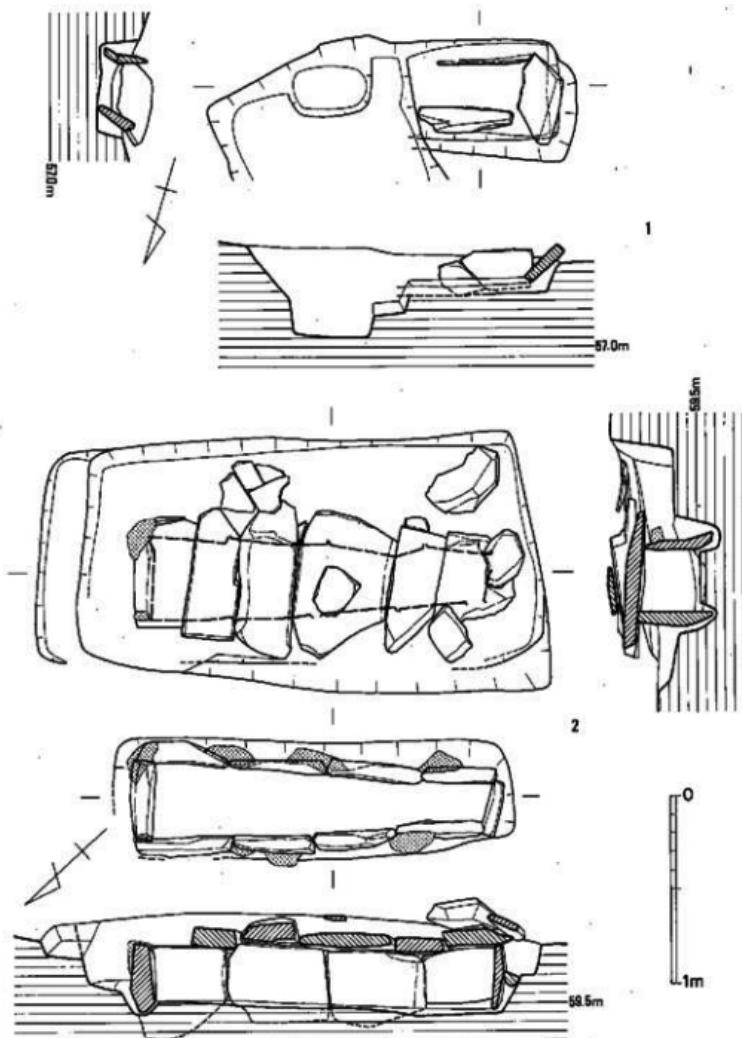
下窓(図版66、第53図10下) 球形の胴部に太くてすん窓な口頭部がつく壺で、胴部と頭部の境界が不明瞭な肩部に1条の三角凸帯を付し、区別している。口縁部は短かく逆L字状に強く屈折したもので、底部は器肉の厚い平底である。調整は口頭部外面上半は刷毛のあとナデ、頭部下半と胴部外面は粗い刷毛のあとナデと粗いヘラ磨きを施している。口頭部から胴部の内面は、外面より丁寧なヘラ磨きで仕上げ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は内外とも茶褐色を呈し、焼成は良好な土器である。復原口径41cm、頭部径と胴部最大径は同じ38.8cm、器高は54cm、底径は9.7cmを測る。

表 2 墓棺幕計測一覧表

(単位cm)

NO	合せ形式	上 窓	下 窓	埋設角度	主 軸 方 位	墓 棺 幕 横		時 期	備 考	旧番号
						長径	短径			
K 1	呑口	窓	窓	+10°	N-43.5°-E	(80) × (66)		中期初頭		K 4
2	"	窓(口縁打欠き)	窓(口縁内打欠き)	は×水平	N-47°-E	- -		"		K 5
3	"	窓	窓	+19.5°	N-43°-W	- × (53)		日貼り粘土		K 6
4	覆口	跡	窓	+32.5°	N-48.5°-E	(97) × (95)		上窓下に平石あり		K 1
5	"	窓(口縁打欠き)	窓(口縁打欠き)	+33.5°	N-39.5°-E	(60) × (50)		下窓に穿孔あり		K 2
6	单棺	木蓋?	窓	12°×水平	N-23°-E	(70) × (67)				K 3
7	"	"	窓	"	N-42°-E	(95) × (55)				K 9
8	呑口	窓(口縁打欠き)	窓	+31°	N-3°-E	(108) × (67)		日貼り粘土		K 10
9	-	窓	-	-	-	(124) × (68)				土壤22
10	呑口?	窓	窓	-	-	-		"		

(4) 石棺墓・石蓋土壙墓 (図版42~45, 第54・55図)



第 54 図 1・2号石棺墓実測図 (1/30)

1号石棺墓 (図版43、第54図1) 2号墳と3号墳の間から検出された石棺墓で、東半部は柿穴で破壊されていた。側壁は扁平な横長の割石を各1枚を用い、西側小口石は少し傾いていたものの扁平な割石を立てていた。いずれも石材は雲母片岩である。側壁間の幅からして、西側が頭位と思われる。残存する石棺内法長0.6m、西側小口幅0.27mを測る。主軸方位はN-106.5°-Wを指す。

2号石棺墓 (図版44、第54図2) 2号墳の南側にあり、6~7号木棺墓を切った状態で検出された石棺墓である。掘り方は両側が広い隅丸長方形で、中央よりやや西側に偏して構築されていて、頭位は北東である。蓋石は北側小口部の1枚がすでに除去されていた以外は、5枚の扁平な板石が架構されていた。両側壁とも横長の扁平な板石4枚を使用し、縁目は青灰色の粘土で目貼りしている。石材は1号と同様、全て雲母片岩を用いている。石棺内法長1.78m、北小口幅0.44m、南小口幅0.26m、深さ0.34mを測る。掘り方の規模は、長径2.45m、短径1.35mである。主軸方位はN-42.5°-Eを指す。

表 3 石棺墓計測一覧表

(単位m)

NO	石棺内法				掘り方		主軸方位	備考
	長	頭位幅	足位幅	深さ	頭位	長径	短径	
1.	(0.6)	0.27	—	0.18	西?	(0.8)	(0.54)	N-106.5°-W
2	1.78	0.44	0.26	0.34	北東	2.45	1.35	N-42.5°-E 目貼り粘土

1号石蓋土壙墓 (図版45、第55図) 2号石棺墓の東側から検出されたもので、1・2号木棺墓と6号木棺墓の一部を切って作られた石蓋土壙墓である。両側は柿穴で破壊されているが、隅丸長方形プランの墓壙内中央に棺身部分を掘り下げた土壙墓で、蓋石は西小口部で2枚、東小口部で1枚を残すだけで、中央は除去されていた。いずれも扁平な雲母片岩の板材を使用している。棺内は側壁上面の一部が剥落しているものの、ほぼ全面に赤色顔料が塗布されている。棺身床面の長さは1.71m、頭位と思われる東小口部で幅0.32m、西小口部で幅0.21m、深さ0.48mを測る。主軸方位はN-112°-Eを指す。

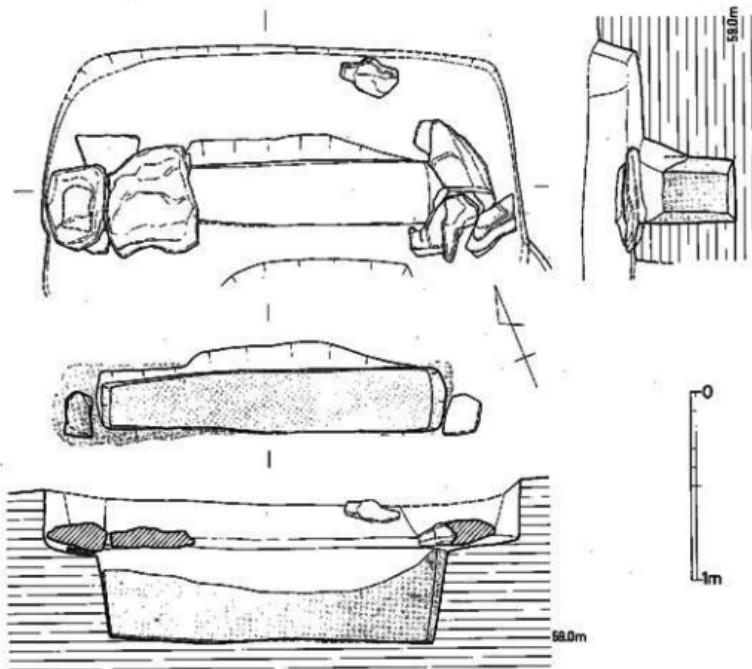
表 4 1号石蓋土壙墓計測表

(単位m)

NO	内法				掘り方		主軸方位	備考
	長	頭位幅	足位幅	深さ	頭位	長径	短径	
1	1.71	0.32	0.21	0.48	東	2.54	(1.27)	N-112°-E 二段掘り

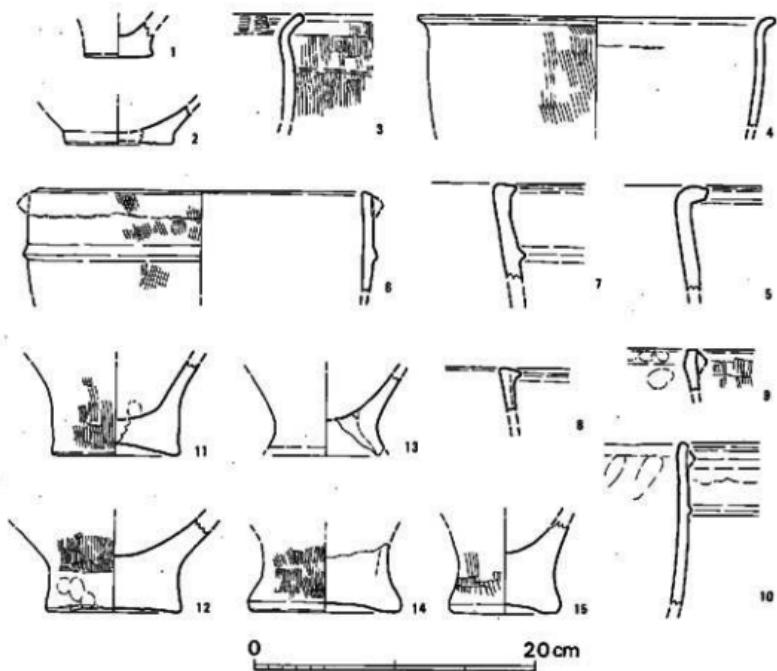
(5) 採集遺物 (第56・57図)

弥生式土器 (第56図) 1・2は小形壺の底部、3~15は甕の資料である。いずれも1号墳



第 55 図 1号石蓋土壙実測図 (1/30)

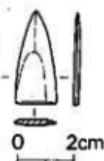
石室掘方内や周溝、墳丘付近で採集された土器である。2は胴部と底部の境が比較的明瞭な平底で、復原底径7.8cmを測る。内外ともナデ調整で、色調は暗黄褐色を呈し、焼成も良好。3～5は如意形口縁の表で、3は口縁下に1条の沈線がめぐるタイプである。調整は、3が胴部内面ナデ、胴部外面と口縁部内面刷毛、口縁部内外はさらにヨコナデ、4は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ、5は胴部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。4の胴部外面には謀の付着がみられる。色調は外面3と5が暗褐色、内面茶褐色。4は外面暗茶褐色、内面暗黄褐色を呈す。焼成はいづれも良好である。4は復原口径25.8cmを測る。6～10は口縁端部に三角凸帯を付した表で、6・7・10はさらに口縁下に1条の三角凸帯がめぐるタイプである。調整は6・9が胴部外面刷毛、口縁内外と凸帯付近はヨコナデで仕上げている。7・8は胴部内面ナデ、口縁部と凸帯付近はヨコナデ調整である。色調は6が黄褐色、7が暗茶褐色、8は外面暗茶灰色、内面茶褐色、9は外面黄灰色、内面茶灰色、10は外面茶褐色、内面暗



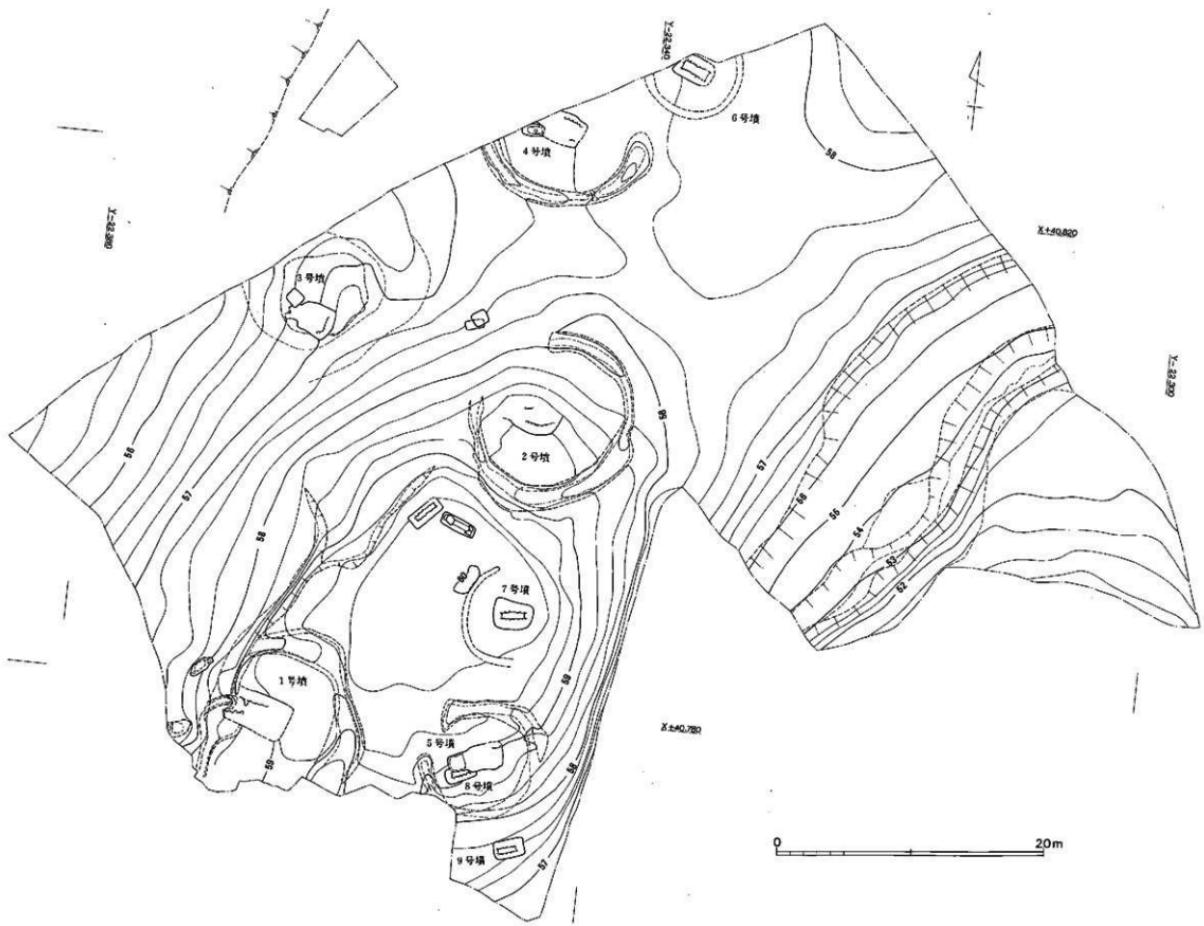
第 56 図 异生式土器実測図 (1/4)

黄褐色である。焼成は10が不良の他は、良好である。6の復原口径は26cmである。13~15は外底部が外方に張り出すタイプで、12は器内の厚い平底である。調整は13が風化のため不明の他は、外面刷毛、内面ナデ仕上げである。11の内底部と12の底部外面には成形時の指頭圧痕が残る。色調は11・13が暗茶褐色、12が暗茶灰色、14・15は黄褐色を呈し、焼成は良好である。底径は11が9cm、12が9.7cm、14が10.7cm、15が7.6cmを測る。

石器(第57図) 中央に鈎を残す扁平な磨製石鏃である。長さ3.3cm、基部幅1.45cm、厚さ0.25cm、重さ1.7gを測る。粘板岩製。4号土壤と4号木棺墓の中間から出土した。



第 57. 図
磨製石鏃実測図 (1/2)



第 58 国 古墳群配置図と山地地形図 (1/300)

4. 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 古墳群と土壙墓（図版1、第58図）

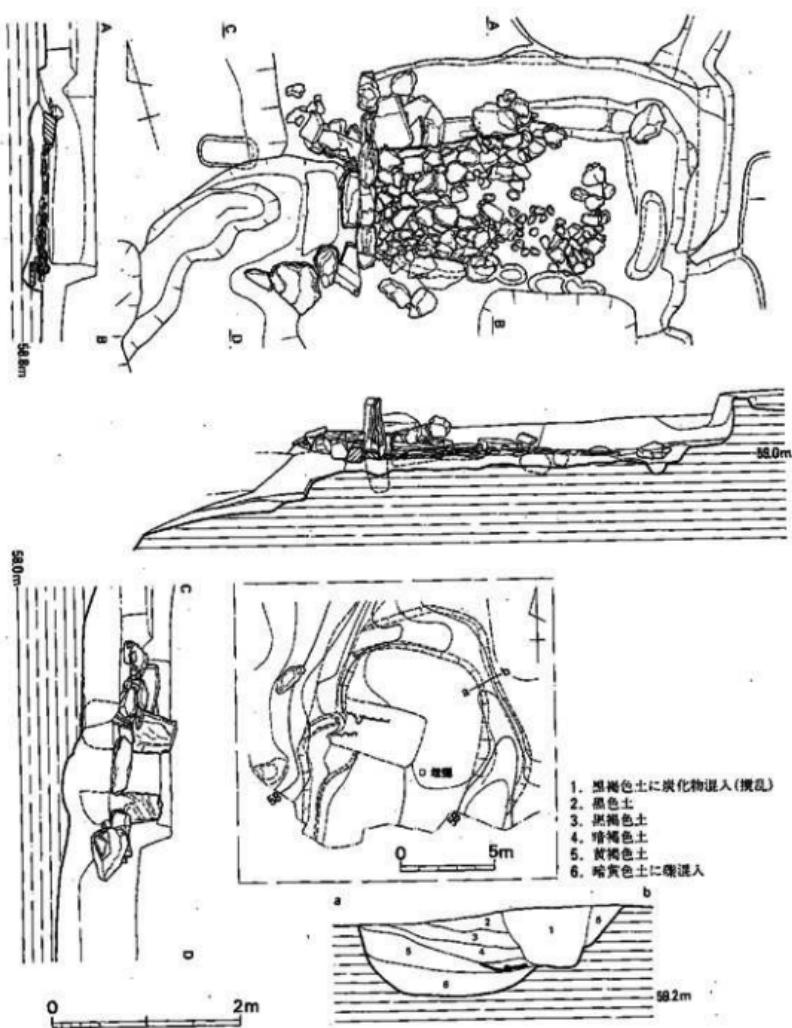
1号墳（図版46～49、第58・59図）

墳丘（図版46、第59図） 発掘区の南西端部から検出された古墳で、朝倉高校が調査した4号墳にある（註1）。調査前は、柿畠として造成されていたこともあり、墳丘はすでに削平され、古墳の存在は確認できなかった。調査の結果、西側が畠の開削で一部消失していたものの、北側から東側にかけて周溝が検出され、円墳であることが判った。南側は用地外で調査していないが、墳丘の規模は周溝外径で約14.5m、内径で約10.5mを測る。西側に残存した周溝内から須恵器杯身・杯蓋・高杯などが一括出土した。朝倉高校が調査した昭和30年には、小さく低い墳丘が存在したがその規模などは判らないと記録されている。

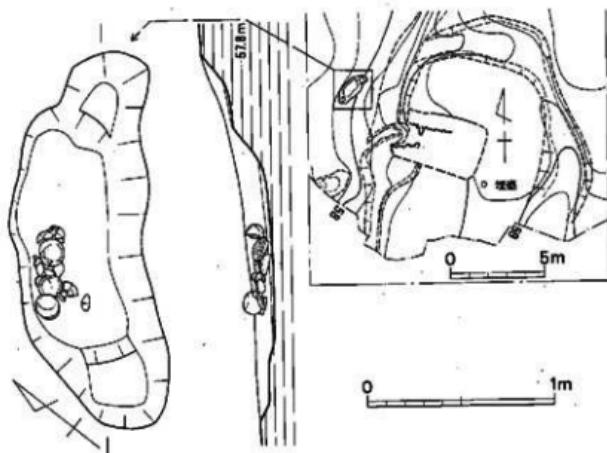
主体部（図版47・48、第59図） 主体部は両袖单室の横穴式石室で、主軸方位はN-74.5°-Wを指し、西に開口している。玄室は奥壁と南側側壁を全く欠失しているが、抜跡及び敷石の状況から羽子板形のプランを呈すことがわかる。従って、玄室の規模も明確ではないが、全長約3.15m、幅は玄門側で1.58m、奥壁側で約1.5m、玄門幅は0.4mを測る。玄室内は扁平な板石と河原石で敷石している。側壁は北壁の玄門側の一部が残存するだけだが、扁平な板石と横長の角石の小口積みである。朝倉高校の実測図をみると、今回欠失していた奥壁の一部と奥壁側の北側側壁が残っていて、北側側壁は大きな一枚石であったことがわかる。その他は、今回の調査時とあまり変わっていない。また、玄室の計測値もほぼ一致している。玄門部は扁平で横長の石を立てて構築していて、北側玄門石内側一部に赤色顔料の塗布がみられる。前庭部は八字形に短かく聞く粗雑な小口積みで、素掘りの墓道が続いている。石室の石材は、敷石に河原石が使用されているが、大半は緑泥片岩と雲母片岩である。石室内からは鐵錐片3点が出土ただけである。朝倉高校の記録によれば、ガラス製勾玉1、ガラス製管玉1、耳環2、鉄劍1、刀子1、鐵錐2、須恵器瓶1、庖1個が出土したとされている。出土土器からして、本墳の築造時期は6世紀前半と思われる。

出土遺物（図版67～69、第61～64図）

土師器碗（1～9） いづれも杯部口縁が内窓するタイプで、大きさにも大小あり、12cm前後（1～5）、15cm前後（6～8）の二種類である。調整は杯部外面下半をヘラ削りしたままのものが7・9で、他は全てヘラ削りのあと丁寧にヨコヘラ磨きをしている。内面はいづれもヘラ磨き仕上げで、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。1・3～5・7～9は内外とも黒漆の塗布がみられる。特に、1・4は黒漆塗りが良く残っている。色調は1・3・4・7・8が暗黄褐色、2・6が褐色、5・9が黄褐色を呈す。口径は1が11.9cm、2が12.6cm、3が12.5cm、4が12.2cm、5が12cm、6が14.6cm、7が15cm、8が16cmで、1・4・5がほぼ完形品の他は



第 59 圖 1号墳石室実測図 (1/60)



第 60 図 1号墳周溝内遺物出土状態実測図 (1/30)

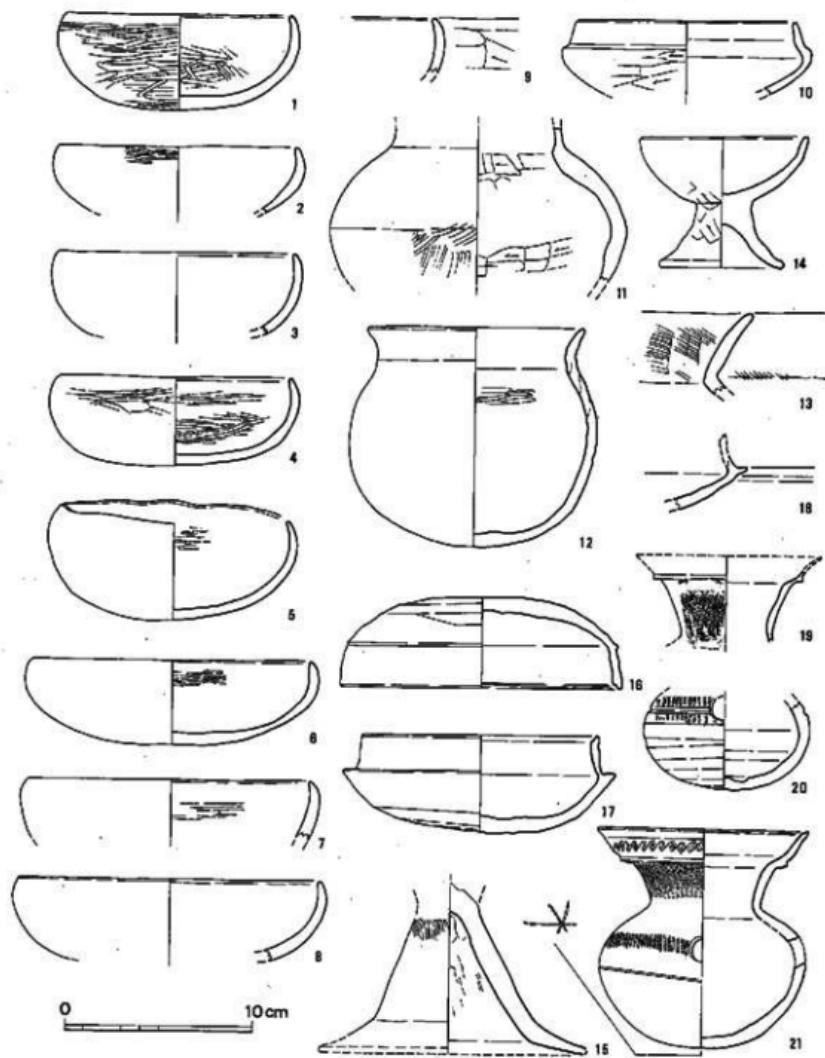
破片資料である。器高は 1 が 5.1cm, 4 が 4.75cm, 5 が 6.3cm, 6 が 4.6cm を測る。7 が石室掘り方内出土の他は、全て、西側周溝内から一括出土したものである。

土師器杯身 (10) 須恵器杯身を模倣した土器で、蓋受部の段は不明瞭である。体部外面はヨコヘラ削り、内面ナデ。口縁部内外はロクロヨコナデで仕上げている。内外とも剥落は著しいが黒漆塗布の痕跡がみられる。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。復原口径 11.4cm を測る。墳丘出土。

土師器壺 (11・12) 11 は扁球形の胴部に立ち気味の口頸部がつく小形壺である。調整は胴部外面刷毛のあと、上半はナデ、内面下半はヨコヘラ削り、上半はナデ、頸部内外はヨコナデで仕上げている。外面に黒漆塗布の痕跡が残る。復原胴部最大径は 15.8cm を測る。12 は球形の胴部に緩やかに外反する短い口縁がつく広口の小形壺である。外面は風化が著しく調整は不明だが、内面は丁寧なヘラ磨きで仕上げている。内外とも黒漆が塗布されていたらしい痕跡がみられる。口径は 11.5cm、器高 11.7cm を測る。色調は 11 が暗黄褐色、12 は黄褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。11 は東側周溝、12 は西側周溝内出土。

土師器壺 (13) ク字状に強く外反した腹の口縁部付近の小破片である。口縁部内外は刷毛調整のあと外面と内面端部付近はヨコナデで仕上げている。色調は暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。北側周溝内出土。

土師器高杯 (14・15) 14 は椀形の杯部にラッパ状に聞く短かい脚部がつく小形の高杯である。内外面に黒漆の塗布がみられる。調整は杯部内外ナデ、口縁部内外はヨコナデ、柱状部は



第 61 圖 1号墳出土土器実測図 1 (1/3)

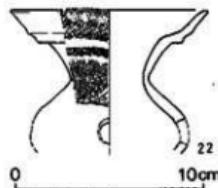
ヘラ削り、裾部内外はヨコナナデ仕上げである。杯部径8.7cm、裾部径6.4cm、器高7cmを測る。色調は暗黄褐色で、焼成良好である。15はラッパ状にひらく脚部の資料で、復原裾部径は14.3cmを測る。調整は柱状部上端に刷毛目が残る他は、内外とも器面の風化が著しく不明である。色調は茶褐色を呈し、焼成良好である。14は西側周溝内、15は東側周溝内出土。

須恵器杯蓋(16) 口径14.85cm、器高4.9cmを測る。天井部は比較的平坦で、口唇部は内傾して凹面をなす。天井部外面は左廻り方向の回転ヘラ削り、体部内外は回転ナデ、天井部内面中央はナナデ仕上げである。天井部外面には自然釉がみられる。色調は灰色を呈し、焼成堅緻である。西側周溝内出土。

須恵器杯身(17・18) 17は口径12.45cm、器受部径14.55cm、器高5.25cmを測る。立ち上りは内傾度が少なく、口唇部は内傾して凹面をなす。外底部は回転ヘラ削り、内面は中央はナナデ、体部内外は回転ナデである。胎土・焼成とも良好で、色調は灰色を呈す。西側周溝内出土。18は器受部から体部の小小片で、内外とも回転ナナデ仕上げである。色調は灰色で、焼成堅緻である。石室掘り方内出土。

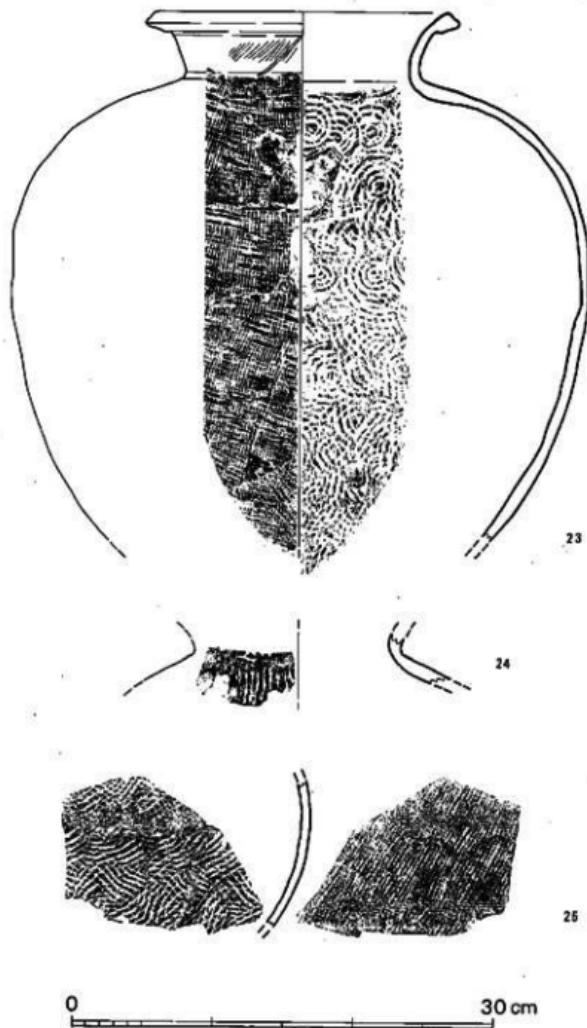
須恵器馳(19~22) 19は口頭部の破片資料で、頭部には櫛目波状文を施した器肉の薄い焼成堅緻な土器である。色調は外面黒灰色、内面灰色を呈す。20は扁球形な胴部の破片資料である。胴中央に1条の沈線があげられ、上下に櫛齒による刺突文が施されている。中央の円孔は斜面上方に穿たれている。胴部外面下半は回転ヘラ削り、胴部内面は回転ナナデ仕上げである。色調は灰色で、焼成堅緻である。19・20とも石室掘り方内出土。21は復原口径11.2cm、胴部最大径11cm、器高11.6cmを測る。扁球形の胴部中央に1条の沈線があげられ、その上には櫛齒刺突文が、頭部と口縁部外面には櫛目波状文が施されている。調整は胴部内外ナナデ、口頭部内外は回転ナナデ仕上げである。色調は暗灰色で、焼成堅緻である。外底部にはヘラ記号がみられる。北側墳丘出土。22は復原口径10.6cmを測る、口頭部外面には櫛目波状文が施されている。調整は胴部外面ナナデ、胴部内面と口頭部内外は回転ナナデ仕上げである。頭部内面と外面に灰かぶりがみられる。色調は灰色を呈し、焼成堅緻である。

須恵器蓋(23~25) 23は復原口径22.4cm、胴部最大径41.2cm、残存器高37.6cmを測る。肩の張った胴部に強く外反する短かい口頭部がつく處で、口縁部外面は有段状をなす。胴部外面は細かい格子目、内面は同心円文のタタキ、口頭部内外は回転ナナデ仕上げである。色調は暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。24は肩部付近の破片資料である。肩部外面は平行タタキを施し、内面は風化が著しく調整は不明である。色調は灰色を呈し、焼成も良い。25は胴部破片で、外面は平行タタキ、内面は同心円文のタタキを施している。色調は外面灰色、内面暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。24・25とも石室掘り方内から出土した。



第62図

1号墳出土土器実測図2(1/3)



第 63 図 1号墳出土土器実測図 3 (1/4)

鉄錐(図版69、第64図) 1は三角形式、2は柳葉式の錐で、3・4は茎部の破片資料である。

2が石室掘り方内の他は、玄室内出土である。

管玉(図版69、第64図) 長さ42mm、径7mmのガラス製の管玉である。色はブルーと緑とダークブルーの縞をなす。墓道付近から出土した。

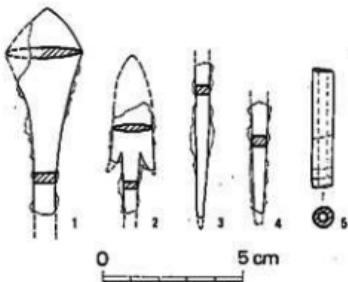
埋甕(図版49、第60・65図) 石室の南東隅後方の埴丘内から検出された。楕円形プランの長径45cm、短径37cm、深さ32cmの土壇内に下に甕を据え、上に鉢を被せた埋甕である。甕内には中程までベンガラが詰まり、その量は1,940gであった。

上甕(第66図1) 広口の丸底の鉢で、口縁下に1条の沈線がめぐる。器形は歪つて、口縁部上面觀は楕円形をなす。口縁部最大径36.5cm、短径32.7cm、器高23.2cmを測る。調整は胴部外面粗い刷毛、底部はナデ、胴部内面はヘラ削り、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗黄褐色を呈し、焼成も良い。

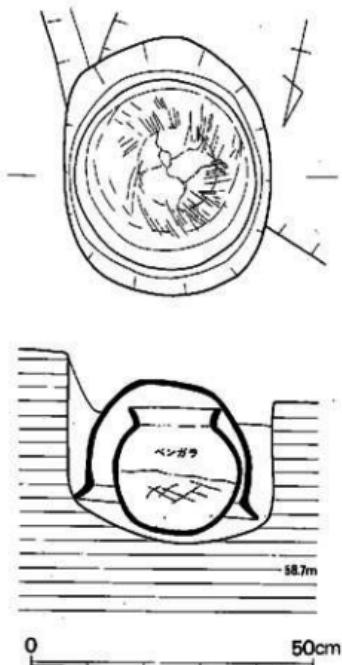
下甕(第66図2) 球形の胴部に、わずかに弯曲気味のく字状口縁がつく甕で、口径16.2cm、器高23.7cmを測る。口縁部内外と胴部外面は刷毛調整し、胴部内面はヘラ削り、口縁端部内外はヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、焼成良好である。

註1 高山明他「埋もれていた朝倉文化」

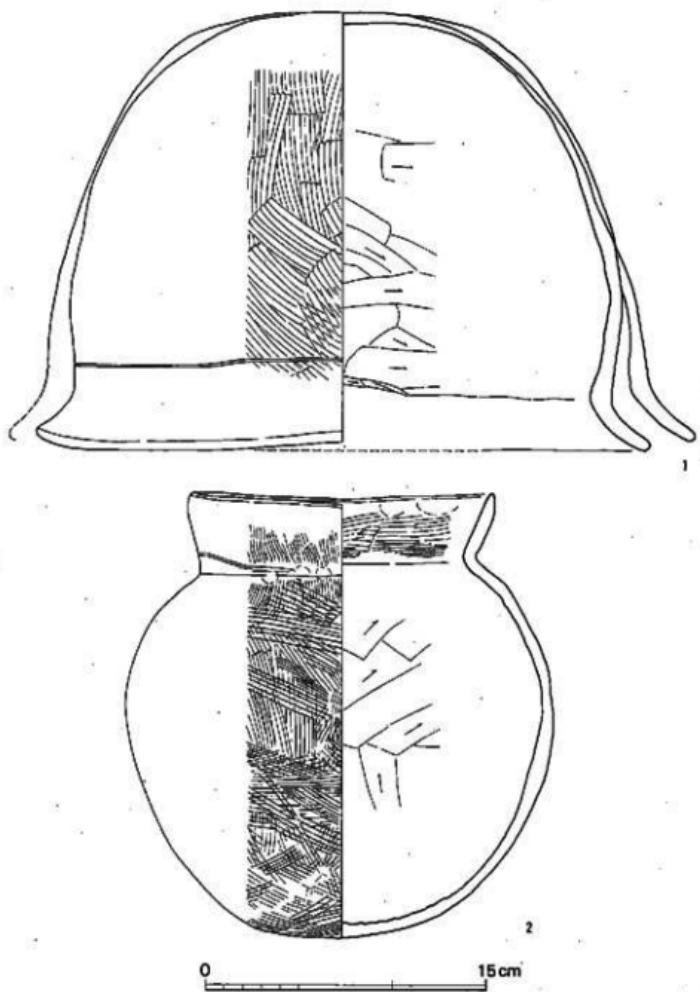
朝倉高校史学部 1969



第64図 1号墳出土玉類・鉄器実測図 (1/2)



第65図 1号墳内埋甕実測図 (L/10)

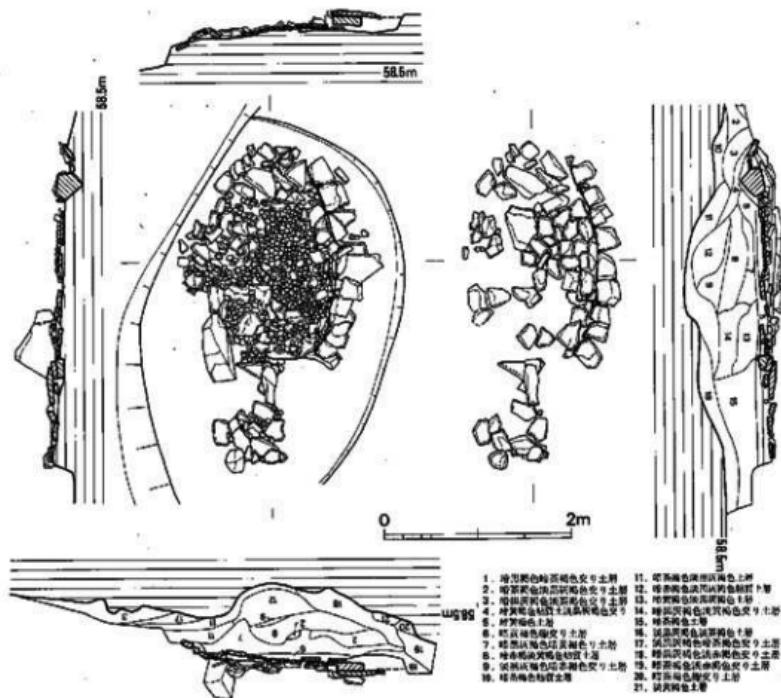


第 66 図 埋甕に使用された土器実測図 (1/3)

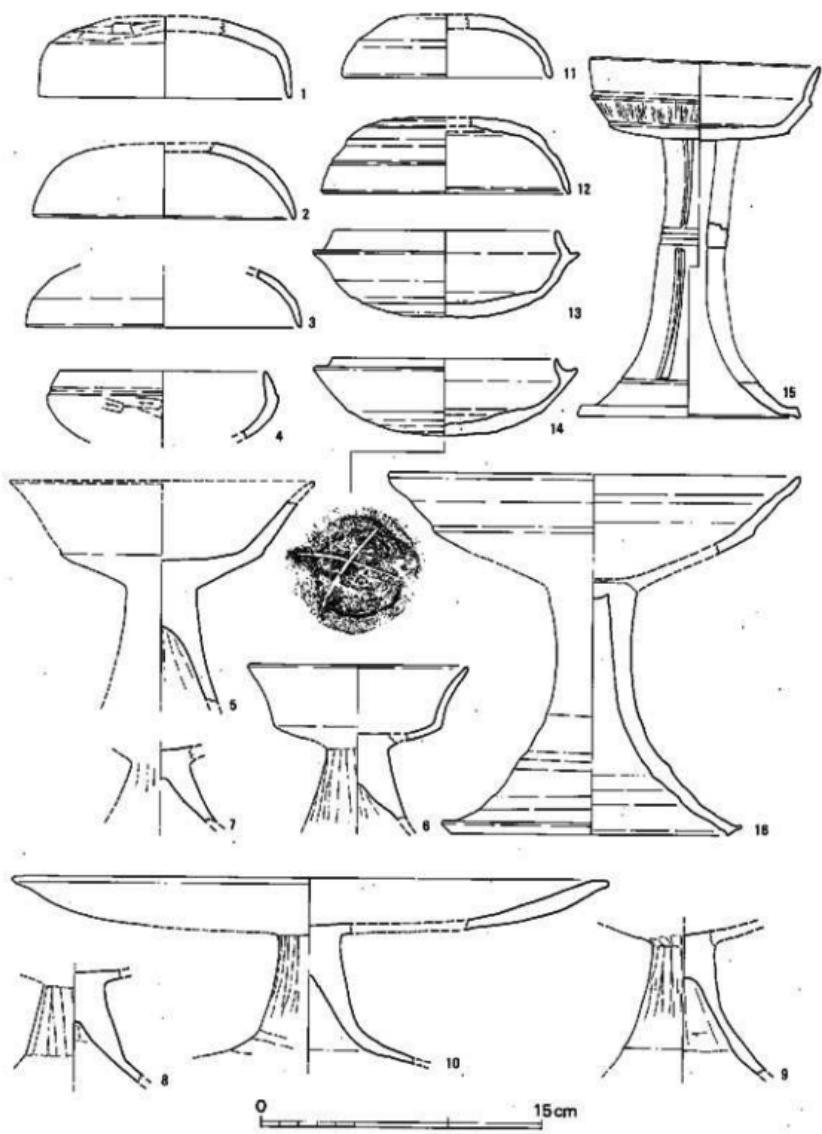
2号墳（図版50・51、第58・67図）

墳丘（図版50、第58図） 発掘区中央から検出された古墳で、朝倉高校調査時の5号墳にある。1号墳と同様、墳丘はすでに削平されていた。調査の結果、北西側が窓の開削で一部消失しているが、北側から南側にかけて周溝が検出され、円墳であることが判った。墳丘の規模は、周溝外径で14m、内径で10.7mを測り、径11mの円墳といえる。南西側周溝内からは土器器高杯や須恵器杯身・杯蓋・高杯などが一括して出土している。

主体部（図版51、第67図） 主体部は朝倉高校調査時の実測図と、今回の調査結果を勘案すると西に開口する両袖式の横穴式石室で、玄門前面に遺存する敷石からすれば複室式であった可能性が高い。主軸方位はN-83°-Wを指す。朝倉高校が調査した時点では、奥壁の大きな一枚石と両玄門石は存在したが、今回は残っていなかった。一部、北側の玄門石と思われる立石は



第 67 図 2号墳石室実測図 (1/60)



第 68 圖 2 号墳出土土器實測圖 (1/3)

あったが、朝倉高校の図面をみると移動していることが判る。玄室は北側側壁が全て欠失しているが、南側側壁と敷石の状況から剥張りプランと思われる。奥壁側の敷石は石室掘り方と奥壁の位置を考えると、その一部は後日動いたものとすべきで、南側側壁の東端部に奥壁がつくものであろう。玄門部も南側側壁西端部につくもので、敷石の範囲とも一致する。敷石は2枚あり、上層は玉砂利、下層は緑泥片岩の板石を用いている。石室の石材は全て緑泥片岩である。前室は両側壁もなく、その規模やプランも不明である。玄室の規模は、長さ約2.1m、中央部幅約1.65m、複室部の敷石までの全長は約3.3mを測る。副葬品は玄室内から耳環3個が出土したと記録されている。

なお、敷石を除去して下層を掘り下げた結果、石室構築前にいったん下層を下げた後に整地してから構築していることが判った。本墳の築造時期は西側周溝から出土した土器群から6世紀後半と思われる。

出土遺物（図版68、第68図）

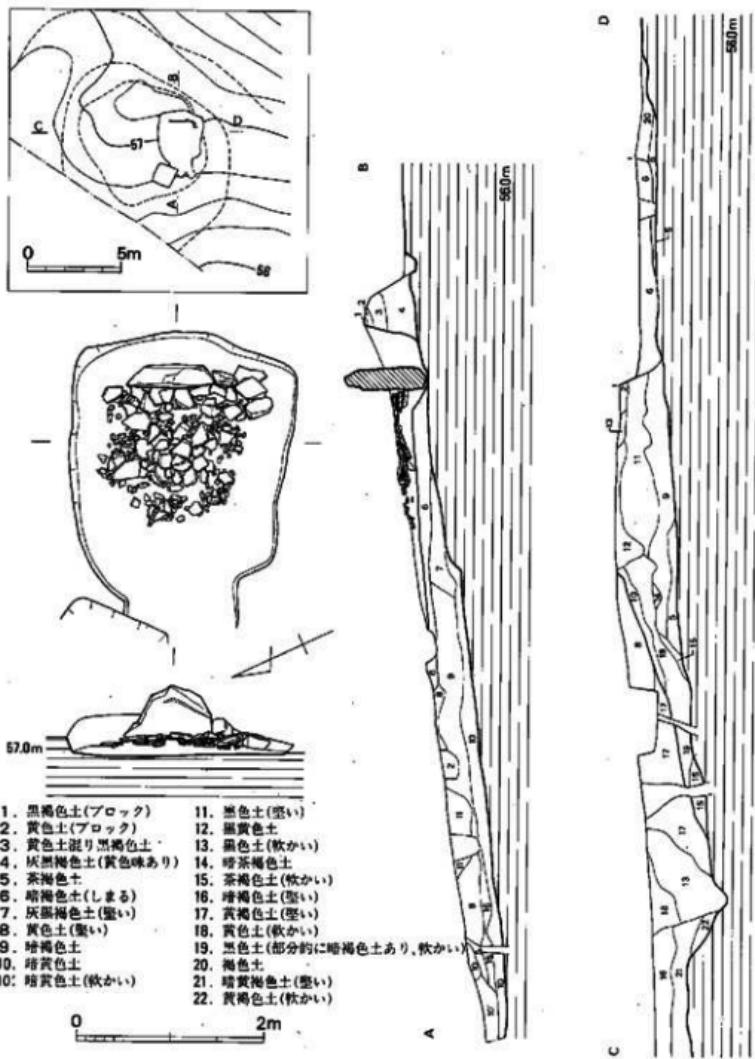
土師器杯蓋（1～3） 天井部が比較的平坦で口縁部が立つもの（1）と口縁部が傾斜し、丸味をもつもの（2・3）がある。1は天井部外面ヨコヘラ削り、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ調整である。2・3は内外ともヨコヘラ磨きで仕上げ、黒漆を塗布している。復原口径1が13.4cm、2が13.8cm、3が14.7cmを測る。色調は1が黄褐色、2が淡黄褐色、3が暗黄褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。南西側周溝内出土。

土師器杯身（4） 復原口径11cmを測る小型の杯身で、蓋受部は曖昧で沈線状をなす。体部外へラ削り、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ調整である。色調は黄褐色を呈し、焼成良好である。南西側周溝内出土。

土師器高杯（5～10） 大きくは二種類がある。杯部体部外面が有段状をなし屈折するタイプ（5～9）と杯部が盤状のもの（10）があり、さらに前者には大小がある。5は大型、6～9は小型品である。いづれも軟質で器面の風化が著しいため、調整が不明なものが多い。6～10の柱状部は縦位のヘラ削りで、内面は残りの良い9はヘラ削りし、檐部はヨコナデで仕上げている。復原杯部径6が11.7cm、10が31.8cmを測る。色調は5・7・9・10が黄褐色、6が淡黄褐色、8が褐色を呈し、焼成も良い。いづれも南西側周溝内出土である。

須恵器杯蓋（11・12） 体部外面の屈折線が不明瞭なタイプで、11は復原口径11.2cmと小型、12は13.3cmと大きいものである。12の口唇端部内面は内傾し、回線状をなす。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は11がナデ、12は口縁部内外とともに回転ナデで仕上げている。色調は11・12とも外面が暗灰色、内面が灰色で、焼成は堅緻である。11は南西周溝内、12は墳丘出土。

須恵器杯身（13・14） 復原口径は11.9cmと同一で、器高は13が4.6cm、14が4.1cmである。体部下半外面回転ヘラ削り、内面ナデ、口縁部から体部上半は回転ナデ仕上げである。14の底部外面にはヘラ記号がみられる。色調は13が外面暗灰色、内面黄灰色、14は暗灰色を呈し、焼成はいづれも堅緻である。



第 59 図 3号墳実測図 (1/60)

須恵器高杯（15・16） 15は口径12.1cm、器高19cmの脚部のスマートな高杯である。杯部は中程と杯底部境に段がつくもので、脚部は細長く、上下二段に透しが入る。裾部端部は嘴状をなす。杯部外面下半に櫛歯による刺突文が、脚部中位に2条、裾部に1条の沈線がめぐる。杯部は体部内外回転ナデ、内底部ナデ、脚部内外と杯部外底は回転ナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈して、裾部には灰かぶりがみられ、焼成は堅緻である。16は、復原口径21.8cm、裾部径16cm、推定器高19.2cmを測る。杯部外面に段をもつ杯部に、ラッパ状に大きく開く脚部がつく高杯である。内外とも回転ナデで仕上げた技術的には須恵器だが、色調は褐色を呈す土師質の土器である。

3号墳（図版52、第58・69図）

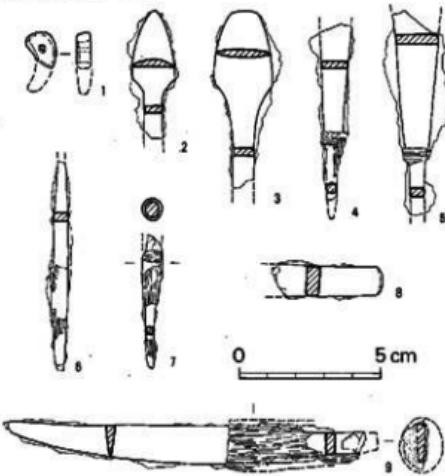
墳丘（図版52、第58図） 2号墳の西側から検出された古墳で、一部、墳丘は残存していたが正確な規模や墳形は不明である。しかし、北側に遺存した封土の裾部から石室中央部までの距離は約6mを測り、北側交換点とはほぼ一致する。しかし、東側と南側の交換点は畠地造成時のものと思われる。なお、円墳だとすれば径12mの古墳となる。周溝は造構プランとしては確認できなかったが、墳丘断面をみると浅い周溝が存在したようである。また、石室の構造は一定程度盛土した後に、掘り方を掘って構築したものである。

主体部（図版52、第69図） 奥壁と南側側壁の一部を残すだけの遺存状態の悪い石室であるが、掘り方の規模などから单室の横穴式石室と思われる。南側側壁の一部と敷石の状況から玄室は胴張りプランの石室と考えられる。奥壁は中央に大きな1枚石と小さい石1個を据えている。側壁は奥壁側から2石を残すだけで、北壁は全く残存していないかった。敷石は緑泥岩製の扁平な板石を使用し、一部に河原石も使用している。玄室の規模は、その大半が欠失しているため不明であるが、残存する部分で奥壁幅1.15m、長さは敷石の範囲で1.4mを測る。玄室内南東部床面上から鐵鏃片6点、中央から刀子2点が出土した。

出土遺物（図版69、第70図）

勾玉（1） ガラス勾玉の半欠品で、色はダークブルーである。玄室内出土。

鐵鏃（2～7） いづれも玄室内か



第70図 3号墳出土玉類・鉄器実測図(1/2)

ら出土した破片資料である。2・3は柳葉式、4・5は鷹頭式の鎌で、6・7は茎部の資料である。4～7には木質が残り、4・5・7は桜皮も一部遺存している。

刀子（8・9）8は柄部の破片、9は柄部と切先の一部を欠失するがほぼ完形品である。9は柄部に鹿角が残っていて、断面は梢円形をなすと思われる。現存長12.7cm、刃部長8cm、刃部最大幅0.85cm、身厚0.35cm、柄部現存長4.7cmを測る。

4号墳（図版53、第58・71図）

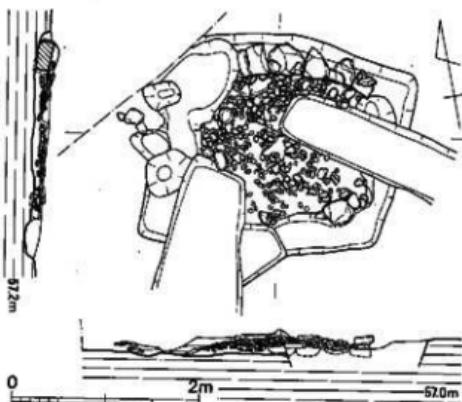
墳丘（図版53、第58図）2号墳の北側から検出された円墳で、北半部は未掘である。墳丘は他の古墳と同様、削平され消失している。調査の結果、東側から南側にかけて周溝が検出され、円墳であることが判った。北側には周溝が存在しないが、6号墳に近接するため、当初から掘削しなかったと思われる。墳丘の規模は、北半部が未掘のため不明な点が多いが、外径約13m、内径約9.5mを測る。

主体部（図版53、第71図）柿の肥料穴などでの破壊が著しい石室で、若干不明な点を残すが両袖单室の横穴式石室と思われる。主軸方位はN-72°Wを指し、西に開口する。玄室は北側壁と南側壁の一部を残すだけで、奥壁も玄門石も欠失している。奥壁は掘り方からしたら2号墳と同様、一枚石と考えられる。玄室の平面形は胴張りプランで、敷石は河原石を敷いている。玄室の規模は、不明な点が多いが、敷石の状況と石室掘り方から推定すると、長さ約1.8m、中央部幅約1.6m、奥壁幅約1mとなる。石材は扁平な緑泥片岩を使用している。

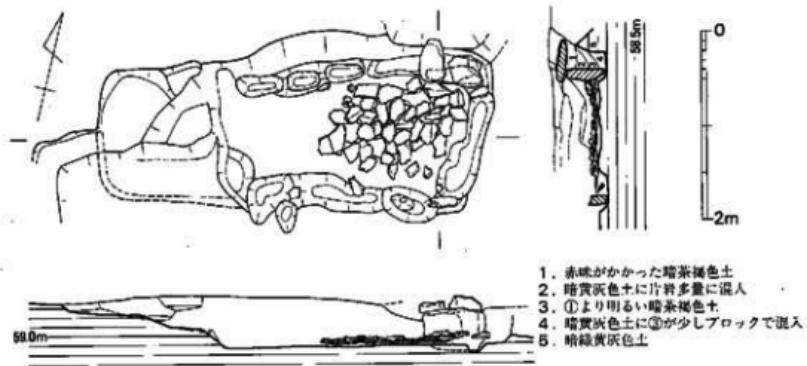
5号墳（図版54、第58・72図）

墳丘（図版54、第58図）1号墳の東側から検出された円墳で、朝倉高校調査時の3号墳にあたる。墳丘は他の古墳と同様、削平され消失している。調査の結果、南側は烟の闇削で欠失していたが、西から北側にかけて一部がとぎれるものの周溝が検出され、円墳であることが判った。墳丘の規模は、外径で約9.5m、内径で7.3mを測る。

主体部（図版54、第72図）石室は著しく破壊されていたが、残存する石材と朝倉高校調査時の災測図などをみると、西側に入口部を持つ竪穴系横口式石室であることが判る。主軸方位



第71図 4号墳石室実測図(1/60)



第72図 5号墳石室実測図 (1/60)

はほゞN-104.5°-Wを指すと思われる。石室は北側と南側側壁の一部を残すだけである。朝倉高校の記録によれば、奥壁は3枚の縦長の石を使用している。他は、北側側壁が2石存在していた程度で、残存状況は同じである。石室内は扁平な板石を敷いている。側壁の腰石は、横長の扁平石を立てて、その上は扁平な割石を小口積みした石棺系の竪穴式石室である。石室の平面形は、側壁石の抜跡から奥壁側が広く、玄門側に狭い羽子板形を呈す。入口部は一段高くなり、斜めに上方に立ち上がる構造である。なお、石室内からは緑色のガラス小玉1個が出土したと記録されている。

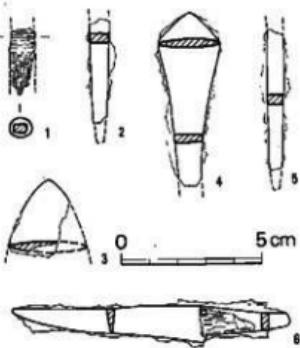
出土遺物 (図版69、第73図)

鉄鎌 (1・2)、茎部の破片資料である。1は木質と桜皮が残り、断面楕円形をなす。茎部の断面はいづれも長方形である。石室内埋土中出土。

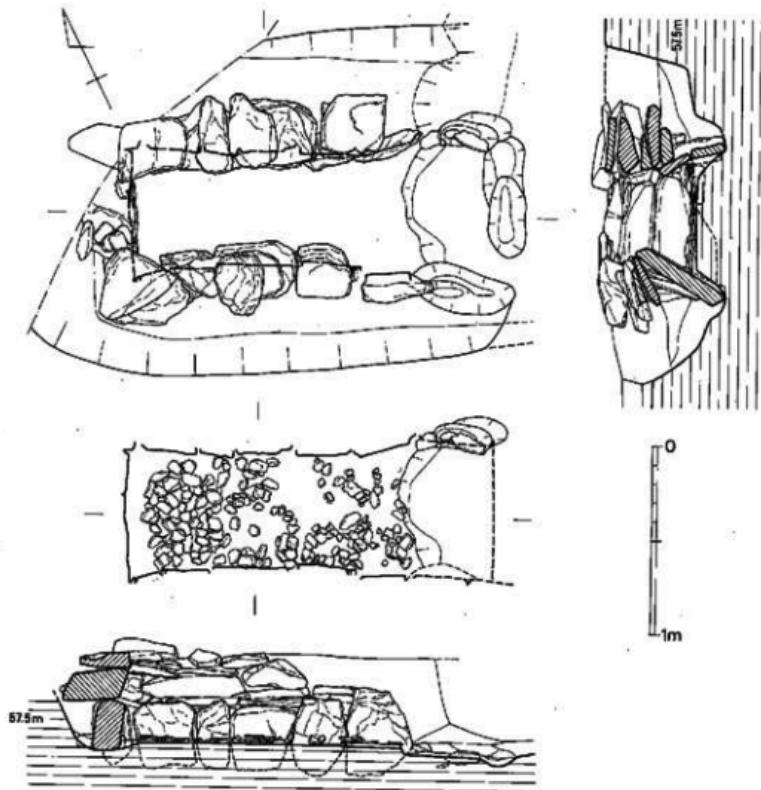
6号墳 (図版55、第58・74図)

境丘 (図版55、第58図) 4号墳の北東に隣接して検出された円墳で、北半部は未調査である。墳丘は他の古墳と同様に消失しているが、調査の結果は、削平され浅くなっていたものの南側からは周溝が検出され、円墳であることが判った。墳丘の規模は、北半部が不明のため明確ではないが、外径で約7.5m、内径で6.3mを測る。7号墳とは、同規模の古墳である。

主体部 (図版55、第74図) 東側小口部が柿の肥料穴で破壊されているが、石棺系の竪穴式石室といえる。主軸方位はN-64°-Wを指す。腰石は、扁平で縦長の石を立てて、その上は扁平



第73図 5・6号墳出土鐵器実測図 (1/2)



第 74 図 6号墳石室実測図 (1/30)

な割石を小口積みしている。また、腰石は後世の土圧によるものか内傾が強い。床面には雲母片岩の小さい割石が敷かれている。石室の石材も全て雲母片岩である。規模は東側小口部が破壊されているため、不明な点はあるが、小口部の石の抜跡からすれば、長さ約1.92mとなる。幅は中央で0.62mを測る。また、頭位も明確ではないが、抜跡の位置からして東側と思われる。石室内全面に赤色顔料の塗布がみられる。

出土遺物 (図版69・70、第73図)

鉄剣 (1) 切先の小破片で、断面は扁平な両丸造的な断面をなす。石室内出土。

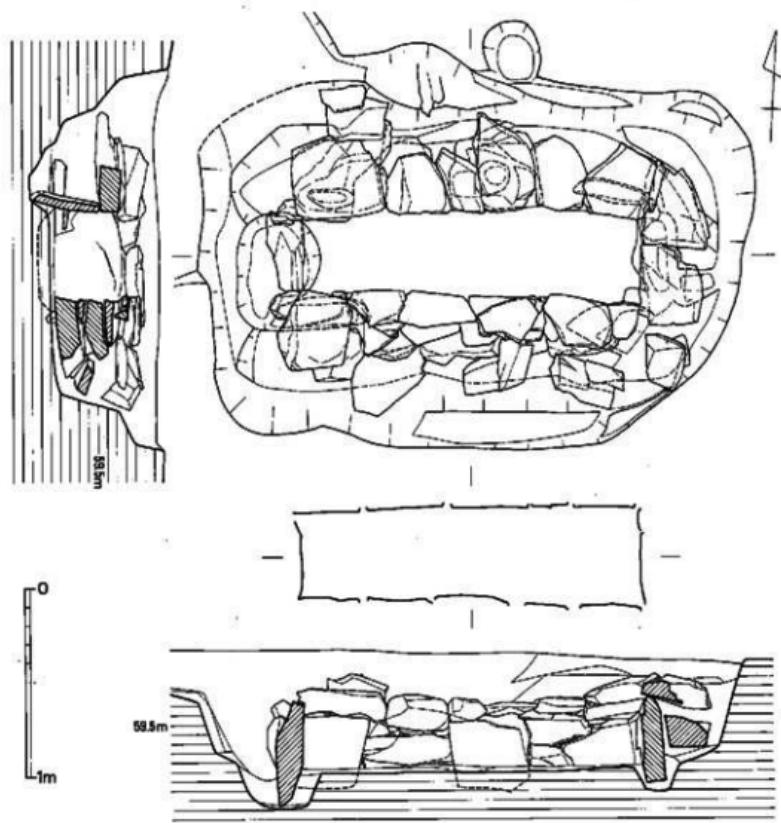
鉄鎌 (4・5) 4は三角形式で、5は茎部の破片資料である。4は刃部最大幅2.2cm、刃部

中央厚0.25cm、現存長6.2cmを測る。石室内出土。

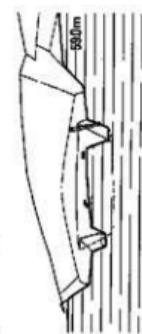
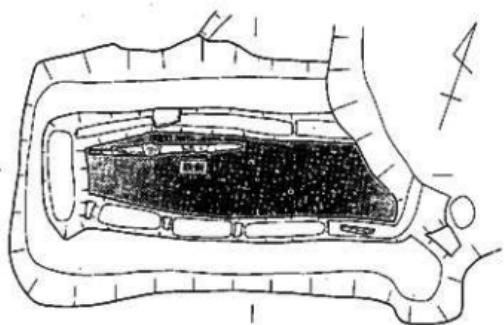
刀子(6) 小型の刀子で、全長9.9cm、刃部長6.7cm、柄部長3.2cmを測る。柄部には一部に鹿角が残存する。

7号墳 (図版56、第58・75図)

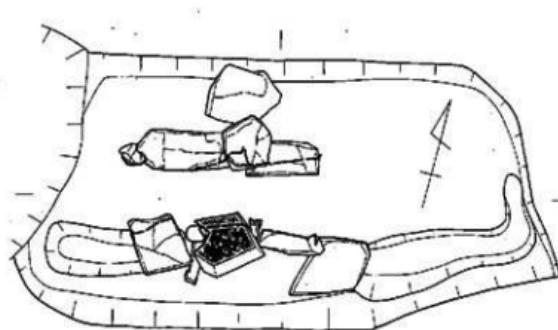
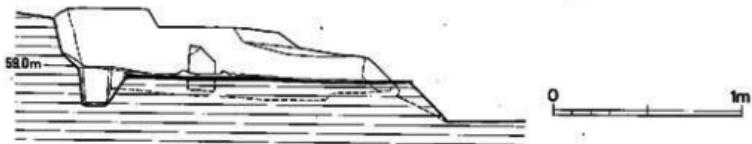
墳丘 (図版56、第58図) 2号墳と5号墳の間から検出された円墳である。墳丘は既に削平され消失している。調査の結果、東側は畠の開削で欠失していたが、北側から南側にかけて削平



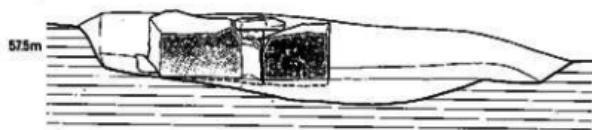
第 75 国 7号墳石室実測図 (1/30)



8



9



第 76 図 8・9号填石室実測図 (1/30)

は著しいものの周構の存在が確認できた。墳丘の規模は、外径で約8.3m、内径で約6.3mを測る。

主体部（図版56、第75図） 石棺系の堅穴式石室で、蓋石は除去されていたが最も残りの良い石室である。両小口は扁平な石を立てて、側壁の腰石は縦長の石を立てた所と横に据えた所がある。2段目以上は扁平な割石の小口積みである。石室の規模は、長さ1.8m、東小口幅0.53m、西小口幅0.46m、残存壁高0.45mを測る。主軸方位はN-87'-Wを指し、頭位は東である。なお、石室内は全面に赤色顔料の塗布がみられた。棺材は全て雲母片岩である。

8号墳（図版57、第58・76図）

墳丘 5号墳石室に一部切られた状態で検出されたものである。すでに削平され、墳丘も周溝も確認できない古墳で、墳形も不明である。

主体部（図版57、第76図） 棺材は全て抜き取られていたが、抜跡から石棺であったといえる。従って、6・7号墳のような石棺系の堅穴式石室であったかは不明である。石室内からは柄部を西小口に、切先を東に向いた鉄劍1本が北壁側床面から出土した。その南壁側からは鐵鎌片も出土している。床面は赤色顔料が塗布されている。全長82.4cmと長大な鉄劍は古墳時代のもので、弥生時代後期のものと考える1・2号石棺墓とは区別しておきたい。主軸方位はN-72'-Eを指す。一部残存した石材片から石棺材は雲母片岩と思われる。

出土遺物（図版70、第77図）

鉄劍（第77図） 基部の一部を欠失するがほぼ完成品で、基部は少し弯曲している。復原全長82.4cm、身部長66.5cm、基部長15.9cm、身幅は最大部（関節）で4.6cm、鋒先近くで2.9cmと細くなる。身部には明瞭な鎬はなく、両丸造的な断面形態である。鋒先の一部に鞘の木質が残存する。

9号墳（図版57、第58・76図）

墳丘（図版57、第58図） 5・8号墳の南側斜面から検出された古墳である。墳丘は烟の開削で完全に消失し、周溝も残存しない。従って、墳形も不明である。

主体部（図版57、第76図） 著しく破壊されていたが、残存する石材から石棺系の堅穴式石室といえる。両側壁の一部を残すだけである。腰石は扁平で縦長の石を立てて、その上は扁平な割石で小口積みして



第77図
8号墳出土鉄器実測図 (1/4)

いる。剥落した部分もあるが側壁には赤色顔料の塗布がみられる。南壁中央の棺材上面に赤色顔料の塗布がみられるが、側壁が倒れたものと思われる。規模は不明だが中央部での幅は0.37mである。

表 5 占墳計測一覧表

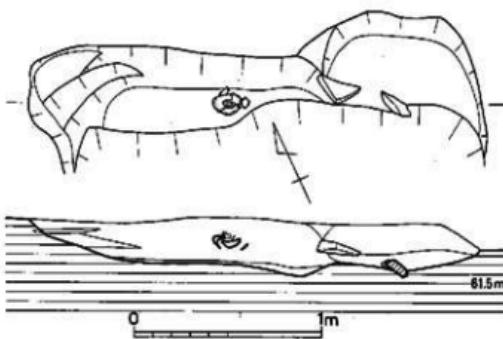
(単位m)

NO	墳丘規模		石室構造	主軸方位	玄室				横進		石室容積	出土遺物	旧番号	
	外径	内径			長	最大幅	仰壁幅	玄門幅	平面形	長	幅			
1	(14.5)	(10.5)	平塗横穴式	N-74.5°-W	(3.15)	(1.6)	(1.5)	(0.4)	扇子板形	1.2	0.92 1.2	(4)		1号
2	14	10.8	複室横穴式?	N-83°-W	(2.1)	(1.65)	(1)	-	網目形?	-	-	-		2号
3	14.6?	12?	平塗横穴式	N-65°-W	(1.4)	(1.4)	(1.15)	-	扇子板形?	-	-	-		3号
4	(13)	(9.5)	?	N-72°-W	(1.8)	(1.6)	(1.2)	-	網目形?	-	-	-		5号
5	(9.5)	7.3	堅穴系縦口式	N-104.5°-W	(2.4)	(1.24)	(0.9)	(0.55)	扇子板形	(3)	(2)	○		4号
NO	墳丘規模		石室構造	主軸方位	石室内法				掘り方		周溝	出土遺物	旧番号	
	外径	内径			長	頭底幅	足底幅	深さ	傾位	長	幅			
6	(7.5)	6.3	石棺兼窓穴式	N-64°-W	(1.92)	(1.42)	0.86	(0.48)	東?	(2.57)	1.8	○?		C-6
7	(8.3)	(6.3)	?	N-87°-W	1.8	0.53	0.46	(0.65)	?	2.95	2	○		C-4
8	-	-	石棺系堅穴式?	N-72°-E	(1.7)	(0.38)	-	(0.35)	西?	(2.4)	1.37		鉢形1	C-3
9	-	-	石棺系堅穴式	N-76°-W	(2.6)	-	-	(0.45)	東?	2.75	1.45			C-5

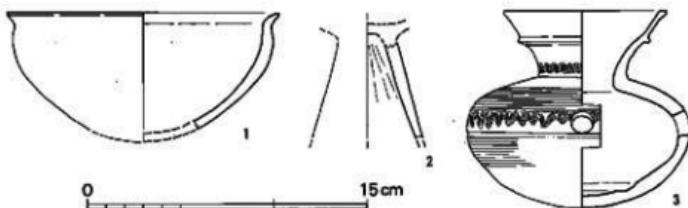
※ 墳丘模様の外径は周溝を含み、内径は周溝内径を示す。() 現存長を示す。

1号土塚墓（図版58、第58・78図）

7号墳の南側周溝を切った状態で検出されたもので、南半部は柿の肥料穴で破壊されている。また、東側小口もピットと複合している。残存する部分での全長1.57m、幅0.46m、深さ0.25m、内法長1.17m、内法幅0.24mを測る小型の土塚墓である。また、床面より浮いた状態で、ほぼ元形の須恵器甌1個が出土した。他に、土師器碗と高杯脚部片も出土している。時期は5世紀後半でも中頃に近い時期のものであろう。なお、この土塚墓は周溝



第78図 1号土塚墓実測図 (1/30)



第79図 1号土器出土実測図(1/3)

の一部分が残存したものであるという可能性も否定できないが、ここでは一応、区別したものである。

出土遺物 (図版70、第79図)

土師器碗(1) 復原口径14.6cmを測る深目の椀で、口縁端部は短く強く外反する。体部の形状からすれば、底部は尖り気味の丸底と思われる。調整は口縁部付近内外はヨコナナデであるが、他は器面の風化が著しく不明である。色調は黄褐色を呈し、焼成は良い。

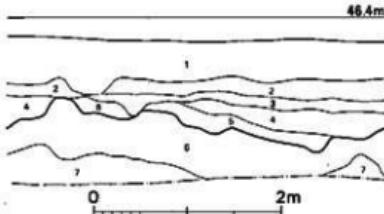
土師器高杯(2) ラッパ状に聞く高杯の柱状部である。内外とも器面の風化が著しく調整は不明である。色調は褐色を呈す。

須恵器碗(3) 口縁部の一部を欠くだけであるが、ほぼ完形の碗である。扁球形の胴部中位には2条の沈線がめぐり、その間を櫛目波状文が施されている。また、頭部下端にも櫛目波状文がめぐる。口縁部下端の屈折稜は明瞭で凸帯状をなし、口縁端部上面は凹線状をなしている。口縁部内外は回転ナナデ、胴部外面はカキ目、下半はナナデ仕上げている。色調は外面暗灰色、内面灰色を呈し、胴上半には灰かぶりがみられる。焼成は堅緻である。
(井上)

(2) 溝状造構 (図版59、第86図、付図1)

南東斜面下端部の谷と接する調査区で検出された南西~北東方向に走る溝状造構である。幅9m、長さは10mほど確認した。底面は全体として浅いU字状を呈すが、凹凸が著しく土層の堆積も不安定である。

溝の埋土は1層が耕作土で約40cm、2層は暗茶褐色土で10~20cm。土錐が出土。3層は黒色土で砂質10cm内外の層厚で、糸切り土師器を出土。4層は茶褐色土で10~30cmの層厚。古墳時代から弥生時代前期末頃の遺物が若干出土。5層は黒褐色砂質土で溝の最下層である。10~15cmの厚さだが溝



第80図 溝状造構土層断面図(1/60)

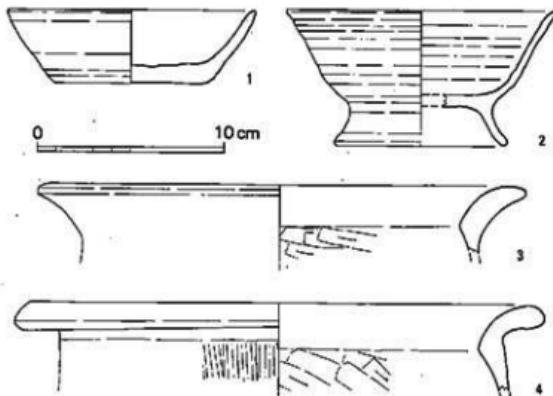
全体に堆積する訳ではない。6・7層は地山で、黄褐色粘質土・暗緑褐色礫層となり谷部の粘土層へ移行していく。

出土遺物（第81・82図1～9）1は糸切りの土師器杯で、厚味のある底部から外方に広がる器形。口径13.3cm、器高4cm、底径8.2cm。2は高台付椀で、口縁部が外反する椀部と、2cmに達する高い高台部はやはり外反する。体部はロクロ目が著しく、外面は漆塗りされる。復原口径14.4cm、器高7.3cm、高台径9.2cm。1・2とも3層出土。3・4は土師器裏ないし瓶の口縁部片で、内面頭部にヘラケズリによる棱を作り出す。

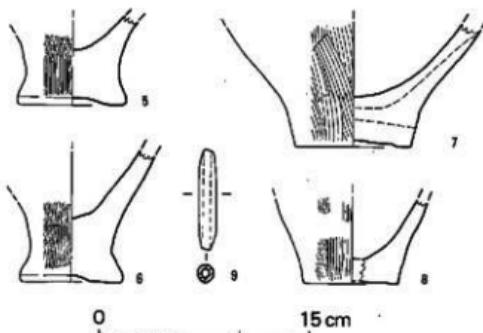
4の口径28.3cm、両者とも古墳時代後半頃か。5～8は弥生土器の底部。5・6は厚さ3.5～4cmの部厚であげ底の底部。7は壺で底径8.2cm。前期末から中期前半頃であろう。いずれも4層出土。9は細身の土鉢で完形品。長3.5cm、径0.6cm、孔径0.3cm。茶褐色を呈し、焼成は良好。2層出土で中世以降であろう。

出土遺物から、この溝状造構は弥生時代前中期頃に開削され、埋没・掘削をくり返しながら中世まで機能していたと考えられるが、埋土からは水に覆われた形跡はない。

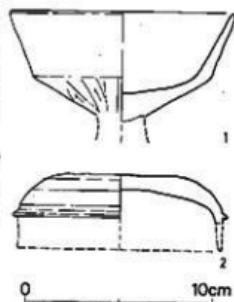
(木下)



第81図 溝状造構出土土器実測図(1/3)



第82図 溝状造構出土土器・土鉢実測図(1/4・1/2)。



第83図 土師器・須恵器実測図(1/3)

(3) 採集遺物 (第83図)

土器器(1) 高杯の杯部の破片資料で、復原口径12.1cmを測る。杯部外底部へラ削り、内面ナテ、体部内外はヨコナテ調整している。色調は茶褐色を呈し、焼成良好である。

須恵器(2) 復原最大径11.4cmを測る杯蓋の破片資料である。天井部は平坦で、体部外面の屈折稜は突出し、シャープである。天井部外面は回転ヘラ削り、内面と体部内外は回転ナテ仕上げである。色調は暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。

(井上)

5. おわりに

(1) 先土器時代について

本文中で、AT火山灰との関係で述べたように、少なくとも台地上II区での先土器時代の遺物の出土状況は、プライマリーな状態とはいえないことは事実であろう。しかし、台地下のIII区に関しては、層位的混乱を示す考古学的事実ではなく、プライマリーな状況と判断して良いと思われる。その場合II区で分析した火山灰との関係であるが、現場で検討した、各地区的土層の併行関係に誤りがないとすれば、これら先土器時代遺物は、いずれもAT火山灰の直上に出土していることになる。遺物のあり方からして、矛盾するものではない。

III区の土層の堆積状況と、周囲の地形を観察すると、周囲にこれらの先土器時代遺物が流れ込むような、生活面らしい地形は認められない。おそらくは、この陥られた約150m²の凹地に、流れ込みでない遺物包含層が本来的に形成されたと考えるのが妥当であると思われる。土層の堆積の仕方にも、あたかも、岩陰または洞穴跡にみられるのに近い様子を示している。もちろん地形からといって洞穴跡であったとは考えられないが、南に開口した岩陰跡の性格(岩陰というより、土層の断層的変動で形成された凹地)を持つ生活址を考えることができると推定される。出土遺物の少ないのも、長期的・継続的に居住された場所ではなく、季節的に一時的に居住した場所として利用されたものと考えられる。

(2) 縄文時代について

縄文時代遺物は、時によってその遺物分布の中心地は異なっている。早期は、II区の谷状地形とI区の1号墳周辺に多く認められるが、遺構の検出されているのはII区のみである。集石遺構は、炉としての集石と、かなどに使用した礫を廃棄した場所の2ヶ所である。遺物の拡りからして、おそらくこれ以上の集石はなかったと考えてもよく、あっても1~2ヶ所ぐらいのものであろう。隣穴状遺構については、内部より押型文土器が出土しており、早期の遺構であることが位置づけられている。設定された場所であるが、南北にのびる台地の丁度鞍部に設けられている。主軸方向は、鞍部に対して直交するものと、並行するものがあり、けもの道に対

して、いずれの方向からでも利用できるように、両者同時に設けたものか、時期的にずれがあるのかは定かではない。注目されるのは、逆茂木の痕跡が認められたことで、その木の太さは7cm程と推定される。これらの陥穴状造構が、この位置に生活している時につくられたものか(居住空間のすぐ脇に)、キャンプサイトとして、移動の合間に設定されたものか、不明であるが、おそらく後者と考えた方が妥当であると思われる。

前期遺物は、I区1号墳周辺に集中、中期遺物は、I区1号墳周辺と、II区の2ヶ所に分散するが遺物の量は多くない。後期は2号墳周辺にまとまっている。以上の状態は、各時代における小集団が、一時的な利用を行った痕跡と考えることができよう。晩期遺物は、I区1号墳周辺に広く、II区に広く散布しており、前時代より利用空間が広がったものとすることはできるが、遺物量からしても、台地面積からしても、そう大きな集団ではない。

縄文時代の石器は、全体的に量は少なく、検討するにはいささか難はあるが、石鎚とスクレイバーが多く、石斧類がきわめて少量で、磨石・凹石も少ないので、トータルな石器の組合せとしては、いささか不足な部分があり、この石器群からだけすれば、比較的狩猟に比重の置かれた、一時的で非連続な居住地であったといえよう。ただ、漁網鍼として利用される大きさの石錐が出土しており、漁撈的性格を持っていたとすると、定住的に生活していた時期もあったと考えて良い。

(木村)

(3) 木棺墓について

(i) はじめに

筑後川流域の発掘調査が増加している昨今、従来より確認されていた木棺墓の調査例が増加した他に、小口部に石材を用いる所謂組合わせ型木棺墓と発見した遺跡数も増加した。後者の例を挙げると、小都市の三国の鼻遺跡(註1)、甘木市の柿原遺跡群F地区(註2)と平塚大願寺遺跡(註3)が報告されている。この他では、同じ横断自動車道関係の杷木町に所在する杷木宮原遺跡(註4)でも確認されており、また、筑後川南岸の浮羽町に所在する岩野遺跡(註5)でも良好な資料となる木棺墓を見ついた。

上記に挙げた木棺墓の時期は、大半以上が弥生時代前期末頃から中期初頭にかけての所産と考えられる。また、この種の木棺墓の分布は筑後川流域に多数存在することから、この地域が墓制に関して一つの文化圏を構成していると判断するのは早計であろうか。以上の事象を念頭に置き、構造や配列について考えてみる。

(ii) 構造について

本文中でA・B類とI・II類の4つの組合せに大別したが、ここではA・B類を主に考えてみる。確実にA類と判断されたのは13基を数えたが、小口石が抜き取られたと考えられる30号木棺墓を加えても3割には達しない。当遺跡でもB類が主体となるのは疑う余地はない。ま

た、先後関係からA類は築造期間の中頃に隆盛すると考えられよう。これらをまとめると、当初は所謂木棺墓を造っていたが、中頃に組合わせ型木棺墓となり、その後旧来の木棺墓に戻ったと解釈される。この様な系譜が何に起因したかを考えてみよう。

まず、A類の構造について述べると、代表例として挙げられるのは33・40・42号木棺墓である。他の10基に関しても、裏込め土と棺内流入土との相違が認められ、組合わせ型木棺墓であることは間違いかろう。先ず、33号木棺墓の再検討を行う。堆積状況では、裏込め土と棺内流入土とは基本的に同じ土質であるが、組成を異にすることから木質部が腐蝕した後に、封土が棺内に流入した状況を呈していた。また、棺の短軸と小口石の幅とは歴然とした差異が認められ、側板が小口石を挟む形態となる木棺が想定出来よう。40・42号木棺墓も略同じ堆積状態であるが、木棺の形態は逆に小口石が側板を挟むタイプと考えられる。他の木棺墓の大半以上は後者のタイプとなる。その他には、32号で確認された事象ではあるが、棺の寸法は被葬者の身長等だけでなく、材料にも規制された例も見受けられた。

B類の堆積状況はA類と殆ど差異が認められず、小口部に石材か木材を用いただけの差と考えられた。また、I・II類と小口部に掘り方の存否の違いがあるものの、時期によりB類内での構造の違いは見い出せなかった。このB類の代表例としては45号木棺墓が挙げられる。

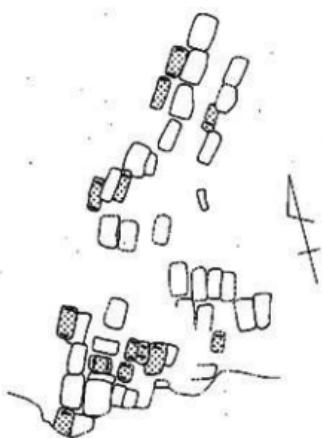
45号はI類に属す。木棺は若干北偏しているも、小口部の立ち上がりも確認出来た。この墓の特徴は標石が在したことであり、標石から墳底までの深さが1.4mに達していることである。この様な土壘頭状の標石が存在したこと、僅かに墓壙が切り合うも、棺自体を切削しているのが1例であったことは首肯出来よう。なお、B類における棺の構造等詳細な点については解明出来なかつたし、I・II類及び小口部の掘り方の存否等の配置にも規則性を見出せなかつた。

6 配置及び配列について

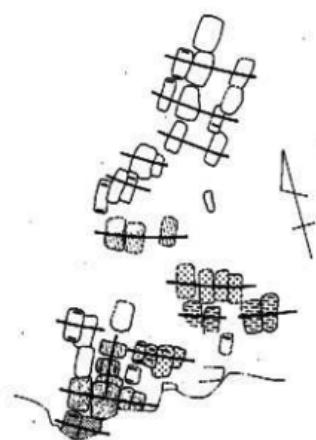
48基の木棺墓における配置及び配列に関して若干まとめてみる。第84図の①はA・B類の分布状況であり、前述した様に規則性は殆ど見出せない。

②は長軸方位が近似し、僅少切り合うか隣接して直列をなすグループを抽出した図である。特に、A列とB列は略並列となり、2本のラインも等高線のラインと略合致している。このA・B列と同じラインをとるのは1～4号木棺墓で、次の並列関係とも関連していく。

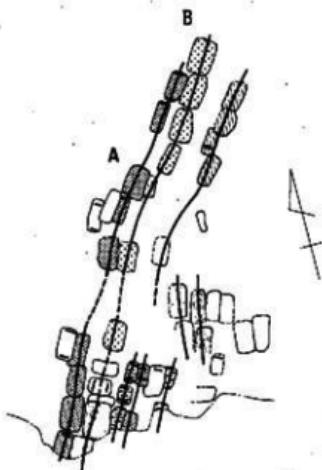
③は長軸方位が近似し、並列関係をなしたグループを抽出した図である。北半部では3基が1単位を構成しているが、南半部では4基ないし2基で単位を構成している。しかし、北半部の1～4号木棺墓の東側にも木棺墓が存在していたと仮定すると、2基ないし4基が基本的な単位と考えられる。上記より二列埋葬形態を呈していると言えるが、20～23号木棺墓と31～34号木棺墓は他と異なり、4基を1単位とみなすのが妥当となろう。本文中にも記した39・40・44号木棺墓であるが、長軸方位を大きく異なる4基中の3基が並列している。このグループから次の様な推測をするがどのようなものであろうか。二列埋葬形態を基調と考えるならば、



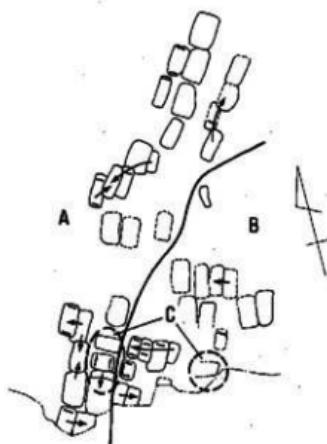
①A・B種の分布状況



②並列関係



③直列関係



④新旧関係と群構成

第 84 図 木柵墓の分布状況と群構成

39号と、44号が当る。両者の空間を墓道とする考え方もあり、その後に墓域が無くなつたか構成人員の関係に起因してか40号が造られたのではないかろうか。この事象は、20~23号と31~34号の二グループにも当てはまろう。

以上のことから、木棺墓は二列埋葬形態を基本として順次造られたと推定される。このグループは④図のA群である。しかし、B・C群については南調査区外の有様で判断すべきであり、一応Aグループとは若干異質な様相を呈しているに止めておく。なお、④図の矢印は新旧関係を示している。

付 おわりに

48基の木棺墓から出土した遺物は少なく、岡化できた品は11点である。これらの品も供獻された品とは考え難く、半数以上は表内より出土した品である。僅かな遺物であるが、時期は弥生時代前末から中期初頭の間に限定される。出土土器やこの種の木棺墓が限られた時期に見られることから判断して、上記の時期と大差ない頃が木棺墓の発造時期と言える。

付の項で十分に説明出来なかつた墓制に関して、④図のB群に4基が並列している点と特異なC群が存在することを提起するに止めた。しかし、三国の鼻遺跡（註6）等にも同様の例が確認されているので今後の課題としたい。

(武田)

註1 小郡市教育委員会 1986 三国の鼻遺跡II 小郡市文化財調査報告書第31集

註2 福岡県教育委員会 1987 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 一12—

註3 甘木市教育委員会 1989 平塚大願寺遺跡 甘木市文化財調査報告第22集

註4 朝倉郡杷木町に所在し、福岡県教育委員会が調査を行ない、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—21—として刊行予定である。

註5 浮羽町教育委員会 1990 岩野遺跡・浮羽町文化財調査報告書第5集

註6 註1と同じ

(4) 古墳群の変遷

今回、検出された古墳は総数9基である。その内の3基は、昭和30~33年に朝倉高校が調査した古墳と同一で、1号墳が朝倉高校調査時の4号墳、2号墳が5号墳、5号墳が3号墳にあたる。他にも3基（1号・2号・6号墳）の古墳が朝倉高校により調査されているので、総数12基の古墳が確認されることになる。なお、朝倉高校調査の1・2・6号墳については、今回発見した古墳と区別する意味で、号数の前にAを付することにする。ここでは、それらも含めた12基からなる上ノ宿古墳群の形成時期と、その変遷について触れ、まとめとしたい。

古墳群の形成時期 本古墳群の形成時期については、7号墳の周溝の一部を切った状態で検出されたと判断した1号上塚墓出土の須恵器甌（第79図3）が、一つの決め手となる。この土

器は陶邑編年によればⅠ型式3段階にはあたり、5世紀後半の年代が与えられている。従って、1号土壙墓より古い7号墳はそれ以前か、ほゞ同じ時期に築造された古墳といえるだろう。

形成時期の決め手となる1号土壙墓は、7号墳の周溝の一部という可能性もあり、さらに、主体部が石棺系竪穴式石室で、この石室構造がこの地域で一般化する時期が5世紀前半から後半ということとも符合し、本古墳群の形成時期を5世紀後半とみるのが妥当であろう。

他に、1号墳と2号墳からも年代の決め手となる土師器や須恵器が出土している。1号墳西側周溝内出土の一括土器は、須恵器杯蓋・杯身をみるとⅡ型式2段階に位置付けられる。しかし、北側埴丘から出土した須恵器甌（第61図21）は1段階に近い形態を残すので、2段階でも古式の時期と思われる。また、朝倉高校調査時に石室内から出土した須恵器甌はⅡ型式3段階ないしは4段階に比定できるもので、明らかに追葬が行われている。

2号墳周溝出土の一括土器は、須恵器杯蓋・杯身・高杯等の特徴はⅡ型式3段階から4段階に属し、6世紀後半～末の年代比定が可能であり、1分墳の追葬時にはほゞ併行する時期に築造された古墳といえる。従って、本古墳群は出土遺物からみるかぎり、5世紀後半から6世紀後半ないしは終末にわたって形成された古墳群ということができるであろう。

石室構造の変遷 12基からなる本古墳群の石室構造は多様で、遺存状態は悪いが大きく4タイプに分けることができる。いわゆる石棺系竪穴式石室といえるもの7基（6号～9号墳、A1号・A2号・A6号墳）、竪穴系横口式石室1基（5号墳）、玄室プランが羽子板形の古式の横穴式石室1基（1号墳）、玄室プランが胴張りのこの地域特有の横穴式石室をもつ古墳3基（2～4号墳）などである。

本古墳群における石室構造の差異は、先にも一部指摘したように出土土器や切り合い関係からしても、少なからず時間差として位置付けることは可能である。遺存状態が極めて遅く、不明な点を多く残すものの石棺系竪穴式石室と思われる8号墳の主体部の一部を切って構築された5号墳の石室は、いわゆる竪穴系横口式石室といわれる新出の石室構造である。構造の差異がそのまま時期差と一致している。

5号墳との新旧関係は不明であるが、1号墳の石室構造は玄室プランが羽子板形の单室で、古式の横穴式石室である。竪穴系横口式石室である5号墳の石室構造より後出する石室といえ、時期は出土土器から6世紀前半である。

2～4号墳は、いわゆる玄室プランが胴張りの横穴式石室を有す古墳である。時期は2号墳出土の土器が示す6世紀後半から末の時期といえる。従って、本古墳群は基本的に石棺系竪穴式石室→竪穴系横口式石室→玄室プランが羽子板形の古式の横穴式石室→玄室プランが胴張りの横穴式石室へと変遷したといえるだろう。

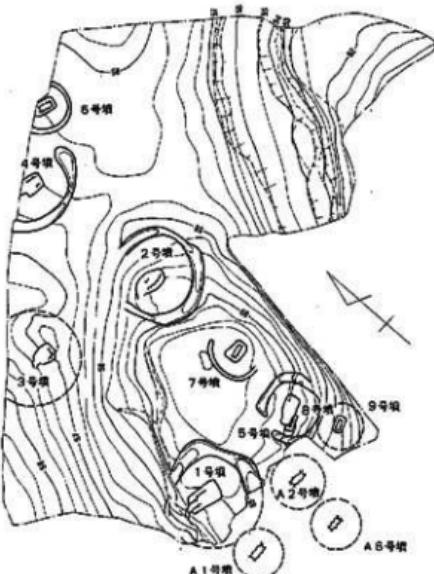
このように12基からなる本古墳群は、少なからず石室構造の差異とその変遷が、そのまま本古墳群の形成過程を示すという典型的な古墳群として興味深い。

古墳の分布 全体に出土遺物も少なく、各古墳の時期比定はかならずしも明確とはいえない。しかし、時期のわかる古墳からすれば石棺系竪穴式石室を持つA1号・A2号・A6号・6号・7号・8号・9号墳がまず形成され南北二群をなす。次いで竪穴系横口式石室の5号墳が南群の一角に築造され。その後、古式の横穴式石室をもつ1号墳が、最後に、玄室プランが胴張りの横穴式石室をもつ2号・3号・4号墳が発掘区中央の北側緩斜面に形成され、本古墳群が終焉するようである。

なお、石棺系竪穴式石室を有す古墳がいつれも同時期に築造されたかは明らかでないが、両小口と両側壁基底部は板石を立てて使用するという共通した石室構造は、さほど時間的隔たりもなく相前後して築造された古墳といえるだろう。従って、竪穴系横口式石室をもつ5号墳と一部併存した可能性も否定できないものの、その多くは前段階に形成された古墳というべきかもしれない。

一方、古墳群の分布状況については、朝倉高校調査時の配置図が現存しないため明確ではないが、「埋れていた朝倉文化」の記述をもとに、今回の記録と合わせて復原すれば第85図のようないくつかの配図状況であったと考えられる。

(井上)



第85図 古墳群の分布状況復原図（Aは朝倉高校調査番号）

(参考文献)

中村 浩 「陶邑 I~IV 大阪府教育委員会 1976~1979

柳沢一男 「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982

図 版



1 上り宿道跡遠景空中写真



2 上り宿道跡南半部全景空中写真

図版 2



1 II区全景



2 II区E 2-1、F 2-2区 箱層面(土層断面①・②)



1 土層断面⑤



2 土層断面⑥



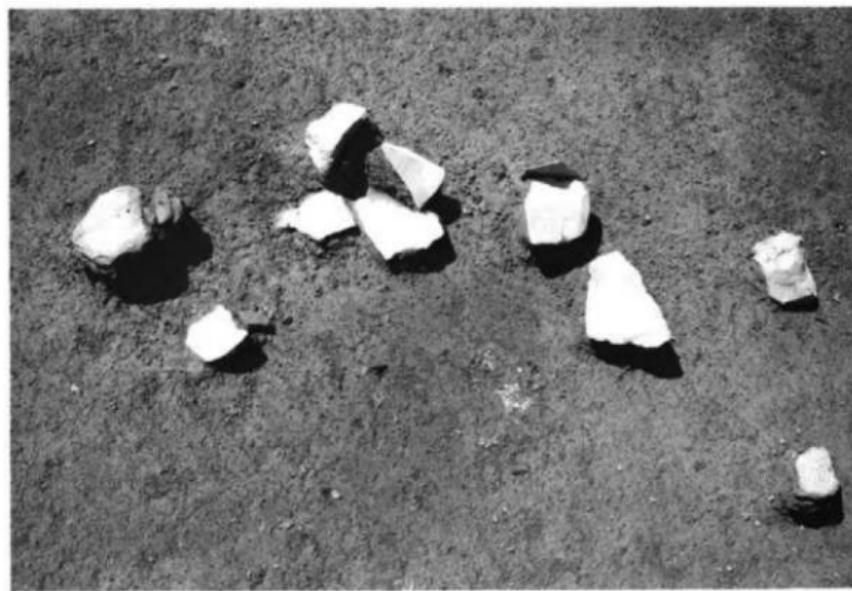
1 目区田层面1号集石道構



2 目区田层面2号集石道構



1 サヌカイト集石全景



2 サヌカイト集石近景



1 田区側層下面全景



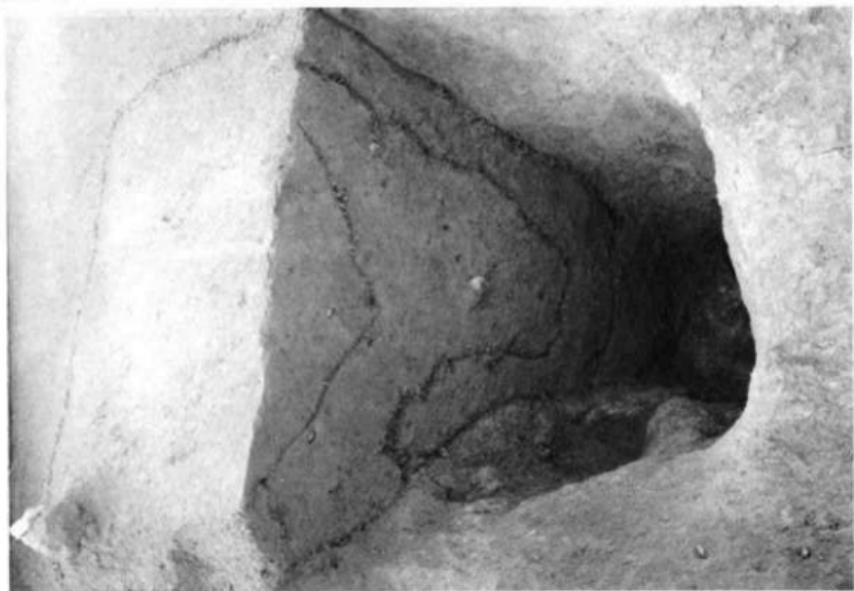
2 田区土層断面(1)の裏側土層



1 田区遺物出土状態 1



2 田区遺物出土状態 2



1 1号腐穴状遺構土質断面



2 1号腐穴状遺構（元から）



1 2号竪穴状遺構土層断面



2 2号竪穴状遺構（南から）



1 1号土壙（北から）



2 4号土壙（東から）



上 2号土壙（東から）

下 6号土壙（西から）





1 7号土壤（西から）



2 8号土壤（西から）



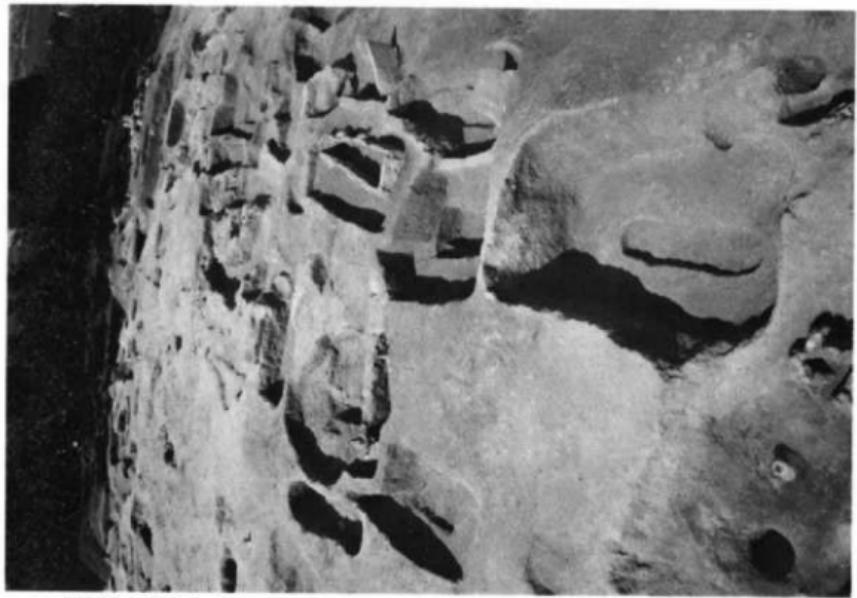
1 弥生時代墓地群全景空中写真



2 弥生時代墓地群近景空中写真



1 木棺墓群（南小之）



2 木棺墓・石棺墓群（北小之）



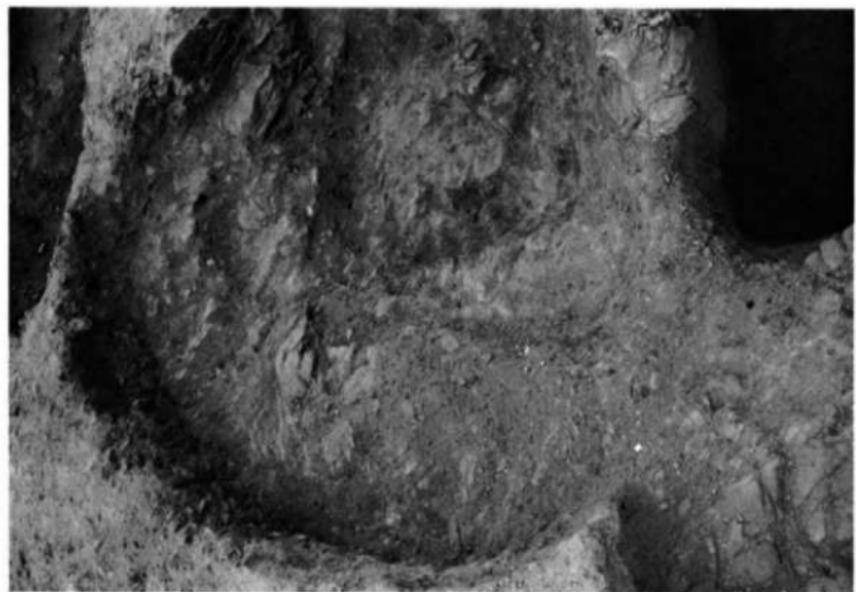
1 木橋巖群全貌（北面）



2 木橋巖群全貌（南面）



一 一定長形殻 (年名心)



二 不定長形殻 (年名心)



1 5号木僵蝶 (早石)²



2 6号木僵蝶 (早石)²



1 7号木棺蓋（裏面）



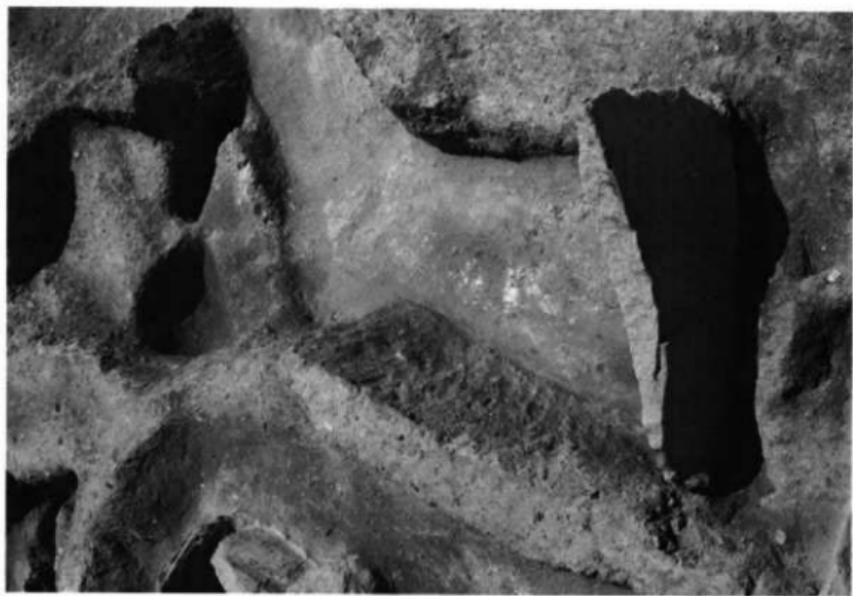
2 7号木棺蓋小口右側下端（裏面）



1. 八带长轴螺壳化石 (部分)



2. 八带长轴螺壳 (部分)



1 9号木相属 (单心心)



2 11号木相属 (单心心)



1 11・12号木棺墓（北から）



2 13~15号木棺墓（南から）



1 17号木棺墓（東から）



2 18号木棺墓（東から）



1 20・21号木棺墓（東から）



2 21号木棺墓（東面）



1. 21号木箱盖 (面分-1)



2. 21号木箱盖 (面分-2)



1 沿谷長距離 (西から)



2 26号木棺墓 (東から)



1 滅多木植葉 (右から)



2 滅多木植葉 (左から)



1 30号木棺墓裏込め除去後（西から）



2 32-34号木棺墓（南から）



1 江介木核螺 (南かく)



2 33号木核螺 (南かく)



1 34号木棺墓 (南から)



2 34号木棺墓東邊の除去後 (南から)



1 36号木棺墓（西から）



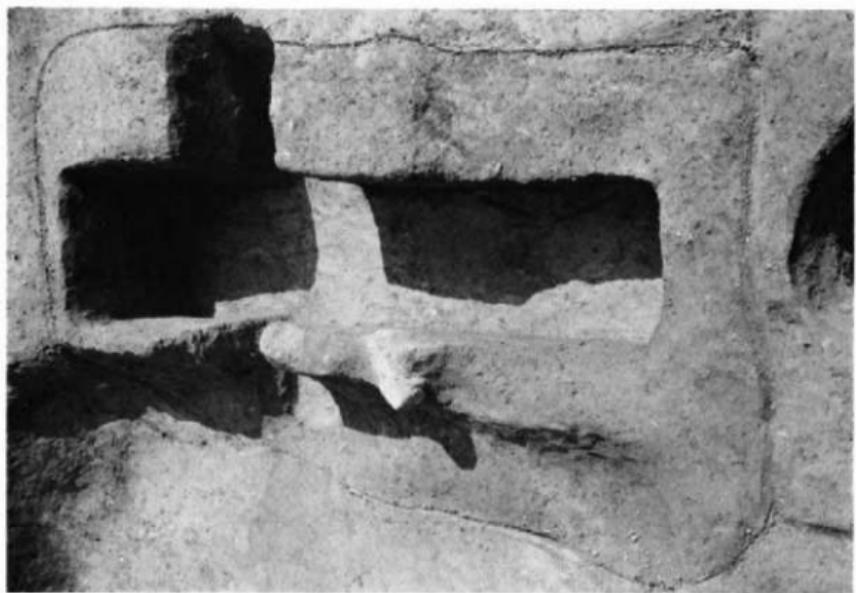
2 37・38号木棺墓（西から）



1 40公分長的砾石 (面少之)



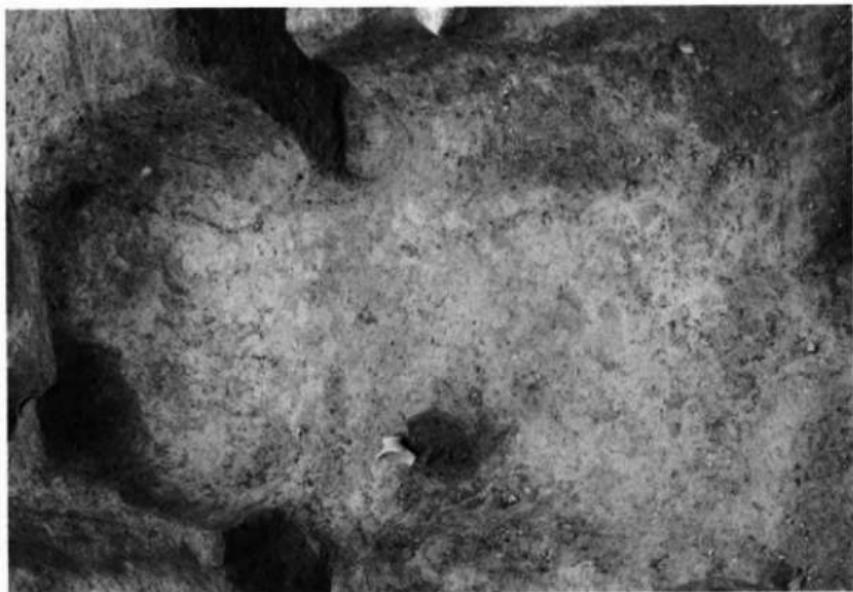
2 40公分長的砾石 (面少之)



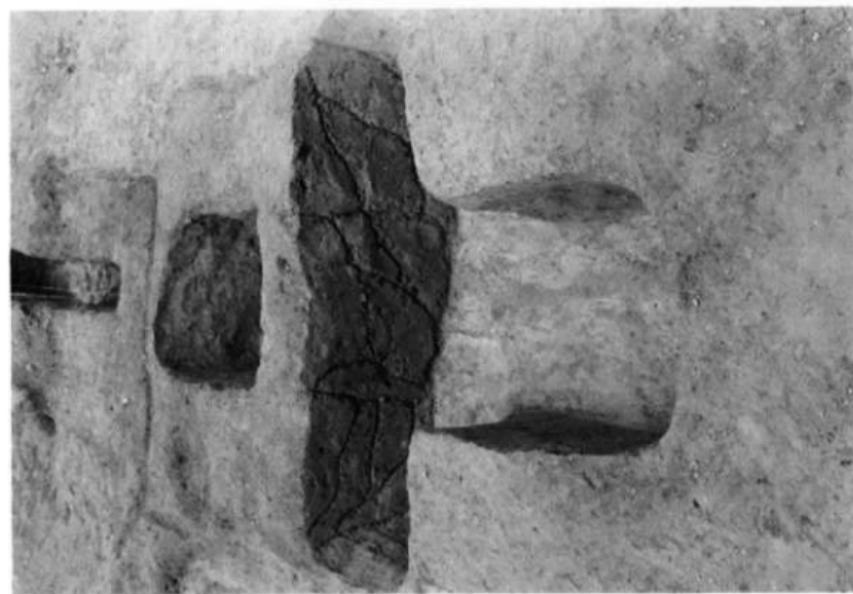
1 日本木化石 (南かじ)



2 日本木化石周辺の陰天像 (南かじ)



1 42号木化石 (南台山)



2 43号木化石(薄断面) (南台山)



1. 雜形木節蟲 (頭心+2)



2. 雜形木節蟲 (頭心+2)



1 45号木棺墓と標石（南から）



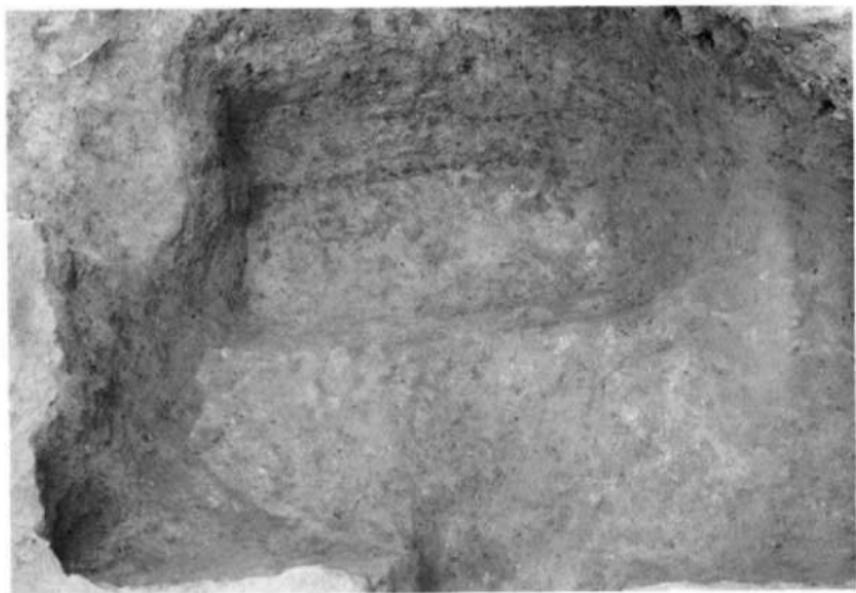
2 45号木棺墓土層断面（南から）



1 46号木棺墓（出土状）



2 46号木棺墓から除去後（出土状）



1 行き木相違（面から）



2 行き木相違（面から）



1 1号覆棺墓（西から）



2 2号覆棺墓（北西から）



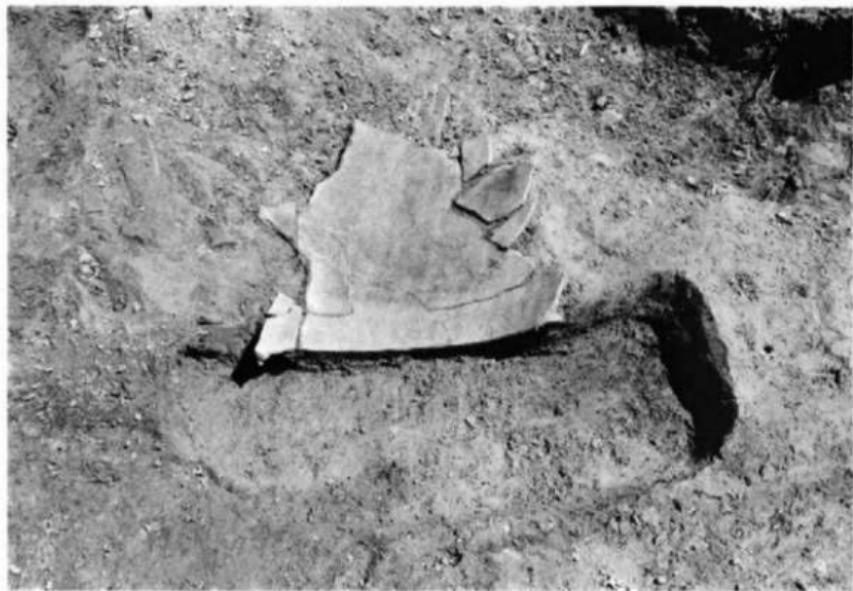
1 6号型证据 (近から)



2 4号型棺墓 (東から)



1 5号甕棺墓（南から）



2 6号甕棺墓（南から）



1 7号唐棺墓（西から）



2 8号唐棺墓（西から）



上 9号石棺墓（北から）

下 木棺墓群と重複する石棺墓
・石蓋土塚墓





1 木棺墓と切り合う 2号石棺墓（北東から）



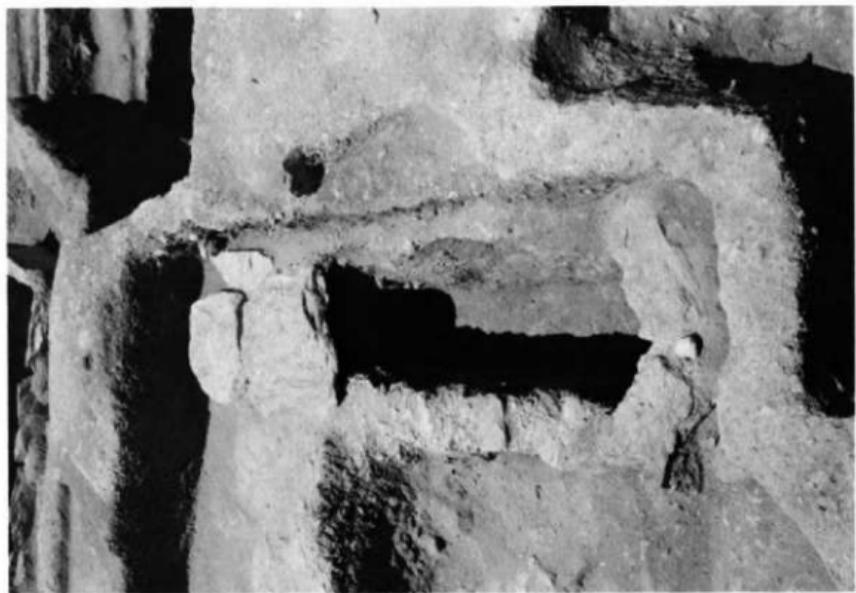
2 1号石棺墓（北から）



1 2号石棺墓（東から）



2 2号石棺墓蓋石除去後（東から）



1 1分石面上横縫面石陰去後 (東北)



2 1分石面上横縫面石陰去後 (東北)



1 1号墳全景空中写真



2 1号墳全景（東から）



上 1号墳石室全景（西から）

下 1号墳石室全景（東から）





1 1号墳玄門と前庭部（西から）



2 1号墳西側周溝内土器出土状態（東から）



1 埋甕（北から）



2 上蓋を除去した埋甕（北から）



1 2号填全景空中写真



2 2号填石室全景 (西から)



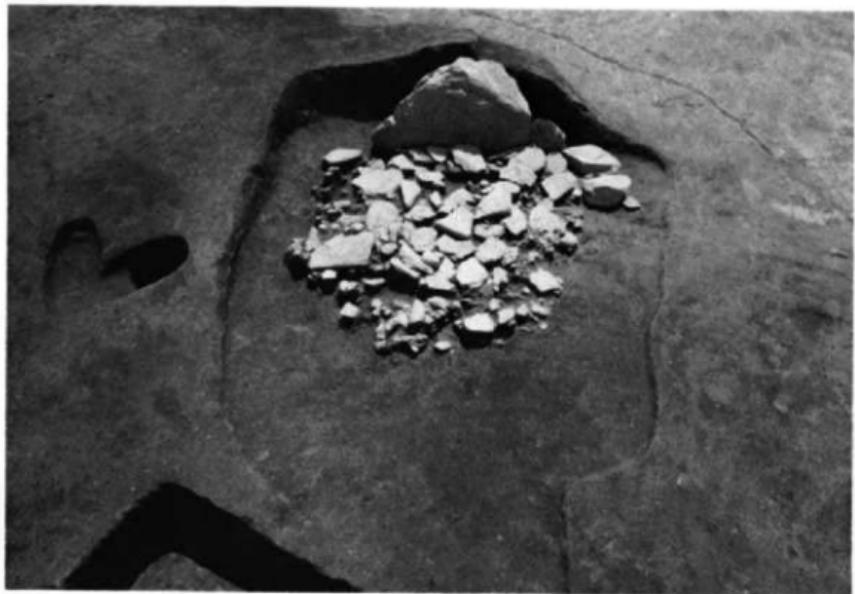
1 2号墳石室全景（北から）



2 2号墳南西側周溝内土器出土状態（北から）



1 3号墳埴室全景（西から）



2 3号墳埴室全景（西から）



1 4号墳全景（南から）



2 4号墳石室全景（南から）



上 5号填石室全景空中写真



下 5号填石室全景(西から)



1 6号墳全景（東から）



2 6号墳石室全景（南から）



1 7号墳全景空中写真



2 7号墳石室全景（東から）



1 8号墳石室全貌 (東面)



2 9号墳石室全貌 (東面)



1 1号土塙墓全景（北から）



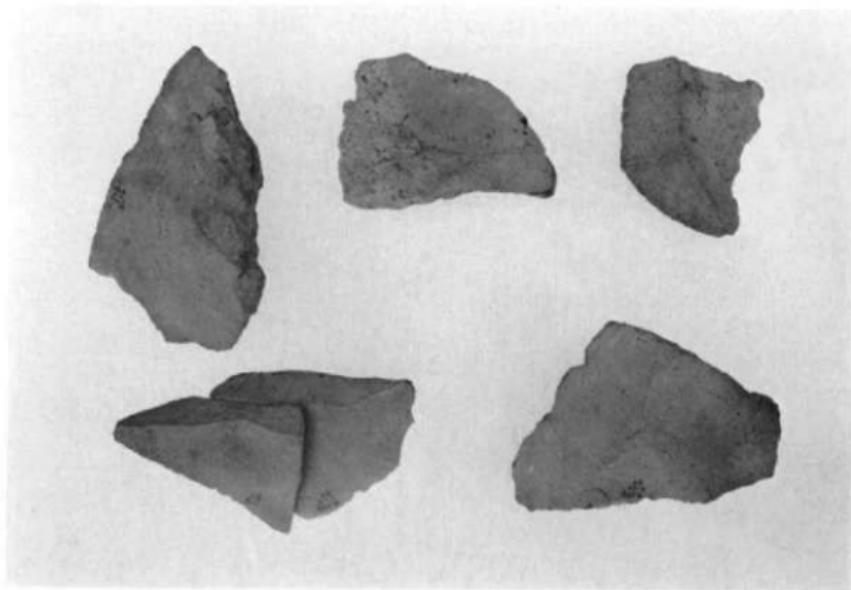
2 1号土塙墓内土器出土状態（北から）



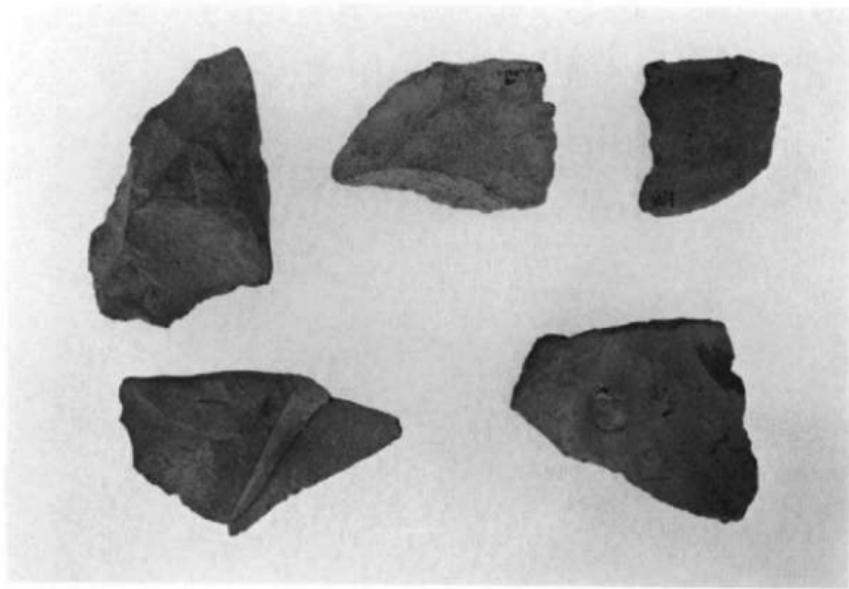
1 溝状造構全景（北から）



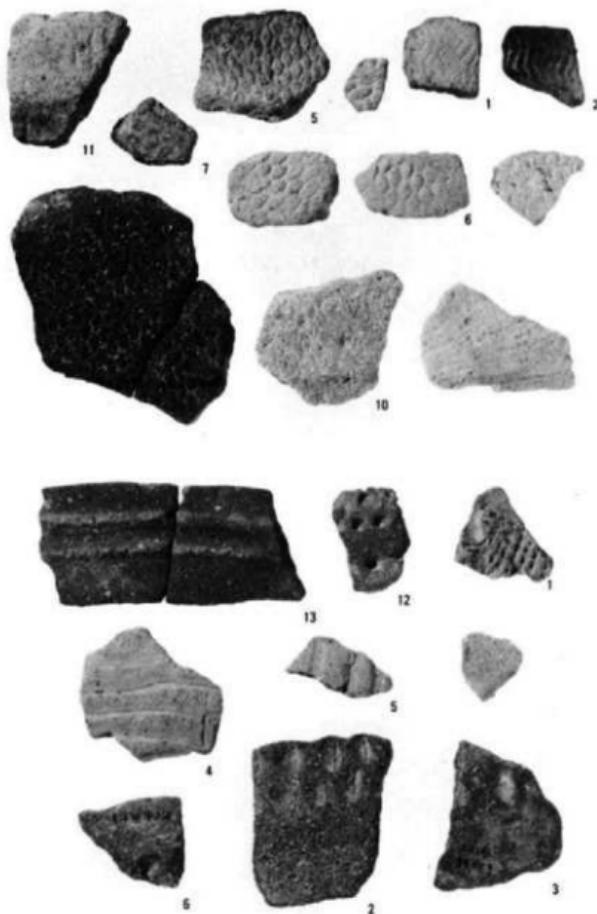
2 溝状造構内土層断面（北から）



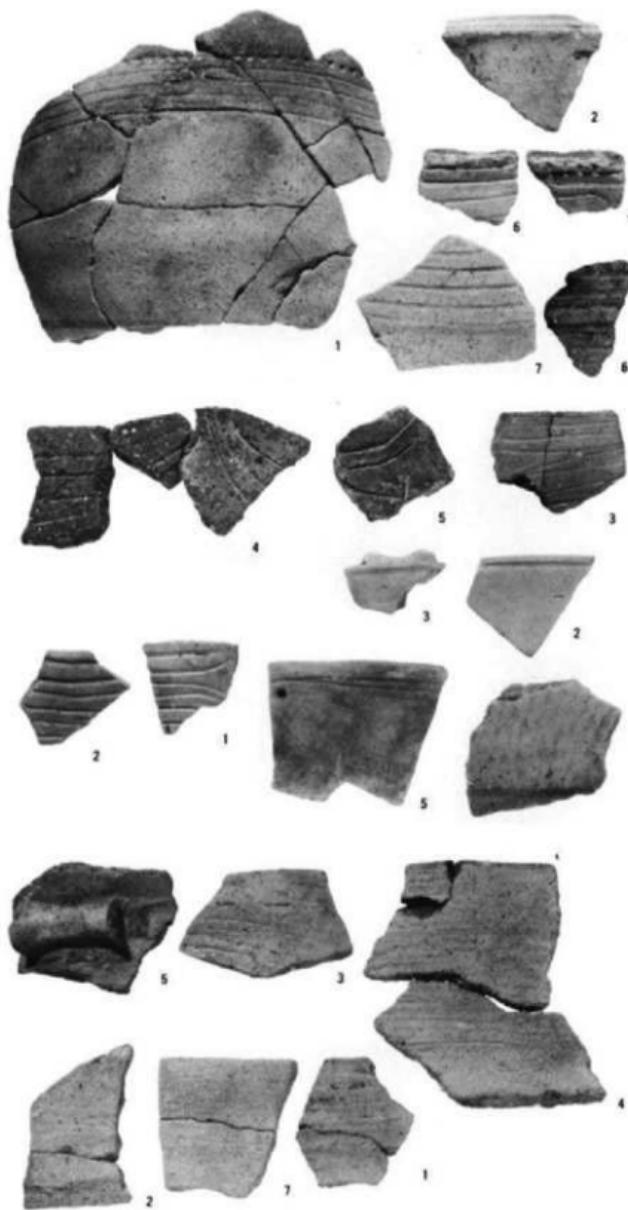
1 サヌカイト集石出土石器

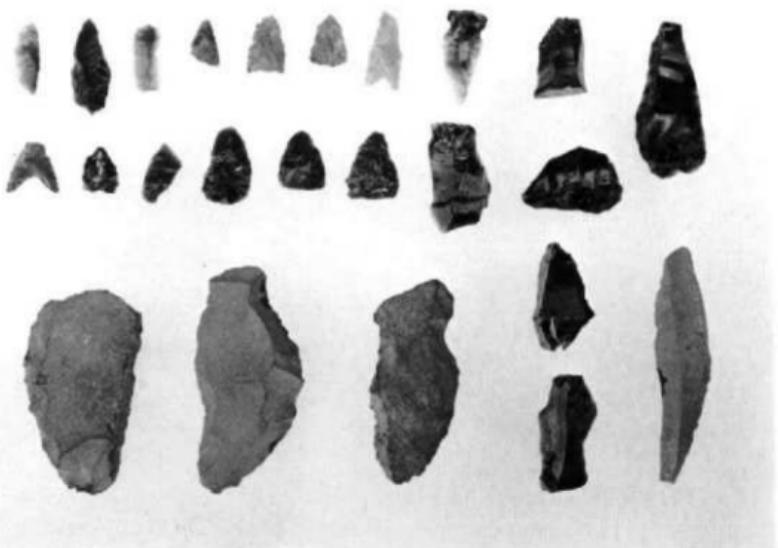


2 サヌカイト集石出土石器裏面

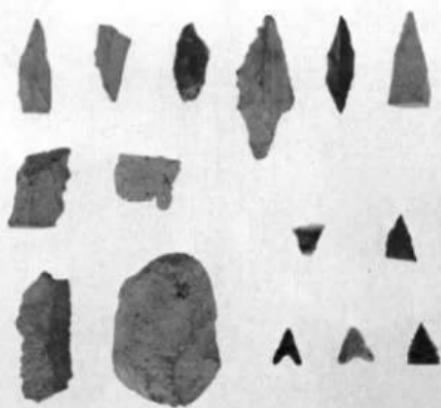


縄文土器 1





1 II区出土石器



2 III区出土石器

図版 64



1



K1上



4



K1下



5



7



K6

土壤・木棺墓・溝状造構内出土土器と甕棺



K2上

K2上



K2下

K2下



K3上



K4下



K5上



K8上



K5下



K8下



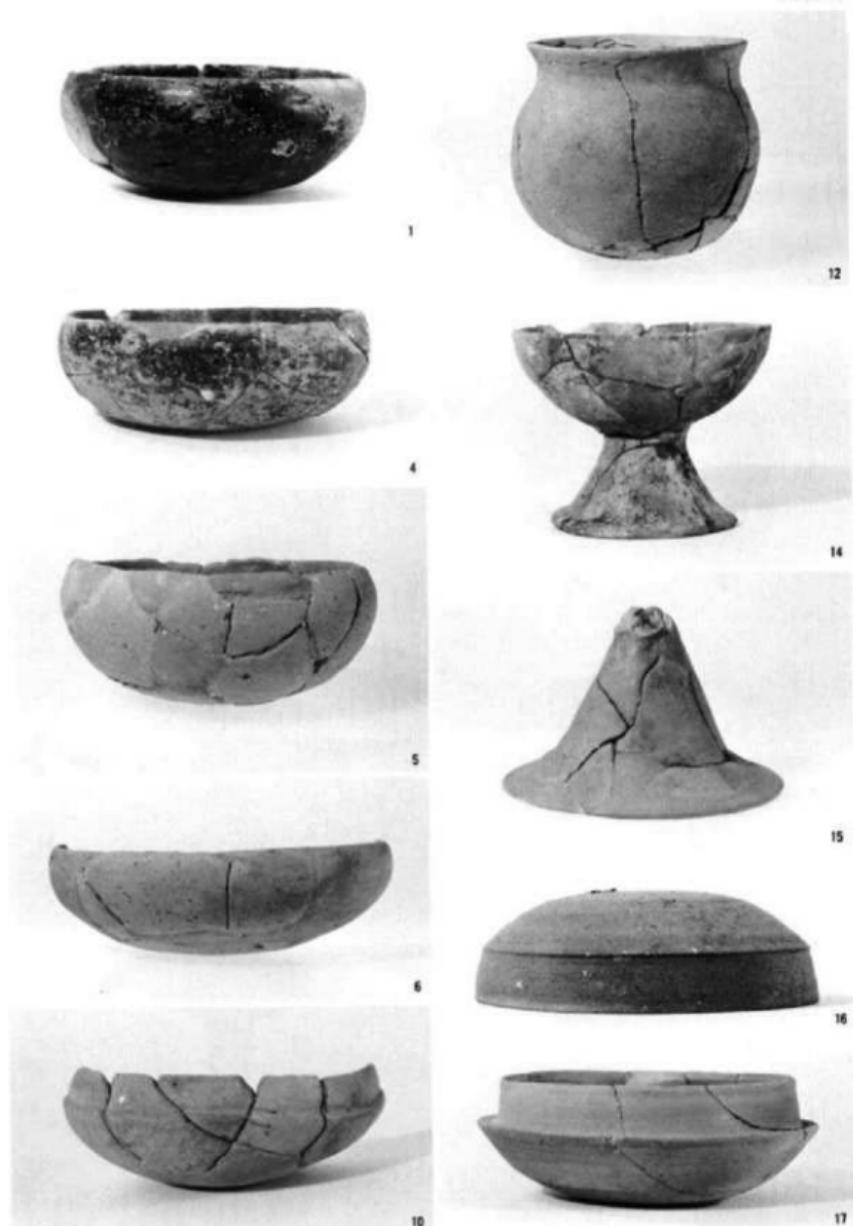
K7



K9



K10下



1号墳出土土師器・須恵器



21



堆上



23



堆下



1



2



13



10



15

1. 2号墳出土土師器・須恵器と埋甕



1・3・5・6号墳出土玉類・鉄器・磨製石器・土鍾



16



1



3



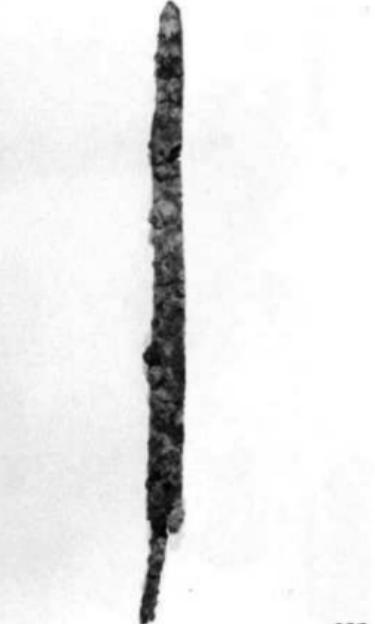
1



1



4



8号標

2・8号墳・1号土塚墓出土土師器・須恵器と鉄劍

惠蘇山遺跡の調査

本文目次

1. 遺跡の概要	117
2. 造構と遺物	119
(1) 穫穴住居跡	119
(2) 指立柱建物跡	120
(3) 土 壤	120
(4) 柱 穴 群	125
(5) 包含層出土の遺物	125
3. おわりに	129

図版目次

本文対照頁

図版 1	(1) 遺跡全景(東から)	117
	(2) 遺跡全景気球写真(西から)	117
図版 2	(1) 1号竪穴住居跡	119
	(2) 1号竪穴住居跡遺物出土状況	119
図版 3	(1) 南斜面調査風景	118
	(2) 1号土壤	120
	(3) 1号土壤遺物出土状況	120
図版 4	(1) 2号竪穴住居跡と2号土壤	120
	(2) 3号土壤	124
図版 5	(1) 4号土壤	124
	(2) 5号土壤	124
図版 6	(1) 南斜面遺物出土状況 1	125
	(2) 南斜面遺物出土状況 2	125
図版 7	出土遺物 1	126
図版 8	出土遺物 2	128

挿図目次

第1図	石室のみの古墳	117
第2図	遺跡周辺地形図(1/2,000)	117
第3図	地形実測図(1/600)	118
第4図	遺構配置図(1/300)	折込み
第5図	1・2号竪穴住居跡実測図(1/60)	119
第6図	1・2号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	120
第7図	1号掘立柱建物跡実測図(1/60)	121
第8図	1号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3)	122
第9図	1・2号土壤実測図(1/30)	122
第10図	3~5号土壤実測図(1/30)	123

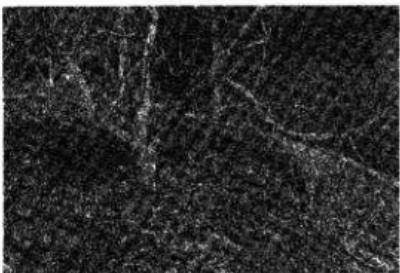
第 11 図	1・4 号土塙出土土器実測図 (1/3)	124
第 12 図	柱穴群出土土器実測図 (1/3)	124
第 13 図	柱穴出土磨石実測図 (1/3)	125
第 14 図	南斜面出土土器実測図 1 (1/3)	126
第 15 図	南斜面出土土器実測図 2 (1/3)	127
第 16 図	南斜面出土土器実測図 3 (1/3)	128
第 17 図	南斜面出土石鎚実測図 (1/2)	129

IV 恵蘇山遺跡の調査

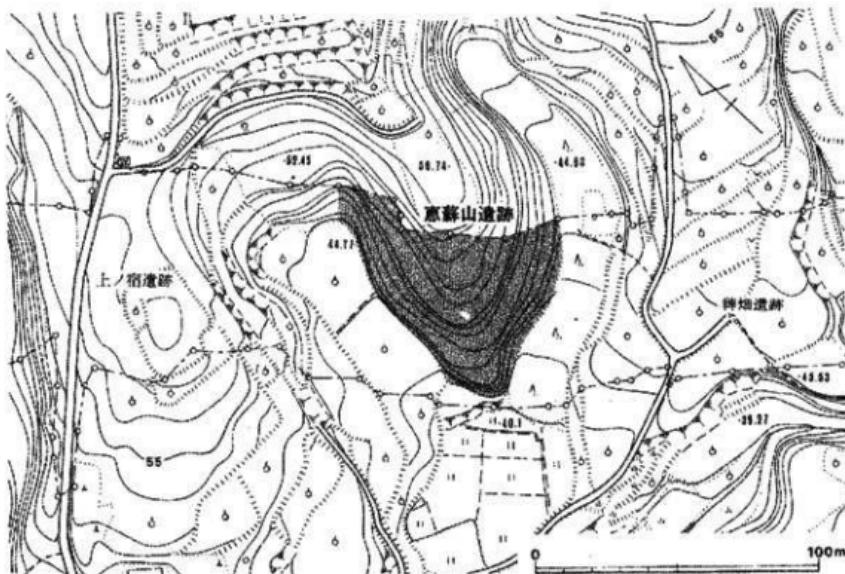
1. 遺跡の概要

恵蘇山遺跡は県のほぼ中央部、福岡県朝倉郡朝倉町大字山田字恵蘇山および幾田に所在する。遺跡は麻底良山（標高294.9m）南麓が、筑後川に向って標高を減していく丘陵南端部に位置する。字名でも判るように、丘陵の端部は幅20mほどの狭い谷（幾田）がとり囲んでいるが、その谷を挟んで、北西が上ノ宿遺跡、南東が稗畠遺跡である。

調査区域は頂部で標高53.5m、谷で40mとかなりの傾斜を持つ丘陵の西及び南斜面である。この丘陵の調査区域外には稗畠造成で破壊された古墳（第1図）の石材がとり残されており、周辺には数多くの古墳が



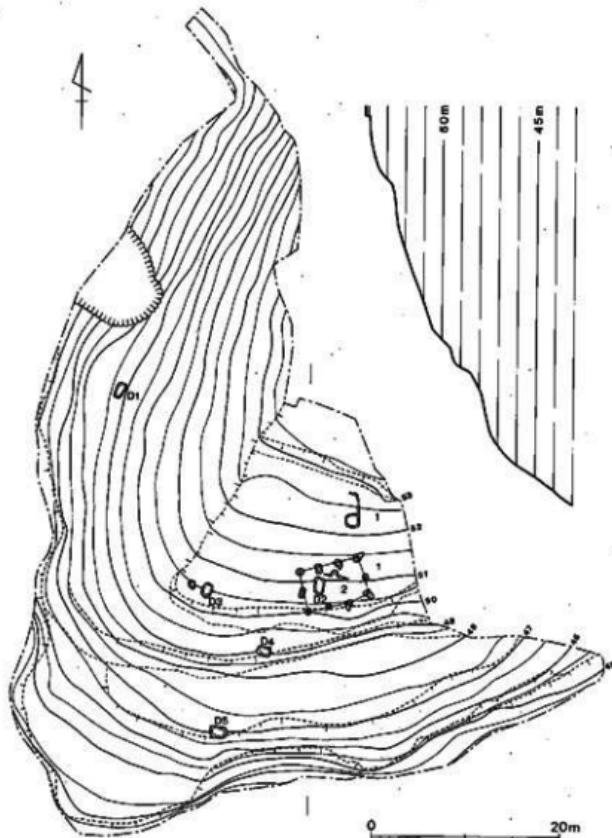
第1図 石室のみの古墳



第2図 遺跡周辺地形図 (1/2,000)

あつたらしい。

遺構は傾斜の強い西斜面では1号土壙と柱穴群が検出されただけで、第3図の断面図でも判る様に、南斜面の頂部付近の緩斜面で、奈良時代の竪穴住居跡2・掘立柱建物跡1と時期不詳の土壙1、中段の平坦面に土壙2及び柱穴群、また、谷と接する南斜面で2ヶ所の遺物集中部を検出したにすぎない。



第3図 地形実測図 (1/600)



第4図 遺構配置図 (1/300)

2. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

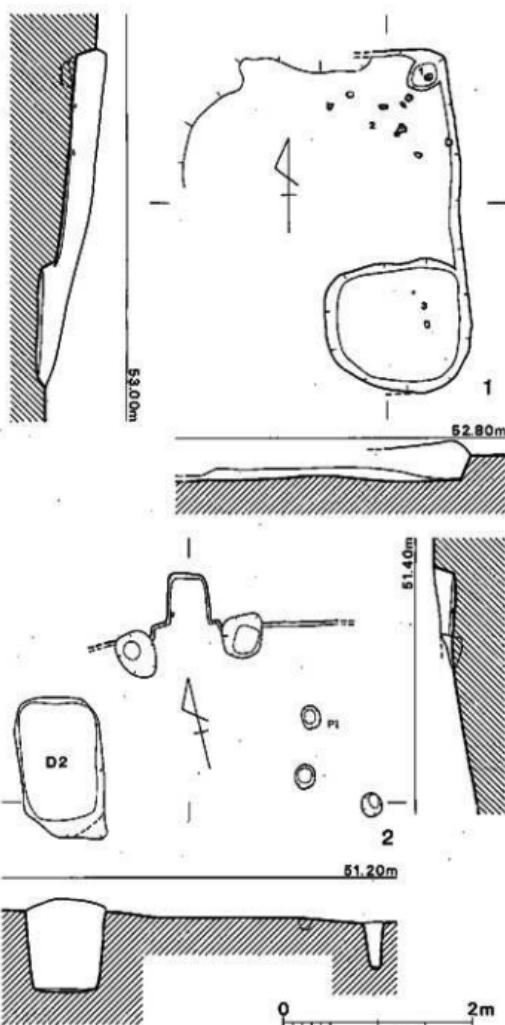
1号竪穴住居跡（図版2、第5回）

調査区の頂部に近い、標高52mに位置する。残存した東壁から、一辺3.6mほどの方形プランを呈す事が判るが、柱穴等は不明。壁高約30cmで、南東隅に深さ20cm、径1.5mほどの隅丸方形の落ち込みがみられる。北東隅より土師器・須恵器が出土した。

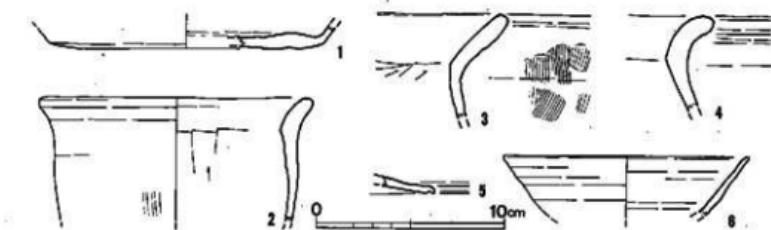
土師器（第6図1～4） 1は底径14cmに復原できる皿で、外底面は回転ヘラケズリ。2・4は甕で、緩く外反する口縁部を持つ口径14cmの小型の2と、大きく「く」字に外反する大型の2者がある。内面はヘラケズリ。3は瓶と思われる口縁片で、外面には指圧痕とハケ目を残す。出土遺物から8世紀前半頃であろう。

2号竪穴住居跡（図版4、第5回）

1号住居跡の南斜面に、カマドとそれに連なる壁の一部が遺存した。一辺が2.6m以上の方形プランで、北壁側、つまり斜面頂部方向に壁外に突出するカマドを持つ。カマドはあまり使



第5図 1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第6図 1-2号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

用された状況になく、短期間営なまれた住居のようだ。内より須恵器坏身(6)が出土した。

須恵器(第6図5・6) 5はわずかな身受けの反りを持つ蓋の小破片でP1より出土。6は底部からそのまま外へ広がる器形の坏身で底部を欠く。復原口径13cm、残存高3.2cm。この住居も8世紀前半頃であろう。

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(第7図)

南斜面に1棟のみ検出された2×3間の建物跡で、2号住居跡・2号土壙を内に取り込む。主軸方位をほぼ東西にとり、桁行・梁行柱間とも1.1mと等しい。頂部側の柱穴(P8)は1mと深いが、斜面下方(P10)では30cmほどである。

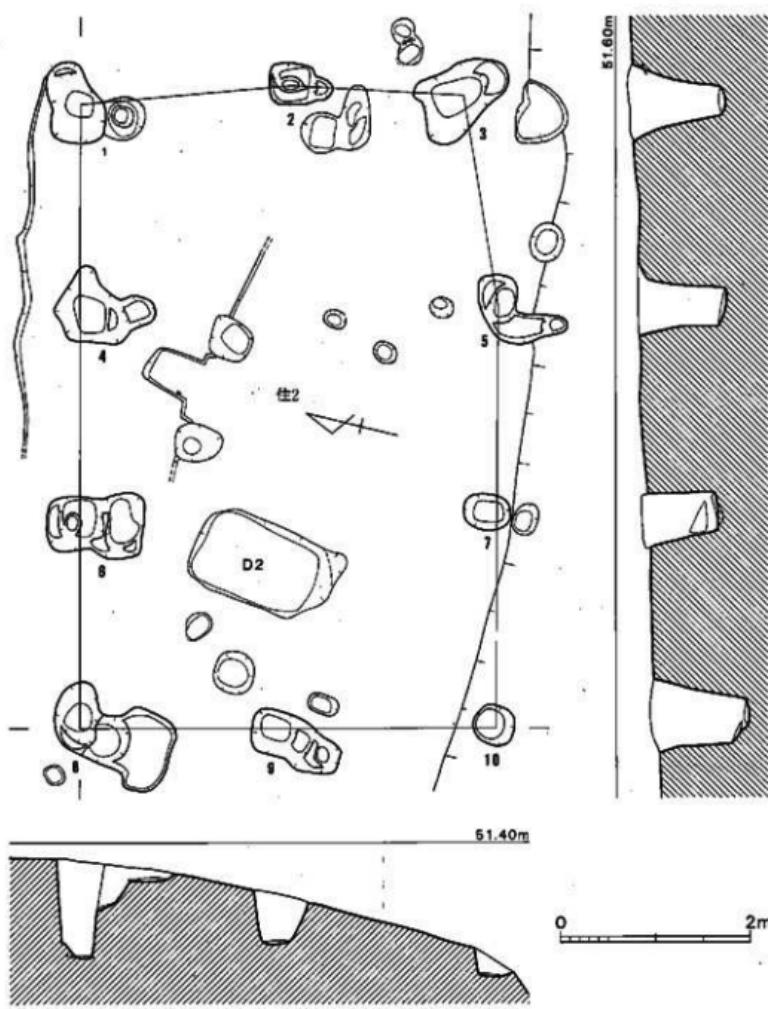
須恵器(第8図1・2) 1は坏身の小破片で、若干外反する口縁部。2は底径13cmほどに復原される盤と思われる。外底面は回転ヘラケズリ、両者ともP1より出土した。1の坏身は2号住居跡出土のもの(第6図6)に類似し、それに近い8世紀前半と考えられるが、切り合は不明である。

(3) 土 壙

1号土壙(図版3、第9図)

西斜面で検出された柱穴以外の唯一の遺構である。主軸をN-35°-Eにとり、長辺1.43m、短辺0.8-0.95mを測る隅丸長方形のプランを呈す。やや凹凸のある底辺の中央部が凹み、深さ15cm。完形品の土師器坏2点が中央部東側上部に並んで出土した。プラン、遺物の出土状態から墓であった可能性が強い。

土師器(第11図9・10) 両者とも相似た作りで、同一工人によると思われる坏。丸く納めた口唇部を内に折り返し、球状の胴部、丸味の強い底部を持つ。外面はヘラケズリの後にナデ調整、内面はナデ。口径12cm、高4.4cmを測り、精良な胎土、朱色かかった茶色の色調とまったく



第 7 図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

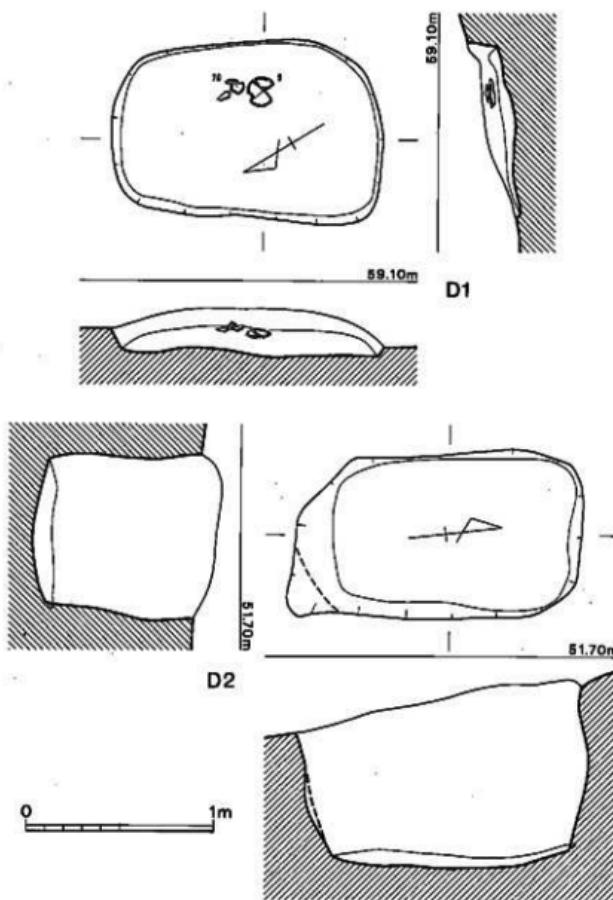
同一。当遺跡では最も古く6世紀末から7世紀前半頃であろう。

2号土壙(図版4、第9図)

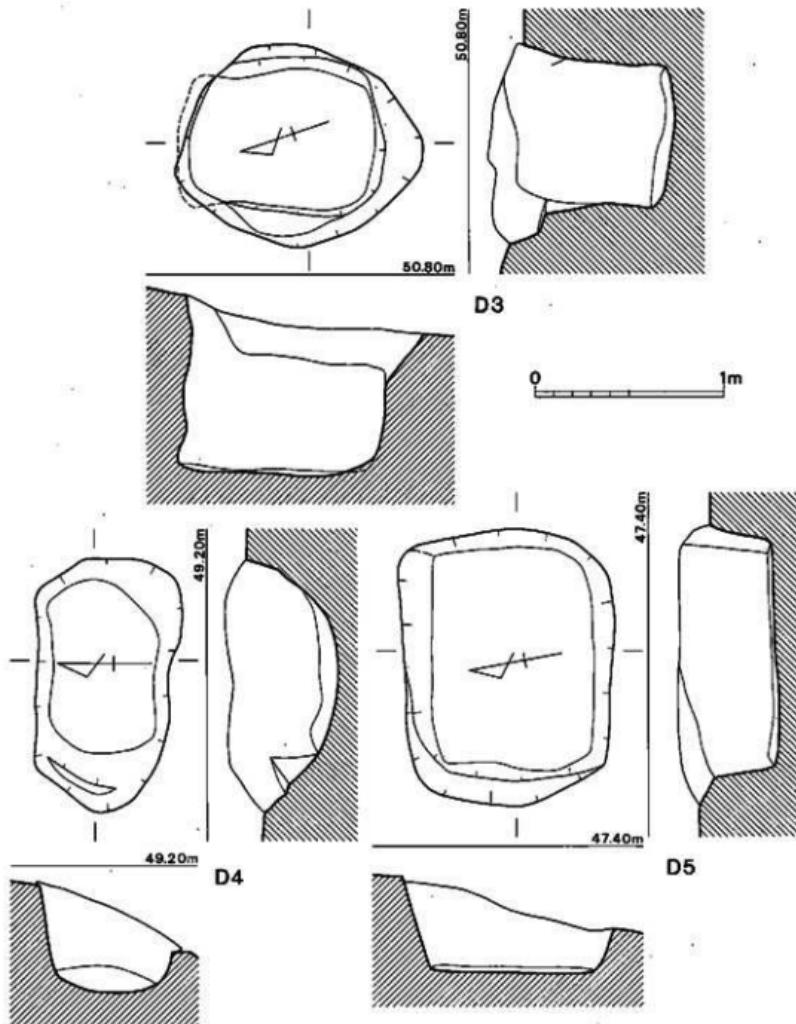
1号掘立柱建物跡の内側に位置する土壙で、隅丸長方形のプランを呈す。長辺1.52m、短辺0.9m、



第8図 1号掘立柱建物跡出土器実測図(1/3)



第9図 1・2号土壙実測図(1/30)



第 10 図 3~5号土壇実測図 (1/30)

深さ0.9mを測る。壇内の埋土は地山の赤褐色土が軟質に変化したもので、掘削後短期間で埋没したものである。遺物は出土していない。

3号土壤(図版4、第10回)

調査区中央の斜面に位置する。主軸をほぼ南北にとる土壤で長辺1.05m、短辺0.9m、深さ0.9mを測り底面は浅くへこむ。遺物は出土していない。

4号土壤(図版5、第10回)

南斜面中段に検出された土壤で、主軸をほぼ東西に斜面と平行にとる。長辺1.35m、短辺0.7m、深さ0.53mで、底面

は中央に深くなる。形態等2・3・5号土壤とは異なる。土師器の环・甕の小片が出土した。

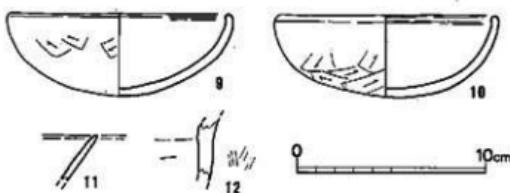
土師器(第11図11・12)

11は环の口縁部片で、南斜面出土の第14図24のような外方へ広がる器形で

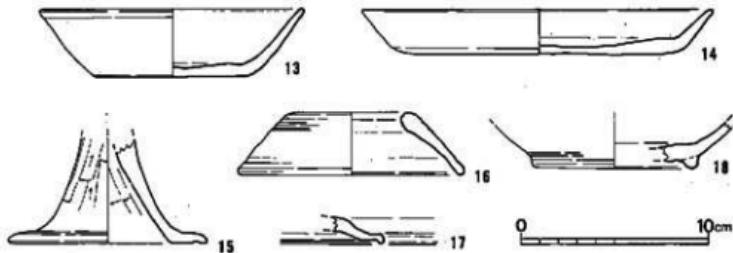
あろう。12は小型の甕の頸部片で、内面はケズリ、外面はハケ目を施す。8世紀後半から9世紀頃であろう。

5号土壤(図版5、第10回)

南斜面の下段近くに位置し、主軸を等高線に沿ったほぼ東西に持つ。長方形のプランで、長辺1.33m、短辺1.13m、深さ0.5m。底面がほぼ平坦で深みが無い点、2・3号土壤とは様相を異にする。出土遺物は無い。



第11図 1・4号土壤出土土器実測図(1/3)



第12図 柱穴群出土土器実測図(1/3)

(4) 柱穴群(第4図)

調査区の全域で柱穴が確認された。西斜面は疊で、南斜面下段に密集するが、1号建物跡を除いて埋まるものは無い。奈良時代の遺物が多い。

土師器(第12図13~16) 13は壺身で、底部からそのまま外に広がる器形。底外面には板目状の圧痕がある。口径14cm、器高3.5cm。14は盤で丹塗り。スヌが部分的に厚く付着する。口径18.5cm、器高2.35cm。調整等は磨滅して不明。15は高台の脚部片で、下端部は2cmほどの平坦面をなす。内外面ともケズリ。16は脚台とでも言う器形で、底径12cm、器高3.3cm。色調は暗黄褐色で、胎土は緻密。

須恵器(第12図17~18) 17は端部が嘴状を呈す蓋の小破片。18は有高台の壺ないし壺で、低く部厚な高台は径8.8cmに復原される。

磨石(第13図) 長円形で、体部は磨きにより平坦に近く、周縁には敲痕が目立つ。長12cm、幅9.4cm、厚3.6cmで、輝石安山岩製。

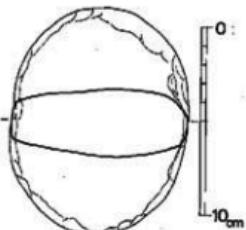
(5) 包含層出土の遺物

南斜面と谷部との接点付近の2箇所に、遺物の集中地点があり、斜面上に存在した遺構から破棄された可能性が強い。

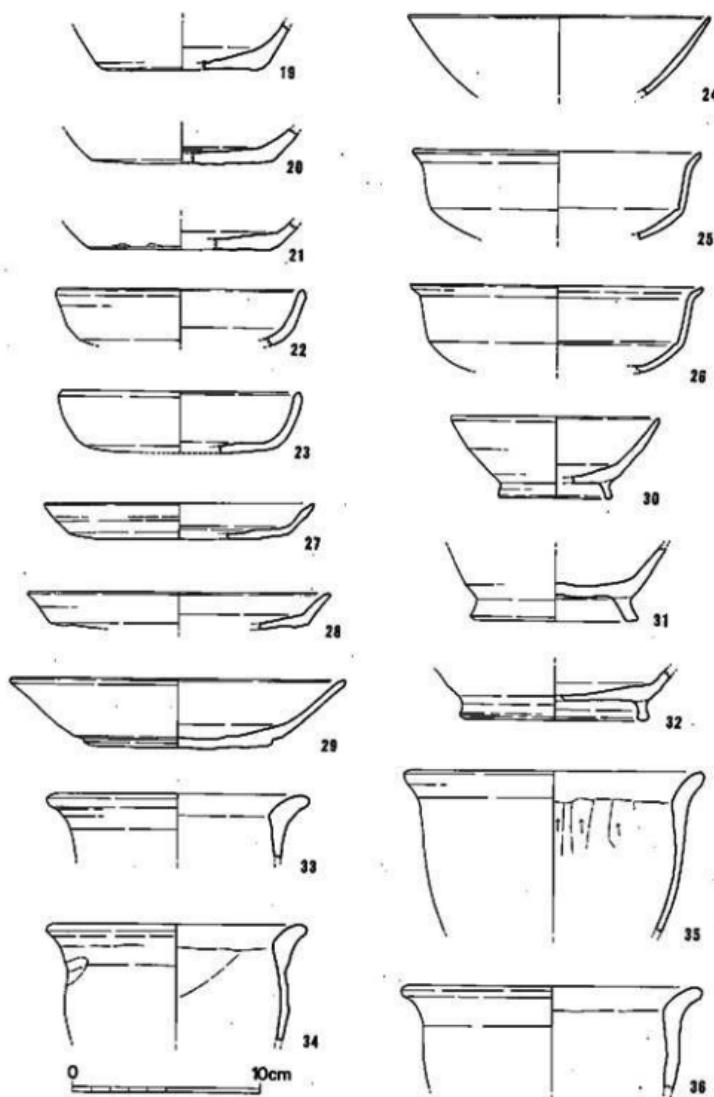
土師器・須恵器は、8世紀から9世紀代のものが多い。

土師器(第14~15図) 19~23は壺で、19~21は底部から外方へそのまま広がる器形。22~23は内窓して立ちあがり、口唇部を丸く納める。調整は風化し不明。23は口径12.5cm。24~26は高台の付く壺であろう。24は薄手で外方へ大きく広がる器形で、口径15.9cm。25~26は胴部で屈曲して真直ぐに立ちあがり、口縁部付近で外反する特徴的な壺で、25の口径15.3cm。27~29は皿で、27~28は外反する口縁部を有する。27の口径14cm、器高1.9cm。29は底部から外方へ大きく広がる器形で壺としても良い。口径17.7cm、器高3.7cm、底径10cmを測る。30~32は高台付壺で、30は口径11cmと小型。高台は胴部端部からやや内に高く立つ。口縁部はほとんど内窓せずに外方へ広がる。31~32の高台も端部に位置する。31の高台径8.8cm、高さ1.3cm。33~45は甌で、口径から16cm未満の小型品(33~37)、20cm未満の中型品(38~41)、及びそれ以上の口径を有す大型品(42~45)に分類できる。いずれも口縁部を肥厚させるが、胴部をヘラケズリにより薄く仕上げるもので、外面の頸部以上はヨコナテ、以下はハケ目調整を施す。口縁部の形態を見ると明らかに腫状をなす33~34、37~40、42~44と緩く外反するタイプの2者があり、前者は8世紀前半頃から出現するものである。

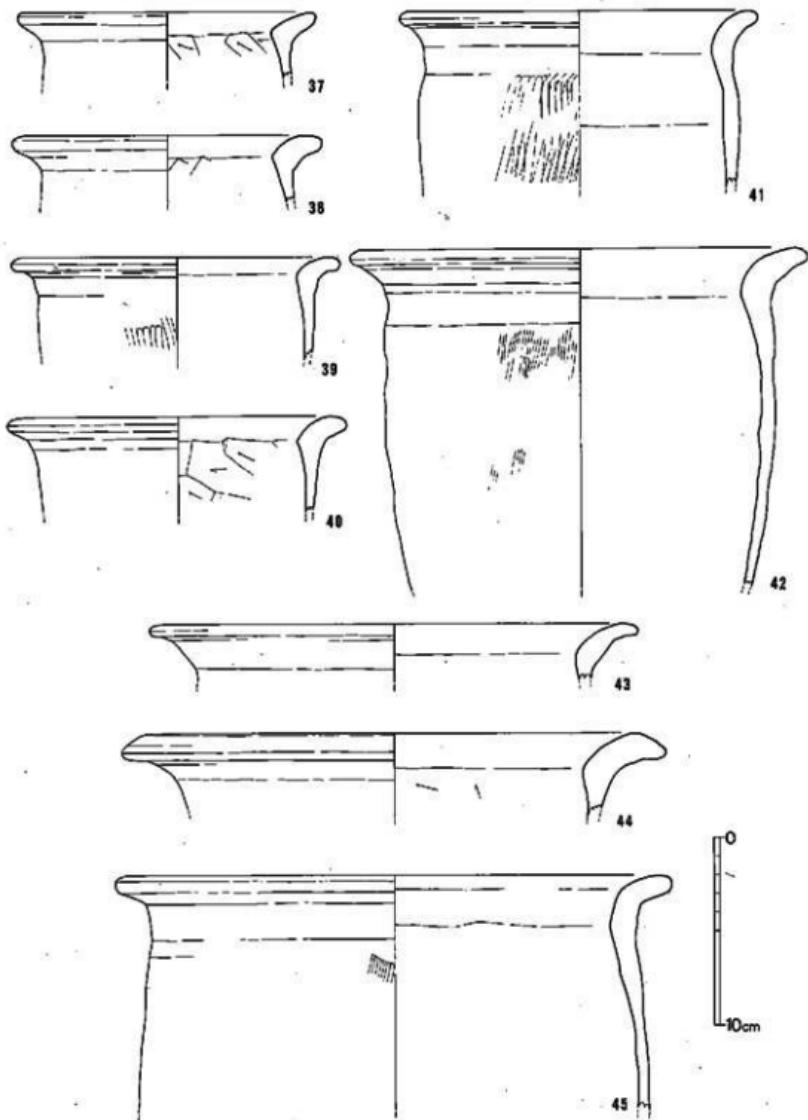
須恵器(第16図) 46~48は蓋だが、つまみ部を欠く。端部は丸味があり、わずかに受け部を



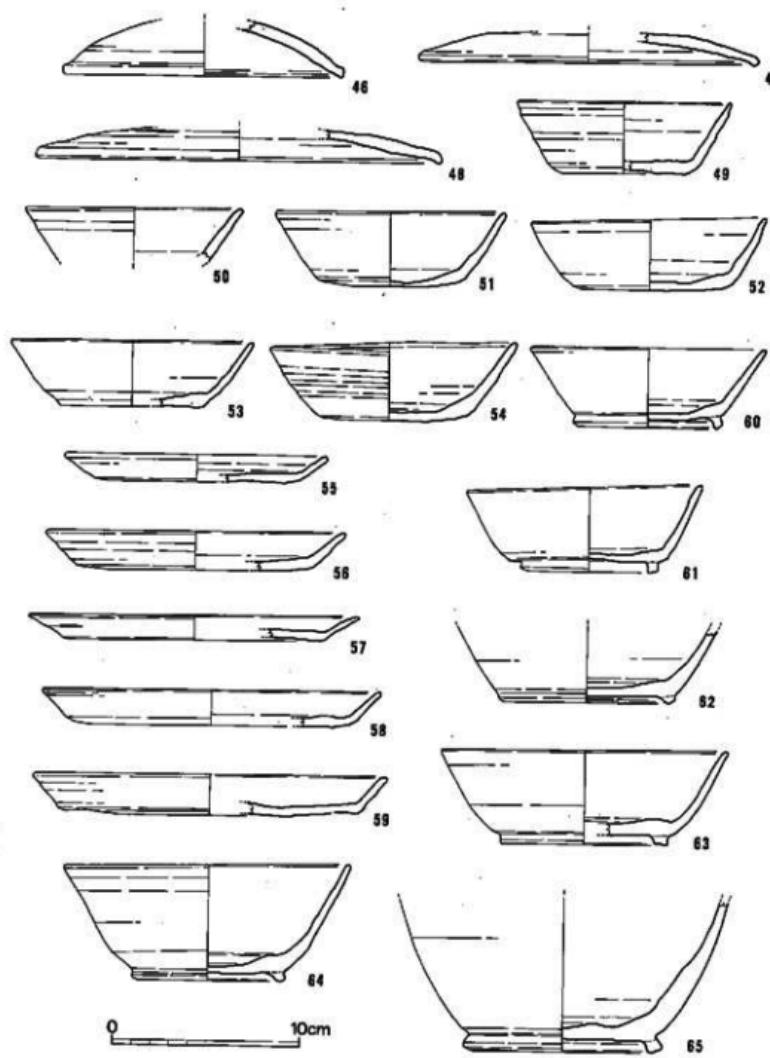
第13図 柱穴出土磨石実測図(1/3)



第 14 図 南斜而出土土器実測図 1 (1/3)



第 15 図 南斜面出土土器尖測図 2 (1/3)



第 18 図 南斜面出土土器実測図 3 (1/3)

作り出す。48は盤の蓋であろう。49~54は環で、底部からそのまま外方へ広がる器形が多い。底部はヘラケズリされるもの(51・53・54)とそうでないものがある。55~59は皿で、口縁部がいずれも外反する。55は口径14cm、59は19cm。底部はいずれも丁寧にナテ調整されヘラケズリを施すものは無い。60~63は高台付环で外方へ広がる环部に低い高台を持つ。61は口径12.5cm、高台径7.4cm、器高4.6cm。64は高台付境で、5.5cmと深みのある体部は直線的に広がり、高台は外方へ短くふん張る。65は高台付鉢ないし壺の破片で、胴下半部は回転ヘラケズリのまま、内面には焼ぶくれにより変形している。高台は低く、外端部につけられる。

出土した土器器・須恵器は、8世紀前半頃に位置付けられる27・28・33・34・37~40・44・46・51・53・54・60・61や9世紀代に下ると思われる24・49・50・55~58・63~65および10世紀以降らしい25・26がある。

石 鑑(第17図) 片脚を欠く凹基無茎式の石鑑で、両面とも全周に細かな調整を施す。右側縁の弯曲度が強い。長2.7cm、厚0.35cm、重0.9gで黒曜石製。



第17図 石鑑実測図(1/2)

3. おわりに

恵蘇山遺跡から検出された遺構は6世紀末から7世紀前半頃の1号土壙が最も古く、8世紀前半、つまり奈良時代に属する竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟。8世紀後半から9世紀頃の土壙1基のはかは、時期の判断できない土壙3基と柱穴群があるが、いずれも遺存度は悪い。

地形的にかなりの急傾斜であり、当初は遺構は存在しないと考えていたが、少数とはいえ、住居跡等の遺構が存在した。それらの立地を見ると、頂部に近い緩斜面に住居跡と建物跡の遺構がまとまっており、遺跡の中心は東側へ続く緩斜面から丘陵上部にあると推定される。一方、南斜面から谷部にかけての接点より出土した土器群には、9世紀頃の遺物が多く出土しており、南斜面下段に集中していた柱穴群が住居跡・建物跡等の遺構であった可能性もある。

また、標高57m付近の調査区域外に発見された古墳の存在は、柿畑による削平を予想させたが、石室掘方等何ら検出されず斜面以下に古墳が築かれなかった事が判明した。

当遺跡は分布調査の段階では、立地的に見て急斜面すぎること、遺構・遺物等がまったく確認されなかったために調査地点から除去していた。しかし、再確認の意味で全域の表土を除去したところ、上記の遺構を検出した。この様な結果は、横断面の調査が東の杷木町へ進行する過程で、狭い尾根や尾根間の谷間といった箇所の調査において顕著に現れ、重要な遺跡が次々と発見された。今後の調査においては、ただ単に立地や分布調査を基にした既存概念のみで、遺跡の有無を判断する事は非常に危険であるという教訓を得た。

図 版

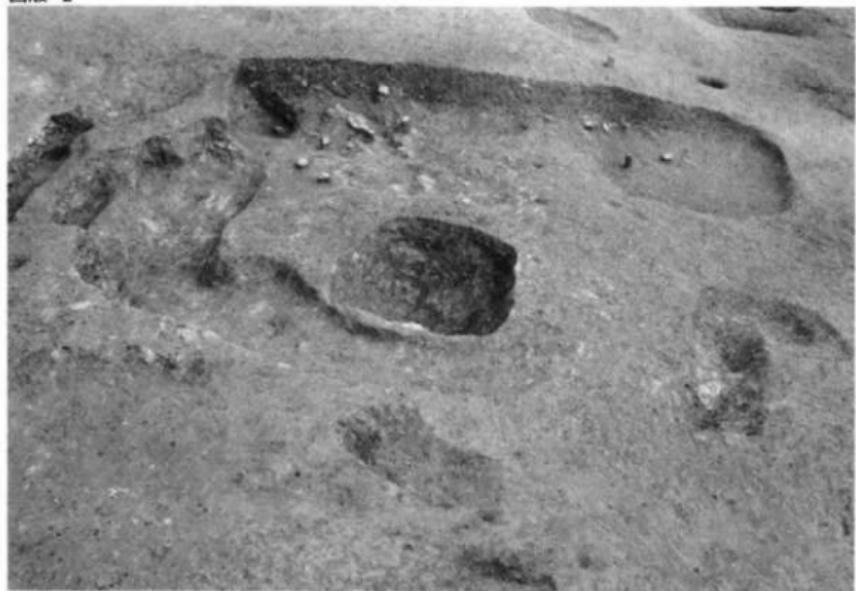


1 遺跡全景（東から）



2 遺跡全景気球写真（西から）

圖版 2



1 1号竖穴住居跡



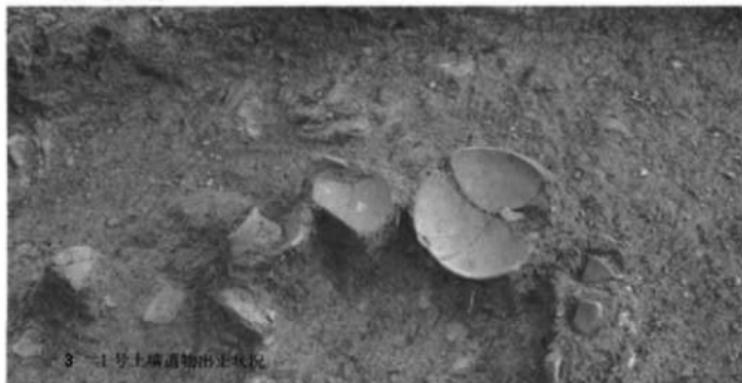
2 1号竖穴住居跡遺物出土狀況



1 南斜面調査風景



2 1号土塙



3 1号土塙遺物出土状況



1 2号堅穴住跡と2号土壤



2 3号土壤



1 4号土壤



2 5号土壤

図版 6



1 南斜面遺物出土状況



2 南斜面遺物出土状況 2





41



60



42



61



62



52



63



53



64



54



65

稗 畏 遺 跡 の 調 査

本文目次

1. 遺跡の概要	131
2. 縄文時代の遺構と遺物	132
(1) 層序	133
(2) 土壙	133
(3) 包含層出土の遺物	137
3. 古墳時代の遺構と遺物	147
(1) 積穴住居跡	147
(2) 捩立柱建物跡	164
(3) その他の遺構と遺物	165
4. おわりに	168

図 版 目 次

	本文対照頁
図 版 1 遺跡気球写真（北から）	131
図 版 2 (1) 遺跡全景（南東から）	131
(2) 遺跡南半（南東から）	131
図 版 3 (1) 遺跡南端部	132
(2) 土層 C~C'断面	133
(3) 遺跡西南部斜面	133
(4) 土層 D~D'断面	133
図 版 4 (1) 縄文時代調査区 1・2段目	133
(2) 2段目の縄文時代遺物出土状況	133
図 版 5 (1) 縄文時代調査区 3段目と 3号土壤	135
(2) 2号土壤と打製石斧	136
(3) 3号土壤	136
図 版 6 遺物出土状況	137
図 版 7 出土土器	137
図 版 8 出土石器	142
図 版 9 (1) 1号竪穴住居跡と調査区南側全景	147
(2) 1号竪穴住居跡（西から）	147
図 版 10 (1) 2・3号竪穴住居跡（西から）	148
(2) 2号竪穴住居のカマド	148
図 版 11 (1) 3号竪穴住居跡（南から）	148
(2) 3号竪穴住居のカマド	150
図 版 12 (1) 4号竪穴住居跡（北から）	152
(2) 3・4号竪穴住居跡出土土器	153
図 版 13 (1) 5号竪穴住居跡全景（北から）	156
(2) 5号竪穴住居のカマド	157
図 版 14 (1) 5号竪穴住居遺物出土状況	157
(2) 出土土器	158
図 版 15 (1) 5~10号竪穴住居跡全景（東から）	158
(2) 5・6号竪穴住居跡（北から）	158
図 版 16 (1) 6号竪穴住居跡（南から）	159

(2) 6号竪穴住居のカマド	159
図版 17 (1) 7・8号竪穴住居跡(南から)	161
(2) 6・7号竪穴住居跡出土土器	161
図版 18 (1) 1号掘立柱建物跡(北から)	164
(2) 2号掘立柱建物跡(北から)	164

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡周辺地形図(1/2,000)	131
第 2 図 網文時代の遺構配置と地山コンタ(1/600)	132
第 3 図 土層断面図(1/60)	134
第 4 図 1~3・5号土壤実測図(1/30)	135
第 5 図 4号土壤実測図(1/30)	136
第 6 図 5号土壤付近調査風景	137
第 7 図 出土土器拓影1(1/3)	138
第 8 図 出土土器拓影2(1/3)	139
第 9 図 出土土器拓影3(1/3)	140
第 10 図 出土石器実測図1(1/2)	141
第 11 図 出土石器実測図2(1/2)	142
第 12 図 出土石器実測図3(1/3)	144
第 13 図 出土石器実測図4(1/3)	145
第 14 図 1号竪穴住居跡と中央部の擾乱	147
第 15 図 1号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)	148
第 16 図 2・3号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60・1/30)	149
第 17 図 3号竪穴住居カマド実測図(1/20)	150
第 18 図 2・3号竪穴住居出土土器実測図(1/3)	151
第 19 図 4号竪穴住居跡実測図(1/60)	152
第 20 図 4号竪穴住居出土土器実測図(1/3)	153
第 21 図 5・10号竪穴住居跡実測図(1/60)	154
第 22 図 5号竪穴住居カマド実測図(1/20)	155
第 23 図 5号竪穴住居出土土器・石製品実測図(1/3)	156

第 24 図	5 号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)	157
第 25 図	6 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30).....	159
第 26 図	6 ~ 8 号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)	160
第 27 図	6 号竪穴住居出土石器実測図 (1/3)	161
第 28 図	7 ~ 9 号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	162
第 29 図	1・2 号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	163
第 30 図	1・2 号掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)	164
第 31 図	3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	165
第 32 図	柱穴群出土土器・土製品実測図 (1/3)	166
第 33 図	包含層出土土器・土製品実測図 (1/3)	167

付 図 目 次

付 図 1 碧畠遺跡遺構配置図 (1/300)

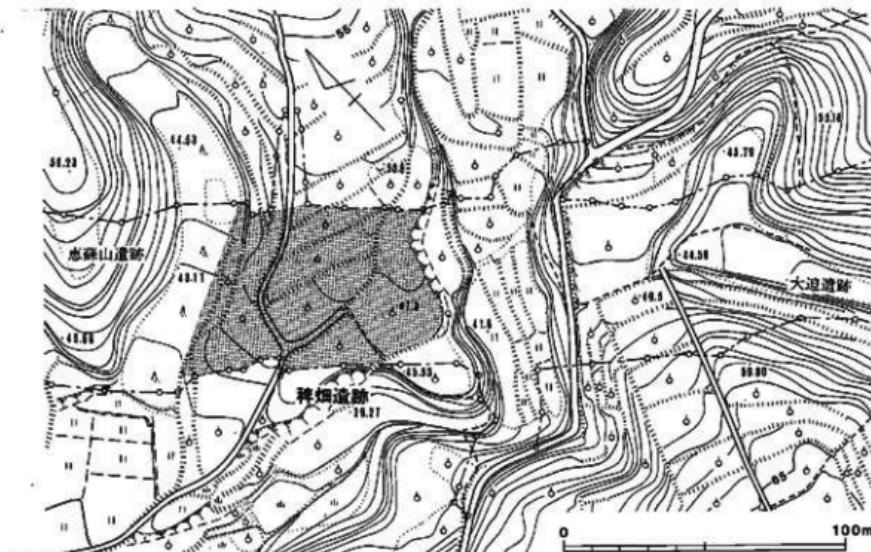
V 碑畠遺跡の調査

1. 遺跡の概要

碑畠遺跡は朝倉郡朝倉町大字山田469~472番地、字碑畠に所在し、東西を浅い谷で限られた台地上の南端部に立地する。東西の幅は70m前後と狭く、前述した谷との比高は5m内外である。台地上は言うに及ばず、谷斜面まで柿畠による開墾が進み、この調査区内も4段に造成されている。標高は北端で50m、南端で46.5mを測る。碑畠遺跡の西方は、当報告書に納めた恵蘇山遺跡で、奈良時代の竪穴住居跡2、掘立柱建物跡1などが調査されている。また、東側の谷を挟んだ大迫遺跡では、台地の南斜面を造成して營なまれた奈良時代末~平安時代前半にかけての大火葬墓群が発見された。

西側にある農業用道路を除いて全面調査を実施したが、4段に造成されたうち3段目では大規模な天地返しが行なわれている。造構配置図(付図)では1・2号住居跡のみが削平されているが、4~10号住居跡の位置関係からして削平部にも住居跡等の存在が推測される。

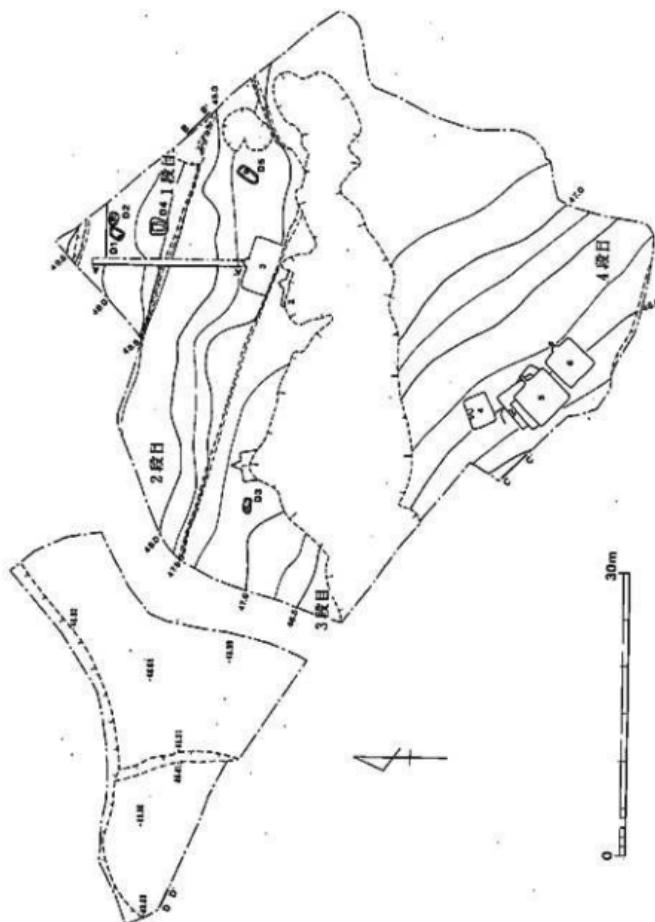
調査の結果、古墳時代終末の竪穴住居跡10、掘立柱建物跡3、溝1、柱穴群と、その下層に绳文時代早期~晩期の包含層および、土壌5が検出された。



第1図 遺跡周辺地形図 (1/2,000)

2. 縄文時代の遺構と遺物

調査区のほぼ全域にわたって縄文時代の遺物が出土したが、遺構としては5基の土壙と柱穴を検出するに留まった。土壙は1段目に3基、2段目東側に1基、3段目西側に1基と散在し



第2図 縄文時代の遺構配図と地山コンタ (1/600)

ている。遺物は縄文時代早期から晩期のものが出土し、早期～後期は北側に、晩期は南端の住居跡群周辺及び西端から纏って出土した。

(1) 層序 (図版3、第3図)

調査区の4箇所について土層図を作成した。A～A'は調査区中央部の1・2段目、B～B'は1段目北端、C～C'は4段目南端、D～D'は農道西側南端である。

遺構検出時の段階で、調査区中央部では既に4層以上を重機にて削平しており、従ってA～A'図では認められない。各箇所とも層序が一定している訳でもなく不安定である。

0層：耕土。1a層：耕作土で20～40cm。1b層：黒色土層で15cm前後。南端部のみに堆積する。2層：黒褐色土層で層厚10～35cm。古墳時代の各遺構面を覆う土層で全域に分布する。3a層：暗茶褐色砂質土層で層厚30cm前後。農道西側にはない。3b層：明茶褐色土層で、北側のB～B'断面では5cmほどだが、南・西側では15～35cmと厚くなる。この層からは縄文時代晩期末の土器が多く出土する。4a層：茶褐色粘質土で13～25cmの層厚があるが、1段目全城と2・3段目北～東側のみに堆積する。縄文時代早期～後期の土器が混在して出土。4b層：暗茶褐色土層で10～28cm。1段目～2段目の中央部付近のみに堆積する。縄文土器若干が出土。5層：暗灰色粘質土層で45～92cmと南側のみに部厚く堆積する。特にC～C'図のように溝状を呈する箇所も見られるが、この層を含めて以下には縄文土器を含まない。6a層：砂礫層で、5層との境界に部分的に疊を含む。6b層：灰白色砂層で調査区全域に分布する。6c層：灰白色砂礫層。6d層：灰白色シルト層。6層は4枚に細分されるが、互層になっているのである。西南側D～D'図では70cmほどの層厚が観察される。7層：暗赤色粘土層で層厚25cm。8層：黒紫色粘土層で多くの鉄分が沈澱する。12～25cm前後。9層：6層と類似したシルト層。

縄文時代の遺構・遺物は3・4層中に検出され、量的には3b層に縄文晩期終末が、4a層に後期～早期が多く出土した。

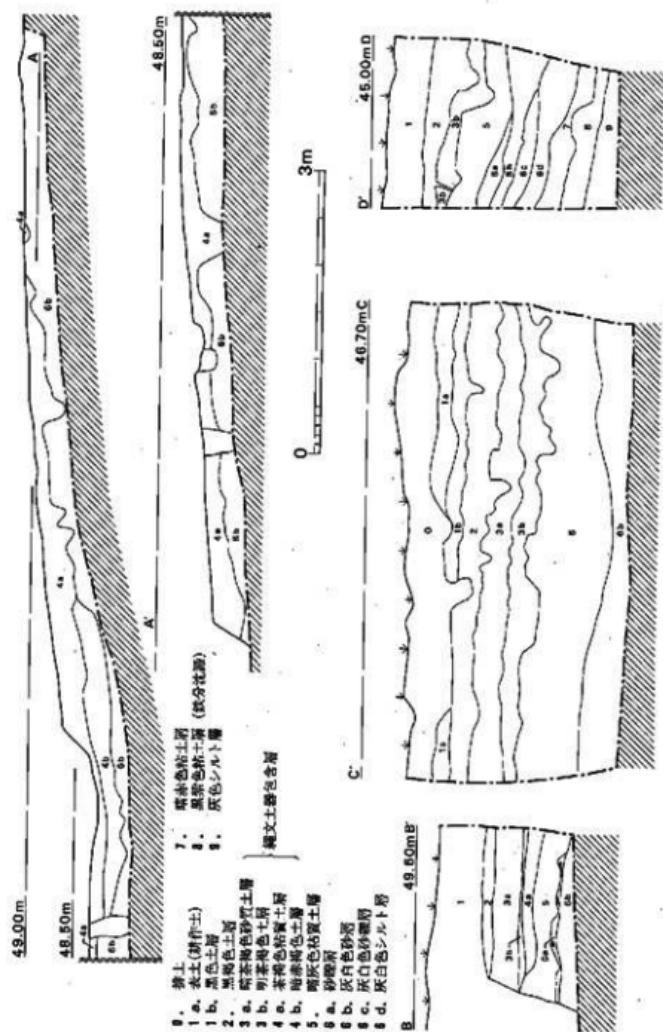
(2) 土 壤

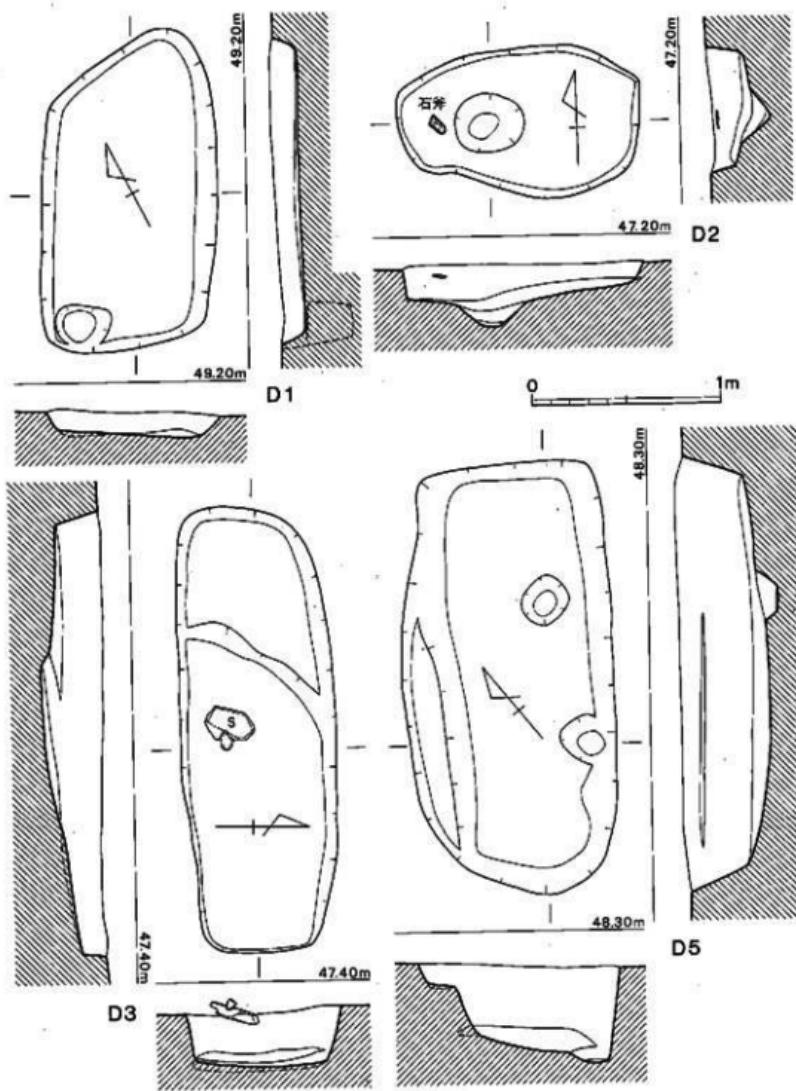
1号土壤 (第4図)

1段目の北側に2号土壤と並んで検出された。長軸をほぼ南北方向にとり、北辺が斜辺となる長方形プランの土壤で、長辺1.65m、短辺0.93m。南西隅に径25cm、深さ25cmのピットがある。床面は平坦で12cmほどの深さがある。埋土は茶褐色粘質土(4a層)で、その中より磨石・黒曜石製の剝片が出土した。

石 器 (第10・13図18・46) 18は折れているが、2.9cmと幅広の黒曜石製剝片。小さな自然面の打面があり、背面の側縁部にも自然面を残す。石核は上・下から剥出している事が判る。

第3图 土层断面 (1/50)





第4図 1~3・5号土壤実測図 (1/30)

46は長円形の磨石で、側面は平滑に近くなるまで使用される。体部も磨痕が著しく専ら磨石として使用されたものであろう。長10.6cm、幅7.3cm、厚3.9cm、重372+ α gで輝石安山岩製。時期は縄文時代後期か中期であろう。

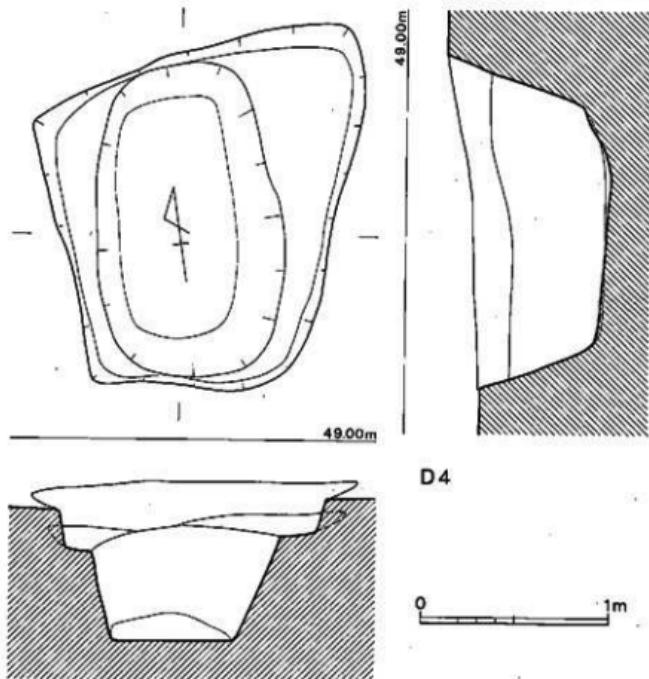
2号土壙（図版5、第4図）

1号土壙のすぐ東に位置する。長軸を東西方向にとる不整長方形のプランで、長辺1.3m、短辺0.6~0.8m。中央西寄りに30×37cmほどの円形ピットがある。床面は内に緩く探し、西へ傾斜する。堆土は1号土壙と同様に茶褐色土層で、西側上層より打製石斧が出土した。

石 器（第12図40） 緑簾片岩製の扁平な打製石斧で頭部を欠く。中央部を除き両側縁には大きな剝離が、刃部付近はやや細かい調整を施す。残長10.5cm、幅3.6~4.4cm、重89+ α g。後期墳であろうか。

3号土壙（図版5、第4図）

3段目西側に位置する。主軸を東西にとる隅丸長方形の土壙で、長辺2.37m、短辺0.83mを



第5図 4号土壙実測図 (1/30)

測る。底面は西に10cm高いテラスを持ち、その段落部が最も深くなる。土壇直上に變岩系の石材が2点あり、土壇裏の標石かとも思ひ巡らした。内より刻み目凸帶文土器らしい小破片が出土しているので、晩期終末頃なのであろう。

4号土壇（第5図）

1段目の南端近くに位置する2段掘りの土壇。上段は一辺が1.15~1.77mの不整形で深さ28~34cm、下段は隅丸長方形を呈し、長辺1.65m、短辺1.01m。床面は平坦に近く、長1.52m、幅1.16m、深0.55m。上層より石鐵と格円押型文土器が出土したが、押型文土器は整理中に紛失してしまった。

石 簸（第10図11） 暗茶褐色土より出土した石鐵で、片脚・先端を欠く円基無茎式、打瘤部を抉りの位置に置く斜片に、荒い調整を施す。長 $1.7 + \alpha$ cm、厚0.35cm、重0.6 + α gで良質な黒曜石製。押型文土器を出土しているが、石鐵からすれば、中期以降であろうか。

5号土壇（第4図）

調査区の2段目東側に位置し、3号掘立柱建物跡に切られている。隅丸長方形のプランで主軸を北東~南西方向に向ける。長辺2.3m、短辺1.1m、深さ0.48m。西壁上部にテラスがあり緩く傾斜するが東壁側は直に近い。床面は浅いU字形を呈し、北東側に径25cm、深さ10cmほどのピットを持つ。遺物は出土していないが、茶褐色粘質土を埋土としており、縄文時代の所産である。

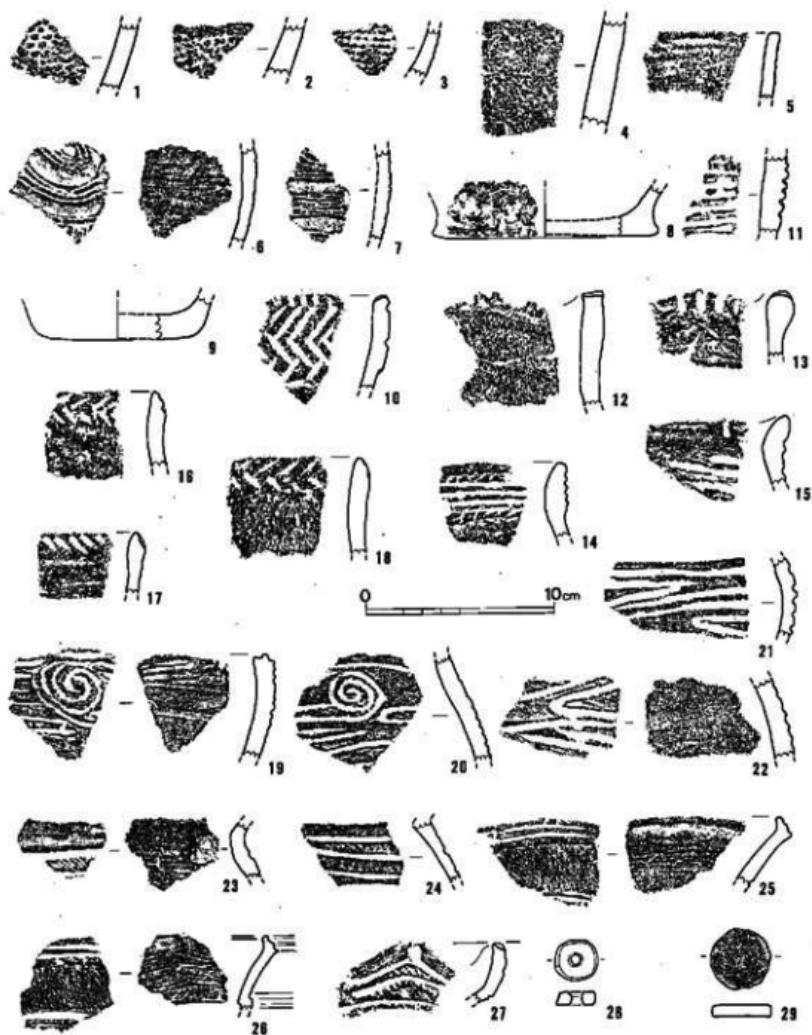


第6図 5号土壇付近調査風景

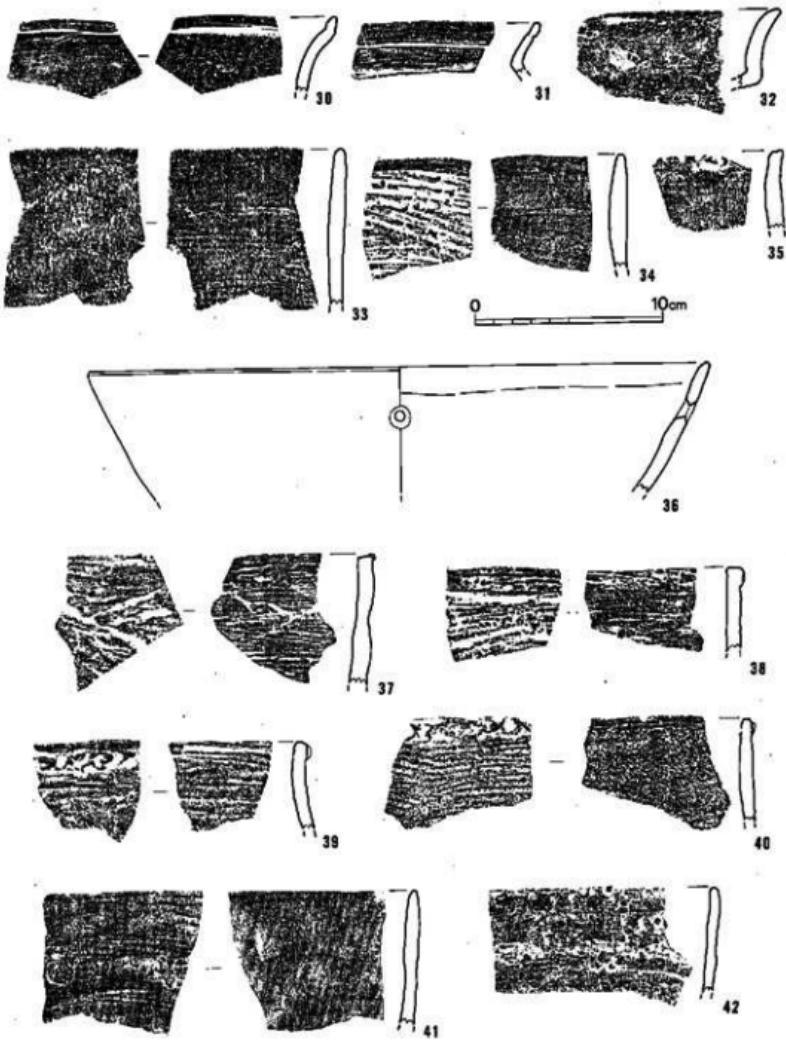
(3) 包含層出土の遺物

早期から晩期の土器・土製品・石器が出土した。量的には後期から晩期のものが多く出土するが、層位的には分離できない（図版4）。

土 簸（第7~9図） 1~3は早期の格円押型文土器である。1は粒径6mmほどの整った原体より施文。器壁1cm内外で1段目4a層出土。2は厚手で、施文が乱れている。5号住居跡埋土出土。3は格円と格子目の原体を合わせた様な文様帶である。7~9mmと3点のうちでは薄手で、3段目のP1より縦型石匙と共に伴した。4は1.4cmと分厚い器壁の無文土器の胴部片で、指圧痕が見られる。押型文土器に伴うものである。5はわずかに外反する口縁部片で、口唇部は平坦に納める。器面は風化しているが、横位の沈線が口縁部に平行して4条ほど施文される。器壁は7mmほどと薄手である。前期の曾畠式土器である。6・7は胎土に滑石を多量に含み、

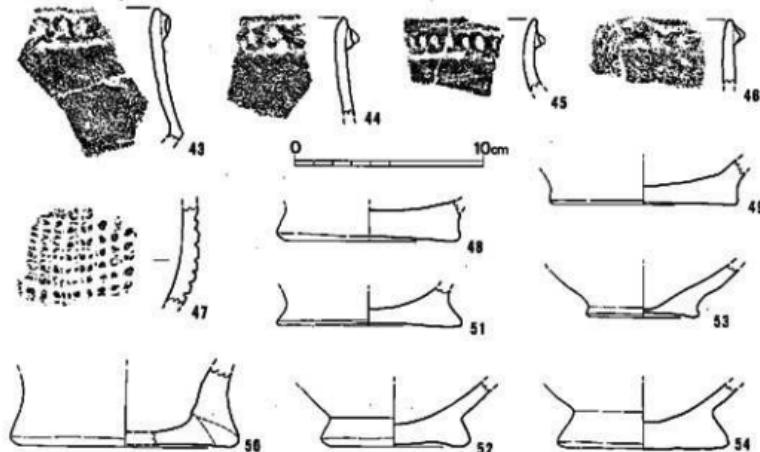


第7図 出土土器拓影1 (1/3)



第 8 図 出土土器拓影 2 (1/3)

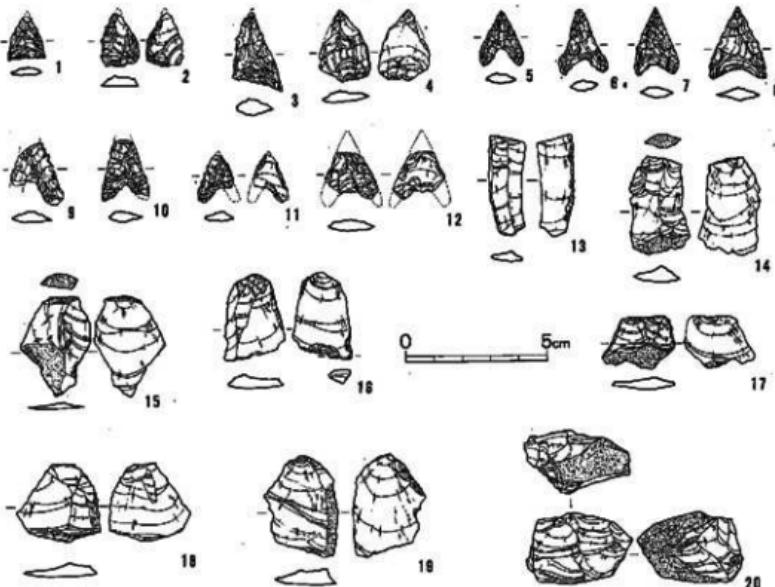
太い四線文とそれに沿った沈線文をもつ中期の並木式土器。6は3条の沈線文間に刺突を施し、7はその沈線がへら先状の短線になっている。両者とも1段目の4a層出土。8は底径12cmに復原され、指による整形痕が著しく、胎土には滑石を多く含む。9は丸味を持った底部で、径8cm、厚1.4cm。8は6・7に伴うものであるが、9は滑石を含んでおらず、形態からも前期かもしれない。10は肥厚させた口縁部にやや深めの棱松状の沈線を施文するもので、同一の原体で口唇部にも刻み目を入れる。1段目4a層上部出土。12は口唇部に続いたり目を施し内面は条痕文。13~15は肥厚させた口縁部に沈線状の刻みを施す13と、横位の沈線を持つ14・15がある。11は胴部に沈線文を横走させている。12を除き南福寺式に含まれるものと思われる。16~18は指先状を呈す口縁部で、短沈線による「ハ」字状文、斜行文を口縁部に沿って巡らす出水式土器である。19~22は沈線文で構成される鐘ヶ崎式土器である。19は内寄する深鉢形土器の口縁部を持ち、渦巻状の文様を横位の沈線が囲む。口唇にも胴部と同じ沈線を入れる。内面は条痕文のあとにナデ調整。2段目の4a層下部より出土。20は「く」字に屈曲する鉢の胴上部片。21・22は胴部片で、2本の沈線が交差する21と反転する22がある。23は頭部片で沈線下にRLの繩文を施す。24は3条の沈線間に擬繩文が見られるので北久根山式土器であろうか。25・26は同一個体で頭部で「く」字状に反転する平線の深鉢。口縁部に2条の沈線を巡らし、頭部以下にも平行する沈線が入る。沈線間には繩文が押圧されているようだ。27は波状口縁の波頂部で、波頂部は円棒状工具による押圧、沈線文間はRLの繩文と、沈線に沿って刺突文を施す。P222より出土。この3点は西平式土器である。33~40は粗製深鉢で、器面は粗い条痕文で調整



第9図 出土土器拓影3 (1/3)

される。33~35は後期に属す。37~39は口唇部の内面側の粘土を外側へ引き出し、端部を突き出させる特徴をもつ一群で、39はそこにヘラ先状工具で2段の刺突を施す。いずれも2段目4a層上層出土。40は口縁部直下にある凸帯に押圧を加える。30~32は晩期後半の精製土器で、30・31は、外面に沈線を持つ。36は口径33cmぐらいに復原できる粗製深鉢土器で、外面は擦過による。径1cmほどの補修孔があり、西南隅の調査区出土。41・42は半粗製の深鉢で、器面はヨコ方向の擦過。両者とも外面に煤が付着する。4段目南端部出土。43~46は晩期終末の凸帯文土器で、口縁直下に粘土紐を貼りつけ、大きい割み目を付す。3a層より出土。47は凸帯文土器と共に伴した、いわゆる組織文土器。外面の一単位は0.7×0.7cmの正方形。内面はヘラミガキにより平滑で、黒色を呈す。48~54は底部を一括した。50~54の様に円盤状の底部と、そうで無いものがある。48・49は後期、他は晩期であろう。

土製品（第7図28~29）28は有孔土製品。胴部破片を利用し、周辺を面取りし磨く。孔は硬い工具で上下から穿たれ、稜を持つ。径2.1~2.35cm、厚0.75cm、孔径0.5cm、重4.1gを測る。2段目4a層下部出土。29は土製円盤。やはり胴部破片を利用し、周縁を細かく面取りする。径3.1cm、厚0.6cm、重7.2gを測る。胎土には砂粒を多く含み、黒褐色を呈す。表採資料で、後

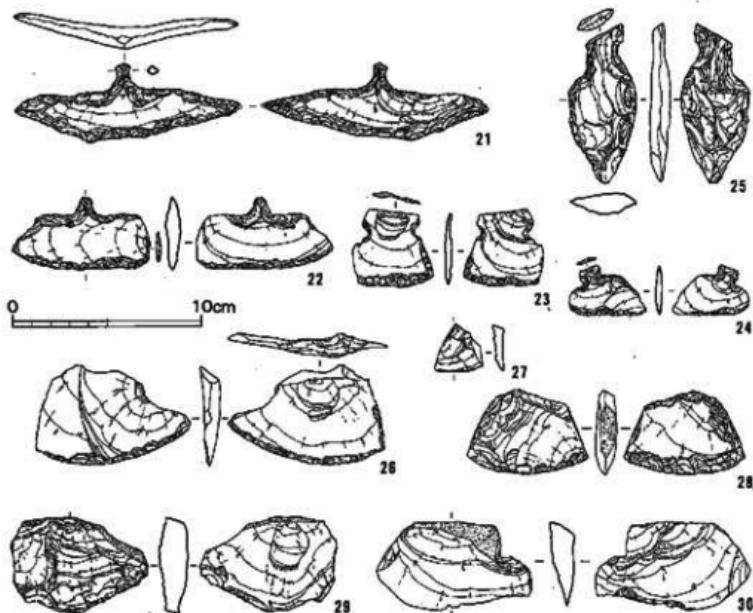


第10図 出土石器実測図1 (1/2)

期と思われる。

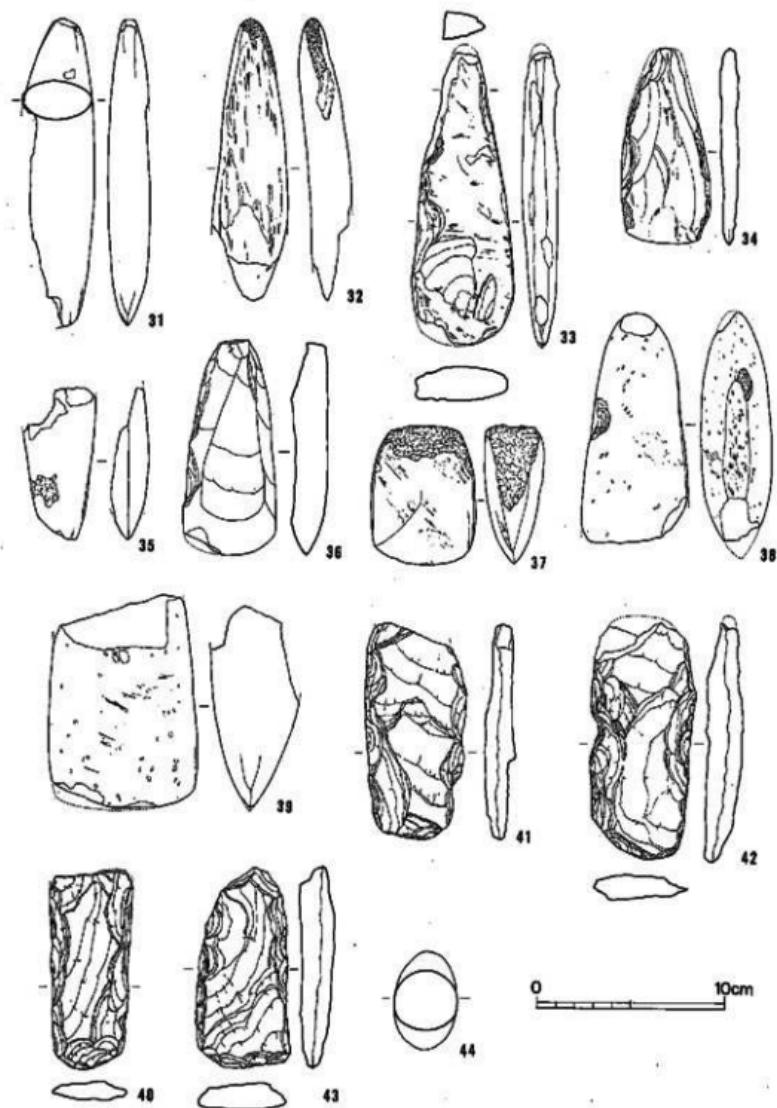
石 畈 (第10~13図)

1~12は石鎌で、基部の形態により平基式(1~4)と凹基式(5~12)に2分類される。1・3は両面調整、2・4は裏側に主要剥離面を残す。1は平坦剥離に近い調整を施す整った石鎌だが先端を欠損する。基部幅1.4cm、厚0.25cm、重0.5g。茶褐色土上層(以下4a層)出土。2は凸基に近く、周縁のみに調整を加える。長1.9+ α cm、重1 g。3は左右の刃長が異なり基部が傾斜し、先端もやや傾けるくせを有する。荒い調整を施し、先端を欠くものの2.8cmと長く、幅1.7cm、厚0.6cm、重2.1g。2段目4a層直上出土。4は寸づまりの剥片を素材とした石鎌で、打瘤は基部側にあるが除去している。長2.5cm、幅1.75cm、厚0.42cm、重1.7+ α g。2段目4a層下部出土。5はハート型の整った石鎌で完形品。調整も丁寧で、長2.0cm、幅1.6cm、厚0.4cm、重0.6g。5号住居跡付近より出土。6は両脚が広がるタイプの完形品。長2.3cm、幅1.8cm、厚0.45cm、重1.1g。7は先端の锐利な鎌だが両脚側縁は丸く納まる。長さ2.4cm、重1.15g。3号住居跡内の柱穴より出土。8は抉りの浅いもので、縦長剥片を素材とする完

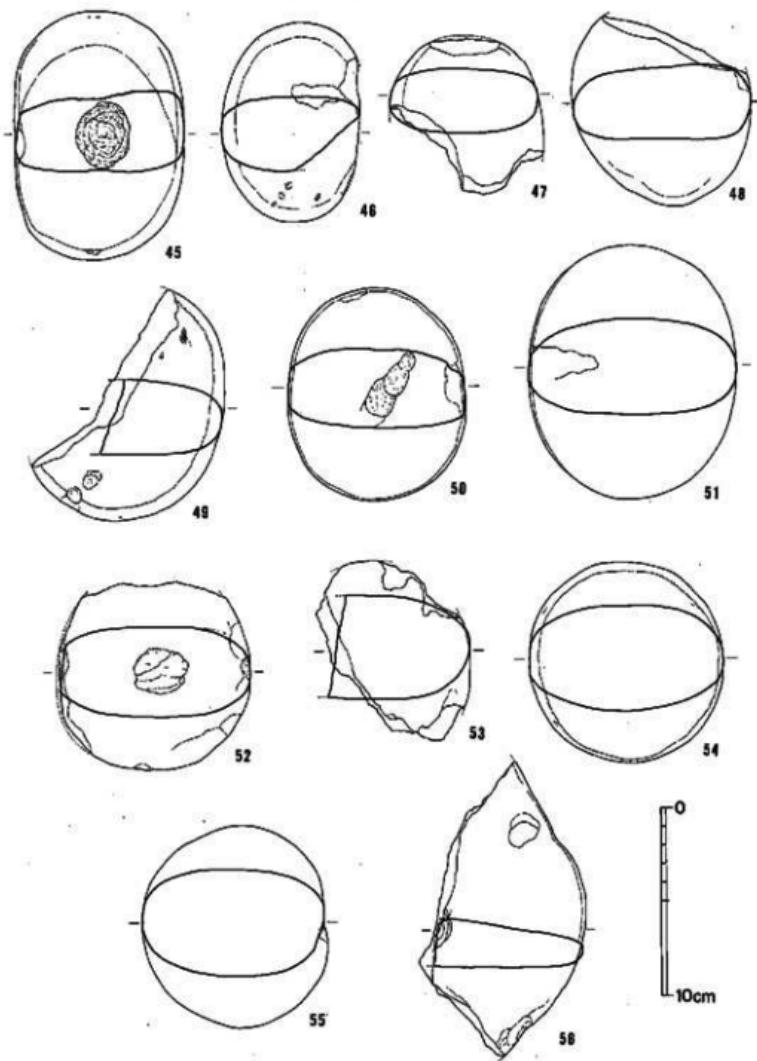


第 11 図 出土石器実測図 2 (1/2)

形品。調整はそう細かいものではない。長2.5cm、幅2cm、厚0.42cm、重1.6g。2段目の4a層最下部出土。9は先端部、片脚を欠損する鋸歯盤で、図示していないが主要剝離面を大きく残す縦長剝片を素材とする。10はやや細身・長身の鎌で西南部の3b層出土。12は体部片で1段目4a層出土。石材は3・8が安山岩、6が石英以外は漆黒の黒曜石製。13は背面に一条の棱をもち、断面が三角形の刃器で、刃こぼれが著しい。黒曜石製で、幅1.1cm、P106より出土。14~19はいずれも黒曜石製の縦長剝片で14・15は自然面の打面を持つ剝片。16は両側縁からノッチがあり、いわゆるつまみ形石器。17・19は背面に自然面の一部を残し、剝片の一側縁ないし二側縁に加工を施し刃部としたスクレーパーで、19は2号建物跡の柱穴より出土。14・15の剝片は4号住居跡付近より他に3点ほどが発見されて出土した。20は石核で打面を90度変えながら剝離している。黒曜石の角礫を用いる表採資料。21~25は石匙で横型石匙(21~23)と縦型石匙(25)の2者があり、いずれも安山岩製。21は有翼石匙とでも仮称したい整った石匙で、上・側面觀とも大空に舞い飛ぶ鳥の姿を彷彿とさせる。横長剝片を素材とし、周辺に丁寧な加工を施す。つまみ部の断面は四角形を呈し細かく仕上げる。幅12.2cm、長3.8cm、厚1.1cm、つまみ部厚0.4cm、重30g。2段目4a層下部出土。22は台形の剝片に薄手で小さなつまみを付けた石匙で、若干外弯する刃部とつまみ部周辺のみに加工を施す。この剝片の石核は打面を90度転移させていることが判る。幅7.3cm、長3.9cm、厚0.75cm、重16.5gを測り、21と同様に2段目4a層下部出土。23・24は西南部3b層より出土。21・22の半分ほどの大きさで、両者とも直線刃。23は非常に薄手で、幅広のつまみ部は両側とも単打の剝離面で形成される。打面は自然面のままで幅狭い。幅4.3cm、長4.1cm、厚0.4cm、重8.2g。24は靴型を呈し、つまみ部を斜めに付ける。23と同様にノッチ・刃部加工は浅い調整。幅4.1cm、長2.7cm、厚0.46cm、重4.4g。両者とも凸帯文土器に伴う。25は横長の剝片を素材とする石匙で、主要剝離面側(右)は階段状剝離が施され、背面の両側縁の調整は、つまみ部の抉りを含めて入念に行なわれる。長8.4cm、幅3.7cm、厚1.2cm、重32.3gを測り、3段目のP1より押型文土器(第7図3)と伴出。26~29は削器で安山岩製だが、他に黒曜石製の削器も出土している。いずれも横長・幅広の剝片の末端部に外弯した刃部を有するもので、28・29のように打面に自然面を残すものが多い。26は幅8.3cm、長5.3cm、厚1.05cm、重38gで、入念な打面調整を施す。P337出土。27は1段目4a層上部出土の欠損品。28は幅6.6cm、長4.4cm、厚1.15cm、重35gを測り、3段目4a層中部から出土。29は幅7.4cm、長さ5.1cm、重68.5gを測り、2段目4a層上部出土。30はそうした削器の素材となる剝片で、打面は自然面であり、锐利な末端部には刃こぼれが見られる。1段目の4a層上部より出土。31~39は磨製石斧。31~33は長身で頭部が狭く、刃部が蛇刃になる乳棒状石斧で、いずれも蛇紋岩製。31は全面丁寧な研磨、32の頭部には密な敲打痕をそのまま残す。33は頭部を欠く資料でやや薄手。原材料から荒削りし調整剝離を加えた段階の剝離面内にも研磨痕がみられる。図中左側縁の折断面に部分的に残る研磨痕は、破損後のものである。31がほぼ全形を残し、長



第 12 圖 出土石器實測圖 3 (1/3)



第13図 出土石器尖端圖4 (1/3)

16.4cm。いずれも4a層上部より出土。34は8~9mmと薄手の泥質片岩を素材とした両刃の石斧で、整形時の凹凸が著しく、凸部は研磨されるが特に刃部周辺は丁寧な研磨を施す。長11.5cm、幅4.6cm、重61g。33・42と共に出土。35~39は蛤刃石斧であるが形態は多様である。35は38と類似するもので、蛇紋岩製の体部全面には敲打痕が残り、側縁は平坦面を有する。2段目4a層上部出土で輝石安山岩製。36は楔形を呈し厚さ2cmに未だない玄武岩の縱長剝片を素材とし、刃部両面の2cm間を研磨している。左側縁には調整剝離面をそのまま残す。長11.4cm、刃部幅5cm、重165gを測る。1段目4a層直上出土。37は小振りの石斧で、頭部から側縁上半に細かい敲打痕が顕著に残る。石材は厚味のある硬砂岩を用い、体部から刃部にかけての研磨は非常に丁寧。長7.3cm、刃部幅5.7cm、厚3.2cm、重230g。3段目の採集品。39は大型蛤刃石斧で厚さ4.5cmを測る。P293より出土し輝石安山岩製。40~43は板状の石材を用いた短冊形の打製石斧で両側縁から荒い調整剝離を施す。41は泥質片岩製で長11.3cm、幅4.8~5.3cm、厚0.8~1.6cm、重120g。42は両側縁の中央付近に浅い抉り込みの加工を施すもので、綠泥片岩製。43は長10.5cm、幅5cm、厚1.5cm、重130gを測る綠泥片岩製で、2段目4a層上部出土。44は卵形を呈する石器で全面磨かれている。いわゆる投弾状石製品（石弾）であろう。長5cm、厚3.5cm、重85gで、2段目4a層下部出土。45は長円形を呈す凹石の完形品で、表裏両面とも中央部に敲打による凹形の窪みを有するが、深さは2mmほどである。長13.3cm、幅9.1cm、厚4.2cm、重845g、2段目の4a層直上出土。46~55は磨石で長円形を呈すもの（46~51）と円形に近いもの（52~55）の2つのタイプがある。周縁は整形時の敲打痕をそのまま残すものが大部分で、体部は使用磨痕が著しい。周縁に縞を持つ（47・49・50・54）ものも少なくなく、48・50・52のように中央部が若干窪む例もある。47は二次的に火を受け赤化する磨石で、4a層中部出土。48は2段目4a層下部出土。49は7号住居跡の埋土出土。50は長11.3cm、幅9.5cm、厚4.2cm、重700gで、P63より出土。51は長円形のものでは最大で、長13.5cm、幅11.1cm、厚4.9cm、重1,140gに達する。2段目4a層下部出土。52は2段目4a層中部、53は上部出土。54~55は西南部の3b層より共伴したもので、54は径10.5cm前後、厚5.7cm、重935g。55は片側に自然の窪みがある。径10.7cm、重865g。石材は輝石安山岩（47・49~51・53・54）、雲母安山岩（48・52）、玄武岩質安山岩（55）である。56は石皿と思われる石器で輝石安山岩製。4a層出土。これらの石器のうち、その所属する時期が特定できるのは次の通りである。早期は8の石鎌、21の横型石匙、25の縦型石匙。22も前期以前かもしれない。中~後期には1~4・7・9の石鎌、26~30の削器、31~43の石斧類、45~53の磨石、56の石皿が、晩期は5~10の石鎌、13~16・19の刃器、縦長剝片、23・24の横型石匙、54・55の磨石が該当しよう。

3. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は竪穴住居跡10、掘立柱建物跡3、溝1と柱穴群である。その配置は、西側に1号竪穴住居跡が単独であり、中央部北寄りに2・3号竪穴住居跡、3号掘立柱建物跡、溝が位置する。南側には4～10号竪穴住居跡、1・2号掘立柱建物跡が縦まる。このうち5・7～10号竪穴住居跡は短期間での重複関係が認められ、最終的に調査区を拡張したので、遺物の混在が危惧される。前述したように、調査区中央部に大きな削平部があるので、この箇所にも遺構の存在が予想されるが、数はその配置から見て多いものでは無いだろう。また、農道西側、調査区東側では柱穴が若干検出された程度である。従って、集落は調査区南側にその中心があると判断され、今回はその一部を調査したと言えよう。時期的には古墳時代終末頃で、一部奈良時代に下る資料もある。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版9、第15図）

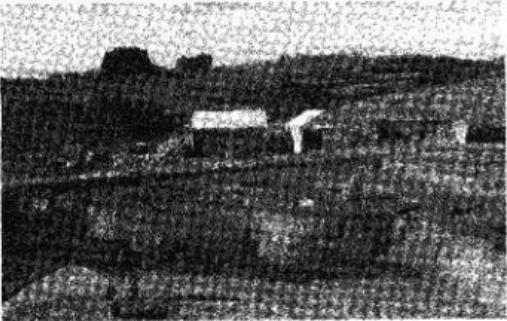
調査区の中央部西寄りに検出されたが、南半分は削平されている。方形のプランを呈し、北壁長3.15mと小振り。床面から40cmほど掘り込まれた主柱穴（P1・P2）があるが、本来は4本柱。

カマドは北壁の中央に付設され、燃焼部が底より50cmほど張り出す突出型で、その先に長104cm、幅23～30cm、深20cmほどの煙道が付く。先端部の煙出しは一段深く掘り下げている。燃焼部は幅44cm、袖部は50cmほど残存し、火床面と接する部分は良く焼け固く縮まっている。

遺物は、古墳時代と考えられる土器が数点出土したのみである。

2号竪穴住居跡（図版10、第16図）

調査区の3段目、中央部に位置する住居跡であるが、土取りによる擾乱により北壁と西壁の一部を残すのみである。他の住居跡と同様にカマドが住居跡北辺の中央部に付設されるとすれば4.4mの隅丸方形プランを呈するのである。壁から10cmほどで床面となるが、固く縮まっている。



第14図 1号竪穴住居跡と中央部の搅乱

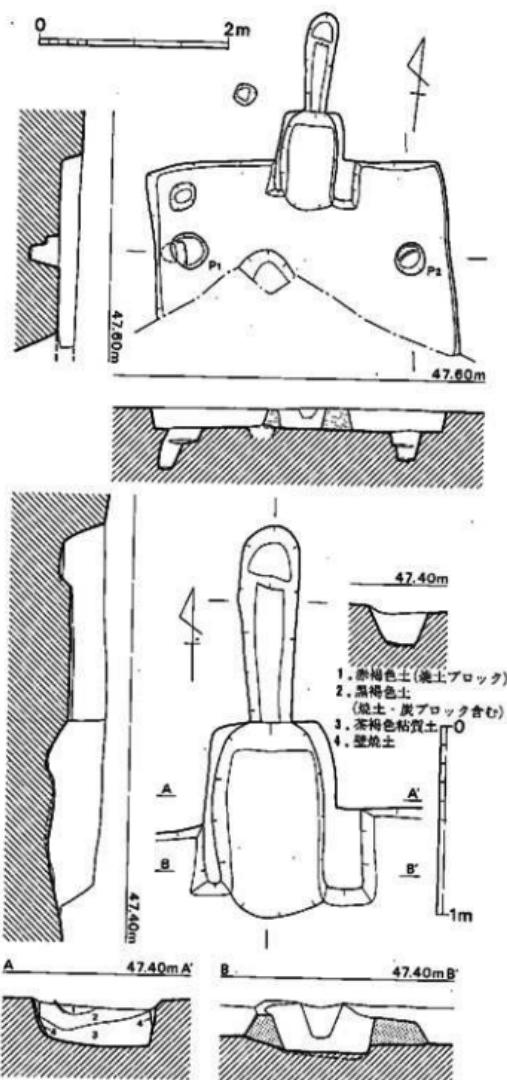
カマドは燃焼部中央から奥を突出させるタイプで、幅48cm、奥行き95cmある。袖は幅10cmほどの粘土帯が巡る。煙道は幅28cm、長50cmで、燃焼部から直ぐに下って、煙出し部の痕みとなる点、3・5号住居跡のものと相違が見られるが、短い煙道と考えれば1・5号と類似している。土師器甕が少量出土した。

土師器（第18図1・2）1・2とも肥厚させた口縁部を「く」字に外反させる變の破片で、両者とも口唇部に平坦面を持つ特徴がある。2点とも埋土出土であり、古墳時代終末頃の住居跡としておきたい。

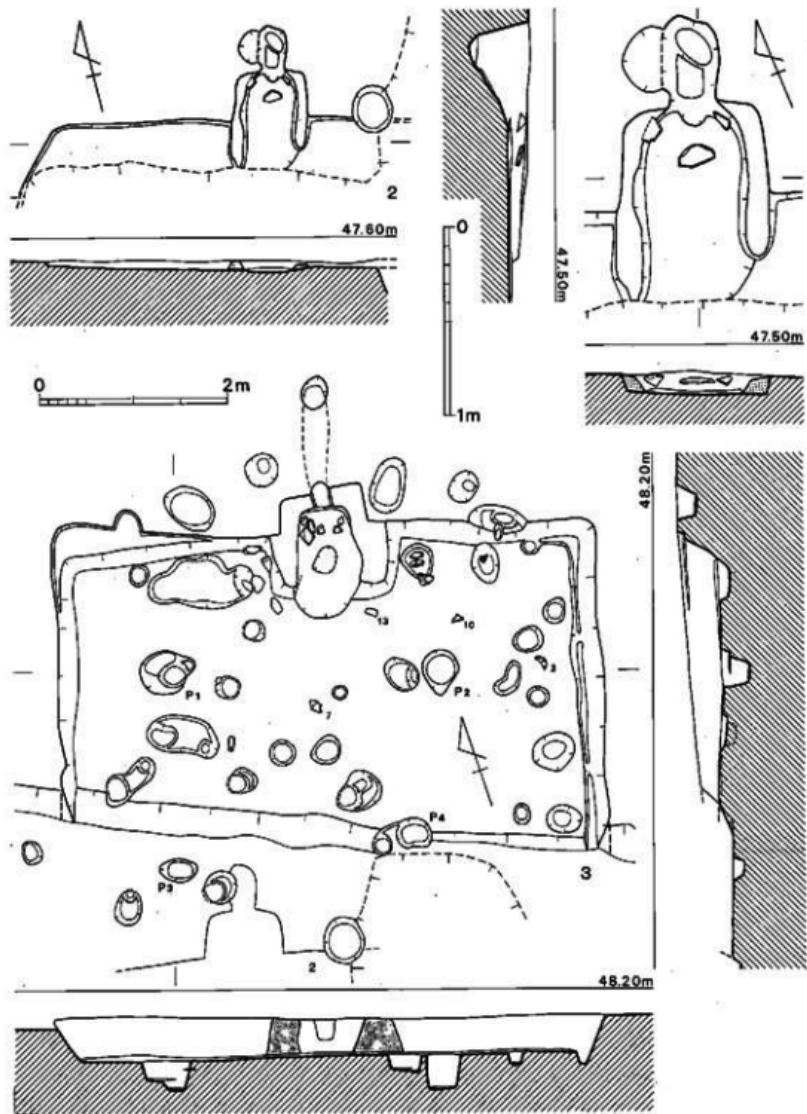
3号竪穴住居跡（図版10、第16・17図）

2段目の中央部に位置する住居跡で、南側1/3は削平されている。北壁の東西辺5.8mと当遺跡群で最大。東壁のみに壁溝があるのは5・7号住居跡と同じである。4本の主柱穴全体とも西壁側に片寄っており、P1・P2間2.9m、P1・P3間2.1mと南北に短い点を考慮すると、南北辺は4.5mほどのかも知れない。

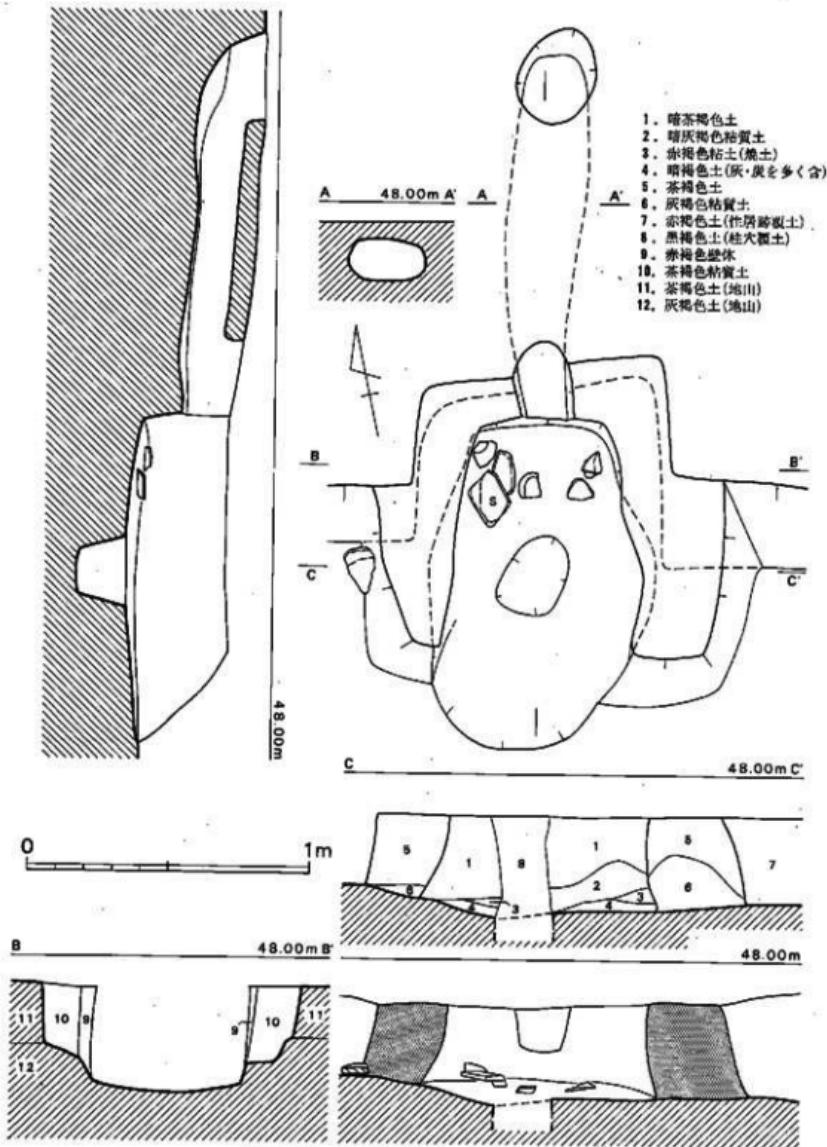
カマドは北壁中央部に付される突出タイプのもので、最も進存度が良い。燃焼部の袖は65cm



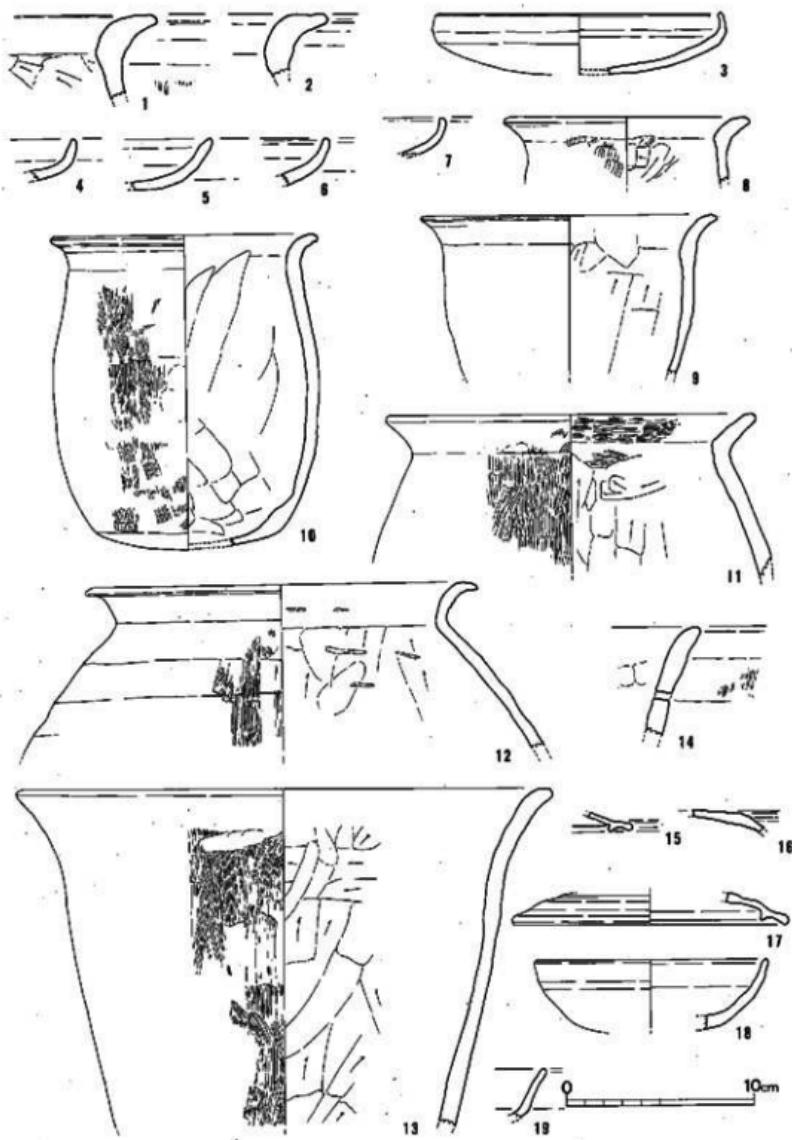
第15図 1号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第 18 図 2・3 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60-1/30)



第 17 図 3号竪住居カマド実測図 (1/20)



第 18 圖 2・3 号 穴居出土器実測図 (1/3)

高さ32cmほど残り、壁体内面の手前は内側に張り出し、奥は内弯する。全面が良く焼け、赤色の壁面(土層9)となっている。煙道はトンネルとなり1.55mで煙出しになる。煙道の断面(第17図A~A')は長径27cm、短径15cmの長円形を呈し、内には黒褐色土が詰まっていた。

出土遺物は、床面まで40cmと比較的深かったにもかかわらず少なく、床面より土師器皿(3)、瓶(13)、須恵器壺(18)が、カマド内より土師器甕(9~11)が出土したに留まった。

土師器(第18図3~14) 3~7は皿である。3は胴上半から直角に近く屈曲して口縁部に移行する器形で、外面は摩滅しているため不確実だが、ヘラ磨きを施しているらしい。口径15cm、器高3.15cm。8~12は甕である。いずれも内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整を施す。10はほぼ完形品で、口縁部の外反も弱く、胴部の張りも少ない。口唇部にヘラ先による沈線が巡るのは7号住居カマド出土の甕(第26図55)と同じである。口径14.1cm、器高16.4cm。11は平べったい「く」字形の口縁部で、内口縁にも横方向のハケ目を施す。外面口縁部付近に煤が付着する。カマドの袖内より出土。口径19.6cm。12は大きく外反させた口縁部の先をなお下側に返したもので、胴部はかなり張る。輪積み痕・指捺えが判る。復原口径20.8cm、残高8.9cm。13~14は甕であるが把手を欠く。13は外方でそのまま広がる器形で、口縁部下2cmからハケ目、ヘラケズリを施す。口径28.5cmで、全外面に煤が付着する。14は口縁部破片で、焼成後の穿孔がある。

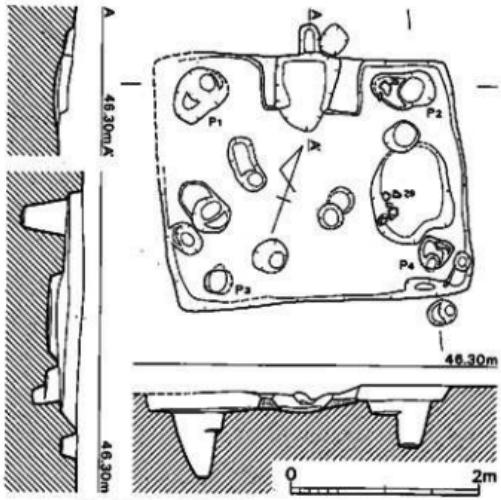
須恵器(第18図15~19) 15~17は浅い身受けのかえりを有する器高の低い蓋で、つまみが付くのである。天井部付近のみに回転ヘラケズリを施す。17は復原口径14.6cm、残高1.7cm。18~19は环身で18は若干内弯ぎみ

に立ちあがる。復原口径12.3cmを測る。

出土遺物から7世紀後半頃の時期であろう。

4号竪穴住居跡(図版12、第19図)

調査区の南側、7~9号住居跡の北側に検出された。東西辺3.2m、南北辺2.65mの長方形プランであるが、北西壁は試掘トレンチで削平してしまった。四隅に近い位置に各主柱穴(P1~P4)があり、P1は70cmほど掘り込まれる。床面まで20cmほどしかないが、



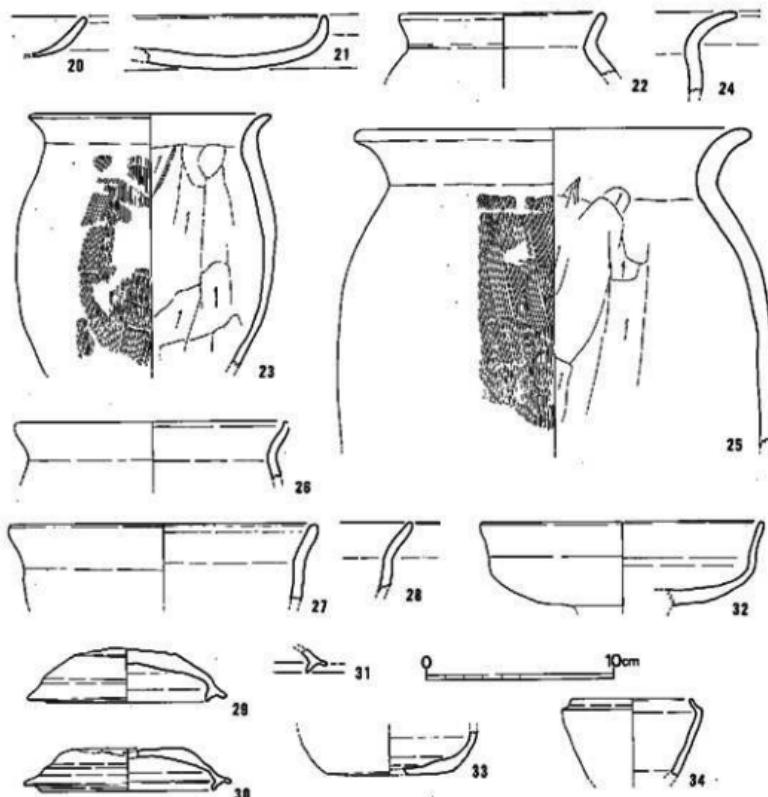
第19図 4号竪穴住居跡実測図(1/60)

良く踏み締まっている。

カマドは北壁中央に築くが、燃焼部は壁内に納まり、40cmほどの短い煙道が延びる。袖の残りはあまり良くなく、50cmほど粘土質の整体が遺存する。

遺物は、土師器・須恵器がカマド(23)、床面(29・30)、柱穴等より出土した。

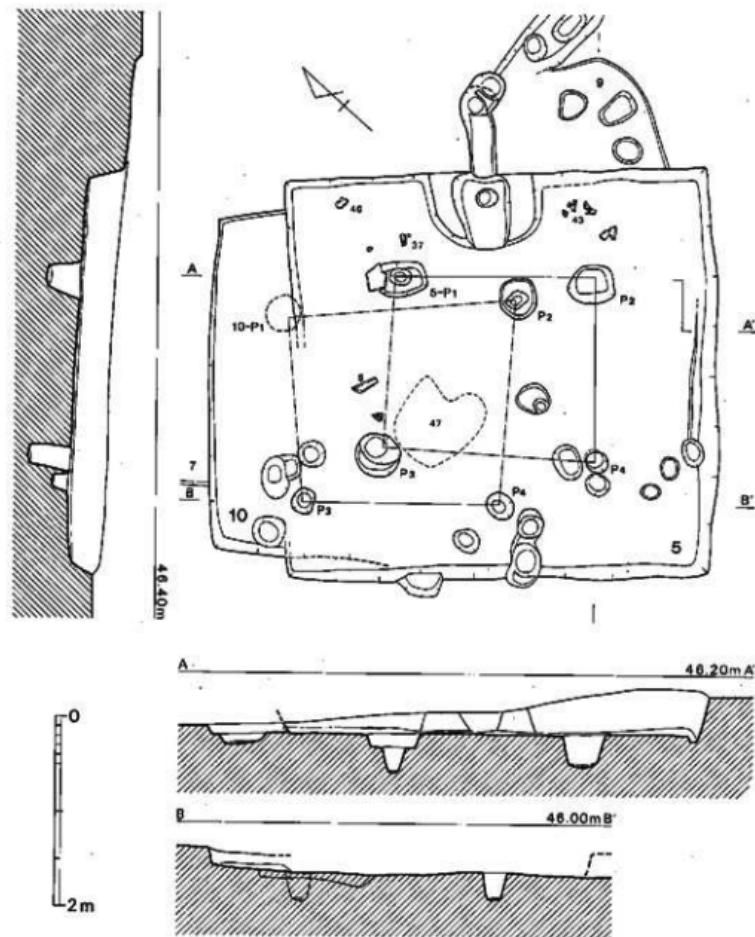
土師器(第20図20~28) 20は深みのない壺の口縁部片で、胴下半はケズリらしい。21は盤であろう。調整等は摩滅し不明。22~25は甕で大小がある。23は緩く外反させる口縁部に、最大径が胸部にあると言え、張りの少ない器形。外面はハケ目、内面は下から上方向のヘラケズリを頭部まで施し、そこにケズリ稜が入る。口径12.9cm、残高13.5cmを測る。25はやはり胴下半部から底部を欠く。口径21cmで、頭部から大きく外反させる口縁部と、張りのない胸部を持



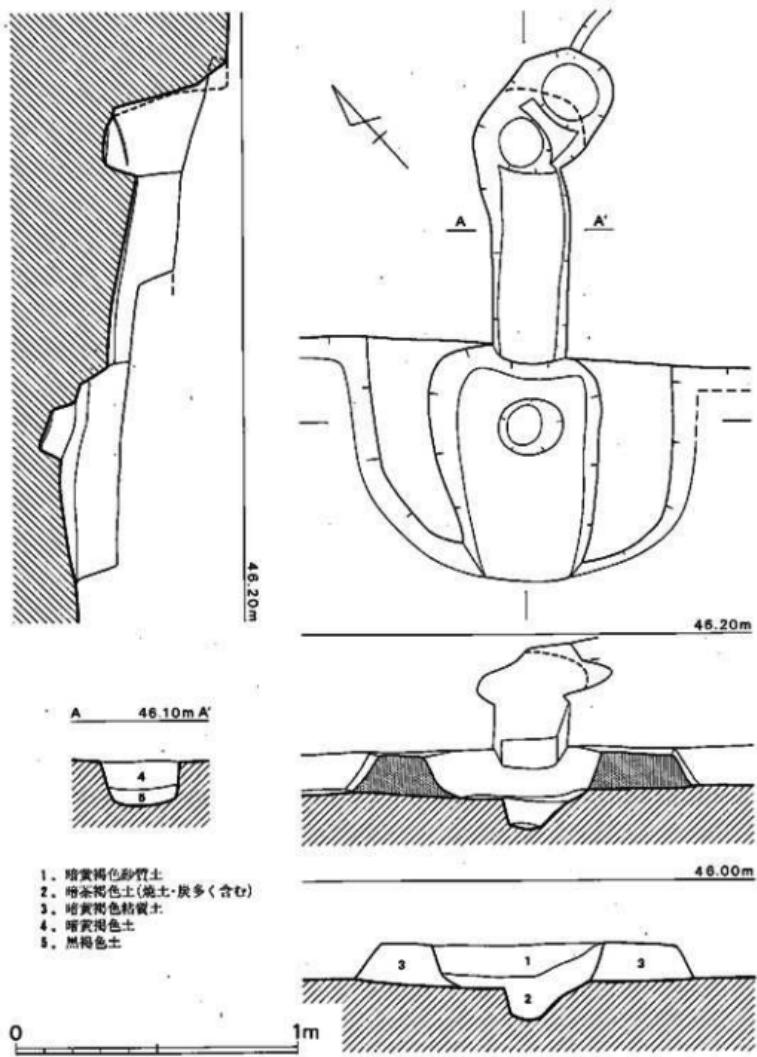
第28図 4号窯穴住居出土土器実測図 (1/3)

つ。P2より出土。26~28は鉢で、口縁部付近の破片から復原。頭部から緩く外反する口縁部は、いずれも内窵しており、口唇部でかすかに内傾する。器壁はいずれも6mmほどで、胎土は精製されている。28が口径16cm程度。

須恵器(第20図29~34) 29~31は受け部を有す蓋で、受け部上端とかえり部の下端の幅は3~5mmほどある。29は天井部付近に回転ヘラケズリを施すが、30はナデ。内面は不定方向のナ



第21図 5・10号竪穴住居跡実測図 (1/60)

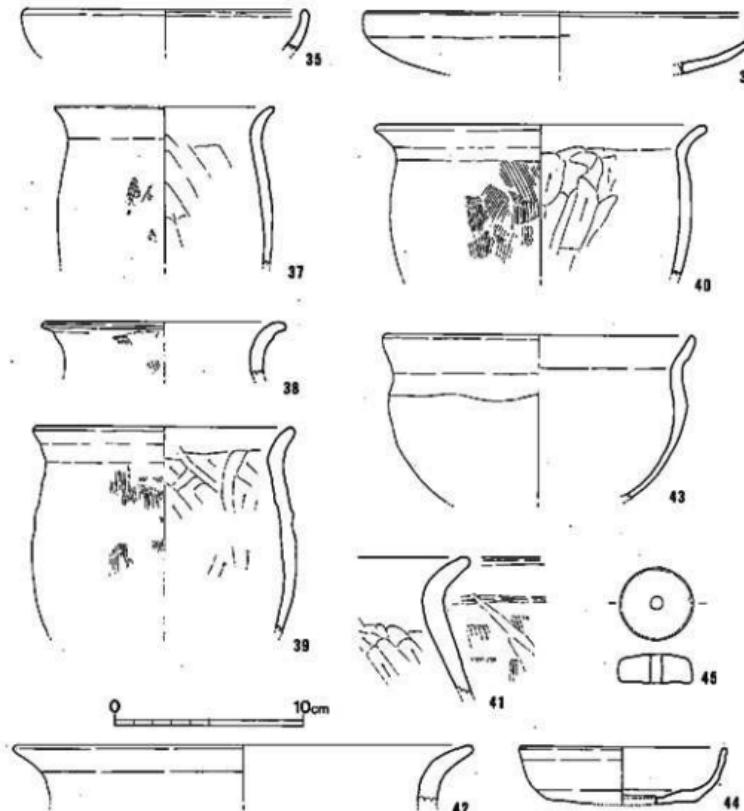


第22図 5号竖穴住居カマド実測図 (1/20)

デ。29の口径10.6cm、かえり部径8.55cm、器高2.9cmで、天井部に2本線のヘラ記号がある。32は壺部中央部で反転して外反する高壺の壺部片で、下半部は回転ヘラケズリ。口径14.8cm。33・34は鉢で、34は口縁部を逆「く」字状に内傾させ、薄手で精良の山米である。口径6.2cm、残高4.3cm。出土遺物から7世紀中葉頃の住居跡であろう。

5号竪穴住居跡（図版13～15、第21図）

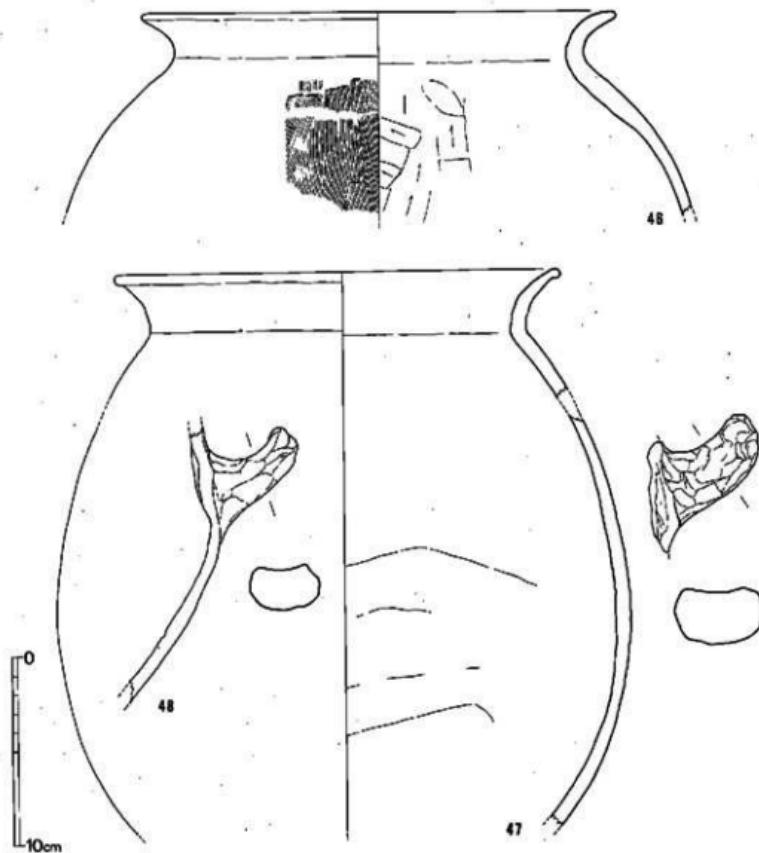
調査区の南端で検出された住居跡で、7・9・10号住居跡と切り合い、最も新しい住居跡である。長辺4.5m、短辺4.34mとほぼ正方形に近いプランであるが、北西壁は調査時点では把え



第23図 5号竪穴住居出土土器・石製品実測図(1/3)

られず掘り過ぎているが、7号住居跡を切っているのは誤りない。P1～P4の主柱穴間は約2.2m、4.9m²のエリアがあるが、住居跡の大きさに比べて主柱穴の位置が各壁より1mほど内にあるので、全体が狭く感じられる。カマド前面及び主柱穴内の床面は良く踏み締められている。東壁側のみに一部壁溝を検出したが、他では不明。

カマド（第22図）は北壁中央に付設されるが、4号住居跡と同様に燃焼部は壁内に納まり、10cm高い位置から煙道が1mほどのびる。煙出しは10cmほどの窪みとなり、雨水等が燃焼部に



第24図 5号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)

逆流しない構造となる。カマドの袖は長さ70cm、幅30cmの粘土層として遺存する。燃焼部の幅45cm、奥行き70cmで、火床面に支脚を置いた抜き跡がある。

出土遺物は割合豊富で、床面から甕(37)、鉢(43)、滑石製紡錘車(45)、カマド内より甕(39)、47の瓶は床面より10cm浮いて出土した。

土師器(第23・24図35~43、46~48) 35は内窯する口縁部の壺であるが、あまり深みはないと思われる。復原口径14.8cm。36は口縁部付近で内に屈曲する皿で、器高は3.5cm未満、復原口径21cm。この両者とも調整はヨコナデ。37~42・46は甕で小型~大型のものがある。調整は内面頸部以下は底部から口縁部方向のヘラケズリ、外面も頸部以下に継ぎし斜めのハケ目を施すが、口縁部のほとんど外反しない38は口唇部付近までハケ目がみられる。37~40は口径が18cm未満と小型のもので40は口縁部の外反度が強い。46は口径25.2cmに復原されるが、胴部の張りが他とは異なり極めて強い。外面のハケ目は非常に緻密である。43は鉢で、胴下半はケズリにより薄手。胎土は精良で、化粧土を掛けている。口径16.5cm、残高8.7cm。47・48は瓶である。47は口唇部を玉縁状に作り出すもので、須恵器的なイメージがある。口径23.7cm、胴部最大径30.4cmで、胴下半部には煤が付着する。48は把手を付けた胴部破片である。両者とも器壁が7mm前後で精良な作り。

須恵器(第23図44) わずかに1点のみ出土した环身で、底部から若干内窯ぎみに立ちあがる器形。底部は回転ヘラケズリで上半は回転ナデ。口径10.9cm、器高3.05cm。

石製品(第23図45) 滑石製の紡錘車で、上面は円弧をなす。径3.8cmの正円に近く、厚1.5cm、孔径0.6cm、重39.5g。

出土遺物から7世紀末から8世紀前半に位置付けられよう。

6号堅穴住居跡(図版16、第25図)

調査区の南側、5号住居跡の東に隣接する。東西3.8m、南北4.1mと30cmほど南北方向に長い方形プランの住居跡である。柱穴は床面から40cm掘り込まれP1・P2間は1.8m、P1・P3間は2.1mを測る。その中央部に径100×78cm、深12cmほどの浅い椭円形の掘り込みを持つ。

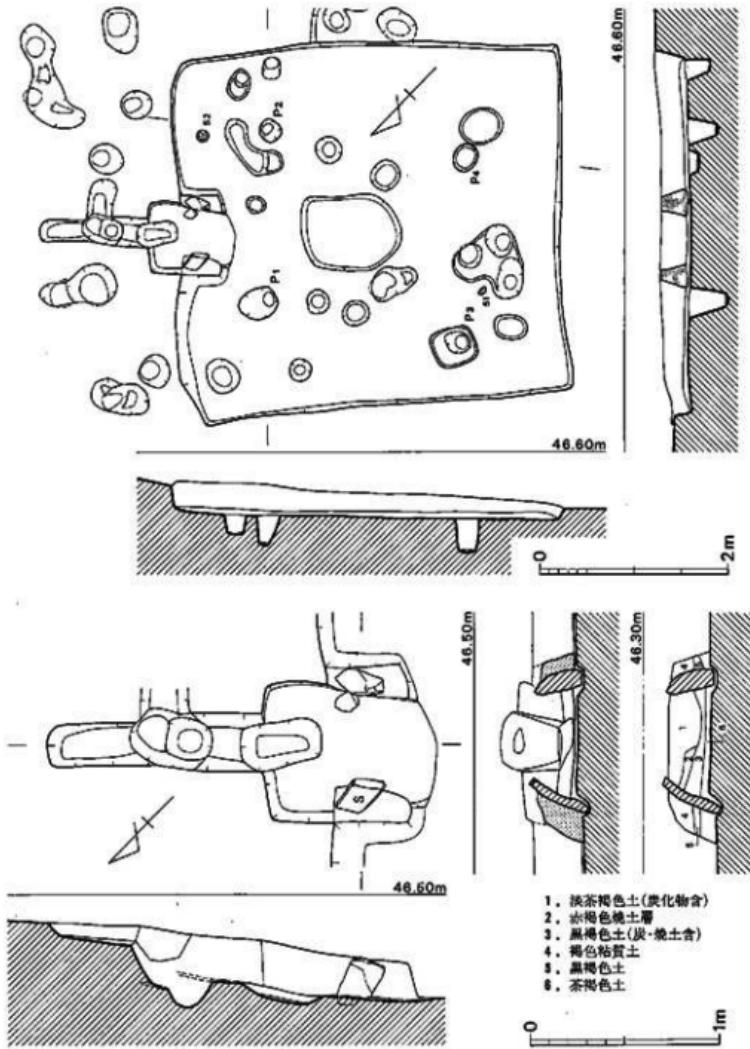
カマドは北壁中央部に設けられた突出タイプのものである。燃焼部の両袖は扁平な石材を内傾させて袖石とし、周囲を粘土で覆う。幅55cm、奥行き92cmで、煙道との移行部が窪む。煙道は燃焼部と目立った段をつけずに、1.1mほど延びるが、煙出部の窪みはない。この煙道のタイプは3・4号住居跡と似ているが、当煙道の方が煙出しから燃焼部への傾斜が強い。

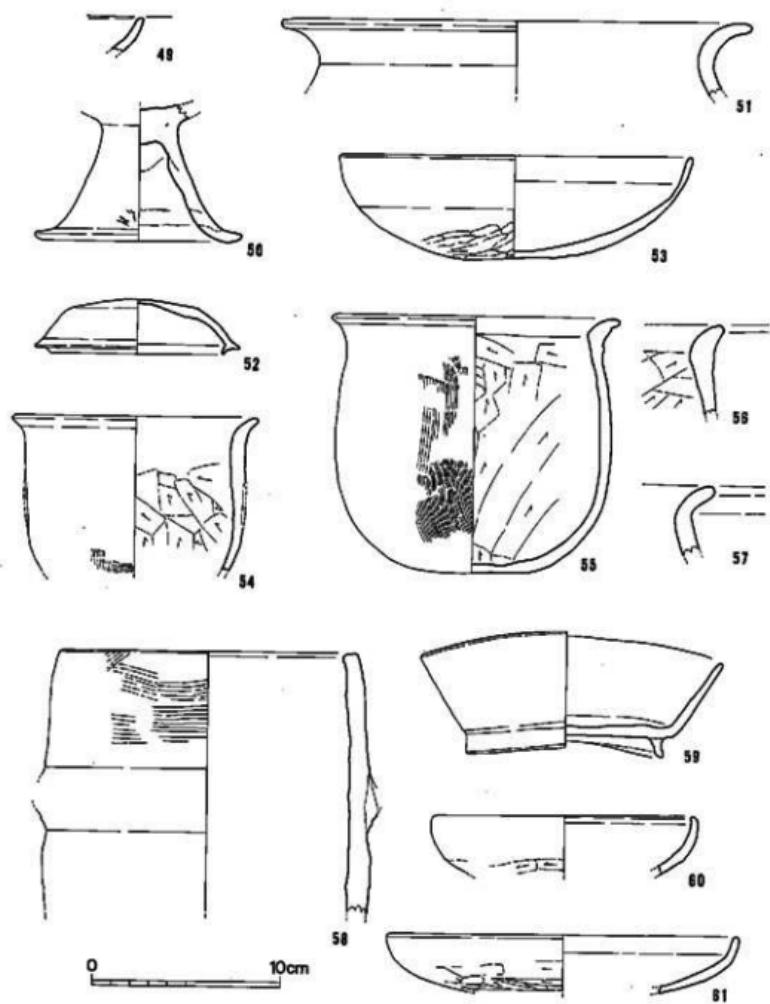
出土遺物は土師器甕の口縁部(51)や須恵器蓋(52)が床面から出土した。

土師器(第26図49~51) 49は壺ないし壺の口縁部。50は高環の脚部で、脚端部は丸味をもつ。51は甕の口縁部破片で、大きく外反する口縁部は肥厚しない。口径24.8cm。

須恵器(第26図52) 浅い身受けのかえりのある蓋の完形品。摩滅により調整は不明である。

第25圖 6号竖穴居跡・カラマツ実測図 (1/60・1/30)



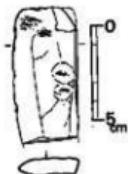


第26図 6～8号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)

口径10.8cm、器高2.9cmを測る。図示していないが、同じかえりを持つ口縁部の極小破片がP1内より出土している。

出土した土器より7世紀中頃の時期であろう。

石 器(第27図) 板状の片側が石庖丁状の刃部に似るが刃として機能するほど鋭いものではない。体部中央の両面が浅く溝状に磨痕があるので、仕上げ砥石として用いられたのであろうか。厚1cm、幅3.5cmの砂岩製で、P1出土。



7号竪穴住居跡(図版17、第28図)

5・8~10号住居跡と重複し、8・9号住居跡を切り、5・10号住居跡に切られる。遺存した北側の壁から4.15×4.3mのほぼ正方形プランを呈す。北東壁の中央部のみに壁溝がみられる。4本の主柱穴のうちP1はその存在が判っていたが、P3については確認されていない。

第27図 6号竪穴住居
出土石器実測図(1/3)

カマドは北西壁の中央部に設けられ、燃焼部が壁内に納まる非突出タイプのものである。袖の遺存度は悪く、粘土質の土壤60cmほどが壁体と判断される。燃焼部の幅65cm、奥行き93cmで、支脚を据え付けた穴等は無かった。遺物は床面より土師器塊(53)、カマド内より甕(54・55)と煙突(58)が出土した。

土師器(第26図53~58) 53は塊で、胴中部以下はヘラケズリのあとミガキを施し、底部はそのため平底化している。上半部内外面はヨコナデ、それ以外は不定方向のナデ。口径18.7cm、器高5.5cmと深みがあり、精良な胎土を持った良品。54~57は甕である。54は頸部のくびれ度が弱く、口縁部を肥厚させない。55は口縁部から頸部を肥厚させ、内頸部に明瞭な稜を作り出す。底部は平底に近く、胴部はあまり膨らみを持たない。なお、口縁部直下にヘラ先による細沈線が巡る。いずれの甕も外面の頸部以下はハケ目、内面はヘラケズリを施す。55の口径15.2cm、器高13.6cm。58は復原口径15.8cm、胴部径17.4cmと筒状の器形で、色調が他の土器と異なり肌色を呈す。外面は横方向のハケ目で胴上半に把手状のものが付くかもしれない。カマド内埋土の上層から出土しており、煙突の可能性もあるが、内面が煤で覆われている訳でもない。

須恵器(第26図59) 高台付塊であるが、ひずみが著しい。底部から外方に広がる器形で、高台はやや長く、外に踏ん張る。口径12.5~16cm、器高6.75cm。

出土遺物から7世紀末頃から8世紀前半であろう。

8号竪穴住居跡(図版17、第28図)

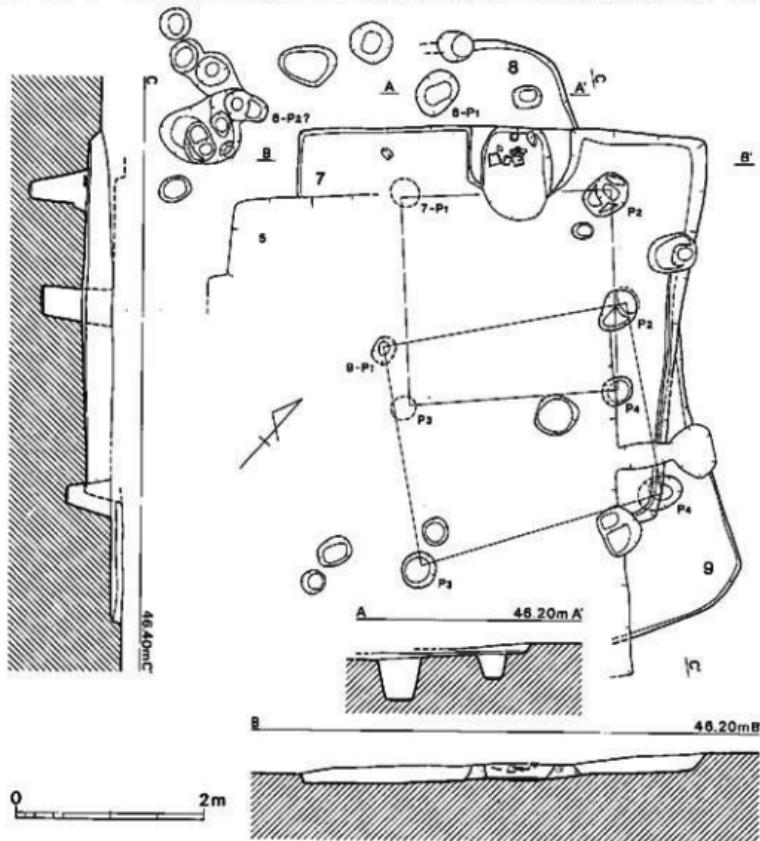
7号住居跡の北側に、壁の一部を確認したに留まった遺構で、カマド等の痕跡も無く住居跡と断定は出来ない。住居跡とすれば北壁からして、隅丸方形のプランで、8P1は主柱穴となるよう。8P2とした柱穴は図上からすると主柱穴となる可能性があり、されば住居の一辺は4.3mほどに復原されよう。土師器の塊と皿が出土した。

土器器（第26図60・61） 60は内弯する塊ないし坏で、胴下半部はヘラケズリ。1/8以下の破片実測で復原口径14.2cm。61は皿でやはり刷下半部は横方向のヘラケズリを施す。内面はナデ、口径18.8cm、残高3.05cm。床面より出土した唯一の遺物である。他に埋土より甕の破片があるが図示できない。

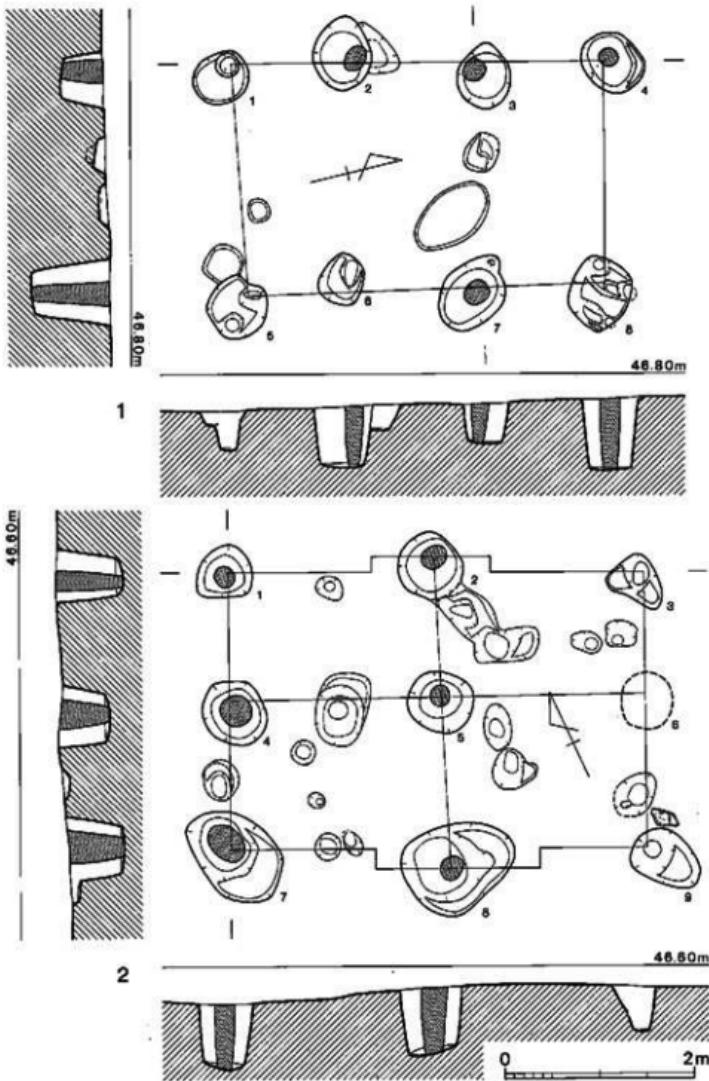
出土遺物から7世紀中頃から後半と思われる。

9号竪穴住居跡（図版15、第28図）

調査区の南端部に位置し、5・7号住居跡にその大半が切られている。主柱穴から判断すれば、一辶が4~4.5m程度の隅丸方形プランの住居跡に復原できる。主柱穴は床面より50~75cm



第28図 7~9号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第29圖 1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

と深く掘り込まれ、P1・P2間は2.6m、P2・P4間は2.1mを測る。遺物は出土していない。

10号竪穴住居跡（図版15、第21図）

5・7号住居跡と重複しており、5号住居跡に切られ、7号住居跡を切っている。西壁が3.5mであるが、主柱穴の位置関係からして正方形に近いプランを呈すと思われる。P2・P4間及びP3・P4間とも2.1mで、床面から30cmほど掘り込まれている。遺物は出土していないが、切り合い関係から8世紀前半頃と考えられる。

（2）掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版18、第29図）

2号掘立柱建物跡の北に隣接する1間×3間の建物跡で、桁行を南北方向にとる。桁行柱間P3・P4で1.4m、梁行P4・P8で2.4m。専有面積は9.17m²。

土器（第30図62・63） 1は内窓する环で、脚下半部はヘラケズリを施す。復原口径10.3cm、器高3.1cm。2は大型の甕の肥厚した口縁部破片。両者ともP2より出土。

出土遺物から7世紀中頃であろうか。

2号掘立柱建物跡（図版18、第29図）

梁行2間、桁行3間の純柱建物跡で、主軸を90度ほどずらして東西方向にとる。P6は搅乱により未検出であり、桁行の中間部柱（P2・P8）が20cmほど外へ出る。桁行柱間2.2m、梁行柱間は平均1.5m。柱穴は50～70cmほど掘り込まれ、専有面積は14.9m²。

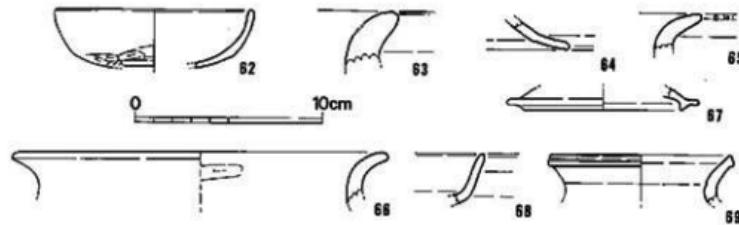
土器（第30図64～66） 64は高環の脚部で脚部は低く広がる。65・66は甕の口縁部破片で65は2号住居跡出土のものに似る。66は復原口径20cmである。64・65はP2、66はP3出土。

須恵器（第30図67～69） 67は身受けのかえりの浅い蓋で、天井部を欠く。口径10.2cm、P8出土。68は外方へ開きぎみの环でP3出土。69は短頸甕と思われ、口唇部に浅い凹線があり、内頭部には沈線状のヘラ当りがある。復原口径9.8cm、P8より出土。

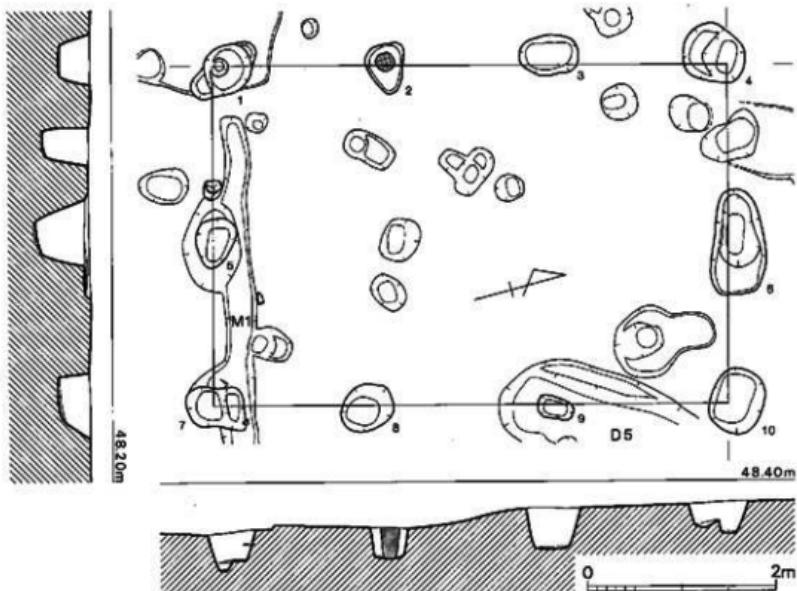
出土遺物から7世紀中頃から後半の時期であろう。

3号掘立柱建物跡（図版31図）

2段目の東側、3号住居跡の東に位置する梁行2間、桁行3間の建物跡で、主軸をほぼ南北



第30図 1・2号掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)



第31図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

にとる。桁行柱間の平均は1.75m、梁行柱間1.8mで、P2の柱痕は約15cm。専有面積は19.8m²。遺物は出土しなかったが、古墳時代終末頃であろう。

(3) その他の造構と遺物

1号溝(付図)

3号住居跡の東側2段目に検出された溝で、東西方向に4.5mのび、段落で消滅する。3号掘立柱建物跡の柱穴(P5・P7)に切られている。底はU字形を呈し深さ15~20cm、幅35cm前後で、埋土は黒褐色土。内より須恵器壺小片が出土したが図示できない。

柱穴群(付図)

調査区全域に柱穴があるが1~3号掘立柱建物跡以外には纏まらない。それらの柱穴より土師器・須恵器・土縄等が出土した。

土師器(第32図70~75) 丸味のある壺で復原口径12cm前後。摩滅により調整は不明、P184出土。71~73の壺のうち、73は外面が手持ちヘラケズリの後にミガキ、内面はヘラミガキを施す。復原口径19.6cm、器高3cmで、色調は暗褐色を呈し黒斑も見られる。71はP68、72はP184、73

はP223出土。74はP224、75はP309出土の壺。

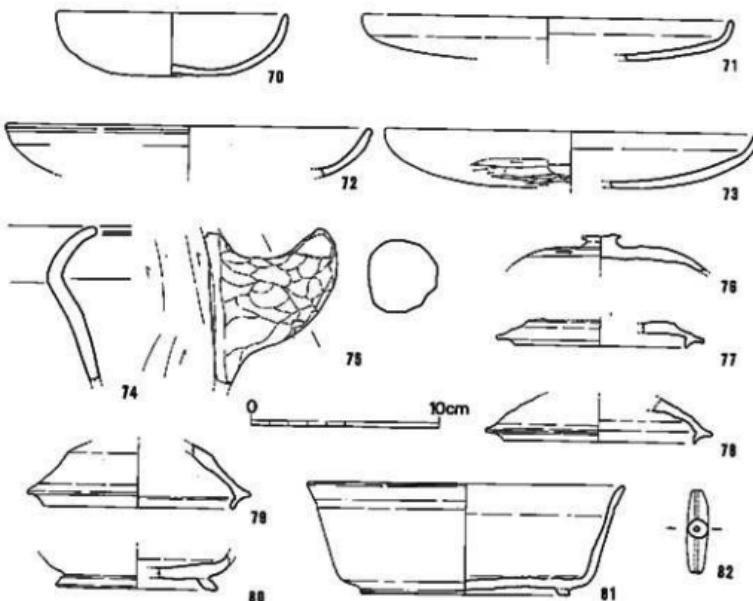
須恵器(第32図76~81) 76~79は蓋。76は扁平なつまみを持つ天井部破片で、天井部のみが回転ヘラケズリ。P222出土。77~79は身受けのかえり部を有す破片で、いずれの立ちあがりも低く短い。77は器高が低いもの。79は壊身の可能性もある。順にP167、P222、P332出土。80・81は高台付壺で、80は外方に張る高台を持ちP2出土。81は底部からそのまま直に近く立ちあがる器形で、内底面は不定方向のナデ。高台は台形の低いもの。復原口径16.6cm、高台径11.05cm、器高5.9cmでP218より出土。

土 錫(第32図82) P2より80の高台付壺とともに出土。長4.4cm、径1.1~1.2cm、重6gを測る。94・95と比べて両端部があり窄まらず筒状を呈す。色調は淡褐色で軟質。

包含層出土の遺物(第33図)

遺構に伴なわない遺物を一括した。

土師器(83~86) 83は4号住居跡の南側擾乱土より出土の皿だが深みがあるので壺と言っても良い。復原口径18.6cm。84も皿の口縁部破片。85は4~6号住居跡付近から出土した甕で、外面頭部以下にハケ目調整を施す。86は口径30.4cmと大きく、口縁部を肥厚させ、外頭部に穂

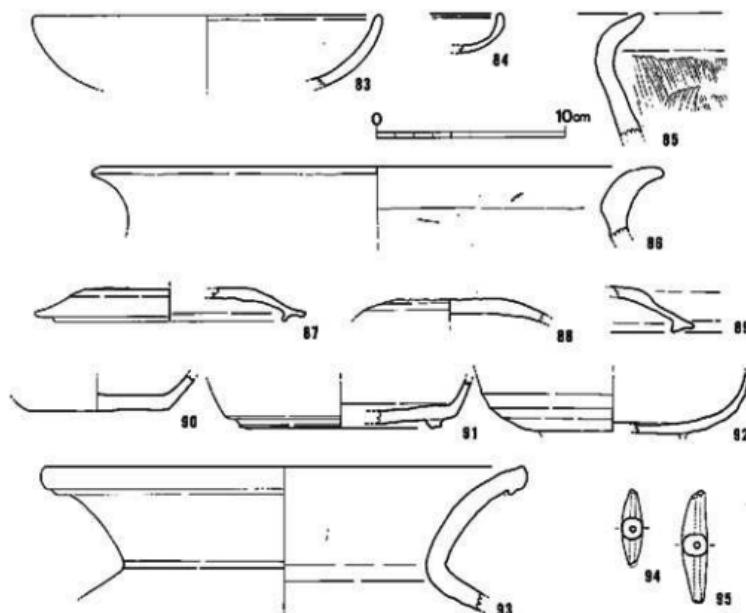


第32図 柱穴群出土土器・土製品実測図(1/3)

が入る。

須恵器 (87~93) 87は浅い身受け部を持つ低平な蓋で、天井部のみが回転ヘラケズリを施す。88は天井部のみの破片で、つまみが付いていた痕跡がある。89は身受け部の破片。90は蓋の底部で径7.5cm。91は高台付境で高台は台形に近くかなり外側に寄る。高台径10.8cm。92は丸味のある肩下半部に高台が付くらしい。93は甕の口縁部片で、内面は青海波紋のタタキ。復原口径25.8cmで、2・3号住居跡付近より出土。

土 錐 (94~95) 94は下端部を欠失する資料。円形に近い体部に対し、両端部はかなり窄まっている。長 $4.1 + \alpha$ cm、径1.23cm、重4.5gを測る。色調は明褐色で軟質、2段目より採集。95は長5.85cmと大型品で、上端部を斜めに切る特徴がある。中央部は指おさえの凹凸が目立つ。径2.1cm、端部0.75cm、重8.5gを測り、色調は淡褐色でやはり軟質。2段目より出土。



第33図 包含層出土土器・土製品実測図 (1/3)

4. おわりに

稗畠遺跡では、縄文時代及び古墳時代終末の遺構が検出された。

縄文時代の遺構は土壙5基である。プランは長方形を呈すものが3基で1・3・5号土壙。4号土壙は2段掘りだが、下段は長方形を呈す。大きさは長辺が1.6~2.37m、短辺0.8~1.1mで、床面は平坦ないし、若干窪む程度である。深さは1号土壙が12cmと浅く、他は30~43cm内外である。3号土壙の中央部上面には25×15cm、厚さ7cmほどの変岩が置かれた状態で出土した。形態および3号土壙の標石と考えられる石材の存在から、この4基は土壙墓の可能性がある。山門郡瀬高町權現塚北遺跡（註1）でも、晩期の長方形プランの土壙墓が検出されている。3号土壙墓でも凸帯文土器が出土しており晩期末の所産であろう。なお、各土壙墓の主軸は次の通りである。

1号土壙（N-27°-E）、3号土壙（N-89°-E）

4号土壙（N-10°-E）、5号土壙（N-38°-E）

出土遺物は、1号土壙が黒曜石製の幅広の剝片と磨石、3号土壙は凸帯文土器、4号土壙は押型文土器と石錐。5号土壙は出土していない。時期的には1・4号土壙が中期～後期、3号土壙は晩期末である。2号土壙は土壙内中央にピットを有するので墓ではないのであろう。打製石斧が上部から出土し、後期頃の所産と考えられる。

1~4段目の包含層から出土した遺物は、縄文時代早期～晩期まである。1・2段目からは早期～後期の土器が多く出土し、4段目及び西端部からは晩期凸帯文土器が多い傾向はあるが、層位的には把えられない。凸帯文土器と共伴して組織痕文土器（47）が1点出土したのは注意される。石器では第11図21の横型石匙は極めて良品である。安山岩製の横長剝片を素材とし、長めのつまみ部と翼状の刃部が特徴的である。県内では筑紫郡那珂川町深原遺跡（註2）に押型文土器と共伴した類似の石匙が2点出土している。また、25の縦型石匙の断面は1cmと厚く、レンズ状を呈す。幅広のつまみ部を除くと木葉形の尖頭器に似る。これも早期に属する石器であろう。一方、23・24は厚さが3~4mmと薄手の横長剝片を素材とし、1~2.5cm幅で狭い打面を有す。調整剝離も刃部に限定されている。両者とも凸帯文土器と共に共伴しており、当期まで石匙が存在する事が判る好例である。

古墳時代の遺構は竪穴住居跡10軒と掘立柱建物跡3棟である。時期的には4・6号住居跡が7世紀中頃で古く、5号住居跡が切り合ひ関係から最も新しく、8世紀前半と考えられる。また、掘立柱建物跡も7世紀中葉から後半の時期で、100年前後の短期間営なまれた集落である。

竪穴住居跡はいずれも方形プランを呈す。4号住居跡が最小で2.65×3.2m、3号住居跡が最大の5.8mであり、一般的には4m前後のものが多い。8~10号住居跡を除き、いずれも斜面の上に向かって、つまり北方向にカマドを有している。

カマドは形態から大きく2つに分類される。I類は壁内に造りつけのカマドである。煙道を持つないIa類（7号住居跡）と煙道を持つIb類（4・5号住居跡）に細分される。II類は壁外へ突出するタイプのカマドで、いずれも煙道が付く（1～3・6号住居跡）。長さは2号住居跡の50cmが最も短く、3号住居跡が1.37mに達し、平均1m。3号住居跡では煙道の径が15cmである事が判っている。これに対しI類では5号住居跡が95cmと長いが、4号住居跡はわずかに20cm弱、7号住居跡には付設されていないので、カマドから直接煙突を付ける構造のものもあるのであろう。煙道の先端には、浅い掘り込みを設ける構造となっているのが普遍的で、ここから煙突を立てる。窓みは雨水等が直接カマド内へ侵入しないための処置であろう。

竪穴住居跡から出土した土器はそう多いものではないが、編年作業が進んでいる須恵器の坏身・蓋を基にして時期についてふれておきたい。坏蓋は3・4・6号住居跡、2号建物跡、柱穴群から出土している。そのうちP332出土の79は擬宝珠状のつまみをつけると思われるもので、V期に比定され、当遺跡では最も古い時期である。次いで4号住居跡出土の29・30と6号住居跡の52、2号建物跡の67があげられる。口径が11cm前後で器高2.5～3cm未満の低平な坏で、つまみはない。身受けのかえりも低く小さく、天井部付近のみにヘラケズリを施す。あまり出土を見ない土器で、筑紫郡那珂川町観音山古墳群の4号墳や23号墳から、無高台の坏とセットで出土している（註3）。須恵器窓では大野城市平田2号窓（註4）や太宰府市長浦窓（註5）出土に類品があるが、3号住居跡出土の15～17の坏蓋のように扁平でかえりの浅い蓋なので、29・30・52・67の蓋より後出するものであろう。両窓の時期はVIa期で、年代的には7世紀中葉とされ、4・6号住居跡、2号建物跡は7世紀前半でも中葉に近い年代と考えられる。坏身では有高台の7号住居跡出土の59とP218出土の81がある。59はいびつな土器であるが外方へ広がる坏部にやや高めの高台が付く。一方、81は直に近く立ちあがり口縁部付近で若干外反する坏部に、低く台形の高台が付く。前者はVIa期の長浦窓に次ぐ時期で7世紀後半、後者は大宰府開発の資料等から8世紀前半頃であろう。

当地域では、古墳時代終末頃の集落はあまり検出されていない。周辺に数多く築かれた群集墳との関連からも、当期の集落は山麓に広く展開するものと思われ、今後の調査が期待される。

註1 川辺昭人編「櫛現塚北遺跡」「櫛高町文化財調査報告書」3 櫛高町教育委員会 1985

註2 木下修「深原遺跡の調査」「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」8 福岡県教育委員会 1978

註3 柳田康雄・木下修他「筑紫郡那珂川町観音山古墳群の調査」「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」5 1978

註4 古谷秀一編「筑前平田窓跡」雄山閣 1974

註5 高橋章・龟井明徳「向佐野・長浦窓跡の調査」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」

VI 福岡県教育委員会 1975

図 版



圖版 1

蘇聯領事館

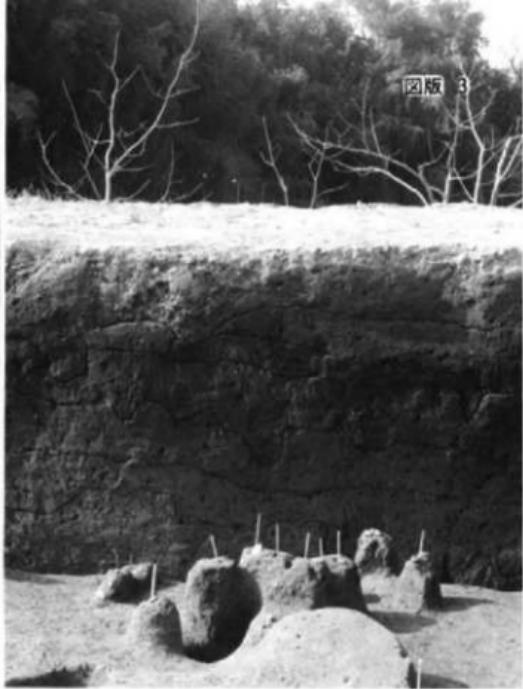
火車站



1 遺跡全景（南東から）



2 遺跡南半（南東から）



1 通路南端部
2 土層 C-C'断面

3



3 通路西南部斜面
4 土層 D-D'断面

4



図版 4



1 縄文時代調査区 1・2段目

2 2段目の縄文時代遺物出土状況





1 繩文時代調査区 3段目と 3号土壙

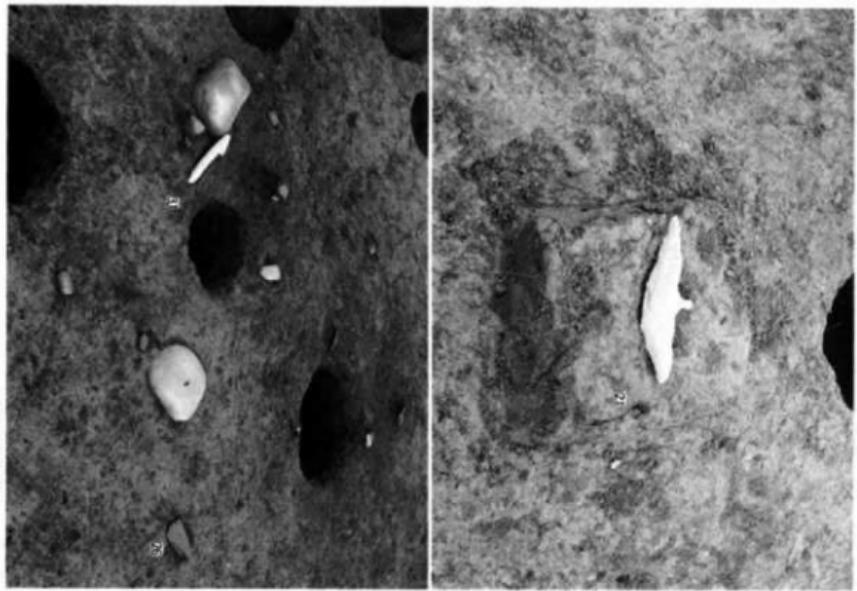
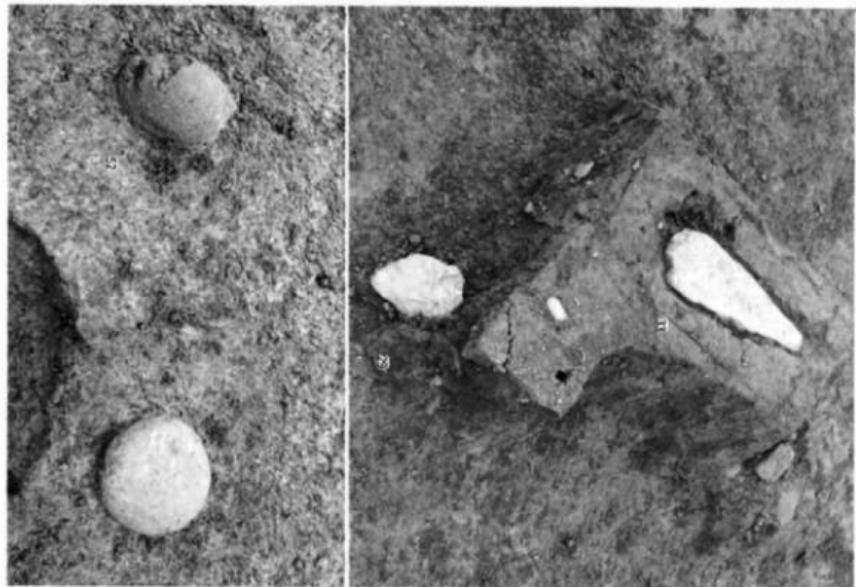


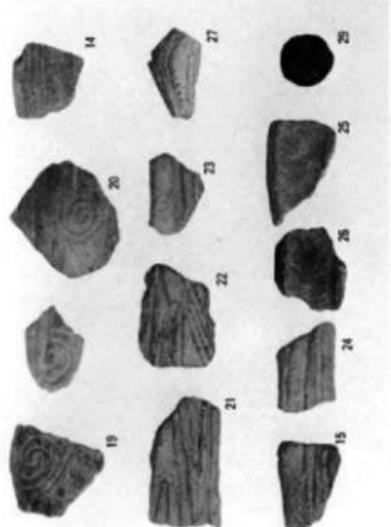
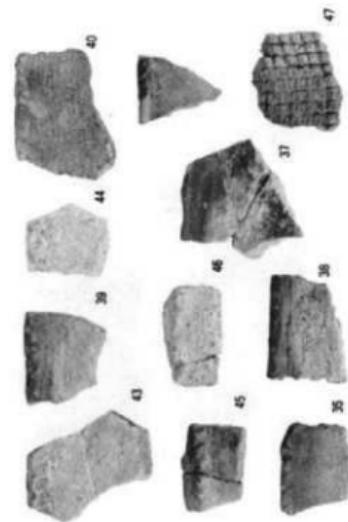
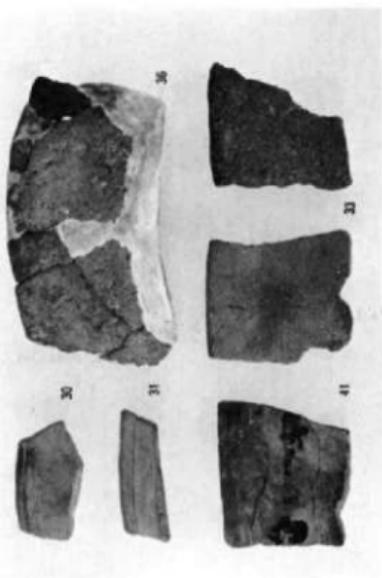
2 2号土壙と打製石斧

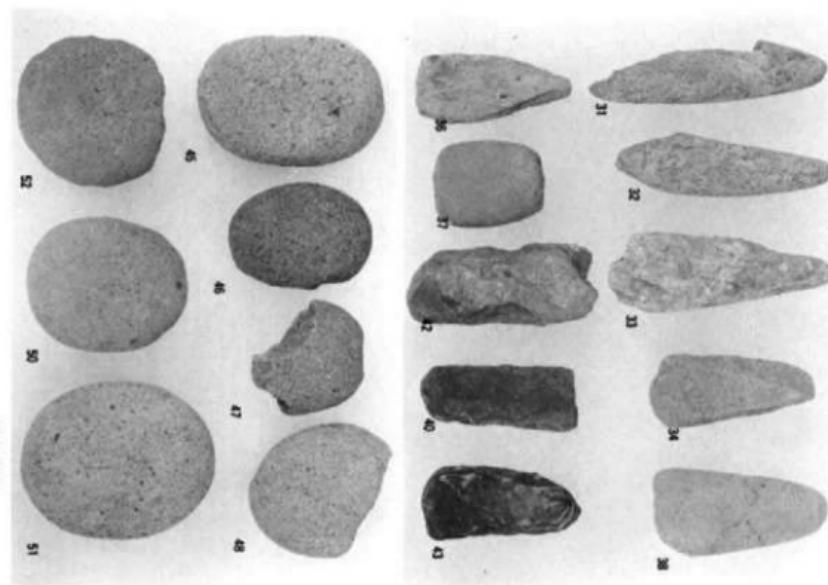
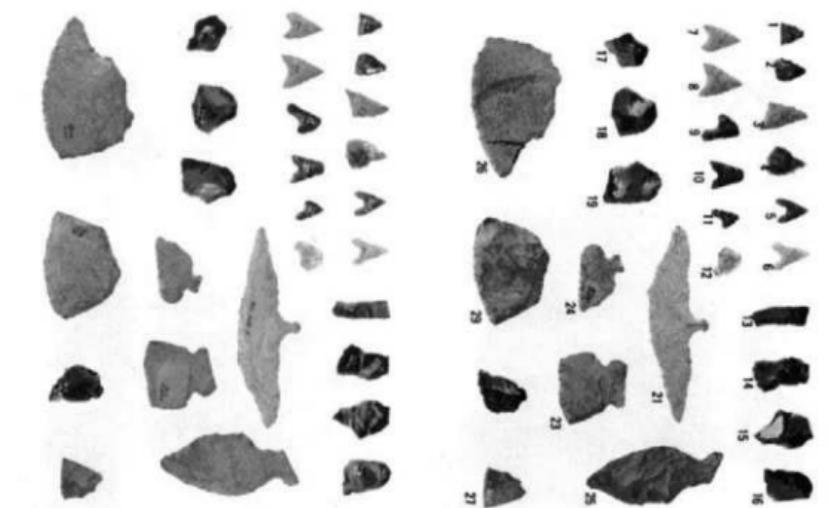


3 3号土壙

図版 6

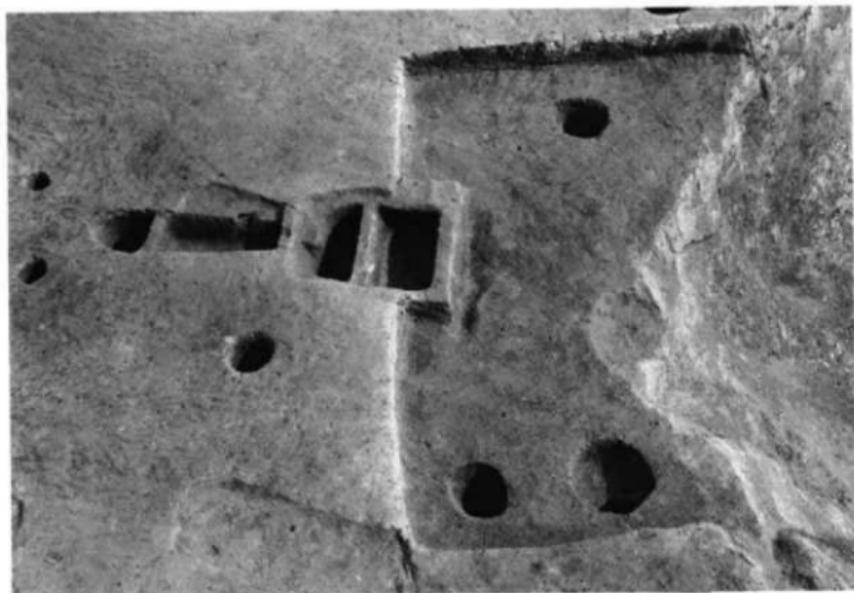




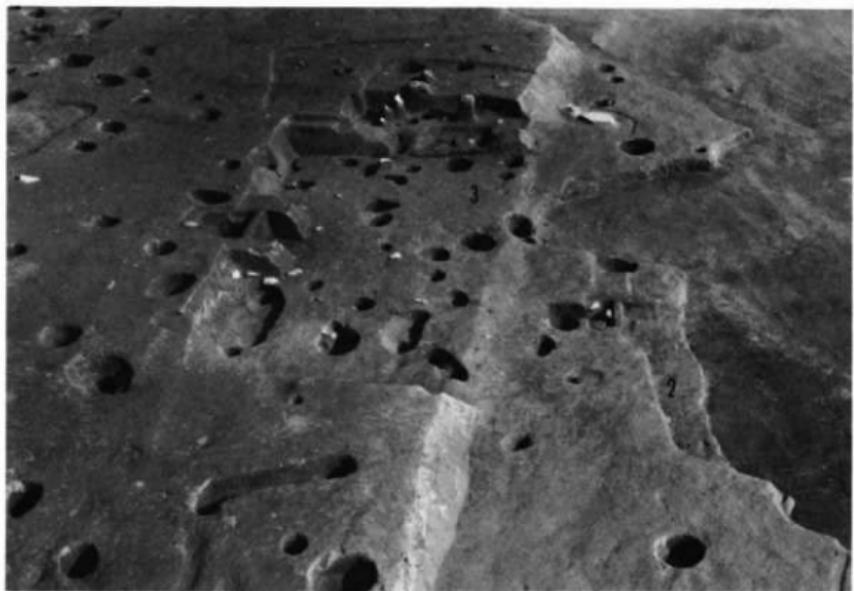




1 1号竪穴住居跡と調査区南側全景



2 1号竪穴住居跡（西から）



1 2・3号堅穴住居 (西から)



2 2号堅穴住居のカマド



1 3号堅穴住居跡（南から）



2 3号堅穴住居のカマド



1 4号竪穴住居跡（北から）



2 3・4号竪穴住居跡出土土器



1 5号竖穴住居跡全景（北から）

2 5号竖穴住居のカマド

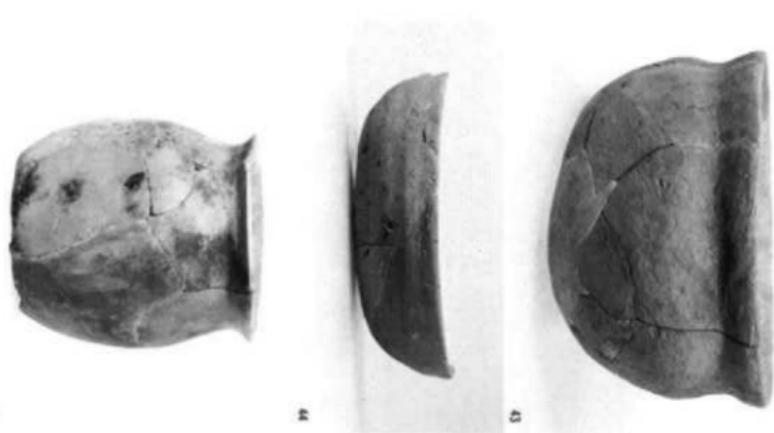


图版 14

1 5号墓穴出土情况



2 出土土器





1 5~10号竖穴住居跡全景 (東から)

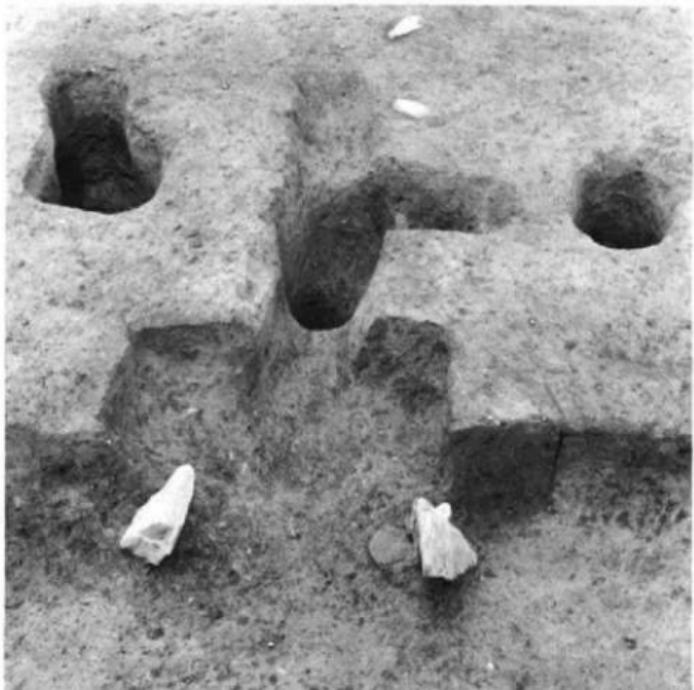


2 5・6号竖穴住居跡 (北から)



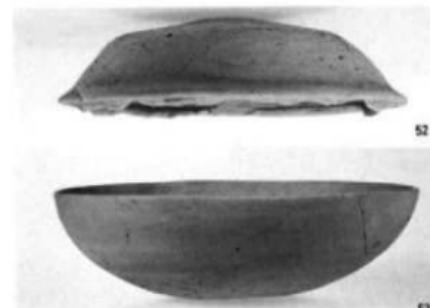
1 6号堅穴住居跡（南から）

2 6号堅穴住居のカマド





1 7・8号竪穴住居跡（南から）



52

53



54

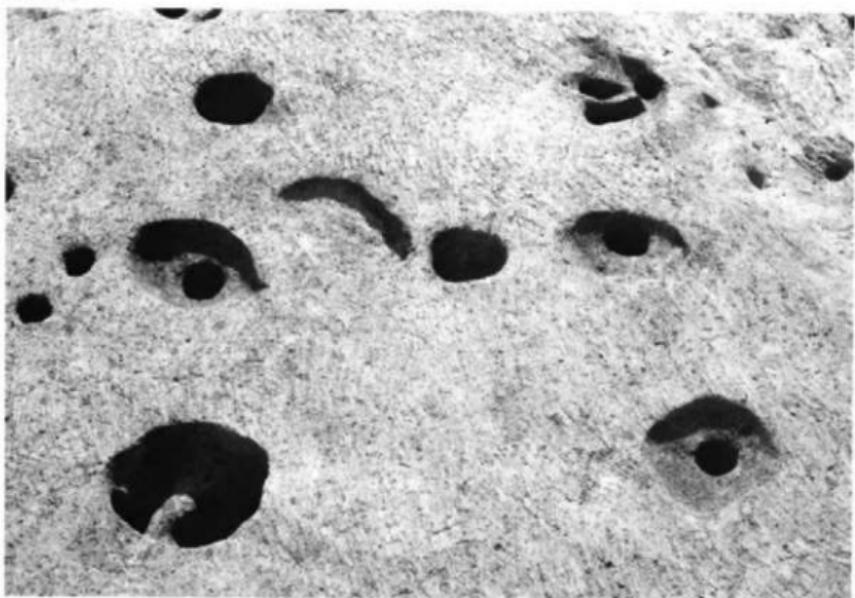


55

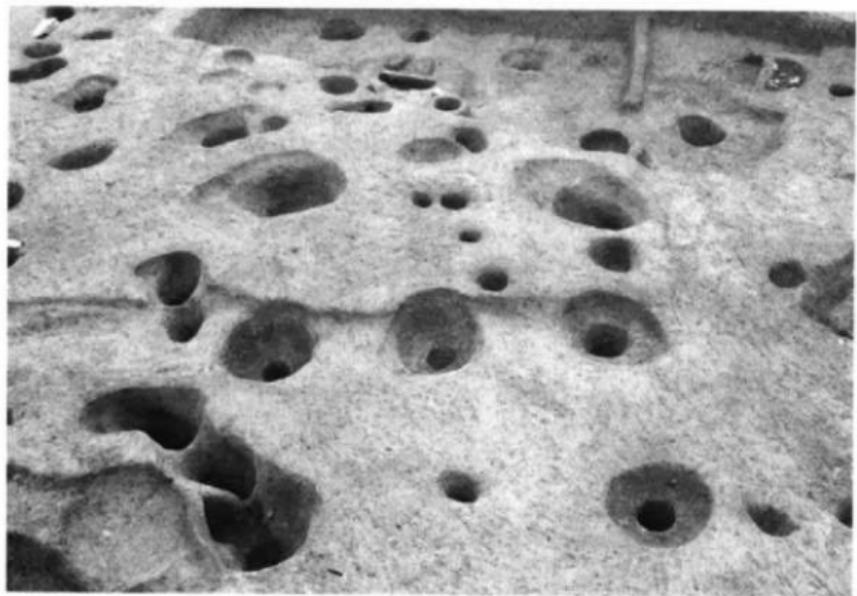


56

2 6・7号竪穴住居跡出土土器



1 1号掘立柱建物跡 (北から)



2 2号掘立柱建物跡 (北から)

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 2	登録番号 4

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—20—

平成3年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8-34

九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告書

—20—

付 図

**上ノ宿遺跡
稗畠遺跡**

1 9 9 1

福岡県教育委員会

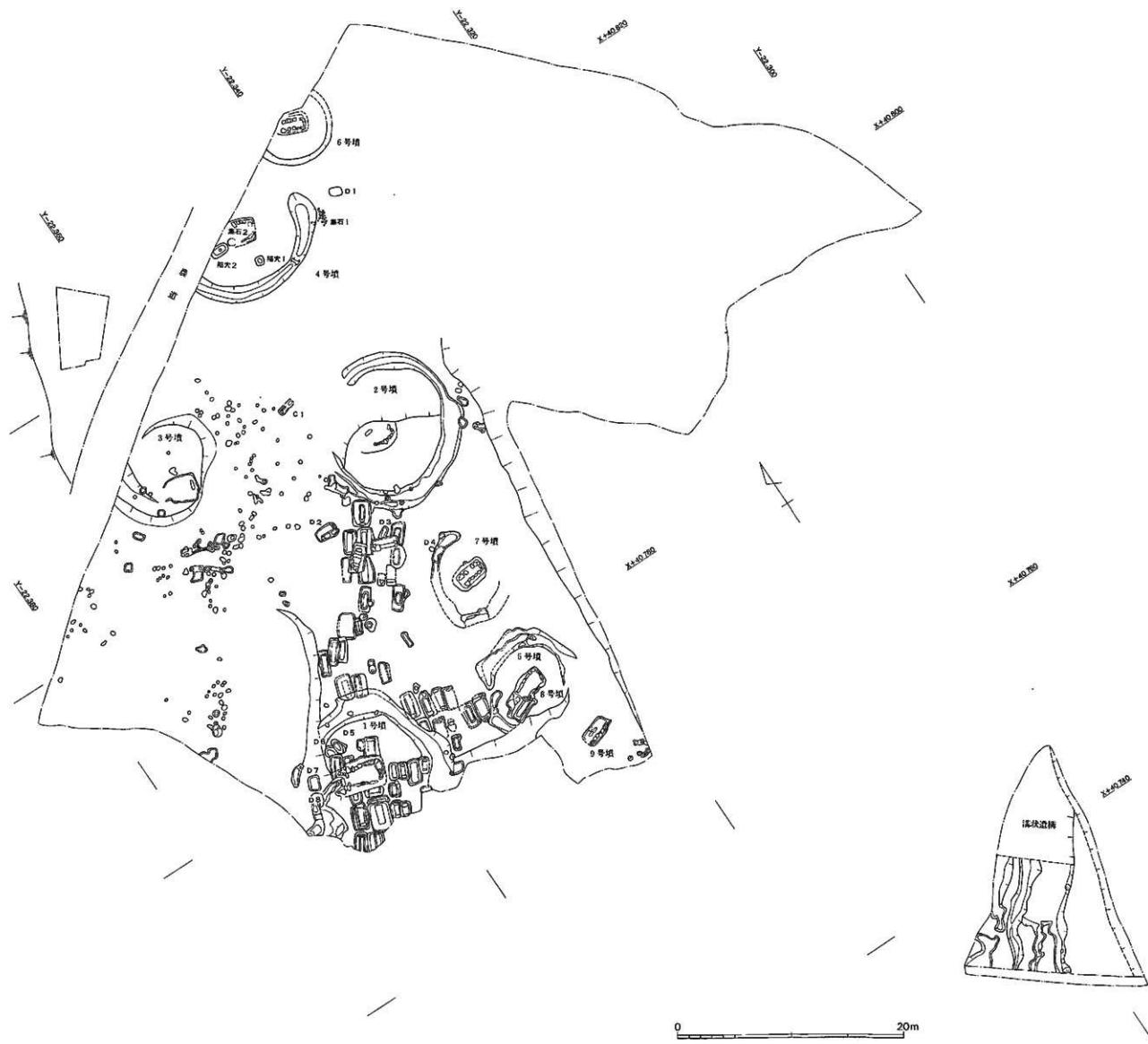


图 四 1 上ノ古道跡構配圖 (1/300)



付図1 種種遺跡記載図(1/300)